THE CENTRAL REVIEW

中央公論

7-1916

七月號

332　7　31

第三十一年第七號　第三百三十二號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨を御附記乞ふ

最大の幸福は腦を患はぬ人!!



主効

□腦充血□腦貧血
□腦膜炎□卒中
□逆上症□鬱憂
□神經痛□頭痛
□眩暈□便秘
□健忘□癲癇

特長

本劑を少量宛常用せば逆上を引下げ便通を快し恐る可き腦充血を快治し中風卒中を未發に防ぎ記憶力の増進を促す特効あり

價

一日半分 二十錢
半週分 四十錢
一週分 七十錢
二週分 一圓卅錢
五週分 二圓半
十週分 五圓

本舖 丹平商會藥房
大阪 東京
全國海外信用藥店ニ販賣セリ

腦を患はぬ人、健腦丸服む人!!

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

ノーベル賞金を得たる白耳義國文豪
マーテルリンク著

文學士 栗原古城先生譯

死後は如何

三版【出來】

四六判總クロース
全一冊
正價壹圓貳拾錢
郵稅拾錢

▼附錄『交靈術とは何ぞや』

人間の死後は果して如何、**絶滅**か、**永生**か、將た『醒むる無きの睡眠』か、既成宗教は其權威を失し、近代科學は之に就て何等の說く所無し。而も闇黑の中に一道の光明あり、**泰西の新科學は既に靈魂の不滅を實證し、將に輪廻轉生の眞理を說かんとす。**現代第一の文豪にして思想家たるマーテルリンクは、深く此不可思議なる心靈の現象に動かされ、其神秘的冥想と、聰明なる理智との高潮に乘じて、此大問題を解決せんとしたる者、即ち此書也。譯者は將來世界を震撼すべき心靈運動の曉鐘として、本書を提供する者と云へり。附錄とせる**『交靈術とは何ぞや』**に至りては、眞に人界靈界に亘る一大驚異を說ける者にして、物質萬能の現代社會は、之を讀んで將に大なる**戰慄と畏怖**とを禁じ得ざるべき也。

三版

デゼルチス著
高橋五郎先生譯

心靈學講話

四六判總洋布製
全一冊
正價金八十五錢
郵稅八錢

東京本郷西片町 玄黃社
電話下谷一三一九番
振替東京七九九五番

文學士 阿部次郎著（新刊）

哲學叢書（第六編）

倫理學の根本問題

本書は日本語で書かれた一切の類書中恐く最も生きた倫理學である。此處には論理と共に情熱がある。崇高なる道德原理と共に人生問題の豐富なる解決がある。本書は人の良心を整理し强壯にするのみならず大多數の人にとつては更に人生觀の根本的革命を促す巨鐘である――それは著者の私見ではなくて現代哲學者中彼の最尊崇するリップスの思想を祖述したものだからである。

四六判
四百頁
定價一圓廿錢
送料八錢

文學士 石原謙著（新刊）

哲學叢書（第七編）

宗教哲學

本書は著者の私見の組織的敍述ではない。が宗教哲學は宗教の獨立性と先驗的價値とを認め又形而上的觀念ではなしに活ける宗教其者を對象とせねばならぬとの確信に基き從來なされし哲學神學及宗教學的研究の總果を記述すると共に現代に於ける宗教哲學的根本問題を列擧論評して、自家の立場を樹立し且將來の斯學研究に基礎を築かうとする學術的努力の結體である。宗教に對する根本的理解と研究の指針とを求めんとする者に此書を薦む。

四六判
四百頁
定價一圓廿錢
送料八錢

發行所 東京神田 南神保町 岩波書店 電話本局五四二〇番 振替東京二六二四〇番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊

ポアンカレ著　東北帝大講師　文學士　田邊元譯

科學の價値

科學の價値如何、これ實に緊切にして興味ある問題である。しかも所謂哲學者は之を知らず、科學者自身も之を知らず、之を知るは一に絶倫なる科學者たると同時に優秀なる哲學者たる原著者の如き人に待つ。本原書は著者の數ある著述中にも最も有名なる者であつて、文章秀麗、攻學の美はしき精神を發露し、他に求め難き獨特の智識を提供する唯一無二の書である。『最近の自然科學』の著者なる譯者の嚴密にして忠實なる飜譯が學界の十分なる信頼に價すべきは本書肆の信じて疑はざる所である。

四六版　三百八十三頁　定價壹圓參拾錢　送料內地八錢

新刊

リッケルト著　京大文科教授　西田幾太郎序　文學士　中川得立譯

認識の對象

現代の哲學に於て認識論的研究が其中心的地位を占むべきことは敢て多言を要しない。本書は其師ヰンデルバントの哲學を獨特に開展して所謂西南學派を大成したるリッケルトが優秀なる其根本思想を開陳せる主著『認識の對象』及び『認識論の二途』なる大論文を極めて精確に譯出せるもの。嚴密なる學的哲學の意義と根柢とを論明する點に於て此譯書が吾が學界に對する寄與の甚大たるべきは本書肆の斷言を憚らざる所である。

四六版　五百十頁　定價壹圓五拾錢　送料內地八錢

發行所　東京神田南神保町　岩波書店　電話本局五四二〇番　振替東京二六四〇番

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

■現文壇諸家最近の傑作小説集也■

近代傑作叢書

◉第一編◉ 神童

谷崎潤一郎著　山村耕花装幀

：菊半截表紙布製天金　紙數貳百數十頁

現文壇で最も特色のある畸形的な作家と云へば谷崎潤一郎氏である。その作風に於いても題材の取扱ひ方に於いても他の作家とは全然異つた氏獨特の境地がある。『神童』は即ち神童と云はるゝ程の天才兒が而もだん／＼と肉的誘惑に吸込まれて行く經路を例の官能的な描寫で表はされてゐる。卷末の『饒太郎』とは恰度自叙姉妹編と云つて差支へない。

最新刊　定價五拾錢　送料六錢

◉第二編◉ 巫女殺し

上司小劍著　小寺健吉装幀

：菊半截表紙布製天金　紙數貳百數十頁

卷頭の『巫女殺し』を始めとして『春は悲しや』『孕み女』及『第三の母』等總て小劍氏の最近に於ける傑作短篇集である。『巫女殺し』は大阪のある寺院の神樂師同じ寺院の巫女と通じて遂に女を舞用の劍で殺してしまふまでの事を書いたものである。何れも關西を題材としたもので氏一流の皮肉もユーモアも殊によく表はれてゐる。

六月下旬發賣　定價五拾錢　送料六錢

東京日本橋區濱町二ノ二十　須原啓興社　電話浪花三二八八　振替東京三〇五〇〇

簡易生活會主幹 西村文則著

簡易生活法

▼菊大判全一冊
▼紙數三七〇頁

定價金八拾錢
送料一冊八錢

◆簡易生活は、二十世紀の初頭に於ける世界の新しき叫び也。虚榮生活と、重複生活とは、今や全世界の極端より、極端を侵略して剩す處なし、之を以て健全なる悦樂と、剛健素朴の風と、獨立自治の精神とは、殆ど地を拂ひ、而して不自然なる生活裡に、人は煩悶より煩悶に蠢動しつゝあり。

◆本書は古今東西の學説と、實驗とを綜合し、今や切實に迫りつゝある現代の生活問題を縱論横議し竭したり。要は簡明直截の生活を主張して、僞善と、形式に囚はれたる現代生活の缺陷に一大痛棒を加へ、力の生活、自我の生活、自由獨立生活の眞髓を、平明に傳へたるもの、現代生活に疑を抱くの士、先づ手にして本書の眞價を定め給へ。

東京銀座・振替二一九
大日本圖書株式會社

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稻田大學名譽教授文學博士　坪內逍遙先生序文
東京帝國大學文科大學教授文學博士　建部遯吾先生序文
早稻田大學教授文學博士　吉田東伍先生序文
早稻田大學教授　五十嵐力先生書簡

平家詩史

村山龜齡君新著

中澤弘光、田代古崖兩畫伯裝畫

總ふりがな附

大判全一冊裝釘極美、帙入、天金
本文紙數七百有餘頁
着色挿畫十二枚コロタイプ版
大形二面寫眞版六十餘個
正價金貳圓八拾錢
送料十二錢

發行元　東京市本町　博文館

麗春花のごとく清秋月の如きもの、實にわが龜齡先生之文章也。先生の文を行るや、經營慘憺拮据七年にして此の書を成す。自ら卷頭に序して曰く『期する所は一貫せる平家傳說史也。詩化せられたる平家傳也。潔くすゞしく、而も飽くまで華やかに、由々しくもまた目ざましかりし渠等が短き生涯を優麗なる或る種の文學として我も人も、心ゆくばかり意味深く味はゝむとす』と。平家三十年の盛衰は、藤原氏四百年の盛衰を高調に縮寫したるものに非ざる無き乎。今の世に見るべき歷史は多し、而かも讀む可き歷史として本書の如きもの他に是れありや、字々皆金玉、全篇無韻の詩。而して卷尾更に暮春西行記の長編を加ふ。著者曾て筆を載せて平氏興亡の史蹟を踏み、時に隨ふて胸中の感懷を叙したるもの清新の文致、筆端聲あり。兩々相俟つて讀者を神往せしむ、源平時代の眞世相・眞面目を此書に求むべく、文章修辭の按排・呼吸・活模範を此書に求む可し。加ふるに、挿畫の豐富、裝釘の優美、恍として卷を措く能はざらしむ。此の內容と此の製本と、而して此の廉價と、近時の出版界に斯の如きもの類例何處に在りや。本館は爰に極美の一大著作を大方の座右に薦む。

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■獨逸強盛の眞因は之を本書に聽け■

蘇峰德富猪一郎序　農商務省參事官　男爵伊藤文吉著　好評嘖々

獨逸の經濟的勢力

總布上製　各種著色版統計圖表卅四種挿入　定價一圓五十錢　郵税十二錢

□獨逸が聯合軍と開戰以來既に滿二年に垂んとし、然も多ゝ倍ゝ辨ずる其の無限的戰鬪力は、一に是れ最近約半世紀間に於ける獨逸産業發達の効果に因る。本書は最新の材料と最近の事實とを綜合し、之を叙述するに的確なる識見と平明なる文章を以てし、最近五十年間獨逸産業發達の沿革より、現時隆盛の狀況を詳にし、其の發達進歩の諸因を究め、世界に於ける獨逸國民發展の情形を明にし、以て日本の現狀と比較對照し、痛切に日本國民の深省と發奮とを促がしたる快著にして。特に各國産業統計の比較圖表、獨逸産業發達の統計圖表、日本重要輸出入品番附の卅四種圖表は、豐富なる材料を根基として作成したる原色石版刷にして、鮮明美麗、悉く實物を以て比較を示し、一見して其の消長盛衰を知らしむる興味津々たるものなり。要するに本書は次で來る可き經濟戰の準備として、實業家は勿論、實業敎育に從事する者、又た經世に志ある人士の必讀す可き有用の良書也。

■次で來る可き經濟戰の準備と本書■

發行所　東京市京橋區日吉町　振替口座一三一〇〇　民友社

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す
一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす
一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

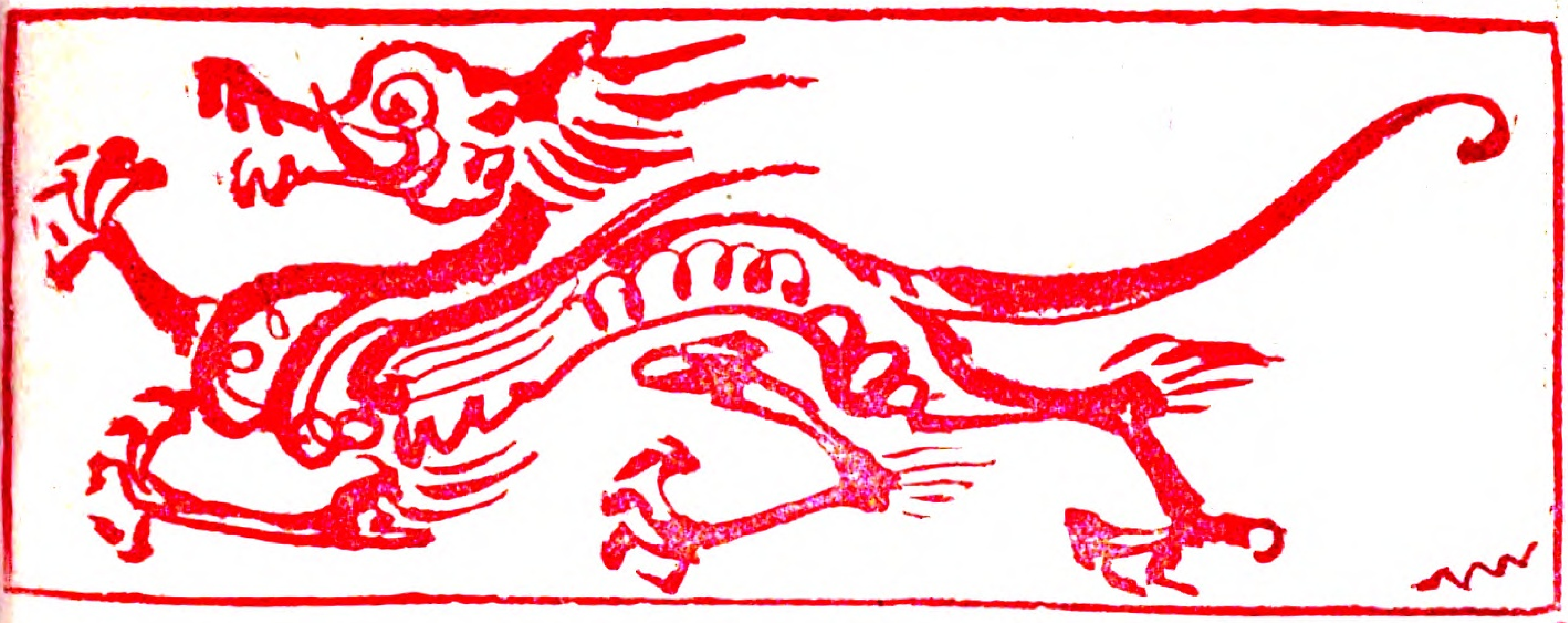
社長 男爵 中島九萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番)

電話本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一七一七番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり
一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す
一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第卅一年七月號目次

▼公論

▼說苑



CLAUDE RAMEAU



PAYSAGE A L'ANE

日とのみ競ふ

マツダランプ



五拾燭光迄長型壹個金五拾錢

東京電氣株式會社

神奈川縣川崎

電話川崎五〇番一〇一番一〇二番一〇三番一〇四番

販賣部

東京出張所 東京市京橋區銀座尾張町一丁目 電話新橋一九三・三二一二 長一〇五九

横濱出張所 横濱市伊勢佐木町一丁目 電話横濱一七一一

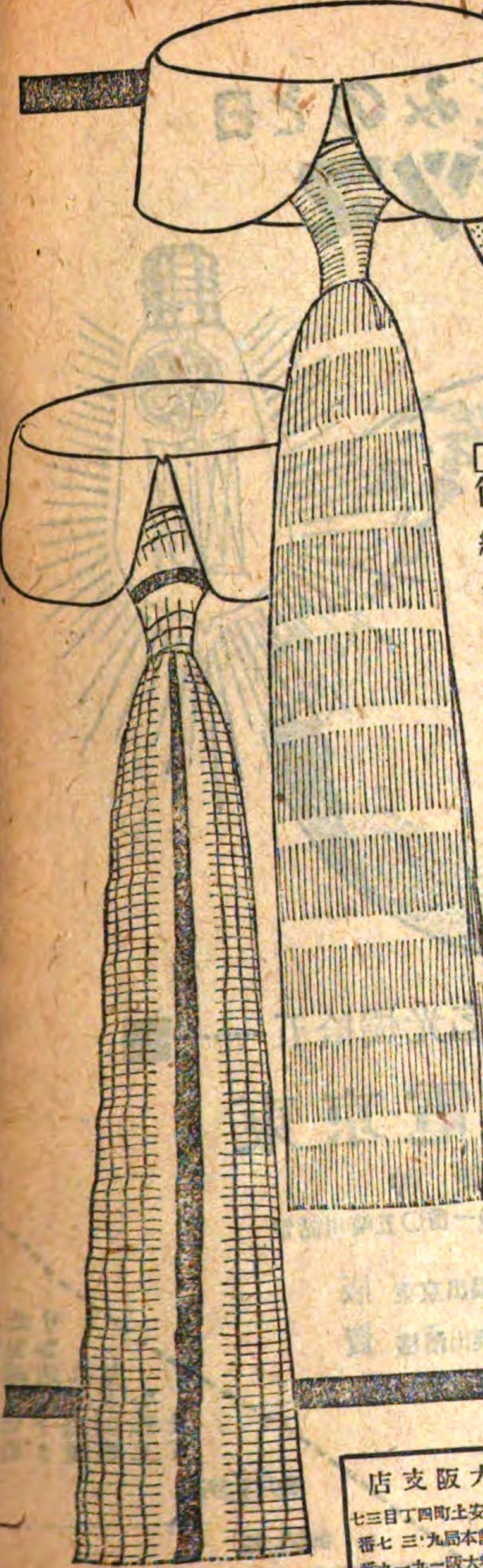
大阪出張所 大阪市西區阿波堀通一丁目五番地 電話長西一〇九五

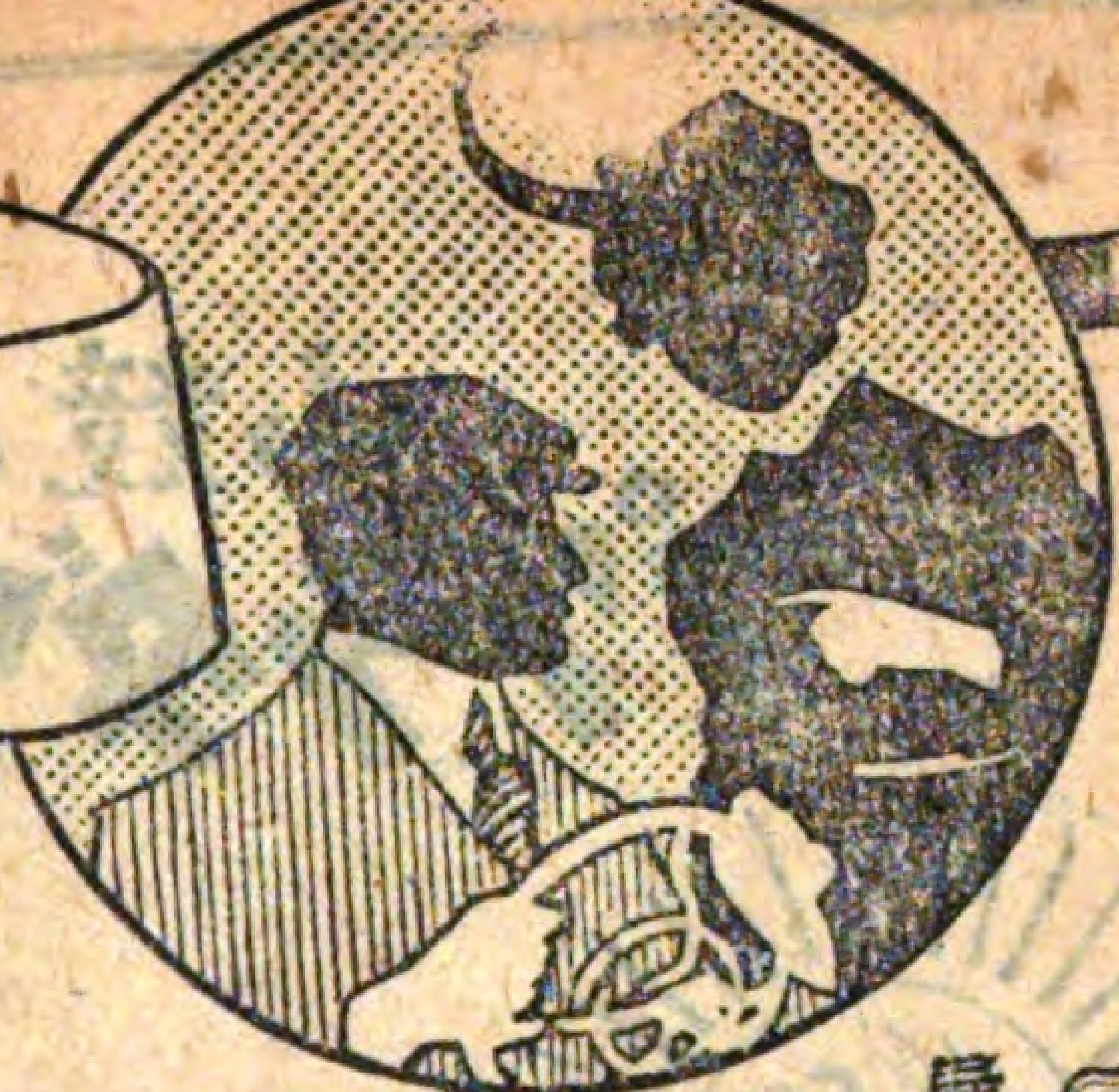
御照會の節は此點線を切取りお送り下されば綺麗な說明書を差上ます

御住所

御姓名

(前付二の一)





登録商標 BEST MADE RED HAT WEAR GUARANTEED

清快の象徴たる洗濯可能(ウオッシユエーブル)ネクタイ

洗濯保証

軽い着物を着て愉快に活動の出來る季節となりました。清新。爽快。溌剌。鋭氣の充ちた若い新しい季節となりました。此季節を代表する生氣ある軽い清い新らしい壯んなる精神を象徴する洗濯可能(ウオッシユエーブル)ネクタイの新柄が取揃ひました。皆様御覧下さりませ。本年の新製品にはリボン式も筒織式も御座います柄行色合は現代の流行を更に洗練しました瀟洒なる逸品揃いで御座います。染織は堅牢でリボン式の内には皆様をあつと言はせる優秀なるものも御座います其れで價が低廉です一日も速く御注文下される樣願ひます。

□リボン式洗濯可能(ウオッシユエーブル)ネクタイ　自金五拾銭至壹圓五拾銭

□筒織式洗濯可能(ウオッシユエーブル)ネクタイ　自金拾八銭至金八拾銭

南文藏商業部

赤帽印ネクタイ發賣元

東京本店
日本橋區通鹽町一五
電話浪花二一〇四番
振替東京九七四三三番

大阪支店
東區安土町四丁目三七
電話本局九三七番
振替大阪一九一九番

中央公論



七月號
第卅一年第七號
第三百三十二號

世界政論の轉化期

（一）

此般の歐洲大戰爭が前古未曾有の大變亂たる程に、其世界の經濟界實業界に殆と革命的變動を起さんとするは何人も疑を容れざる處にして、從つて各國爭ふて此大變動に處するの方法を講ぜんとするは素より當然なり、然れども大戰爭の影響を以て經濟實業の方面に止まるべしと觀察するは甚だしき僻見にして其精神上殊に政治思想の上に及ぼす影響の如き却て最も深奧遠大のものたるべきを思はざる可らず早く既に其影響の一端は顯然として吾人の目前にあり、他なし近時我邦政治家の惰眠を覺破し沈滯して死せる如き政界に一種異樣の波動を捲起せし三浦子と三黨首の會合の如き即ち是れなり、而して是實に

歐洲大戰爭を背景として始めて觀ることを得べき現象にして、歐洲に於ける政論の大轉化が遂に極東の天地にも徐々として波動し到れるを示すものと謂ふ可らずや、若しも首相大隈伯にして能く夙に大勢の向ふ所を察するを得たらんには擧國一致の必要は開戰以來二年後の今日を待つに及ばず疾くに高調せられしなるべし、斯くて猥りに外交を內政の爲めに利用したりとの重大なる非難を免れたる耳ならず前途頗る憂慮すべき現在の我國際的危局を見るに至らずして止みしなるべし、不幸にして大隈伯は平素新知識の專賣店を以て任ずるに關らず內政の爭奪に沒頭して遂に世界の大勢に順應して國論一致の方法を講ずるの道に出でず、益々國政を不安の位置に陷らしめんとするは識者の痛歎する處たり、是れ多年政界を退隱せる三浦子が慨然として三首領の間に斡旋して其會合を催ほし且覺書を協定するに至れる所以にして、一面より之を觀れば現內閣に對する體よき不信任決議と謂ふを妨げざるなり、吾人は三黨首の協定が果して實際の政界に如何の結果を齎らすべきやを知らず、加藤、原、犬養諸氏は果して能く今の內外危局に對し事實問題上共同一致の態度を取るを得べきや否や、是れ高等政治の問題として頗る興味あるものなり、好し三首領相提げて朝に立つ能はずとするも、今の黨派的大隈內閣を斃ふし之に代ゆるに擧國一致、人材內閣の樹立を促がすにも至らば三首領の覺書亦遂に空しからずと謂はざる可らず、兎に角覺書の發表は今の政界に擧國一致の必要を高調せるものにして、我暗昏なる政治界の表面に一道の光明を發つものに非ずや、政敵退治と政權執着の外一事の能なき現內閣に對して該覺書は自ら是れ一種の反抗非認なり、少なくとも是の意味に於て政界の一轉機を作るものと謂はざる可らず。

歐洲に於ては政論の變調疾くに著明なるものあり、佛國にては最も早く擧國一致の內閣を組織して政

論政務の統一に努め、上下官民一體一心となりて時局に對し居れり、英國に於ては政黨內閣の慣例嚴乎として存し兩派の聯合內閣を組織すること容易ならざるが故に開戰以後當分は依然多數黨內閣の下に軍國の政務を執りしも、在野黨領袖とは能く意思を疎通し其贊同援助を期するを得たる耳ならず、全然黨派關係以外のキチエル元帥を羅し得て陸相たらしめしが如き既に黨派的傳說の一端を破れるもの、而して昨年五月遂に內閣を改造し在野黨の首領輩の入閣を見るに至りて擧國一致の形式を具備することとなれり、然れども英國の論者中此般の改革を以て尙ほ姑息因循なりとし、時局の重大なるに鑑み全然黨派の權衡、黨情の參酌を度外し、一に人物材幹に依り當局を選拔し以て軍國の機務を處理せしむべしと主張するものあり、是れ實に政黨主義の本家本元たる英國に於ては一種の小革命を意味せずや、而して列强國際關係の研究者として聲名あるイー・チェー・ディロン博士の如き實に其主張者の一人なり、博士曰く

我國の現當路者は變化なき効力なき政治組織の永續的中心たるものにして、彼等は時局に鑑み其政治組織の基礎を擴大し、更に有効の方法を採用し、國家を全然新規なる針路に向け進航せしめんとはなさず、却て益々狹隘の見を固執し彼等の老朽せる方法に從ひ時々姑息なる局部の變更を試みることあるに過ぎず、斯の如き當局に對し吾人は毫も期待する處あらず、彼等は其最善の力を盡せるなるべし、然れども今の戰局に對し最後の勝利を獲んとせば巧辭令言、毫末を割くの辯說、又は黨派政略等の能くすべき限に非ず、最後の勝利は之を一大人傑に待つ、即ち其抱懷せる熱誠を其周圍に國民一般に感染せしめ、聯合諸國の無限の資源を今の如く空費せず之を有効に使用し得べき一大人物の指導の下に於ける組織力、知識力、決斷力に由り初めて最後の勝利を期し得べき耳と。

最近英國政府が遂に凡百の俗論を排して徴兵法を採用し、又た愛蘭に於ける小暴動の善後策を講ずるき機會を利用しアルスター六郡との葛藤を解決して自治政施行の前途を圓滑ならしめんとするが如き暗にデイロン一派の評論に刺激されたる結果ならずとせず、更に眼を轉じて北米の天地を觀れば今や共和黨はヒユース氏を大統領候補に推し、民主派はウイルソン氏を推薦し、兩々鎬を削りて雌雄を爭へるも、陸海軍の大擴張を焦眉の急務として政綱に高唱するの一事は孰れも相讓らず、華盛頓以來自由平等友愛の大旨を體し國防を度外し世界平和の主唱者を以て任じ來りし此邦が今日乍ち軍國主義に改宗せんとするが如きは實に驚くべき變化ならずや、素より近來世界交通の便開けて東西の諸舊邦と比隣となれる米國が獨り悠々として自由の天地を樂む能はざるは事實なれども、亦た是れ歐洲大戰爭の教訓に負ふ所少なからずと斷定せざる能はず、一片の仲裁條約に由り列國間の平和を支持せんとするが如きは善意餘りありて智慮足らざる平和主義者の一場の快夢たりし耳、超弩級戰艦や、潜航艇や、四十二珊砲や七五米利砲を後援とせざれば今の世界に於ては條約も外交も空拳を以て白刃に向ふに異ならず、而して今日の軍備なるものは切に技術の訓練物資の蓄積に待つ處のもの多く、寧ろ盗を見て繩を綯ふは遲しとせざるも開戰を待つて軍備に着手せんとするが如きは危險極まれり、即ち北米合衆國も亦た軍備の必要に對し擧國一致の實を擧げんとするを以て見れば、歐洲大戰の世界の政論に影響する處實に深且大なりと謂はざる可らず。

（二）

軍國主義と自由主義とは其形式と結果に於て正反對の位置を占むるが如くなれども、試みに歷史に溯

れば互に共起原を同ふするの觀あるは一奇なり、軍國主義の基礎は徵兵制度に在り、若しも徵兵制度なかりせば軍國主義は其目的を達すべき唯一の道具を缺き空の理想を以て止まざる可らず、而して徵兵制度の起原は近代自由主義の一大淵源たる佛國大革命の際に在り、此より先き英國革命の際にはクロムウエルの鐵騎隊あり、三十年戰爭にはゴスタアボス・アドルホスの瑞典兵とワーレンスタインの帝國軍とあり、更に普の太王フリドリッヒの時には近代式隊伍の編制を行なへる强兵あり、然れども是等は孰れも義勇兵に非ざれば各國の浪人を驅集め得たる傭兵に外ならず、即ち七年戰爭に於て普大王と百戰場の辛苦を共にしたる軍隊中にも外來の傭兵少なからずして、軍隊と國民との感情は常に頗る疎遠なりしと云へり、斯くて國民皆兵の主義を立てゝ國防を國民の負擔に歸せしは實に佛國革命に始まれり、一七八九年革命開始の後幾許もなくブルボン王室の顚覆と共に從來の常備軍亦壞破するや國家防備の必要より徵兵法を提案するものありしが、個人の自由を束縛すとの反對に遭ひ一旦立消へとなり、一八九二年隣邦の大軍國境に迫らんとするや初めて『國難』の叫びの下に國民兵の大募集あり乍ち百二十萬人を得て以て敵軍の襲來を擊退し國家を保全するを得たりき、此の國民大募集（レヴィ・エンマス）に由り造り得たる陸軍こそオーシ、モーロウ、ナポレオンが帥ゐて以て赫々の功名を馳せ革命の佛國をして列國の雄たるに至らしめしものなりけれ、然れども此國民大募集も其形式は義勇兵たり未だ徵兵の本義を解するものに非ず、强制徵兵法を實施せしは實に一八九八年に在り、此年將軍モーロウは之を提案して議會の通過を見、茲に佛國兵制の基礎を確定したり、後年ナポレオンが露國遠征の失敗により大軍を亡失しつゝ尙ほ數箇月にして前日に劣らざる大軍を率ゐて列國の聯合軍に相對するを得たるも必竟徵兵法の賜に外ならず、然れば軍國主

義の基礎たる强制徴兵法は獨逸の發明に非ずして佛國大革命の副產物たり、但た徴兵制度の重要なる一部に於て獨逸の參加したる功を認めざる可らず、他なし短期入營の規定を立てゝ豫備兵を作り平時編制に對し數倍の戰時編制の兵數を得るの法即ち是なり、然れども是とても間接には佛國に負へる所なきに非ず、其理由はエーナ大敗の後普魯西はナポレオン帝の命により四萬五千人以上の常備軍を置くことを得ず爲めに二年入營の徴兵法を立てて多くの豫備法を備ふるの道を開きたればなり、即ち佛帝の大壓迫なかりせば遂に此の窮餘の智慧も之を絞出する機會あらざりしや知るべし。

斯くて自由主義と軍國主義は佛國大革命の產める双兒と云ふべく、爾來百有餘載、一方に英佛の自由國隆盛なれば他方に獨逸の軍國主義の發達を見るあり、其主張頗る相反するが如きも必ずしも全然分離する能はず、軍國主義の獨逸にも普通選擧法を敷き國家社會主義を採用し學問研究の自由を許すあれば自由主義の英佛兩國にても强兵を備ふを忘れず、佛國は陸軍の員數に於てこそ獨逸に對し稍々劣るを餘儀なくせられたれ其實質實力に至りては一步も之に讓ること無らんことを期し、英は獨逸との最近の海軍競爭に於て遂に彼の一に對し一、六の優勢を維持して退くことなかりき、蓋し如何に自由主義を擴張せんとするも苟くも一國を建つる以上は國防なかる可らずして、其防備の程度は假定敵國の兵力に對抗し得るを以て限定とせざるを得ず、故に獨逸の海軍擴張に對し英國亦た大に其海軍を擴張せざるを得ず又佛國に於ても同じく陸軍に於て間斷なき擴張を餘儀なくせられ、最近三年兵役制を採用するに至れり又た如何に軍國主義を奉ずればとて獨逸は其國民中個人の知識產業の發達を妨ぐること能はず、啻に之を妨げずと云はず却て益々之を發達せしめざる可らず、其必要ありと云ふ理由は現代の軍國主義なるも

のは前段已に論ぜしが如く徴兵制度に基くものにして、而して兵の良否は大に其知識程度と兵器の精粗如何に因ればなり、同時に現在の軍隊には精鋭の銃砲彈藥を設備し、殊に海軍の如きは巨艦巨砲快速力を主義とし一發の水雷により乍ち沈沒すべき一艦の價數千萬圓に及び一發の砲彈亦た數千圓を下らず故に國富まざれば强兵の實を擧ぐる能はず、國を富まさんと欲せば人民の知識を增進せざる可らず、然れども知識の進步は政治上自治制の發達にも待たざる可らず、是れスタイン、ハルデンベルク、シャルンホルストの徒が普國に徴兵令を敷くに先だち農奴を解放し地方自治を許すの順序に出でし所以にして後年ビスマークの時に當り自由主義は已に磅礴として全獨逸に充滿したりければ、彼れの慧眼亦た之を撲滅するの愚を學ばず却て大に之を利用し國家富强の基を築くの方針に出でたり、蓋しビ公には殷鑑遠からずメッテルニッヒにあり、メッテルニッヒ墺國に宰相として反動的保守政策を行ふこと前後殆んど四十年內に在りては思想及研究の自由を撲滅せんとして外來新說の輸入を禁じ、君主神權說を標榜して人民の無條件的服從を强要したり、且つ單に墺の一國を拘束して進運に乘ぜしめざるを以て足れりとせず更に神聖同盟の勢力を利用し世界各國を擧げ悉く同一方針に出でしめんと欲したりき、然れども世界は頑迷固陋なる一宰相の命令に由り其進步を停止すべきに非ず、希臘先づ民族主義に基きて獨立を決行し南米諸邦多くは共和を唱へて保守退嬰の西班牙より分離し、佛國に『七月王政』の創立あり英國に腐敗選擧區廢止の斷行に引續き普通選擧運動あり、メッテルニッヒの魔術に感染すること最も深き伯林に於ても遂に革命的爆發ありて普王は憲法を公約するの止むを得ざるに至りしが（一八四七年）、明くれば有名なる一八四八年の巴里革命ありて佛國共和政府を創立し終に維納の小革命となり流石のメッテルニッヒも

身を以て脱奔せざるのを得ざるに至り、其後に遺れるは貧國弱兵の死せるが如き墺國あるのみ、ビ公は當時フランクフルト聯邦會議に普國を代表し親しく此般の形勢を目擊せるもの彼豈に其教訓に對し盲目たるものならんや。

一八六一年ビスマークが普王ヴイレムの知遇を得て宰相と爲るや彼は普魯西の指導の下に獨逸統一の大業を成就すべく一大決心を有せり、彼れ果して如何の經綸を抱いて其目的を達せんと欲せしや、彼れは當時普王の軍制改革に對する豫算案を拒める委員會に於て演說したる如く『血と鐵』とを以てざれば獨逸統一の大業を成就す能はざるを思へり、即ちナポレオンが佛國大革命の騷亂に乘じて起り軍國主義の下に天下を執りし如く、ビ公は當時獨逸一般に人心を風靡せし自由思想を基礎として軍國主義を斷行すべく決心せり、軍國主義と自由主義の共存は頗る奇異なるが如くなれども、自由を撲滅すれば國民の生命を奪ふに等しく、墺國に於けるメッテルニッヒの失敗を繰返さゞるを得ざるべく、左ればとて鐵血政略を執らざれば統一の業得て成就す可らず、是れ彼れが君主神權と民權、自由と專制を併行共存せんと欲せし所以なり、故に當初議會の反對を無視して陸軍費の爲めに增稅したるも、普國が丁抹を膺らし墺國に勝ちて後ち國論亦た一變するを觀るやビ公は議會に向ひ前日の違憲を謝し責任解除を求めたり、是れビ公に非ざれば敢てす可らざる一種の英斷にして、亦以て彼れが絕對に自由主義の敵に非ざりしを見る可きなり。

是に由て之を觀れば軍國主義の獨逸にも國會ありて國論の發表に努め、自由主義の英佛にも軍備を整へ國防を怠らず、形式上の双方の主張殆んど相同じきが如くなれども事實は決して然らず、國會を主腦

とする英佛は公議輿論の上に國家の經綸を立つれども、官僚政府を主腦として政治を行ふ獨逸は國民に對して朝三暮四の詐略を用ふ、ビスマークより現皇帝に至るまで之を稱して議會の操縱と云ふ、時として陸海軍費を得んと欲して强て外交の危機を唱へ、又は中央黨の歡心を求めて心になき好意を表し、政治は即ち一種の演劇にして觀客を釣りて利得を益さんとするものなり、是れ一種の詐略と云はずして何ぞや、ビ公の傳記を讀み吾人が最も不快の感を催ほすは彼れが鐵血政略を唱へて議會決議權を一時無視したることに非ず、此一事の如き寧ろ政治家の男らしき行爲とすべき節なきに非ず、吾人が最も不愉快を感ずるはビ公の新聞政略に在り、何となれば是れ多くは虛僞詐略を濫用して輿論を操縱するに在ればなり、然れども斯の如き陰險陋劣の手段に出づること亦是れビ公一派の政治家の脚地よりしては勢止むこと能はざるべきか、夫れ國會を開き普通選擧制を採用し以て表面國民に參政權を許しながら實際上政治の責に任ぜしめず、其形式を許して其事實を與へざらんとせば遂に朝三暮四の詐略により人心を籠蓋せんとするは政治の權道として避くべからず思はるればなり、既に憲政の自然に則らず其常道を踏まざらんとせば議院を操縱し輿論を籠絡せんとするが如きは國政を料理する必要條件とも認められざるに非ず、既に議論の出發點を誤れば其結論の正純を得可らざるは當然のみ自由主義の上に軍國主義を行はんとする根本の困難は實に此點にあり、然れども不幸にして其困難は是に止まらず、國民に對し朝三暮四の詐略を用ゆる主權者は其身自ら終に獨立特行なると能はず、必ず其背後若しくは周圍にある他の勢力の爲めに却て自ら操縱せられ籠蓋せられて最後には國家を誤らざれば止まず、現獨逸皇帝が汎獨逸主義者及び軍閥の爲めに誤られて今次の戰爭の端を開くに至りしが如き最も著明なる事例と謂ふ可らずや。

然れども如何に冷酷の批評眼を以て觀るもビ公執政中の獨逸は實に十九世紀後半期に於ける世界の偉觀と謂はざる可らずして、自ら列國の政論に寄與貢献する處ある亦忘る可らず、之を一言にして云へば國家建設の如何にも堅實にして、帝國の威風堂々たると同時に毫も虚構輕薄の態なく、假令主義に於て之を是認せざるものも公及び公の建設せし國家に對しては自ら崇敬の感なきを得ざらしむるものあり、公はナポレオン大帝に學べり、然れどもナポレオン帝の動易もすれば世界的帝國の經營に急にして佛蘭西の富强を以て終始するを忘れたる弊に陷らず、其内治外交毫も冒險の分子なく、計較の精緻打算の確實なる譬へばユウクリットの幾何學を讀むの感なき能はず、ビ公を以て現皇帝に比すれば宛も大ナポレオンを以て第三世ナポレオンに比するに似たり、ビ公職を去りてより二十五年を經て獨逸の今日ある亦た實に故なきに非ざるなり、ビ公なる巨人の獨裁により作立てられし獨逸帝國は今や才氣餘ありて公の見識節制を欠ける他の獨裁者の下に破滅せんとする運命の下に立てり、是れ實に歐洲の時局が天下後世に向つて一大教訓を垂れんとする所以なり。

（三）

眼を轉じて自由主義國に於ける政治運用の法を見るに頗る簡易徹底せるものあり、聞く曾て大浦兼武氏佛國に遊び時の首相クレマンソー氏を訪ふて議院操縱の秘術を問ふ、ク氏頗る意外の感を爲せるものの如く答て曰く議院に對する別に秘術あるに非ず政府當局は只肝膽を吐露し政策の要領を説明し以て議院の賛同を求むる一事ある耳と、大浦氏が現代佛蘭西の政治家より買收政略の秘術を聞かんと欲して失望せしが如くク氏亦た日本の政治家が議院操縱を以て能事了れりとなすが如きを見て稍意外とせしなる

べし、佛國の如きも半世紀以前に在りてはナポレオン三世の專制即ち粗製軍國主義を行なはんとして公然操縱の秘術を盡せしことあれども、近來共和制の基礎漸く定まると共に政界の空氣も亦た自ら公明正大なるの觀あり、英國に至りては流石に輿論政治の國柄だけありて言論を以て政爭の武器となし秘密手段を弄するの餘地あらず、兩大政黨交代して國政の衝に當り國會に對して責任を負ふの制度定まれる以上腐敗手段を弄するが如き却て政治家の信用を棄損するを以て自然公明の手段を擇むに至れるなり、是れ實に自由主義の賜にして、到底軍國主義諸國に於て見る可らざる現象なりとす、又た自由主義は殖民政策の成功に資すること多大なり、玆に殊更に英佛諸國の殖民制度を論ずるの必要なきことながら試みに一言にして此二自由國が其殖民經營に成功せる秘訣を語らんと欲せば是れ殖民地統治の上に自由主義を應用したる結果なりと云ふを以て足れりと爲す、英國は曾て北米十三州に對する失敗に懲りて各地の殖民に自治制を許し、各殖民地の政務は多く其地方の人物を採用して之に當らしむるの制度を採用し、濠洲、加奈陀、南阿等半獨立國の觀あるを免れざるも、其本國との關係は之を絕たんと欲して絕つ可らざるものあり、印度の如き異人種異宗敎の人民を領有することとて、未だ十分の自治を許すに至らざるも、其統治の自由なる到底英國に非ざれば望む可らざる所のものたり、何なる國が代りて印度の統治者となるも今日の治績を擧げ得んこと決して容易ならず、素より印度三億の人民中にも不平者も少なからず又た竊かに獨立を計畫するもの皆無なりと云ふ可らず、然れども獨立不可能にして、假令可能なるも印度の眞の利益ならざるは印度識者の能く辨知する所たり、是れ暗に英國統治の成功を裏書するものと謂ふべきに非ずや、別言すれば此成功は自由主義を奉ずる英國民性に基因すと結論するを至當なりとせ

ん、又た英國に次ぎて殖民地經營に成功せる者を佛國となす、アルゼリヤは佛國殖民地の最も開發したるものなるが其南北七州より每州一人の老元老院議員と二人の代議院議員を巴里の立法府に送る一事を以て本國が之に對する態度の自由寛大なるを察すべきなり、之に反し獨逸が其殖民政策に於て到る處に失敗せるは獨人自ら承認する事實にして、其失敗の原因としては軍國主義の半面たる官僚主義の弊に歸せざる可らず、此れ獨逸主義の解說者として有名なるパウル・ロホバッハ氏の如きも言明し憚らざる所たり、獨逸の殖民地中唯た青島殖民地のみは他と撰を異にするの觀ありて頗る成功の稱すべきものあるに似たり、然れども青島は他の殖民地の如く殖民省の管轄に屬せずして殊に海軍省に屬し事實上皇帝直轄の下に金錢に飽かせて之が經營を計れるが故に素より之を以て他を律す可らず、元來獨逸人民は個人として頗る殖民的資質に富み、北米に南米に又は極東に到る處に能く成功す、然るにも關はらず獨逸の領地に於ては青島を除て外悉く失敗の跡を遺すに過ぎざるは何ぞ、獨人自ら自白す如く是れ主として官僚政治の弊に歸すべきなり、而して獨逸の失敗と對照すれば英佛自由主義諸國の殖民地經營に於ける成功愈々顯著なりと謂はざる可らず。

然りと雖も自由主義の弊亦た頗る憂ふべきものあり、其弊は殊に陸海軍行政の上に露骨なるものあり文官を以て陸海軍省に長官たらしむるの慣例は道理に於て間然する所なしと雖も實際の成績は必ずしも良好ならず、國防問題も往々にして黨情の犧牲に供せらるゝ耳ならず內閣の交迭頻煩なる時には經營の統一を失ひ易くまた往々にして責任の所在を明にす可らず、此れ百弊の因て生ずる所以にして、自ら軍紀の弛廢を來すべきは睹易きの理なり、今次大戰爭の開始後佛國にては其將校の三分一を交迭して後ち

始めて獨軍に向ひ自信ある對抗を試み得るに至れりと云ひ、英國に於ても先帝即位後海軍部内の改革を必要とせられ、首相バルフォル氏に謀りフイシヤ提督を海軍次長に任して、艦隊の編制より上長官の撰任に至るまで大に刷新するを得たり、若しも十餘年前の此改革なかりせば流石の英國大海軍も現在見るが如き好成績を奏す能はざりしや察するに堪へたり、又た自由主義の弊は外交問題に對しても屢々之を認めることあり、反對黨は反對せんが爲め反對するの傾きを免れずして、國家興廢に關する大問題も黨情の犠牲となることなしとせず、或は黨勢擴張の必要より一派の歡心を得んとする情に驅られ危險なる政策に指を染ることもあり、殊に政狀の變轉の爲め外交の當局屢々交迭するは外政の統一を把持するに甚しき妨害あり、吾人は今例を擧げて之を證明するを欲せざるも讀者もし我邦の近狀に思到せば蓋し思半に過ぐるものあらん、過日の三首領會合の如き我外交の現狀に鑑みて最も政策の統一を必要とせしものにして、吾人は歐洲大戰爭の影響として世人が漸く此般の問題に對し大に覺醒せんとすることの決して故なきに非ざるを知るなり。

之を要するに今次の歐洲大戰爭は第十九世紀後半期に於て大に發達したる政界の二大思想に向ひ一大轉化を促しつゝあり、即ち獨逸の代表する軍國主義に向つて官僚政界の弊を除いて眞正の公議輿論に向ひ責任を負ふべく、自由主義に向つては黨爭の弊を除いて國家本位に立歸るべく政論の轉化を要求するものなり、世界無敵の大陸軍國たりしよが即ち獨逸の災をなし理想の自由國と自負せし國情が即ち英國防の缺陷を生じたる原因たるに想到せば戰後の英佛獨の政論は必ずや多大の變調を帶び來らんと想像するに難しとせず、想ふに今次の歐洲戰爭が各國民に向ひ極端に國家觀念を高調せしむべきは疑を容れず

して、英の社會主義的勞働者も佛の萬國的社會主義も孰れも是れより大覺醒期に入りて國家的脚地に立歸るなるべし、同時に非戰論稍々衰へ、平和問題の考究一層の熱度を加へ、國防の忽諸に附す可からざること愈々覩識せらるるに至るべし、斯の如き國情の下に各政黨間の妥協調定は頻々行はるべく、殊に國事外交に關しては必ず常に意見の一致を謀るの風を生じ若し之を黨派問題となすものならば非立憲の非難を受くるに至らんか、同時に獨墺諸邦の國情如何と想像するに假令一時聯合諸國に屈服するに至るとするも恐らくは軍國主義を放棄するに至らざるべく、從來に比して多く公議輿論に聽從すべきは言を俟たざるも、該幾多の異分子を包容する獨墺は軍國主義に非ざれは各其國の統一を保つこと至難なるべし即ち西歐二國と中歐二國との對抗競爭は依然として存續すべく、露國亦た寧ろ自由主義に傾きて英佛と提契を持續すべし、米國は華盛頓の遺志に遠ざかること漸く遠く、其財力、人民の自負心、及び新設の强兵に依頼すの結果恐らくは最も恐るべき國とならん、玆に於て我邦は一日も空々然として晏如たる能はず明治先帝の偉業を承けて其光輝ある歴史をして益々光輝あらしめんと欲せば平時と雖も擧國一致の心懸を要するや論なく、政界の先輩の如き常に私情を除いて國家本位の脚地を占めんことを要す、各政黨は常に眞正の國論を開拓するに努力し、公議輿論に基きて國政を料理せざる可らず、元老凋落し官僚萎縮するの今日政黨の威力是より益々大なるべく、其大威力を振ふに於て吾人は彼等が每に黨派心に勝ち國家本位の行動に出でんことを要望す。

袁死後の支那

袁總統の逝去が果して支那政局の鎮定に便利を與ふるや否は容易に斷言す可らず、南方各派の先鋒等が一齊に袁氏排斥を唱へ來りしことなれば、其反抗の目的たりし人物の取除かれしことは乍ち南北和平を回復するに至るべしと樂觀するものあり、然れども袁氏在世せば對抗の必要上群雄多く一致の態度に出づべきも既に共同の敵を失ふが故に彼等は是より互に地方に割據して各其野心を逞ふするの道を謀るに專念するに非ざるべきや、而して支那の統一は却て益々困難なるに至らんとするに非ざるなきや、現在の所黎副總統袁氏に代り大總統となりしまでは各派孰れも異議なく、至極好運に進みしも、南方の首領岑春煊氏は民國元年の舊約法の復活、舊國會の開催及び責任内閣の組織を主張し其一をも缺かば南方解兵せずと力說す、之に對し黎總統は各省より三人の代表者を北京に集めて會議を開き舊約法回復の可否を決定せんとするものゝ如し、同時に梁士詒氏等帝政派を内閣より除き一部改造を行はんと企てつゝあるは國務卿段祺瑞にして彼れは之に由り其内閣の信望を維ぎ權勢を持續せんとするが如し、此時に際し徐州將軍張勳は清朝緣故の將軍政客等の同意を得て清朝優遇の約束を尊重し亂黨は一切政治に干與するを許さずと主張し暗に革命黨排斥と清朝復辟を仄かせり、馮國璋氏は南京會議以來依然態度曖昧なり彼は形勢を觀望して機に臨み一劇を演ずるの底意なるべし、蓋し約憲法の回復により平和を見るべくは事頗る簡單なるが如きも、此舊約法に由れば內閣員は國會の選擧により任命せらる規定なるが故に立法行政の實權は悉く國會に歸し大總統は虛器を擁するに過ざるに至るは明白にして、且つ國會には南方派多

數を占むるが故に天下の實權は直に張勳の所謂南方亂黨の手に歸すべし、是れ恐らく黎氏初め段、張、馮諸將軍の堪ゆる所に非ず、斯くて解決頗る簡單なるが如くして簡單ならず危機各所に伏在して前途逆睹す可らざるは支那現在の局面なり、我邦は支那內亂に干涉の嫌に陷らざる範圍に於て南北協定の爲めに斡旋の勞を取殊に袁氏死後の北京政府に對し同情を表すべしと云へるも、我邦の公明の態度深厚の同情を徹底せんせんこと甚だ容易ならず、此際一有力者の我邦を代表して直接に支那時局に對するを機宜の一策とせん、林駐伊大使の北京轉任を傳ふ、吾人は其速に事實として現實せんことを希望す。（六月十八日稿）

公論

タゴオル氏に與へて氏の日本觀を論ず

田中王堂

タゴオル先生

現今、わが國には、確かに四つの勢力ある團體があります。官僚の、官學の、政黨の、乃至、富豪の徒が、各、是等の集團の一つを形作つて居るのであります。

然し、彼等の勢力なるものの、必らずしも、彼等の獨立して有する智慧又は識見より來たらずして、其れの多くは、たゞ、彼等が是等の團體に屬することより生ずる(こゝには、一々計算も、記述も出來ないほどの)雜多な關係や、情實より來たつて居るのであることは、たまたま、彼等の制定する法規、彼等の計畫する事業、彼等の發表する學說等からしても容易に洞察し得らるゝのであります。

然し、數は、單に其れが大數であるといふだけで、優秀なる質に反抗し、時としては、優秀なる質を壓倒することのあるのが現代の特徴の一つであります。彼等はこの惡傾向を利用して、彼等の屬する團體を一つの石壇とし、その上に立つて、おのれの地位の顯著を築かうとし、增さうとして居るのであります。そしてわが國に於て、知識と、品性とが異なれる階級の間に、如何に分布されて居るかを尠しも知るところの

なき外人等は彼等のこの外附の勢力、作爲の地位を盲信し、過信して、彼等を以て、直ちにわが國に於ける知識と品性との最高水準を代表するものと速了するのであります。然し、事實（彼等の十中の八九までは）現在の日本の狀態と要求とを理會し、鑑賞するに必要なる聰明と情操とを兩つながら有たぬのであります。彼等の觀察と、說明とを通じて、漸くにして其等の外人等に會得された日本なるものの、私共から觀ては、非常に上調子な、非常に歪んだものとなつて居るのは、たゞ、自然の結果と云ふのほかはありません。私は、彼等のおのれの分際をも辨へずに、知識の專賣者たらんとする厚顏無恥の言動のために、幾度かわが國が外人等に對つて甚しく誤表せられ、誤傳せらるゝのを目擊しました。そして、その度毎に、何のくらゐ、齒痒くも感じ、無念にも感じたか知れません。

私は、こゝに、あなたに告げなければならぬ一事があります。其れは、現に、わが國には、たとひ其の數に於ては、大して多くないにしても、さきに私の擧げた四つの團體の孰れにも屬さない人達にして、その見識に於て、その品性に於て、確かに、是等の團體に屬する人達に一段も二段も卓越して居るものがあります。されば、あなたにして、眞に、その最深處に即して、わが國を理會し、且つ、鑑賞しようと志さるゝならば、あなたは、何人にも先きに彼等に接し、何事にも先きに、彼等の意見を聽かねばならぬと云ふことであります。

あなたは、先頃、大阪市民に對つて今度の御來遊の目的を說明して、『其れは、如何に、日本に於て、東洋と西洋とが會同したか、如何に、其れの過去は其れの現在と協同して居るかを觀、且つ知りたいためであつた』と云はれました。率直に事實を申し上げると、現に、私共の經營して居る生活は、決して、あなたがここでお考へになつて居るやうな形式で實現されたのではありません。もつと、單純な、然し、もつと深刻な問題として提供され、解決されたのであります、しかし、この事に就て、詳しくは先へ進んで述べることと

して、兎に角、あなたにして、多くの失敗を重ねながらも可なりの成功を收めて居る私共の生活の精神、又は、方針とも謂ふべきものを碇りと把握するだけの勞を取られ、實際に把握することが出來たならば、あなたの祖國たる印度に取つて參考の資となることは確かに、尠なくないであらうと思はれます。しかし、其れにしては、あなたと日本との間に仲介して、あなたに對して物象を適確なる視野に置くと同時に、物象に對してあなたをして正當な視角を取らしめる人物が必要であります。今、あなたは斯かる人物をお識りで御座いますか、お有ちで御座いますか。

あなたが神戸に上陸なすつて以後どんな種の人物が最も多くあなたを取捲いて居たか、あなたはどんな人物と最も親しく交はつて來られたか、私には解かりません。然し若し其等の人々の大數が、識見、品性ともに平凡の者であつて、そこに深刻に日本を理會するの聰明を有し、卒直にその理會を表言するの誠實を有する者の一人も居らなかつたならば、あなたに取つて如何に不幸の事であつて、同時に、私共日本人に取つて如何に遺憾な事でありませう。

今、私は一個の紳士として、あなた對つて、おのれの學殖と識見と品性とに就て、自づから確く信ずる所のものを多く語ることの非禮を避けねばなりません。然し、あなたの下問を待たずして、私から進んで尠しく卑言を呈するからには、私をしてこの擧を敢てせしむるに到つた事由を闡明するに必要なる限りに於て、おのれの爲人に就て、尠しく述ぶることのお許しを得たいと存じます。

私は、世間より、わが國に於ては極はめて稀有なる自由思想家の一人として目されて居る者であります。私の享けた性情と、私の取つた教養と、そして、私の選んだ境遇とよりして、私は、さきに私の數へた四つの團體の孰れにも屬しない者であります。そして私はこの「光榮ある孤立」を誇りとして居るのであります。是等の團體に屬する彼等と、其等の孰れにも屬しない私との間に存する種々なる相違點優劣級に就ては、こ

こに一切論ぜぬこととしても、私が彼等の殆ど總べてに優れて、一層公平に事物を觀察し、一層深刻に關係を推理し、一層誠實に意見を發表するの特徴を養成して來て居ることは、獨り私だけが許して居る事實ではありますまい。

されば私は、あなたが數次に互つて公表なされたわが國に關するあなたの感想と共に、わが國に對するあなたの忠言を讀んだ時に、そして、きのふ、けふ、主としてあなたを取捲く人々は、如何なる種の學と識とを具へた如何なる種の者であるかを想見した時に、平生、哲學々徒とし、文明史家とし、はた、愛國者として、私がわが國の開拓しつゝある文明、わが國人の創造しつゝある生活に就て會得するところのものを將て、聊か、あなたの參考に資することが出來ると信じました。この私の信念は、私をして僭越の咎を省るに暇なく、この書を裁せしめることになりましたのです。

今より、大略二十年前、日清戰役の頃まで、私共は日本の同情者たる、或は、さうであることを粧ふ歐米人より、私共は徒らに蕪雜な新來の文明を模倣するがために優しき固有の文明を放棄して居ることの愚策たることを警告されたものでした。然し、私共には別に見る所があり、信ずる所がありましたから、一向に、彼等のこの警告には耳を假しませんでした。其れより二十年後の今日に到つて、あなたは、私共に對つて、卑むべき西洋文明の附植のために、高貴な東洋文明を破壞することの賢者の業にあらざることの忠言を與へて居られます。然し、私共は、現在及び將來に於て、私共が猛然深き商量と、大なる覺悟とを以て、手に取り上げた嚴肅な爲事がありますために、あなたをしてこの忠言を發せしめたあなたの僞りなき友情に感謝すると同時に、この忠言其のものには全然服從するとの出來ないことを悲みます。曩の歐米人の警告の裏には一面に於て、私共は、到底、彼等の創始した近世文明を運用するの才能を有たぬと見た輕蔑の情が含まれ、他の一面に於ては、私共の鄕土をして永く彼等の觀場たるに止まらしめて置かうとした不眞面の氣分が横は

つて居つたのです、其れ故、私共は彼等に對して尠なからぬ義憤を懐きました。あなたの忠言の底には、あなたの、(私に斯く云ふ卒直をお許し下さるでせうか)、固陋な哲理、若しくは、淺薄な詩想よりして、あなたがいたく歐洲文明、即ち近世生活を誤解せらせた結果、あなたが其れとは非常に異なると想像される日本文明、即ち、古代生活を詩化し神秘化し、一種の嫉妬を以て、其れを擁護しようとする純にして、眞實なる情熱が流れて居ります。其れ故、私共はあなたに對しては、悲しき、そして心苦しき敬意を捧げます。彼等に對する私共の感情とあなたとに對する感情との間には是れだけの相違はありますが、あなたが私共の眞の立場を理會なさらぬことは彼等が私共の眞の要求を理會しなかつたと全く等しいのであります。されば、若し之れがために、私共にして彼等の態度に慊らなかつたことが事實であるならば、私共があなたの態度を慊みとせねばならぬことも事實であります。

あなたは、嘗て、五十年前後のわが國の歷史をお讀になつたことがおありでしたか。私共の父老は、實に、國民として千載一遇の危機に出逢つたのでした。政治の統一もなく、兵制の準備もなく、泰平の時代に平和を謳歌して居つた時に當つて、彼等は、俄かに、しかも、不意に、恰も晴天の霹靂の如く、西方の三四の雄邦に依つて、相亞いで見舞はれたのでした、威嚇されたのでした。其れから以後多年に亙つて、種々の行き掛かりもあり、手違いもありましたが、結局、彼等父老は是等雄邦に依つて、「死か否れば、近世文明か、其の一つを選べ」と宣告されたのでした。そして、彼等は死を避ける唯一の手段として、近世文明を選んだのでした。序ながら、一言こゝに申し添へて置きます。私は、彼等の近世文明を採つたのは、死を避けるためであつたと云ひました。然し、彼等は、人類の中で、最も勇敢であり、最もプラウドである民族に屬する者であります。地球上、いづれの處に到るも彼等ほどに死を怖れることを知らぬ種族は他に殆ど見出され難いことは事實であります。彼等の怖れた死は肉體上の其れ

ではなくして、精神上の其れであつたのです。詳しく云へば、彼等の何よりも怖れたのは、暴虐の前に屈することと、地上に永く獨立の生存を失ふこととであつたのであります。兎に角、私共の父老の西洋文明を採るか、採るまいかと云ふ問題は、彼等、及び、彼等の子孫が、一度、死活の分岐點に置かれて、始めて決せられたのであつて、決して動もすれば、世間のヂレッタント達が勝手に暢氣に、揣摩するやうに、醉興や、贅澤から決せられたのではないのであります。是の一事は、何人と雖も、眞劍にわが國の現代文明を理會しようとする者の是非とも留意しなければならぬ最も重大なる條件であります。

然し、如何に、私共の父老は死活の分岐點に置かれたにしても、一つの國民が三千年の久しきに亙つて涵養し來たつた一つの文明を有つて居つた彼等が、一朝、故あつて、樣式に於ても、精神に於ても、其れと非常に相違し、又、其れと非常に抵觸するところのある他の一つの文明を採ることになつたのであります。彼等の中の或る者が、時としては、過去に對して愛著を懷き、前途に對して狐疑を生じたのも極めて自然であつたと思はれます。幸にして、彼等の多くは聰明にして大膽なる人々でありました。彼等は、モルトケと共に卵を毀さなければオムレツの出來ないことをよく知つて居りました。されば、彼等は、どんな難局に立つても彼等の同胞の光榮と幸福とを全うするためには、あらゆる犧牲をも辭せざるの覺悟を一度も誤りませんでした。斯くして、彼等は如何に由緒ある制度と雖も、苟もこの大なる目的に背くとあらば、無下に其れを捨てて惜まず、如何に新奇な方針と雖も、苟もこの大なる目的に合するとあらば、直ちに其れを取つて憚れなかつたのです。私は、他の國民が斯かる境遇に置かれた時に、其等の指導者たるものの往々取つた拙劣にして、不徹底な動作を觀るにつけても、私共は當時、彼等父老の有ち且つ活らかした熾烈なる愛國心と、高邁なる經世の見識と、明敏なる實務の才幹とに對して、幾度感謝しても、猶ほ、其の足らざるところのあるのを覺

えるのであります。

私共日本人が、西洋文明を攝取し、そして、日本に於て近世生活を創始したのは、唯一つの動機に依つて支配された結果であります。そして、其れは云ふまでもなく、外國の强烈な、迫害に對抗して、自國の獨立を保障することであつたのであります。當時、私共は世界の大勢に關しても、知識を缺き、自國の眞價に關しても理會に乏しかつた爲めに、今日になつて、この一大目的を實現せんとして、私共の試みた諸の改革、私共の企てた諸の設備を細かに點検するならば、隨分多くの誤謬に陷つたことも多くの失敗を重ねたことも解かります。然し、私共が大局に處する國是と定めたものに到つては、大體に於て、賢くあり、正しくあつたとせねばなりません。

なる程、新たに工夫するよりも、既に工夫されたものを應用する方が捷徑であり、便利であつたから、國を富まし、兵を强くするに必要とされたものは、兵制、郵便、鐵道等より、法律、政治、教育等に到るまで、之れが範を西洋に求めたことは事實であります。されば、皮相の觀察に甘んずる人々より云はせたならば、其れは、純なる西洋の模倣であつたと云ふかも知れません。然し、こゝに、私が力說しなければならぬことは、是等の總べては、悉とく、日本の要求を充たすがために、日本の實力を用ゐて、日本人の發意に依つて計畫され、成就されたと云ふ事實であります。當時、私共日本人が、過去三千年間に蓄積し改造し來たつた一切のものを外にしては、別に之れが動力となつたもの、方向となつたものは一つもない云ふ事實であります。斯くして、其の理義を討究するならば、謂ふところの新來の文明なるものも、畢竟するに、固有の文明の、たゞ、四圍の事情の變遷に應じて、適度に變更されたのに過ぎないといふことになるのであります。

私は平和主義の主張者であり、同時に、國民主義の主張者であります。つまり、世界に於て、豐富な文明と、充實した生活とを成り立たしめるには、善意に基づく卓越性の競爭と交換とを繁昌せしめねばなりません。

そして併立する國民性の數が多いければ多い程、其等の各の發達の自由が大なれば大なる程、この狀態の德澤を享けるものはあらゆる國民であると云ふのが私の主張であります。然し、現今のやうな文明と生活との繼續する間は、この望ましき狀態を促進するには、總べての國民は自家の義務として、善くあると同時に强くならねばなりません。否、其等は善くなる前にでも强くならねばなりません。或る國民が如何ほど卓越した成績と萠芽とをその國民性の中に有つにしても、若し其れが、不幸にして、獨立を失つて居つたならば、其れは、どうして是等の卓越性を自然に開展させ、自由に普及させることが出來ませうか。されば國民としての重大なる義務の一つは生きること、獨立して生きることであると私は信じて居ります。この理由で、私は、私共の先輩をして、彼等が取つた方向、彼等が擇んだ方針を、實際に取らせ、擇ばせた彼等の本能と智慧とに、當然、敬服して居るのであります。

生活に、内的、外的の區分がないやうに、其れの方便にも、内的、外的の差別はありません。されば、その初め、單に、富國、强兵の道具としてのみ取り入れられた或る文明の機關も、其等を出來るだけ有效に運用しようとする工夫は、其等の運用者をして、何時しか、其等の原理に遡らしめねば止まなかつたし、又彼等をして其等と不可分の關係にある他のあらゆる文明の機關にも涉らしめねば止まなかつたのであります。醫術、兵制等に始まり、久しき間、たゞこの領域に落ち付くべく見えた西洋文明は、次ぎに、教育、法律、政治等の領域にまで其の步を進め、最後に、更らに道德、科學、藝術の領域にまで其の步を進めることになつたのであります。斯くの如くにして、わが日本は、漸を追ふて、全然、西洋文明の洗禮を受け了したのであります。

今、あなたが、大阪に於て試みられた講演と、東京に於て試みられた講演とを比較するに、その外觀だけでは、確かに、大分の相違が認取されます。私の想像するところでは、あなたが東京に於て試みられたもの

は、あなたがあなたの郷土に在つて頻りに日本に憧憬して居る間に起草されたものであつて、大阪に於て試みられたものは、あなたが神戸に上陸の後あなたの豫想に反したあたりの光景にいたく失望された際に著想されたものに違ひありません。前者に在つては、日本はその固有の精神に依つて、新來の利器を更らに醇化して、世界に冠絶する生活を實現しつゝあることを稱讃されて居りますが、後者に在つては日本に於て、東洋文明は無慘にも、西洋文明の暴威の下に蹂躙され、今や、漸く、その貴き特色を失ひつゝあることを痛歎されて居ります。然し、是の相違は、ほんの外觀だけであつて、兩方の講演の奥底に横はるあなたの根本思想に到つては、（他の場合に於ても、隨時あなたが、印象的に、斷片的に語られたるとに徴して解かる通り）全然同一であります。つまり、日本に對するあなたの忠告なるものは、次ぎの飜案に依つて無難に括約出來ると信じます。其れはからであります。『現に、世界には二種の文明が培養され、存續して居る。一方は、外的物質的なる西洋文明であつて、他の一方は、內的、心靈的なる東洋文明である。前者は力の福音を傳へて居り、後者は愛の福音を奉じて居る。そして、如今、世界の大勢に照して、孰づれの國と雖も、力に依らなければ、それの存在を保障することは不可能であるが、同時に、又孰れの國と雖も、愛の福音に頼らなければそれの幸福を完成することは困難である。されば、是等の二種の文明を融合する上に、あらゆる他の國民よりも、便利な境遇に在るやうに見える日本は新たに力の柵を獲得しつゝある間に、舊き愛の泉を擁護し、そして、愛に依つて力を醇化し行くことを怠つてはならぬ。是れこそ日本が、世界に負ふ天職の最神聖のものである。』

私は、こゝに云ひ表はされたあなたの意見が、一時の思ひ付きでないことは、あのSādhanāの中にあなたが開展された、あなたの根本思想からしても推定出來ます。然し、斯く世界の文明を觀察し、評價することは、私共が自分の生活の方針と理想とを決定し行く上に、

果して妥當のものであり安全のものでありませうか。私共は、あなたから（固より、是れは、あなたの確信より來て居ることであらうとは思ひますが、）一つのユウトピヤにのみ與へられ得るあらゆる讃辭諛辭を惜氣なく與へられたからと云つて、それで忽ち如何にもさうだと有頂天になつて了ふわけには行きません。あなたの云はれることが、どこまで信賴し得べき眞理であるか、どうか、を篤と吟味して見ねばなりません。

西洋の文明は力の文明である、東洋の文明は愛の文明であるとのあなたのお言葉は、修辭として面白いが、若し尠しでも事實を指して居るものとすれば、隨分亂暴な區別であると、私は思ひます。西洋の文明を創始したのも、東洋の文明を創始したのも、可なり同似の人間性を享けた人間であつたのです。一方が惡魔であつて、他の一方が天使であつたわけではありません。どちらにしても、協同の生活に憑つて、各自の欲望を充たして居る個人が、或る團體の中に在つて、獨身に又は、他人と共に、色々と實驗し商量した後、比較的に効果ある方法として案出し、繼承し、改良して來たものゝ總合が文明であります。されば、地理や、氣候や、遺傳などの異なるところから、異なる團體の間に、その局部に就て云ふならば、異なる文明が必然に發達することは承認も出來るし、證明も出來ますが、あなたが、こゝで大膽に宣言なさるやうに、西洋と東洋とに於て、全く反對する文明が案出され、そして、繼承されて居ると云ふことは想像するに難く、又、事實に合はぬ話しであります。然し、この事に關しては先きへ進んで適當な機會があつたら、もつと詳しく論ずることにしませう。こゝで、特に私が辯明して置きたいのは、私共は、あなたが推察されるやうに、東西二洋の文明の統合に依つて、私共の生活を營んで來て居らぬと云ふことゝ、そんな意識を以て營うとしたなら、私共の生活は、倏ち混亂と分裂とに陷つて了ふであらうと云ふことゝであります。

東西文明の融合と云ふ言葉は、事實より文字を重しとするわが國の多數の單なる讀書人（即ち、世人の謂ふ

とところの學者）の間に久しく行はれ來たつたジャゴンの一つであります。是れに就ては、私は嘗て一つの論文を公けにして、其れが實際の事實に合はぬことを指摘したのでした。然しこのジャゴンはわが讀書人の語彙より未だ全く其跡を絶たないのに、私共は復た改めて、あなたより承はるのであります。東西文明の融合と云ふことを、頻りに高唱する人々の考への中には、こゝに、東洋文明と云ふ一つの體系があり、かしこに、西洋文明と云ふ他の一つの體系がある。今、全體として是等の文明の體系を理論として比較し、研究した上に、兩方より短所を切り、棄て、長所を取り合はせ、こゝに兩者の孰づれよりも優良な文明を作り出すと云ふのであります。彼等の好きな高揚の口調を藉りれば、東西兩洋の文明を打つて一丸と爲すのであります。然し、實際の生活に於ては、決してそんな風に、東西の文明は一度でも融合されたことはないし、又、到底、され得るものではありません。されば、日本にて西洋文明の或る一部が適用される時、又は、歐米にて東洋文明の或る一部が加味される時には、其れは、必らず、或る特殊の競爭に對抗せんがために、若しくは、或る特殊の知識、特殊の趣味を擴張せんがために、或る特殊の個人、又は、個人の團體に依つて適應され、參照されるのであります。そして、この方法を外にして、東西の文明が融合される方法は決して存在し得ないのでありますから、この事たる、實際には、極めて地味な經過を以て行はれて居るのであります。されば、東西文明の融合など云つても、其れを實行して居る個人の覺悟は、たゞ、彼れの事業の繁昌を圖るがために、或は、彼れの藝術の發展を策するために、彼れが置かれた境遇に居り、彼れが有てる力量を活らかして、彼れが利用し得る方便を利用すると云ふだけであります。そして、是れだけの事は、人間である限りは、誰れでも行つて居る事であります。行つて居らねばならぬ事なのであります。して見れば、その方便が、たま〳〵國産であると、舶載であるとの相違の如きは、彼れの態度に、何等の相違をも來たさぬべき筈であります。

私共日本人が、西洋文明を採用したと云ふ事實も、たゞ、或る場合に、私共の生活の安全と發展とを盡するために、當時、出來るだけ廣く、深く其れが方便となる物を索めて來たと云ふに過ぎないのであります。私共の目的は純一であります。現在及び將來のために成りたけ幸福な生活を實現するために出來るだけ廣く、方便を攝取し、出來るだけ深く其等の意味を考覈しようと努力する外に、何等の懸念もないのであります。私共にして、この覺悟を怠らざる以上は、どんなに舊制度が廢れ行かうが、どんなに新方針が興り來ようが、私共は失望もしなければ、當惑もしません。ただ、私共は、何時でも、眞劒に、豐富なそして、充實した生活を實現しようと努力して居るだけです。

嬰兒は、彼れの手に持つ人形の毀れた時には、彼れの傍に、一層優れた人形があつても、彼れは、猶ほ、毀れたのに一向に、彼れの愛著を置いて、他のには尠しも彼れの眼を觸れようとしません。是れは、極めて不合理な態度と云ふものです。何物にも超えて、彼れの同胞の幸福を尊重する賢者は、決して、このやうな嬰兒の執拗な頑冥な態度を學んではなりません。若し人間の生活にして、不斷の改造に依つてのみ其れが存續し得るものであるならば、舊きものが常に滅じ、新らしきものが常に生ずるのは、極めて順調な經過と謂はねばなりません。舊きものの滅するに伴つて、或る美は滅しませう。然し、新らしき物の生ずると共に、更らに美なる或る美は生じて居ります。舊き美の滅することが悲むべき出來事であるよりも、新らしき美の生ずるのことは更らに喜ぶべき出來事であります。

斯くして、何人にしても、眞劒に、熾烈に生活しようとする者に取つては、如何に舊き文明と新らしき文明とを融合すべきかと云ふやうなことは決して一つの問題を構成せぬ筈であると私は信じて居ります。

其れでは、今日、私共日本人には何等の問題もありませんか。いゝえ、どうして、どうして。私共には、私共が之れに對つて全力を傾注しても、なほ力の足らないやうに感じられる一つの重大な問題があります。是

れは、私共に取つて、最も重大な、否、多分、唯一の問題でありませう。其れは、即ち私共が現に經營しつつある文明は物質的である。私共は、是非とも之れを精神的にせねばならぬと云ふことの問題であります。

こゝで、私が、わが國の文明は物質的である、之れを精神的にせねばならぬと云つて居るのは、決して、あなたが考へられて居るやうに西洋の文明に對抗するやうに、東洋の其れを高調することでもなく、又、近世の文明を凌駕するやうに古代の文明を復活させることでもないのです。其れは、私共の運用して居るあらゆる機關の間に、私共の所有して居るあらゆる才能の間に、調和を圖り、統一を立てることなのであります。

あなたも、一方を呪咀し、他の一方を歎美する意味にて、大分、物質的、精神的と云ふ言葉をお用ゐになります。然し、如何なるものが物質的で、如何なるものが精神的でありませうか。正當に事實を語れば、總べて、欲望の對象は、たゞ其等が享樂される瞬間に於てのみ存續するのであるが、欲望は一つとして、靈の發動でないものはないのでありますから、欲望の對象は、悉とくが、靈的であると云はねばなりません。そして、欲望は生活の機關として權威を有つて居るのであるから、欲望の方便は單獨には、皆同一の性質を有ち、平等の價値を有つて居るのであります。其れであるから、若し、欲望に關して、正當に物質的、精神的の識別の許される場合があるならば、其れは、全然、欲望の活らき樣から來るものに相違ありません。そして、私は或る欲望が活らく時に、其れが他の欲望と調和を保つて居れば、精神的であり、之れに反して、他の欲望と矛盾を生じて居れば、物質的であると考へます。から解釋して來ると、(そして、この外に解釋のしやうはありません)如何に精神的が善くて、物質的が惡いかが解かると思ひます。然し、この解釋に從へば、金錢、財寶の欲求も精神的であり得ると同時に、宗教、美術の憧憬も、物質的であり得ることになります。隨つて、この場合に、前者は稱讚さるべく、後者は非難さるべきものとなります。而して、是れは實際の事實

よく合ふ判斷であります。

今、私は、上の解釋を政治的に、社會的に擴大して、我が國現下の文明は物質的であつて、精神的でないと私は斷言するのであります。何故ならば、其れの機關と機關との間に、協同と理會とが缺けて、文明全體が一致あり、照應ある活らきをなして居らないからであります。そして、私の考へるところでは、是の一事が、わが國の最大痼疾であつて、あらゆる病的徵候は是の痼疾より發して居るものであります。されば、この悲むべき狀態は、一日も速かに改善されねばなりません。然し、如何にしたならば改善されるでせうか。

個人に於て、善はいつでも惡の中より生ぜねばならぬやうに、個人の團體たる社會に於ても、惡を外にして善の來たりやうはないのであります。個人に於て、彼れが善であるか、惡であるかは、彼れの欲望が協同して居るか、矛盾して居るかの事實に依つてのみ決せられるやうに、社會に於ても、其れが善であるか、惡であるかの決せられる標準は、其れの機關が協同して居るか、矛盾して居るかの他にはないのであります。然し嚴密に考へれば、個人の生活も社會の生活も、獨り、其れの欲望、又は、機關の協同に依つてのみ存續し得るものであるから、矛盾と云つても其の實は或種の協同、つまり、低級の協同であるのであります。或は、自覺を伴ふほどに發達しない協同であると云つても宜いでせう。今、私共の社會は物質的であり惡であります。私共は、是非とも、其れを精神的とし、善とせねばなりません。然し、前者を化して後者となす鍵は、すでに私共の手に托されてあるのであります。一方より他方に移る橋は現に私共の生活の中に架せられて居るのであります。其の鍵其の橋と云ふのは他のものではありません。たゞ、物質的となり惡となつて居るもののありのまゝの意義を十分に追窮して行つて、其れをして自づから精神的たらしめ、善たらしめることであります。

も尠し、事實に即して語つて見ませう。其の初め、衝動と信仰とで輸入されたいろ〳〵の近世生活の方針

や、設備の間には、其等自づからに、其等の發生した時代からしても、又動機からしても、既に多大の矛盾と扞格とが含まれて居つたのです。然るに、實行には長ずるが、理論に短なるわが同胞は、偏に、目前の急に應ぜんとして、其等を見つかり次第、手當たり次第に羅織し來たり堆積して行きました。是れがために、わが國に於て西洋に於けるよりも、其等の間に、一層の矛盾と扞格とが見出だされるやうになつたのは極めて自然のことゝ謂ふべきであります。然し、こゝに何人と雖も疑ふことの出來ぬ儼然たる一大事實があります。それは、他でもない。是等のものは、私共の要求を充たして來、現に充たして居ると云ふことであります。煎じ詰めれば人間の生活の中には彼れの要求が充たされると云ふことに勝つて、現實であり、權威あるものは一つとしてないのであります。して見れば、若し、一致、又は、調和といふものが人間の幸福に大切なものであるならば、この私共の要求を充たして來、現に充たして居ることとの中には、暗々に、徐々に、風土化と國民化とが相應に行れてある種の一致又は調和の素地は既に或る程度に居るに相違ありません。今日はたゞ共れをして沈澱せしむるに有効なる振盪を與へ得る人才が闕如して居るだけであります。斯かる人才は少數者の形で現はれるにしても、或は多數者の形で現はれるにしても、一度、この事が成し遂げられる曉には、功利は醇化されて道理となり、使用は深化されて運用となり、是れまで功利に依つて使用されたものは、道理に依つて運用されることになりませう。

つまり、私の物質的であるわが文明を、精神的にしなければならぬと云ふ意味は、私共の現に有つて居る力量の全體を以て、日夜に私共を襲ひ來たる刺激の全部を、出來るだけ消耗のないやうに出來るだけ相殺の生ぜぬやうに支配し、受用して行けるやうにしなければならぬと云ふことなのであります。この私の見解からすると、わが文明の物質的なるを精神的にする方法として、あなたの教示されるものは、反つて、共れを今日あるよりも、一層も、二層も、物質的にすること

になります。何故ならば、あなたは、純全に、現實の中に生活することを勸めずして、故らに無理に、單一なる現實を東洋と西洋、新と舊と若しくは、東洋的と西洋的とに引き裂きそして復、其等を空想で融合するやうな手順を說いて居るからであります。

私は西洋の文明の信者であります。丁度、わが賢明なる福澤諭吉が其れの信者であつたやうに。私は、西洋文明は今日のところ、わが同胞の安全を保障し、彼等の幸福を增進するに必須なものと確信して居りますから、其れが、初め、西洋の土地に生じたから厭やだとか、其れが西洋人の手に依つて養成されたから嫌ひだとか云ふやうな、けちな意地や瘦我慢は決して有つて居りません。私は姑らく、男らしい謙遜を以て西洋文明を學びます。なに、彼れも一時是れも一時です。嘗ては、東洋の文明に依つて西洋を感化したこともあります。やがては、私共の手に成る文明に依つて歐米を利益しない時期の來らぬと云ふことを誰れが豫言し得ますか。昔しから、大なる創始者は、同時に大なる借用者であつたと云はれて居ります。私共は、國民としても、大なる創始者たるためには、先づ大なる借用者たることを愧ぢてはなりません。私はこの覺悟からして、西洋の文明は其れの短所、長所を併せて、可なりに正しく評價して居る積もりです。

あなたは、西洋の文明の性質を誤解されて居ります。否、尠しも理會されて居られません。さうでなければあなたは、どうして其れに對して、あのやうな不公平(unjust)な態度をお取りになりますか。

ベエコンは、嘗て、一つの有名な觀察をしました。其れは、知識と智慧との差別に就てであります。彼れはこんな事を云ひました。『知識はおのれの正しき用を知つて居らぬ。其れを知つて居るのは、知識の外にあり、上にある智慧である』と。今、ベエコンのこの差別を藉りるならば、あなたは、知識を取つて其れを西洋人の生活に當て嵌め、智慧を以て東洋人の生活に當て嵌めやうとして居られます。然し、是れは果して公平な、そして徹底した見解でありませうか。あなたの

御意見の當否の程度を判斷する前に、私は豫め一層嚴密に知識と智慧との關係を吟味する必要を感じます。

若し、ベエコンのしたやうに、知識を生活の局部の方針とし、智慧を其れの全體の方針とするならば、人間には知識と併せて智慧の必要なることは云ふまでもありません。然し、智慧が生活の進行につれて、當然分化して知識となるべきものであることは、恰も一般感覺が生物の進化につれて分化して五感若くは六感となるのと同樣であります。知識にまで進んで行かない智慧には乾度どこかに誤りが含まれて居るのであります。然るに事實西洋人の生活に於ては智慧は立派に知識となつて居りますが、東洋人の生活に於ては、其れの大部分は智慧で止まつて了つて居ります。いひ換へれば、幸福の欲望は品性の陶冶と境遇の征服との二つの方角に發展しなければならぬのであるのに、東洋に於ては品性の陶冶だけは工夫されたが、尠しも、境遇の征服には大した努力が用ゐられませんでした。特に、あなたの祖國なる印度に於てさうであります。されば佛教の諦めとする、Avidya を破つて、Vidya を得ると云ふことも、（無論あれだけでも、驚くべき知識には違ひありませんが、）畢竟するに品性の範圍内に限られたことです。智慧は西洋人も、東洋人も等しく有つて居ります。たゞ、西洋人に在つては、其れが健全な發育を遂げて、知識まで進んで行つたのに。東洋人に在つては、其れが脆弱なために中途で挫折して了つたのです。人間は彼れの種屬に對し、境遇に對して、一面に於ては、其等に隨順して行く必要があるが、又、他の一面に於ては、其等を感化して行く必要がある、之れがために、智慧は愛となり、同時に、力とならねばならぬのであります。古來、東洋に於て、智慧はどれだけ愛となつて居つたか私は知りませんが、確に、大して力とはなつて居りませんでした。然し一生幻想の中に暮らして了ふ少數者は別として、普通の生活を營む大數者に取つては、力の伴はない愛は、生活の改善に効果の極めて微弱なものであります。

西洋に在つて、智慧が知識の本體たる科學の形態を

取り始めたのは夙に、希臘からのことであります。然し科學が其れに特有の理想と方法とを以て永久に確立されたのは人間が彼れの生命の尊貴と彼れの力量の偉大とを自覺して來た文藝復興の際のことです。兎に角若しこゝに、西洋の文明は最も適當に科學に依つて代表されて居ると云ふものがあるならば、私は、彼れのこの意見に對して、尠しも異存を唱へようとはしません。神話に依つて、古代人の生活の特徴が表出され得るやうに、科學に依つて近代人の生活の特徴は表出され得ます。あなたは、「科學と云ふものは人性には非ず唯知識と訓練とに過ぎない、物質界の法則を知得することに依つて諸君は更により深き人道の變更を敢てすまい」(東京朝日新聞所載に據る)と云はれました。精神文明を高調して、物質文明を排斥すると云はるゝあなたは、どうして、人間の生活を觀ることが、此のやうに物質的なのでせう。もつと其れを精神的に觀ることは出來ませんか。科學は人性の發動であり、分派でありますから、つまり人性其のものではありませんか。人性が科學に分化すれば、其の限りに於て、人性は變更したのではないでせうか。隨つてあなたは、又、どうして人道は變更しないと云はれるのです。現に、こゝ、二三百年來科學に依つて、人道は非常に變更されて居るではありませんか。

あなたの提唱され、高調される愛にしても、歡喜にしても、其れを纔かに主觀的の情調に止めて置かうとするなら、其れまでゝすが、苟も、其れを客觀的の方便として、眞に同胞の幸福を圖からうとするならば、科學を措いて、他に有効な何物がありますか。人間が神話を棄てゝ、以來、人道の發達は主に、科學の發達となつて進んで來たのです。人間は、彼れの靈の啓發の異なる程度に隨つて取次に異なつた修養の機關を工夫して來ました。最初に魔術、次ぎに神話、次ぎに宗敎、次ぎに藝術、次ぎに科學、而して今日までのところ、科學が最後のものとなつて居ります。人間は科學に先だつた機關の總べてに就て、既に、其等が現はし得るあらゆる意義、與へ得るあらゆる功徳を試驗し盡

しました。科學は漸く人生に出現したばかりです。隨つて、前途に長き行程を有つて居ます。其れの現はし得る意義と、與へ得る功德とに到つては、なほ全く未知數です。私共はあらゆる修養の機關のうちの最も精神的たるこの科學が、無事に成長し、そして、大膽に活動する日の一日も早からんがために私共は十分其れの愛護に勉めねばならぬと思ひます。

　修養の機關として、神話や、宗教や、藝術の後を承けて起つた科學はよくその由緒ある傳統を辱めず、絕へず一つの大なる humanizing force として、社會に活らいて來ました。科學はもと、志向の評價であるべきで、決して、世人が想像して居るやうに、單に、事實の叙述ではありません。たゞ、科學に固有するこの貴き性質が、未だ一般には明らかにならぬがために、科學は往々誤解されたり、誤用されたりして居ります。科學は政治の如く喧騷しません宗教の如く熱狂しません、戰爭の如く鬪擊しません。謙遜に、靜寂に、徐に、しかし、確りと、この世に於て、苦痛を減じ、幸福を増して行つて居ります。

　私は科學の上に築かれた文明が、宗教や藝術の上に築かれた文明よりも、一層精神的であるとは信じますが、其等より一層物質的であると信ずることはどうしても、出來ぬ者であります。

　あなたが日本に對して尠なからず興味を有つて居らるゝやうに、私も印度に對して多大の興味を有つて居ります。さうして、私は久しき以前より、一度印度の識者に對つて語つて見ようと思つて居つたことが一つあります。今この書の終りに於て其れをあなたに對つて披瀝します。

　嘗て、私の友人として、印度の學生が二人ありました。彼等は二人ともに、當時、東京帝國大學に學んで居りました。たしか、是等の中で、一人は、冶金學を修めて居り、他の一人は、藥學を修めて居つたと記憶して居ります。彼等はかう云ふ學術をして居るに拘はらず、彼等の信仰となると、二人ともに、超絕主義を奉じて居りました。私から觀ると、彼等の學問と信仰

との間には到底同一人では取り入れ融合することの出來ぬほどに相容れざる矛盾があつたと思ひましたが、彼等には尠しもそんな感じはありませんでした。彼等は平氣で兩方を取り入れて居りました。私は、之れを觀て、印度人に取つて、宗教上の信仰が、如何に痼疾となつて居るかを想像することが出來ました。然し、人は同時に、二人の主に事へることは出來ません。たとひ、出來なくないにしても、非常に骨が折れます。若し、全力を以て矛盾する二つのものを信じやうとしたら、理論に於ては兎に角、實際に於ては、勢力の强い方が弱い方を支配して居るに相違ありません。

この理由で、私は、印度の幸福のために、そこに、もつと實驗的の、歸納的の、そして、個人的の思想の流行して居らないのを非常に殘念に思つて居ます。私は印度に於て是等の傾向ある思想が勢力を有つて來ないうちは、あなたの同胞は、まだ政治的にでも社會的にでも眞に覺醒したとは云はれぬと思ひます。少なくとも、現代に於ては、或る指導者があつて、彼れは一方に彼れの信仰として、超絕主義を奉じ、他方に、彼れの主義として、國民主義、若しくは、個人主義を皷吹して居るといふ者があるならば、私の理會は、容易に其れを信ずることを許しません。

現に超絕主義を信奉し、宣傳して居らるゝあなたに對つて、こんなことを申し上げるのは、尠しく失禮かは知れませんが、然し、何が一番印度を荼毒して來たか、そして、現にして居るかと云つて、超絕主義に勝るものは他にありません。誰れの實際生活にしても、彼れが理論で說くほどに、超絕的にはなつては居りませんからよいやうなものの、然し、其れにしても超絕主義が、間接にでも、多少の惡影響を彼れの思想、行爲の上に與へることは明らかです。して見れば、どの指導者にしても、眞に、彼れの同胞の聰明になり、强大になることを望むならば、彼れは、彼れの宗教上の、或は哲學上の信念に就て、大に考へるところがなければならぬと思ひます。

あなたの同胞の或る者は、自國に自由と獨立とを齎

す道は、先づ、自づから富み且つ强くなることであると考へた結果、大分、志を科學や、工藝に向けて來たやうです。そして、是等の中には、先きに、わが國に學んだ者もあるし、現に學んで居るものもあります。是れは、あなたの國に取つて、大に祝福すべき徵候であるとして、私は喜んで居ります。私の喜ぶ理由は、二重です。第一には、無論、あなたの同胞が、この覺悟を取ることを外にして、あなたの祖國を永遠に强大に導く道がないからであります。が、第二には、科學や工藝を學んで居るうちに、彼等が自づから、體認するに至る實驗的、歸納的の精神は反つて第一の利益にも勝る利益であると信ずるからであります。

輓近に到つて、あなたの國人で、近世の科學や工藝を修得した者は隨分に多いことであらうと私は想像して居ります。然るに、(遠くに居てよくは解かりませんが)、宗教の信仰上に、或は、哲學の主張上に實驗的、歸納的の氣運が一向に起つて來ないのは、一體、どういふものでありませうか。私は、之れに對して、聊か失望して居るものであります。若し、世の中に宗教や哲學の必要があるならば、それは、其れが時々の要求に應じて、生活の統一となり、指標となつて行くところにあるのではありませんか。あなたの國人は、實驗的、歸納的の精神で科學や工藝に從事して居りながら、哲學や宗教に於ては、全然、それと背馳する絕對的、神秘的の精神を守つて居ると云ふことになると、私は、あなたの國人の聰明か或は彼等の生活上に於ける誠實か、どちらかの一つを疑はねばなりません。あなたの國に於ては、さう心配しないでも超絕的、神秘的の精神は無くなりません。然し、實驗的、歸納的の精神は餘程努力しなければ容易に附植されません、そして、今、あなたの國に最も須要なものは實驗的、歸納的の精神ではありませんか。

あなたは、先達て、東京帝國大學で試みられた演說のうちで、『幾世代の間理想を抱いて沈默を守れる東洋は、方便を追ふて走る西洋が喘ぎて停止する迄、靜に待つて居ることが出來る。東洋はその不朽にして決し

て滅びざることを知つて居る』(東京朝日新聞所載に據る)と云はれました。なる程、民族としては永久に滅びますまい。然し、私共は皆現に私共と共棲して居る同胞に對して責任を有つて居ります。彼等の生存の中に幸福を圖らなければなりません。『方便を追ふて走る西洋が喘ぎて停止する迄、靜に待つて居ることが出來る』など暢氣なことは云つて居られぬことと思ひます。

現に、あなたの同胞の欲求の中には、政治的に、社會的に、强くなり、自由になりたいといふ一つが活らいてはしませんか。それならば、何故に、あなた方は、この理想を實現し行くに必要な哲學を有たないのです、作らないのです。

あなた方印度の敎師たちの新たに學ばなければならぬ一つの事實があります。其れは、眞理も、善と等しく、悉とく相對的であり、一時的のものである、また、なければならぬと云ふことであります。されば、プレトオ、トオマス・アクイナス、ロツク、カント等の哲學のやうなものにしても、苟も、思想史上に、永く、一時期を劃して居るものは、悉とく、たゞ、當時の社會の理想の指標、若しくは統一として組織されたものであると云ふことです。印度に取つても、其れの生活の理想や様式が變はつて行く上は、是の一つだけが永久に亘つて眞理である、なければならぬと云はれ得る哲學は一つもないわけです。私は、あなたの力說され、宣傳されて居るやうな汎神敎的思想は今日及び今後の印度を助成し行くものではないと信じます。又、印度はあらゆる汎神敎的の思想から脫却しなければ、まだどの意味に於ても、覺醒したとは云はれないと思ひます。

大分長いものを書きました。或は長者に對して、知らず識らず、禮を失したこともありませう。是等の直言に對して、どうか、私の罪をお赦し下さいまし。たゞ、眞にあなたと、あなたの祖國たる印度を敬愛する至情から申し上げたことですから。あなたがわが國に御滯在中、如何なる方々から、如何なる事をお聽きになられるか知りません。が、若し其等の或るものをお持歸りになるならば、どうか、私の是等の意見をも併せてお持歸り下さいまし。その中には、多少御參考になると思はれる事も多少はありませうから。

我國民經濟生活の暗黑面

法學博士　河津暹

一

瀧田樗陰學兄足下

足下は僕に我國現時の經濟問題について論議すべきことを命ぜられたが、僕は經濟時事について愚見を披陳するよりは僕より見れば我國經濟の發展に遙に重大なる關係があると信ずる二三の問題を提出して足下並に識者の研究を煩はし度いと思ふのである。

今次の戰爭は何時終を告ぐべきかは解らないが、戰爭が終を告げたら諸國の間には直に激烈なる經濟戰爭が始まるに相違ない。諸國の戰爭に由りて被つた經濟上の損失は蓋し少くはあるまい、現に戰爭第一年丈でも參加國の資本の八分の一を消耗し之を恢復するには二十年を要するといふことであるから、今日までも已に其れに倍する損失があつたらうし、更に戰爭の永引くに連れて其の額を增加するのであるから、之を恢復するには一方には海外市場を擴張することを勉むるであらうから勢ひ經濟競爭は激烈ならざるを得ないと信ずる。戰爭が瘡痍が癒るまで內國市場を守つて大勢の推移するに任すといふことは萬々あるまい。處でこの經濟戰爭は世界全局面に亘つて行はるるであらうから我國は戰爭に於てこそ戰塵の巷から遠かつてゐたれ、戰後の經濟戰爭には決して安全なる地歩にゐて之を傍觀することを得ないと思ふ。この激烈なる戰爭の渦中に投じて行動宜しきを得るなら我國の經濟上の位置は大に進むであらうが、然らざれば一敗地に塗れて永く頭の上らぬことになるのである。即ちこの戰後の經濟戰爭時代こそ我國の經濟にとりては天下分目の戰爭時代と思ふのである。政府が特に朝野の名士を集めて經

濟調査會を開かれたのはこゝに觀る所があつたからであらう。經濟調査會が如何なる問題を捉へて之を研究し以て我國策を定むるの材料を提供するかは暫く措いて、僕は我國民に我國民の經濟生活について大に猛省顧慮して貰ひ度いものがある。國民にしてこの點について覺醒しなければ、如何なる國策もいはゞ砂上の樓閣であつて燦然眼を奪ふ底のものも畢竟一場の夢に過ぎないからである。僕が我國經濟の發展に遙に重大な關係があるといつたのは此の故である。

我國民は、我國民の多數の生活が經濟の法則に由つて行はれつつありやを考へたとがあるが、言葉を換へていへば我國民の經濟生活が鞏固なる基礎の上に立つものと信じてゐるか。我が國經濟は統計の示す如く年と共に發展はしてゐるのであらう。然し、我國民は經濟生活について年と共に安心幸福を增しつゝあると信ずるか。僕は大に疑ふのである。僕が大に疑を起す有力なる證據は農村疲弊の聲が日に益々高くなることである。農村は都會の發達に押されて疲弊をしたのであると輕く應へることが出來るか、僕はそうは信ずることは出來ない、僕は農村の疲弊は我國民の經濟生活の暗面を反映してゐるものと信ずるのである。何故、農村に之が反映するかといへば、農民は比較的に餘裕がないから、尙剴切の言葉でいへば、たとひ財産があつても土地等に固定してゐて流動資本がないから、經濟生活の暗黑面を蔽ひ隱すことが出來ない、從つて之を暴露し易いからである。この種の暗黑面は都會の生活には更に多く包含せられてゐるのではあるが會々之を暴露しないといふに過ぎないのである。農村の生活を少しく研究して見給へ、我等の目に映ずるものは農民の生活でも、所得が割合に少くして、消費即ち生活の費用が割合に多いといふことである。或は生活の程度が向上するのは慶ぶべきことといふかも知れないが、其れは所得が更に多く增加して、從つて生活の程度が向上した場合にいふことが出來ることであつて、所得が少しも增加しないで生活の程度のみが向上したなら、如何なるものでも長く其經濟を維持して行くことは出來ない

のである。否、其れは少しく極端にいつたことではあるが、所得が十丈しか増加しないのに消費、生活の費用が十二なり十三なり増加したとすると必ずや其のものは經濟生活をするに常に迫害を感じ、不安を訴へるようになり、其局は四苦八苦の悲境に陷らねばならないのである。僕は農民の多數が四苦八苦の悲境に在りとはいはないが經濟生活をなすに何となく迫害を感じ、不安を訴へつゝあるのではないかと思ふのである。この點は實際に通ずる方に聞きたいのであるが農村疲弊の聲は僕にはかくの如くに聞えるのである。僕が觀察する如く農村の疲弊は我國民經濟生活の暗黑面を反映してゐるとすると、農村問題は獨り農村の問題ではなくして我國民の經濟生活の問題であるといはねばならぬ。工場勞働者の問題も社會問題として輕視することは出來ないが、我國の社會問題としては我國民の經濟生活問題が更に重要なるものといはねばならぬ。

二

瀧田樗陰學兄足下

僕は國民の多數とは敢ていはぬが少くとも可成多くのものが其の所得の割合に、より不應の生活をなしてゐるのではないかと疑ふものである。社會の夥多の弊害はこゝに起因してゐるのではないかと疑ふものである。若しこのことが甚だ誤つた觀察でないとすると、昔し江戸兒は宵越の金は使はぬといつたに比較して更に劣つてるといはねばならぬ。昔の江戸兒の生活は餘裕のない生活であるが、今の國民の經濟生活は餘裕のない所ではない「マイナス」の生活である負債の生活なのである。末にはどうかなるであらうの生活である。遣繰の生活なのである。かくの如き生活をなすものが可成多くあるとすれば我國の經濟は實に基礎の鞏固のものでないといはねばならぬ。如何なる國策も之を實行することが出來ないではないか。

然らば、我國民は何故にかゝる經濟生活をなすものが多いのであるか。僕の觀る所を以てすると、其の第一病源は國民の所得其物が非常に不公平であるといふことである。天下廣しと雖も現時の我國ほど所得の不

公平不平等の所が何處にあるか。世の中では動もすると資本家と勞働者との所得が大に懸隔があることを指摘するが、其も事實には相違ないが、所得の不公平不平等なのは獨り之に止らないのである、社會各階級を通じてゞある。近い話が、官吏の俸給と實業家の所得を比較して見給へ、殆んど比較にはならぬのではないか、其れに拘らず官吏は其位置に應じて相當の態面を維持して行かねばならないのである。同じ實業家でも其所得を研究して見ると、同じ位な位置にゐ、同じ位な働をしてゐるものでも非常に懸隔があるのである。更に之等のものと社會を異にする。例へば文筆などで衣食してゐるものと比較して見給へ、其他種々の階級のものを捉へ來りて比較して見給へ、其の差異の甚しいことは獨り資本家勞働者のみには止らないのである。かくの如き所得の懸隔があるのに或程度までは物質上でも對抗して行かねばならぬから玆に不經濟生活が生ずるのである。物質上のことは少しも顧みないといふ決心があれば問題は別であるが、それを多くの者に强ゆるよりは所得の不公平不平等を或處まで緩和正するのが寧ろ適當ではあるまいか。社會政策を講ずるものは國民の所得の不公平不平等について相當の攻究を積むべきものである。是れが眞の社會問題であるからである、此等の社會政策家は勞働者階級の幸福に重きを置かるゝが、我國では所謂勞働者となつて肉體的勞働で衣食するものとなると、態面などを保つ必要がないのであるから其經濟生活は却つて安全のものであるが、却て其れよりは少しく位置の良きものとなると、經濟生活上迫害を感ずるやうになるのである。僕が數年前或問題の爲に農商務省で勞働者の生活狀態を調査したことがあつたが其の調査では月に五十圓前後の所得があるものは生活上最も困難であるとの結果を得たのである、其調査は東京のみで、我國全體のではないのであるから、之を以て全國を推すことは出來まいが、この事實は蓋し當つてゐると思ふのである。所得の不公平不平等に次では第二の病源として家族制度である。家族制度其物を直ちに經濟生活の不安定の病

原とすることは少しく酷かも知れないが、多くの場合に家族制度は經濟上からいへば寧ろ缺點を多く示してゐると思ふのである。社會上少しく位置あるものは我家族制度の關係から多少は親戚等を救恤扶助をしてゐぬものはない。其れもこれ等救恤せらるゝものが恩義でも感ずるならばしほらしいが、反對に權利である如く感じてゐるのも少くないのである、從て社會上相當の位置あるに拘らず親戚故舊を助けないとすると非常な不德漢の如くに攻擊するのである。所得が限りあるに此種の負擔は決して輕いとはいはれないのである。國民經濟の立脚點からいふと、家族制度の存在する結果困れば親戚のものに泣付けば如何かなるであらうといふのが國民をして獨立獨行大に勤勉ならしめない一原因であるともいへるのである。家族制度のことはいひ度ことがいくらもあるが問題外となるから之は止めて置かう。第三の病源としては公課等の重いといふことを擧げやう。我國の租稅の負擔は絕對數に於ては先進國のとは比較にはならぬが、國民の所得と比較すると決して輕いとはいへぬ、否甚だ重いといはねばならないのである。國稅自身も輕くはないが其れに比較すると地方稅が甚だ重いと思ふのである。地方稅其物は仕方がないとしても我々が地方の行政から受くる利益の割合には却て甚だ重いと思はれる。勿論租稅其物は何も之から對價を得なければならぬといふものではないが、地方自治體の組織や行政の遣方によつては經費を遙に輕減することが出來るやうに思はれる、然るにこれ等組織行政の良しからぬが爲に租稅の負擔が甚だ重いやうである。此等は政府當局者は大局から達觀して之れが矯正の策を講ぜられんことを切望せざるを得ぬ。租稅の負擔の重いのは尙且つ忍ぶべしとするも國家以外に國家と同じやうに租稅的負擔をなさしむるものが少くないのである、赤十字社とか愛國婦人會とか軍人後援會とか其他この種の會は數へ來ると隨分ある。これが地方などでは官憲の力で加入を强制するから、中心大に平ならざるものがあつても之に加入するのである。其の趣意精神からいへば實に堂々たるもの

であつて、之に反對すべき理由はないのであるが、之に從つて片端から加入すれば隨分と重い負擔といはねばならぬ、特にこれ等の團體は中には老猾のものがあつて地方人の虛榮心に乘じて巧に負擔をなさしむるのがある。これ一種の租稅類似のものに非ずして何ぞや。其に地方によりては宗敎が蔓つてゐてこれが種々の名義で淨財を喜捨させる。これも亦一種の社會的租稅といふことが出來やう。數へ來ると隨分とある。其外に多少社會に位置のあるものには每年寄附の勸請を受ける。之を勸請するものは相當の理由を有するに相違ないから、之を拒絕することが困難なる場合が少くはない。これが經濟上からいへば負擔であつて、而かも決して輕からぬ負擔である。地方の名望家などになると國にでも居れば自然この種の負擔が少くないから、態々都會に出でゝ居住をしてゐるものがあると聞いた。何んと間違つた話ではないか。一體寄附經濟などの存在すべき理由がないではないか。寄附するものゝ負擔苦痛はさることと乍ら、寄附金を目當に事業を起すといふことが抑も間違である。若し相當に寄附金が集まらなかつたら其事業は仆れて仕舞はねばならぬからである。其事業には經濟上の基礎がないからである。寄附するものが喜んで之に應ずることは寧ろ例外で、已むを得ず其の位置に對し、其の財產に對し之を出すに過ぎないものが多い、事業を營むものも之を知り拔いて居る、然るに之をなすものが少くない。若し其の事業にして相當に人の注意を引くものであつたら、無理に寄附金を集めなくも其事業は之を維持して行けるに相違ない。僕の承知してゐる範圍では泰西諸國にては勿論少數の例外はあるが所謂寄附經濟を行ふものはない、行はふとした所で、權利思想の發達せる所であるから應ずるものはない。或は富豪等の學校などに寄附する例を引いて僕の意見を駁するものがあるかも知れぬが、其は寄附經濟ではない、寄附金がなくとも學校事業は立派に維持することが出來る、經濟上の基礎があるのである。其れに富豪が任意に寄附をして之を助けるとか、新しい試をなさしむるとかするのである。

我國にあるやうに寄附金を見當に事業を初むとは同一の談ではない。かゝる風は斷じて宜敷ないから止むるやうにして貰ひたい。之と關聯してこの頃世の中では或事業の爲に基金を造ることが流行するやうであるが、經濟上からいへば間違つた話であると信ずる。其の基金を集る趣意は一骨折つて基金を集めさへすれば其れから生ずる利子丈で其事業は永久に繼續することが出來るといふのであらうが、何れ多數のものに迷惑を懸けて寄附金を集むることになるのであつて永久に寄附經濟を行はんとするに外ならない。社會から見ればそれ丈資金を固定さすことになつて我國の如き貧乏國では不經濟の話である。基金を作らずとも經營者が骨を折れば其の事業を繼續することは難くはないと信ずる。其を富豪等に泣き付て基金を集むるなどは腑甲斐ない話ではないか、このことは一寸見れば甚だ輕いことのやうであるが國民の生活の方からいつても、將又事業の經營の方からいつても決して輕いことではないと信ずる。識者は大に注意すべきことゝ信ずるのである。談が脇道に奔つたが國民の經濟生活を行ふ上に於て障害となる第四の原因としては我國民は冠婚葬祭を初め送迎其他何か事があると所謂御祭騷をしたがる癖がある。かゝる虛禮等に力を出さねとさも冷淡な、沒義道のものゝやうにいふから、心中馬鹿々々しいとは思つても「浮世の義理」として之を廢することが出來ないのである。御祭をされる方でも口には名譽であるとかいつてるが其の負擔は決して輕くはない。地方などで大官等が御出になると其の市町の重立たる者は出迎をするやら歡迎の宴を開くやら御祭をするのである。之に參加するものゝ負擔は勿論、其の地方の勞力資本を濫費することと決して少くはない、一事が萬事でこの調子で行くのであるから農村などが疲弊するのは當然といはねばならぬ。其れに加へて近年では流行を逐ふ風が獨り都會計ではない、田舍にまで大分浸み込んだ樣である。吳服屋よりいへば世の中の人が流行などに注意されなかつたら、反物など賣行が少くなるから、上手に廣告などをして世の中の人を流行に引き入れる

やうにする。流行品なれば品質の優れないものでも價が出るのであるが、流行が廢れば其れ丈價が減ずるのである。若し僕が流行品々々々と高い價を出す旁から其流行が廢れて行けば、いはゞ僕は流行其物に多くの資金を捨てゝゐるやうなもので天下之より愚なことはない。いはゞ我々が流行を逐うのは價値のない虚榮心を滿足さすに過ぎない、西洋の話であるが或貴婦人が其虚榮心を滿足さす爲に遂に其の貸金の證文を綴り合せて夜會などに出たといふことであるが、流行を逐うの心理狀態は大な差はないと信ずる。我國計ではない外國などにては更に其風が昌んであつて巴里などでは服裝の流行は一週間づゝに變るといふことである。我國で其の眞似をしたなら大變である。このことも識者の注意を乞はねばならぬ所である。最後に政治熱の昌なことである。我々立憲國民は政治を解さなければならぬのは勿論であるが、地方などに遊んで見ると、理性によりて政府の政策を議するのではない、感情によつて是非をしてゐるものが少くない、甚しきに至ると、何某が政友會員で其地方に幅を利してゐるから自分は同志會で一旗擧て見やうなどゝ公言して耻ぢぬものがある。これも眞實の政治思想の發露でなくして同じく御祭騷に過ぎないのである。之れが國民の經濟生活に大關係があると信ずる。このことは世人の周知することである。

數へ來ると我國民の經濟生活には障害が少くない。都會の生活にも農村の生活にも、事情に由り程度は同じくあるまいが共にこの種の障害がある。從つて所得の割合には生活の費用が嵩むのである。國民の多數は僕がいふまでもなく夙に之を感じてゐるが、習慣の力に押されて呻吟し乍ら尙この羈絆から脫することが出來ない。其の羈絆から脫することが出來ないから動もすれば一攫千金を夢んで投機などに手を出すに至るのである。世の中に相場の秘傳を教えた書物などが多く出てゐるし、多くのものに喜ばれて讀まれてゐるさうであるが、かゝる秘傳のあるべき道理がない、投機などは決して致富の道ではない、若し相場で成功した百

人のものがありとすれば必ずや一萬人近くの失敗者がなければならぬ。この見易き道理さへ解らずに一攫千金を夢むに至つては寧ろ憫むべき至りである。然しかかる風の漸く昌になるのは我國民の經濟生活の暗面を示してゐるものと信ずる。我國民の少くとも一部分がこの習慣の惰力に壓されて呻吟する結果は動もすると社會を破壞せんとする咒咀の聲を擧げたり、又は其羈絆を破ぶつて放逸享樂の徒となるのである。僕は兩三年前本誌々上で戰前の歐洲の社會を説いて、享樂主義並に社會主義的傾向が年と共に多くなつたことを説明したことがあつたが、我國民も其の風潮に捲き込れて同じ傾向が年と共に增加するやうである。我國前途にとりては實に寒心すべきことではないか、我國民にしてこの弊風から脱出することが出來ない間は到底我國民の經濟に餘裕を生ずる道理がない、其の經濟に餘裕が生じない間は如何なる國策も實は之を施すべき道がないと信ずる。故に我國民は猛省して此の缺點を矯正することを勉めなければならぬのである。こゝに我國民の經濟生活の一面を説いて識者の教を乞はうとするのである。

食物と健康に對する我邦人の迷想

某醫學博士

飮食物は健康を維持する上に、暫時も缺くべからざるものであるけれども、又健康は屢々飮食物の過不及によつて害せられ、生命も亦之によつて短縮せられることもある。今其一二の例を擧げて見れば、神經衰弱の人などには多く其病源を滋養分の缺亡と誤解し、所謂營養物を澤山食ふことが其治療法の一つであるかの

如く考へて居る人を屢々見受けるが、之が往々反對のことがあつて、多食の爲めに却つて神經衰弱を增長せしめて居る場合がある。一體人間の消化器の力は其人によつて一定の局限があるもので、例へば健康な人には普通一人前の食事の二倍以上をも完全に消化し得る人もあるけれども、又人によつては半人分も僅かに消化し得て、それ以上消化することの不可能な人がある。假りに其消化力の弱い人に多量の食事を與へた場合には、其過剩の分は不消化の狀態で、或は醱酵し、或は不生理的に分解し、或は異常の分解をして、屢々それが吸收せられると、人體の組織或は臟器の機能を害することになり、又甚だしき場合には强き毒素の如き作用を呈して、之によつて急性中毒症狀を生じて、或は數日間人事不省、昏睡の狀態等に陷らしむることもある。よし斯くの如き强き程度に至らずとも、日常其消化の惡き狀態を繰返しつゝある時には、其異常分解物の刺戟が絕えず此生體の上に影響するが爲めに、屢々之に原因して健康な人も神經衰弱の症狀を呈することもあり、又神經衰弱などの人は往々其度を高むることがある。一體神經衰弱などの人は多くは臟器の機能の生理的以下なることが多いものであつて、例へば腸胃の力でも肺臟心臟の力でも弱い人に多いものである。此場合に弱いからとて滋養物を澤山にとるといふやうなことは、今の理由によつて、希望したより却つて反對の結果に陷らしむることがあるのである。斯くの如き人には然らば如何なる物が適するかと申せば、人々によつて多少の差はあるけれども、大體に於て穀類であるとか蔬菜の類、輕い魚類などが適するので、肉類其他の所謂濃厚な食物は之に適しない場合が多い。殊に食物の分量としては多過ぎるよりは寧ろ少過ぎる位が適當な量であり、又夕食などは朝食及び晝食よりも少し減ずるやうにするのが、殊に睡眠の出來にくいやうな人には必要な注意である。總て取るところの食物が、之を消化し之を同化するところの機能と一致するやうにせなければ、前述へたやうな反對な結果になる。之について一つ注意して置きたいことは、普通の人の考

へ居る所謂滋養物なるものゝ意味である。普通の人は滋養物と言へば、牛肉とか卵とかいつたやうに、其物に滋養の價値があるやうに考へて居るが、それが抑々間違ひの本であつて、物には滋養の値打を置くことの出來ない場合が多い。例へて言へば甲の人には肉類卵が滋養物であつて、乙の人には之と反對に五穀或は蔬菜等が滋養物である場合がある。今一つ例へをとつて見ればもつと簡單に解ることであるが、即ち同じ鳥でも、生肉を主食として居るところの鷹のやうな鳥もあり、腐肉を主食として居る烏のやうなものもあり、米を食ふ鷄、蟲を食ふ燕、魚を食ふ鵜や、水草を食ふ鳥もある。若し此場合に於て其食物に滋養といふ値打を與へたならば、肉を食はないところの鳥は滋養物なしに生活するといふ矛盾した結論にならねばならない。即ち鷄に向つて肉を強いたり、又反對に鷹に向つて米を食はせようとするのと、同一の不結果を見なければならぬことになる。即ち滋素の値打は其物にあるのでなく、之を食ふところの生物に適するや否やによつて定まるものである。即ち我々の常に唱へて居るところであるが、歐米人には多く肉類及び之に類するものが滋養物であつて、日本人にとつては五穀を重大なる滋養物と考へなければならぬのである。尤も人間は今例をとつた鳥などゝは異つて、食物もさう單純では不十分である爲めに、所謂副食の必要を認めねばならぬものである。即ち五穀を主食として居る場合でも、副食として蔬菜、魚、卵、肉等を用ゐるものであるが、然しながら主客顚倒することは許されない。又其分量に於て各々其適度を超えざるやうに努むることが、最も重大な結果を持ち來して居ることを繰返さなければならぬ。即ち食物の分量は甲の人と乙の人と異つて居るもので、人の眞似をすることは許さないものである。玆に又一つの迷があるが、多く健康な者が多食するものであつて、虛弱な者が少食で且つ淡泊な物を好むものである。それから誤つた結論として往々澤山食ひ且つ濃厚な食物をとれば、健康になると思ふ者もある。それは結果と原因を同一視したものであつて、誤つた論

斷と言はなければならぬ。詰り言へば健康な人には甲類の食物が適し、虛弱な人には乙類の食物が適する丈けのことであつて、之を反對にすれば何れにも不結果を持ち來すべきものである。即ち虛弱な人を健康にしようとすれば、直ちに濃厚な食物を多量に與ふるよりは、淡泊な物を少量に與へて、漸次腸胃の力を强くして其肉類に適するに至つて、初めて乙類を用ひせしむべきである。肺尖加答兒等の人でも往々腸胃の力を計らずして、所謂滋養物を食へば直る如く迷信して、それが爲めに却つて病氣を增惡せしめ、腸胃までも障害して恐るべき結果を持ち來すことがある。而かも尙其の結果に注意せずして、如斯滋養物をとつたにも拘らず不結果に終つたといふことを天命と諦める人があるが、甚だ惜むべきことであつて、如斯ことをせなかつたなら、左樣な不結果にならなかつたかも知らぬと思はるゝ場合がある。然らば、多食の害といふものは何處にあるかと言へば、先に申した通り、或はごくごく健康な十分の運動、勞働の出來る人にはないことであるが、中等の健康以下の人が之をしたならば、其結果は屢々腎臟炎、腸胃疾患、糖尿病、喘息、不眠症、其他の恐るべき疾患を起さしむることが出來るのである。遂には壽命をも短縮せしむるに至る、誠に恐るべきことである。總て人間は腸胃を健全に維持するといふことは、之を木に譬ふれば滋養分をとるところの根を大切にすると同一であつて、根の弱いものは早く枯死せねばならぬ。又僅かの障害に對しても直きに萎縮するやうになる。腸胃の弱い人も之と同樣であるから注意して誤に陷らぬやうにせねばならぬ。

最後に日本人には如何なる種類の食物が最も適するかについては、種々の實驗があつて、先づ健康なる人に混合食を與へた場合に於て、腸から不吸收の狀態に於て排泄せられたる成分を化學的に分析した試驗によれば、學者によつては、蛋白質に對しては三二・二プロセント不吸收狀態に於て排泄せられ、脂肪は四三・二プロセント不吸收で、含水炭素（即ち穀類蔬菜等の主成分）は一・四プロセントしか殘らないで九八・六プ

ロセントは悉く吸收せられて、營養を助くることになるのである。又他の學者の成績によつても、蛋白質は二三・九、脂肪は三九・〇不吸收の狀態で排泄せられるが、含水炭素は僅かに一・六プロセントの外全部に吸收せられるのである。即ち日本人にとつては含水炭素の類は、如何に多く消化され吸收さるゝやといふことは、問はずして明かなることである。如斯狀態を以て考ふれば、日本人は昔より今日に至るまで穀類を主食として、よく之に適合して來たといふことを、今更の如く感ぜざるを得ない。西洋の狀態では之に反して祖先以來肉を主食とし、初めは狩獵を業とし後には牧畜を業として、其肉を喰ひ、其皮を着て生活して來つたところの民族の子孫であるから、遺傳的にも之に適合して居る。然るにも拘らず今日は屢々過剰の肉類を食することを以て有害と稱へて居るところの學者が漸次多數に出て來つて居るを以て見れば、歐洲と雖も昔の民族の生活狀態と今日の生活狀態では、詰り身體を使ふ程度に於て差異を來たしたが爲めに、矢張り肉類の適せずして、含水炭素の適する人が多くなりつゝあると見える。固より又年頭によるものでもあり、即ち少壯な人には蛋白質は適しても、老年になると最早や之に適合しなくなる場合が多い。日本でも老年の人は肉類が消化が惡いといふことを自覺して、淡泊の食物に安んずる人が多くなつて來ることを見る。勞働者は之に反して西洋では多く肉類を主食とすることが出來ないので、經濟的に黑パンや馬鈴薯を以て主食とするが爲めに、西洋人にとつて往々營養不良を起す場合がある。日本の勞働者の狀態はやゝ之と異つて、穀類を主食として魚類肉類等を副食として居る爲めに、勞働者ほど健康狀態が優秀であること、西洋とはやゝ趣を異にして居る。

尙日本の穀類に適する所以は緯度と大關係を持て居つて、即ち北緯三十度四十度の間の温帶に位して居る爲めに、自然之に適するので、即ち日本國のみならず南部支那、印度、伊太利等に於て、即ち支那米、印度米、伊太利米の適する場所にあつては、穀類が主食で

あることは普通であつて、即ち伊太利などにあつてはマカロニ等を主食として、肉類の分量等は歐洲に比して比較的少きことを以て習慣として居る。亞米利加に於ても北亞米利加の南部、亞米利加米の出來る場所に於ては皆穀類を主食とする傾向がある。然れども今日の所謂歐洲文明の中心は、之に比すれば遙かに北にあつて、即ち北緯五十度の地點にあるので、例へば伯林とか倫敦とかは皆五十度以外にある。歐洲では溫かいと言はれて居る佛蘭西などでも尙五十度附近である。之を日本に譬ふれば日領樺太と露領樺太の境界の北緯五十度で境をせられた場所の附近であるので、即ち寒帶に近い爲めに、一方には肉類が適するといふやうな關係を見出すのである。即ち北支那、露西亞及び歐洲の北部、亞米利加の北部を通じて肉食地帶と言はねばならぬ。日本でも北海道の北部以北は、魚類を主食として居る村落が多いといふことを聞けば、矢張り同一關係であると思はれる。尙日本より南に下る時には多くは果物食地帶であるので、即ち春夏秋冬美しき果物のみで生活することの出來る民族がある。恰度日本人でも夏は淡泊な水物が欲しくなり、冬は溫かい脂の濃い物が好まるゝやうになる關係と少しも異つたことはない。結局各其民族、其個人の强弱並びに年齡等に適合した食物の適應量をとるやうに注意せなければ、完全な活動も出來ず、人壽を延ばすことは六つかしからうと思ふ。固より健康な人や、取り除けの場合や、又此議論以外の場合が少からざることゝ思ふ。

三黨首領會議の批判

三黨首領會合覺書の批判

東大教授
法學博士　上杉愼吉

過日三政黨の首領たる人々が會合して申合を爲し、其の覺書なるものを新聞紙上に發表したるに付き之に對する予の意見如何を問はるゝ人も少からざることであるが、果して之は眞面目に取るべきものであるか、又或は裡面に我々の想像出來ざる如き動機魂膽が潜み居るのかとも思はるゝけれども、斯る政爭の情僞を揣摩し、政治家の心術肚裡を忖度するは固より予の爲すべき所でなく、又爲さゞる所である、然しながら此事は憲政上著目すべき一現象であると思ふ、予は正面より彼の覺書なるものを見、裡面の事情などは全く眼中に置かず、唯だ之を讀みたるまゝに解釋して憲政の上から見て感じたる所を述べて世人の參考に供しようと思ふ。

一

予は政黨の存在、少くとも今日の如き形式と實質とに於ける政黨の存在を非なりとする者であり、夙に國家の前途の爲めに憂慮して政黨を研究し、我言世人の耳に入り難きを知るも常に狷介の論を爲して罪を江湖に得て居ることであるが、今暫らく政黨の立ち場より見て今回の三黨首領の會合は我國政黨生活の一進歩であると思ふ、政黨主義を謳歌する人にして或は之を以て政黨を無視するものである政黨の存在を無意味に歸せしむるものであると考ふる者も少からぬようである、新聞で見ると尾崎行雄君などは最も強く左樣なる事を云て居る、斯くてはモウ政黨は要らぬものとなると云ふのである、若し三首領の意にして最早や政黨の爭は斷然之を止めて一意專心國家の爲めに盡瘁せんと云ふに在るならば予の如きは双手を擧げて之を慶し、帝國將來の爲めに祝するのであるけれども、予は三首領の意たる決して此に在らざることを信ずるのである、若し三十年來の迷夢より一覺して今や政黨を國內に對立して相爭ふを非

なりとし擧國一致して公事に奉せんと云ふならば全然各政黨を解散すべきである、依て思ふに三首領の主旨たる此に在らずして却て將來大に政黨を中心として政治を行はんとするにあるものと信ずる、從來我國政治上の勢力は政黨のみならず種々の者があり、政黨は倚ほ從たるもので中心勢力たることは出來なかつた、種々の他の勢力に引縁附和して活動したのである、然るに今回三黨首領が會合して斯くの如き申合を爲し「外界一切ノ容喙ヲ許サズ」と云ふに至つたのは種々の政治上の勢力の間に在りて政黨の勢力を中心とし、又は一歩進んで政黨のみを以て政治の原動力たらしめんとするの方針を定めたるものである、政友會と云はず同志會と云はず又國民黨と云はず、政黨間の區別は暫らく差し措いて一般に政黨と云ふ者を以て政治の中心勢力たらしめんと云ふのが、三黨首領間の一致したる意向であろうと思ふ、政黨と云ふ者が政治の中心勢力たること先づ定まらなければ、各政黨互に相爭ふも何れの政黨も政權を掌握することが出來ぬ、何れの政黨にても政權を獲得せんとするには先づ政黨と云ふ者を以て一般的に政治の中心勢力とすることが我國憲政運用の原則とならなければならぬのである、其れが爲めに現存せる三黨の首領が會合して此の目的を達するが爲めに一致協力して他の勢力を排斥し政黨のみを以て國政を運轉せんとするの基礎を定むる、之が三黨首領會合の憲政上に於ける深き意味であつて、彼の申合は其の文字の如何に拘はらず政黨主義の宣言と見るべきものと思ふ、即ち此の點に於て三黨首領の利害が一致したのである、政黨は初めより政權の獲得を以て目的とするものである、政黨以外の他の勢力がなければ一の政黨は他の政黨を倒し、自ら政權を掌握することが出來るけれども政黨以外の勢力の存する以上は之を排斥しなければ政黨の希望は達せられぬ、之を排斥すると政黨の共通の利益である、此の共通の利害の上に三黨首領が一致して政黨主義を宣言したものと見るべきである、譬は下品であるが恰も娼妓は互に商賣敵として競爭するけれども私娼に對しては一致結束して之に當り其の撲滅を希望するが如きである。

かく解するに於て三黨首領の會合申合は了解することが出來る、然らざれば世間でも能く云ふが如く無害なるものは實に茫漠として無意味である、「外交及國防ノ方針ハ勉メテ一定シ」と云ふた所で當局者ならざる者の言は空言である、加藤高明君は演說して「此の中の誰かが責任の地位に立つことがあると云ふ假定の下に話しをせねば實際の效能はない」（六月十一日の時事新報に依る、本稿は凡て同紙に依る）と云つて居るが左る假定の事を今云々して何の意味があるかと承はりたい、又覺書に「各自黨派ノ消長ニ關セズ」と云て居るが黨派の消長を眼中に置かずして國家の爲めに憂慮するならば何ぞ斷乎として各々解黨せざるや、政黨主義者が此の覺書を見て非政黨主義を發表したるもの少くとも政黨を輕んずるものと云ふのも無理もなきことである、其れならば何故會合者を三政黨の首領に限りたるか、外交問題に就て國防問題に就て又目下の對支問題に就て憂慮する所あり擧國一致を希望する有力者も少からぬことである、何故に斯る人士を加へて眞の擧國一致を企謀せざるか、即ち三黨首

個の會合は政黨中心であるや明かである、政黨の首領なるが故に相會して互に共通して根本的の目的とする政黨主義を定めたるものである、原敬君は「其結果トシテ黨爭ハ或ハ止ムヤモ知レズト雖モ」と云て居るが政黨なるものが全然止むかも知れぬと考へて居るのではない、假に原君の如きは本會合の意義を自覺して居らぬとしても本會合は明かに政黨を中心勢力として政治を行はんとするの企圖である、然らざれば折角の申合も何の意味をも成さぬであらう。

三政黨首領の報告演説を見るに犬養毅君が最もよく右の意味を自覺して居るようである、「三黨の協同を以て成れる權威を以て我邦政界の多年の宿弊たる外界一切の容喙を斷絶せんと欲するのである」と云て居る、政黨のみを以て政治の中心勢力と爲さんとすると云ふのであらう、犬養君は終始一貫したる政黨主義者である、政黨を中心とする政治を行はんとするが其の理想であるように見受ける、喜んで此の會合に加はり（或は此の會合を促成し）此の方針を定むるに同意したることであらうと思ふ、他の二首領は必ずしも斯く徹底したる政黨主義者ではないようであるが、然しながら自己の率ゆる政黨のみを以て政權を掌握することが若し出來るならば最も之を希望し滿足する所たるは云ふまでもない、政友會と云はず同志會と云はず從來政權に近づきたる關係を見るに各種の勢力に引縁し妥協し複雜なる關係に於てしたのである、之れ等の實情は予今之を述べずとも世人の知る所であり、予の述ぶべき事でもないが、今の時に方りて諸方面の關係上他の勢力に引縁せず我黨のみを以て政權を掌握したいとの希望は腹に滿ちて居ることであらうと思ふ、原君と加藤君との此の希望を起すに至れる動機と希望との關係とは頗る違ふであらうが、共に此の希望は之を有し、積極的に其の望は無いと思つて居ても他よりそうしようではないかと誘ふ者あれば固より喜んで之に應ずる譯である、一は其の黨の苦境より脱せんとして自己の微力を嘆ち、一は今一と息で獨力政權を握り得ると自信して居るのであろうが、何れにして頭を押ゆる力は政黨以外の力である、之を排斥して政黨を以て政治の中心勢力とするの基礎が定まると云ふことは抽象的に政黨主義を宣言すると云ふことのみならず、三黨首領殊に原加藤兩君の目下の具體的なる希望であつて三者の利害の共通一致する點である、之れ今回の三黨首領の會合が成り立ち申合覺書を見るに至つた所以であらう、世人は平素犬猿啻ならざる人々が一堂に會して斯る談合を爲したるを奇なりとするが如くであるが實は何の不思議もなきことである、利害の共通は最も強き契紐である。

されば三黨首領が會合して將來他の勢力を排斥して一致協力せんと申合せたるは政黨の衰退には非ずして政黨の進歩である、政黨を以て政治を掌握せんとの大抱負を示したるものである、或は反對黨の首領が會合して一致協力せんと申合はせる如きは政黨を去勢するものであるとも見え、又左樣に批評して不滿足の意を表する政黨者流もあるようであるが、政黨が政黨として發達し、實際一國政治の局に當つて行くには黨首が常に意思を疎通し相互の了解があると云ふことが必要である、政黨政治の

發達したるは英國で――或は政黨政治は英國のみに行はるゝと云てよいのであるが、英國にては兩黨の首領其他の領袖は屢々會合して事を決して居る、かの一九〇九年上院問題の危機に方りて兩院領袖の會合したるが如き其の著しき例であり、他にも其の例は少くない、之は政黨が實際の政治を擔當する以上はなければならぬ事である、政黨は無責任に政治を論議するのではなく、政治の局に當りて之を實行する者である、双方が相爭て互に下らず極度まで行けば國務は進まぬのである、故に妥協交讓して一致點を見出し國務の進行を圖らなければならぬのである、加藤君は英國に於ては外交の事の如きは双方の意思疏通し統一の保たれ居るを稱讚して居るが、政黨が政治の中心勢力たる以上は必ずや然らざるべからざるのである、今回の大戰爭に方り英國に兩黨聯立の內閣が出來たのを見て驚嘆する者もあるが、之れ又如上の關係が著しく表はれたに過ぎぬ、此の意味に於て三黨首領の會合は政黨が政治を擔當するの抱負を示したもので政黨の一進歩であると見るべきである、即ち政黨が實行者として其の責任を自覺して來たのである、從來は其の實行の不可能なるを知りつゝ行はるべき事業の如何を顧みず減稅を主張して民心に投ぜんと力めたる政黨が必ずや行はざるべからざる事柄に就ては首領の談合を以て決せんとする意圖を示し來りたるは明に注目すべき新現象である、之を政黨は互に相爭ふ者と云ふ目から見れば衰退であるが、實際政治を擔當する仕組なりとすれば大進歩である、反對黨は兩立すべからざるもので主義の合せざる限り一黨は他黨を倒すを目的とすると云ふが如きは餘りに眞面目に政黨を見るの幼稚なる論である、此の眞面目を捨て主義の一貫を顧みず唯だ政權を政黨の手に收めんとして實行的なるに至りしは政黨の立場よりして進歩である、政黨と政黨と死力を竭して相爭へば結局共倒れとなる、政黨の爭を或る程度まで緩和して共倒れせざる樣にし政黨以外の原素を政治上の勢力として排斥し政黨を政治の中心勢力たらしめんとするは政黨として進歩と云はねばならぬ。

然しながら、斯ゝる仕組が將來長く計畫通りに我國に行はるることを得るや否や頗る疑問とせねばならぬ、英國の政黨政治に於ては危機に際會すれば兩黨の領袖相會合して意思を疏通し黨爭の外に之を決して危機を脫するのであるが、之れは英國に於て政黨が政治の中心勢力たる以上必ずや然らざるべからざるのであるけれども、元來英國特有の事情に由ることで却て之あるが故に政治の擔當者であることを得るのである、英國政黨の本質を玆に詳述することは出來ぬけれども、英國の政黨なるものは互に彼倒れずんば我倒れんと死力を竭くして相爭ふの政黨ではない、主義を異にして我が主義必ずや行はれざるべからず然らざれば邦家危ふしとするの政黨ではない、一團として國務を擔當する政治家が都合好く政治を運轉し行く仕組である、反對黨は政府黨と相反對する不倶戴天の仇敵には非ずして所謂 His Majesty's opposition 國王所屬の反對黨である、されば必ずしも主義を異にする譯ではない、兩黨の理論上の差違は何れに在るかは何人も之を定むるに苦しむ、保守黨必ずしも保守ならず、自由黨必ずしも自由ならず、一貫の主義を發見するとの出來ざるは一般に

認めらるる所である、斯くして二大政黨對立し滯りなく政黨を中心として國務を運轉し行くのである、而して此の運轉の局に當る者に無論國民全體でなく國會議員全體でなく兩黨の首領たる少數の政治家である、英國は昔も今も貴族國である、昔國王を逐ひ出し之を壓倒して政權を握れるは貴族である、此の貴族がホイグとトオリイとに分れて都合好く政治を運轉したのである、今の政權を握る寡頭の人は往時の貴族とは異れども政權を限られたる少數の政黨首領の手に獨占することは昔も今も變らぬのである、多數の兩黨に屬する政黨員は政治の中心の周圍に浮遊して此の少數者をして政權を握らしむる道具である、兩黨の領袖は一團を成せる政權階級であつて私交に於て親友たり姻戚たるのみならず（兩黨の領袖は互に姻戚たる者甚だ多し）公に於ても政權階級たる一團である彼等は常に機脈を通し共倒れとなるようは事は決してせぬ、一旦危機に遭遇すれば相會合して私語の間に之を決する、一九〇九年の上院問題の時も領袖會合の狀況も結果も一切秘密にして他の黨員には洩らさぬ、政黨員は領袖等の決したる如くに服從して敢て違はぬ、其の結束は見事なものである、英國人はそう云ふものと心得て居るのである、又政黨員か領袖に反對する如きことがあつては政黨政治は到底行はれぬ、之が英國に於ける政黨の實情である、反對の兩黨相爭ふと云ふのは同業者たる角力取が土俵の上で組合ふ様なものである、土俵では東西に分れても本は同業者である、見物本位である、商賣が繁昌せねば共に困る、西を倒してしまつては東だけでは角力は取れぬ、見物に面白く見せるには取締など云ふ者が話し合つて八百長もせねばなるまい、かゝる有樣であるから英國で政黨政治と云ふものが圓滑に行はるる、政黨首領の會合と云ふことも不思議でなく、之が政黨政治運用の重要なる機關となり政黨をして能く實際の政治を擔當せしめ政黨、政治の中心勢力たることを維持し、行くとが出來るのである、我國の政黨論者は政黨の爭を眞劍勝負と思つて居る、之れ我國人の眞面目なる理論的性質に由るので甚だ喜ぶ所であるが、此の考で八百長角力たる英國の政黨政治を見てはどうしても了解することは出來ぬ、今回の三黨首領の會合は首領たる者自ら之を自覺せずとも眞劍勝負から段々八百長角力に近かんとすることを示すもので今迄政黨に屬して眞劍勝負をするつもりで居た人々は稍々出し拔かれた氣味で、其れでは政黨は無意味に歸すると云ふのであるが、政黨と云ふ者の本色は左樣なる眞面目なるものではない、八百長角力でなければ實際の政治を擔當して行くとは出來ぬのである、之れ予の三黨首領の會合を以て政黨として見れば進歩であると云ふ所以である、然れども此の八百長角力を行ふにはそれだけの事情要件が具はつて居らなければならぬ、英國の如き特殊の國に特殊の長き歷史ありて初めて行はるるのである、而して其の英國以外には到底あり得べからざることたるは識者を待たずして明であろう、予は英國の如き政黨政治は假令他國に於て行はれ得るとしても排斥すべきものであると信ずるが世の中には之を理想的なりとする人もある、果して英國の實情を知りて理想的なりとするか否かは知らぬけれども、假りに理想的なりとするも我國には實行することは出來ぬ、

實行の基礎がないのである、予は三黨首領の會合を政黨の進歩とするけれども一時の現象に止まり永續して英國風の政黨政治が行はれ政黨が政治の中心勢力となるに至るとは信ずることは出來ぬ。

二

三黨首領の會合はそれだけを見れば憲政上著目すべき事件であり政黨の一進歩と見るべく之を政黨の衰退とは云へぬが、然しながら事の玆に至りしは我國近時の政黨の衰退が原因である、斯く見れば寧ろ悲慘の感をも起すのである、予は夙に政黨の弊害を力說し世間を警戒したが其の初め世人は予を以て實際に迂遠なる不通の論を爲す者とした、當時予は何時かは政黨の弊害現はれ來り世人の覺醒する時來るであろうと思つて居たが、其の事三五年にして來らんとは思はざりしに早くも近時政黨の弊害百出し、世の政黨を云ふ者其の弊を云はざるはなく、政黨者流自ら政黨に慊きたらざるの色あり、「政黨には困る」と云ふは推しなべての思想であると云てよい、政友會の凋落は國民の同情政友會を去りて同志會に向ひしが爲めに非ず、政友會が偶々大政黨として最も弊害を多く有して居たから之を厭ふの氣運となつたのである、同志會とても誰れも之を信頼すべしとする者はない、つまり一般に政黨と云ふものから同情が去り、政黨が嫌忌せらるゝ樣になつたのである、之には種々副原因もあり予の見る所もあるけれども今は略する、兎に角近時我國に於て政黨の信望は著しく失墜したことは事實である、人物から云ても西園寺侯が退き桂公が死しては寂寞の感なきを得ぬ、政黨內に幾何の人物ありや、予の如き事情に通ぜざる者の知る所ではないが、政黨內に於ける予の知人の話を聞いても人物は無いと云て居る、政黨の意氣も亦衰へた、斯樣になり果てゝは政友會と云ふでなく同志會と云ふでなく政黨其の者が危ふい、私娼の盛なる時は軒毎に競爭もするが愈々撲滅せらるゝとなれば團結して他に當らなければならぬ、譬喩は倫を失するけれども今の時に方りて三政黨の首領が會合して政黨の爲めに狼烟を揚ぐるは悲慘とも云へる、若し一黨にして政權を握るの力綽々たるならば他黨の首領と會合しては如何など云ふて來る者があつても顧みもすまい、首領の人物一國の重を成して上下の信頼を負ひ他の勢力を脚下に見ることが出來るならば何を苦んで反對黨の首領と會合することがあろう、政黨の勢力微々として振はず心細くてたまらぬ、三黨首領の會合の易々として出來た所以である、而して政黨を政治の中心勢力と爲すべきことを宣言すると云ふのは政黨としては一進歩と見るべきであるけれども、政黨今日の衰狀なければ此の事は成立せざりしなるべく、かくても政黨の大に振はんことを期することを得ぬとすれば慶すべきか果た弔すべきか。

或は世の中には何は政黨を我國政治中心勢力、又は少くとも大勢力と見て政黨政治は勢の趨く所であると考へて居る者もあるが如くであるが、今回の三黨首領の會合を見て何と思ふであろうか、かくして見れば政黨の勢力も誠に微々たるものではないか、我國の三政黨の首領が一致して外交國防の方針は我等に於て之を一定し外界の容喙を許さずと宣言したのである、而して其の影響はドレだけあるか、政黨正味の實力を見

て意外の感もせらるゝのである。

三

覺書なるものを法律の條文を解釋する樣に嚴格に考ふべきではないかも知れぬが、少しく憲法論をするならば「外交及國防ノ方針ハ勉メテ一定シ」と云ふのは若し我國の外交と國防は政黨に於て決すると云ふのならば今何れの政黨も實行の地位に居らぬのであるから無意味であるのみならず加藤君の云へるが如く他日其の地位に居るに至りしならばと云ふ假定論であるとしても、大權を侵かすの論であると云はねばならぬ、外交及國防は憲法上大權に屬する、議會は法律と豫算とに協贊し、國務大臣は天皇を輔弼するけれども、外交及國防の方針を決定するの權は無い、政黨が議會に於て多數を占め或は領袖等が國務大臣に任ぜらるゝとも外交及國防の方針を一定するの權能を得ないのである、覺書に「之ガ遂行ノ途ニ當リテハ」とあるから自ら之を一定し遂行するの意であろう、外交及軍事の大權を眼中に置かざる云ひ分であろうと思ふ、「外界一切ノ容喙ヲ許サザル事」と云ふのは元老を排斥するの意味であると新聞紙は註釋して居る、其の眞意は窺知すべからざるも大權の下に之を計畫奉行するの職司もあることである、外界とは何れが外界なるか、當局者を差し措きて政黨に於て之を決定し之を遂行すべく其の議會に多數を占め國務大臣となりしとき其の職に在る者を排斥して之を行ふの意であるとすれば常制を紊亂せんとするものと云はねばならぬ。

加之「一定シ」とは何事なるか更に分らぬ、三黨の一又は三首領の一人が政局に當るに至りしとき外交及國防に就ては他の二黨又は二首領と相談し之を決すと云ふのであろうが、其の際在野の政黨又は首領は自由なる批評はせぬと云ふのであるか、自由に批評して政府を善導し其の方針を定むるに至らしむると云ふならば、當然の事であつて何も問題とするに及ばず、常に行はれて居ることである、在野政黨の本分は至誠を盡くして自由なる批評を當局の政策に加へ自ら過なからしむるに在るのであらう、之を聽いて一定するは大臣であり、大臣の輔弼に依る大權である、天皇は忌憚なき自由なる公論を聽きて國策を定めらるること勿論である、議會を設け輔弼の大臣を置き時に政黨の人を任官したまひしも此故であらう、覺書の意味は將來之を止めると云ふのか、かゝる公然自由なる批評は爲さず三首領だけにて秘密に取り極めると云ふのか又は凡て其の時に局に當りし者の定むる所に盲從すると云ふのか、此の二つでなければ覺書は意味を成さぬ、果して然らば之れ政黨者流の云ふが如く政黨無用論たるのみならず公論政治の衰退である、而して覺書の意味を推しつむれば此の意味であるが如くである、三人で相談すると云た所で三人の意見は必ずしも初めから一致はしまい、二人が局に當れる一人の反對なるとき二人の意見に依ると云ふのか、それならば當局者たる責任なく、當局者たる一人の意見に必ず從ふと云ふの意味で相談ではなく二人に内示するに止まると云ふのならば將來三人の內一人が當局者となりし場合には他の二人又は二政黨は外交及國防に關しては一切批評はせず盲從すると云ふので初めて意味を成すけれども、かくては政黨も結局無意味に歸する

であらう、政黨を無意味に歸せしめぬと言ふならば反對に覺書は無意味となる。

四

然しながら第二の覺書には「對支方針ハ東亞永遠親好ノ目的ヲ以テ相互利益ノ增進ヲ圖ル事」「國防ハ相當ノ限度ヲ定メ其範圍ニ於テ整備處理セシムル事」とあるから此の二點に就ては茫漠に三人又は三政黨の內一人又は一政黨が局に當る場合に如何なる外交及國防の方針を定めても他の二人又は二政黨は必ず之に同意し外界一切の容喙を許さぬと云ふのではなく、略ぼ一定の方針が三黨首領の間に協定せられたるものと見るべきである、唯だ之れ以上明白に定むることは出來ざることであらうけれども、如何にも茫漠として捕捉しがたく、殊に過ぎ去りし事及現在に就ては何事も云はぬと云ふのであらう、結局無意味かとも思はるゝ、國防費は相當の範圍に於て整備せしむると云ふは餘りに當然の事であつて一國國防の計畫は軍事の眼を以て見るのみならず外交財政の眼を以て相當に定めらるべきことと三首領を以て初めて定まることではない。

「對支方針ハ東亞永遠親好ノ目的ヲ以テ相互利益ノ增進ヲ圖ル事」と宣言したるは加藤君も演說したるが如く何人と雖も異論なき所であらうと思ふ、所謂る支那保全は我國策の大方針でなければならず、何人が其の局に當ると雖も此の大方針を本として我對支方針外交方針が定められなければならぬのである、加藤君の云へるが如く「支那人も之を疑つて居るかも知れないから日支兩國の相互の利益の增進を圖ると云ふことを更に宣明することは決して決して無用の議論に非ず」大に事宜を得たるものであらうと信ずる、實は今回の大戰爭の勃發以來擧國一致と云ふことが何人の口よりも唱へられて居る、大隈伯なども頻に擧國一致の必要を說かる、然しながら一定の國是方針定まらずして何の處にか擧國一致せん、歐洲戰爭に對する處置に就ても必ずやかくなければならぬと云ふ大方針は定まらず、政府の行動も其時勝負であるやに見え、世に異論も絕えぬのである、支那に對しても昨年最後通牒を發するまでに立ち至つた、交涉事件から袁世凱の帝政問題に對する帝國の態度に至るまで一貫して國民を安心せしむる大方針は之を見ることが出來ぬようである、支那保全の主義も常に守られたりとは思はれぬ、此の有樣で擧國一致は出來樣はない、我國も大戰爭に加はれる交戰國の一である、英佛露の如く擧國一致せねばならぬと云ても一向國民の血を湧かしめ萬事を捨て丶擧國一致せんと云ふ考にはならぬ、政府の爲す所に異論を云はず擧國一致せよと云へば政府には都合好からんも政府の方針も果して一定しあるや否や何れに一定したるや分らぬ、予は常に之は支那保全と云ふ國策を確立し之に向て擧國一致すべきであらうと信じて居る、其の論は予の專門でないから云はぬが三政黨の首領が會合して此の方針を明かに宣言したるは予の最も喜ぶ所である、三首領の會合も是に於て意義を生ずる、覺書を解して支那保全の大方針に對しては如何なる政黨も異論なきことを示すのが眼目であつて之を目安に國防の計畫も立てられなければならず、此の方針は何人が局に當るも遂行を努め各黨一致協同して國策の成效を期すると云ふ

に至ると雖し、此の會合が將來に向て重大なる意味を成さんことを期待したいと思ふ。

五

三黨首領の會合を見擧國一致を云ふにつけても予の希望殊に切なるものあるは予が常に云ふ所の人物の擧國一致である、我國民の力を一にして出來るだけ大なる效果を現はさしめなければならぬと云ふとである、我國の世界に於ける現在の地位を考ふれば實に興國か滅亡か危急存亡の秋である、我千古の國體あり牢固なる興國の確信は國民の悉く有する所なれども、其れには國民が心を一にして氣を揃へて勇往邁進しなければならぬ、我國民の興國的能力は疑はぬけれどもドウしても地小に人稀である、世界の大國の間に介在して興國の大策を行はんとす、擧國一致各人の力を十倍にも二十倍にも發揮することを力めなければ到底之を期することは出來ぬ、然るに今の我國の有樣は如何であるか、種々の原因行き掛りに由りて人物が悉く其の材能に應じて適處適處に配當せられて居らぬ、各方面に第一流の人物が置かれなければならぬのに人物に系統あり引緣ありて有爲の人物が用ゆる所なく遊んで居る、一派の人か局に當る時は他の人々は寢て居る、百人の人物があるとすれは十人が仕事をして他の九十人は此の人々には共に仕事は出來ぬ關係になつて居て何も爲さずに居る、予は之が我國現時の最大なる憂患であると思ふ、斯樣な國と云ふものはあるものでない、獨逸を見よ、爲す有るの人物は悉く皆適處に配置せられて無駄と云ふ者がない、之れ其の强盛の最大原因である、佛蘭西でも英吉利でも我國の如き事はない、英國の二大政黨組織は人物の無駄を生ぜざる仕組であるとも見られる、反對黨の人物は何も爲さずに居るのではない、常に有用なる役目を働いて居るのである、予は切に我國朝野の人物か從來の行き掛りや僻見を打破一掃して各方面に第一流の人物を置き、力を洩れなく充實して興國の氣運を盛ならしめんとを希望するのである、天皇の御爲と云へば國中一人の異論なき萬國無比の國體の下に之が出來ぬと云ふことはあるべき筈がない、死をだも顧みぬのである、光風霽月皇國の爲めに協同一致することが出來ぬと云ふとはない、近來頻りに大人物が出なければならぬ、英雄豪傑の我國家を負擔する者が出なければならぬと云ふことを聞く、然れとも我國は英雄豪傑の要らぬ國である、天皇の下に統率せられ各人其の心身を奉し其の力を盡くして如何なる事をも爲し得る國體である殊に現代に於ては一人の英雄豪傑が一人で大事業を爲すと云ふことは出來ぬ、現代の特色は凡てが分業的專門的從て合同的であることとである、簡單なる世の中には一人にて軍事外交財政を行ひ得たであろうが今日にはあり得ざることとである、各方面に專門の人物がある、第一流の人物を各方面に配置して組織的に之を合同し大なる力を成すのである、之に非ずんは如何でか我國を興さん、人物の擧國一致する仕組が必要である、擧國一致の大方針存するも擧國一致の形式具はらざれは之を遂行するの力を有效に發揮するとが出來ぬ、之れ予の常に云ふ所であるけれども今三黨首領の會合を見て深く之を感ずるのである、然れども三黨首領の會合は此の意味に於て擧國一致に一歩

を進めた者と云へるかドウか分らぬ、殊に外界一切の容喙を許さずと云ふが如きは却て今日の互に相排斥する有様を助長するかとも見らるる、政黨と云はず所謂る官僚と云はず軍人と云はず實業家と云はず一切の障壁を撤去して國民の力を一にし興國の前途を過まらざらんことを切望する。

（六月十五日稿）

三大黨首の會同協定

東大教授
法學博士　吉野作造

（一）

原、加藤、犬養の三氏が、前後三回（五月二十四日、五月卅日、六月六日）三浦子爵邸に會合し、協議の結果、政治上重要なる申合せを協定したといふ報道は、著しく世間の耳目を聳動した。

原、犬養の二氏は兎に角、此兩氏と加藤氏とは單に政敵であるといふ關係の外、感情上に於ても頗る疎隔して居つたやうに傳へられて居たのに、今度遽かに從來の態度を一變して、膝を交へて親しく懇談するに至つたといふ其動機は果して如何。これに關する一通りの事情は、八日午後三浦子爵が自ら都下の新聞記者を自邸に集めてなしたる談話、及び十日午後三黨首領が各々其黨員を集めて發表せる演説によつて明かとなつた。今此等兩様の談論によつて見るに、今度の會同の趣旨は、外交及び國防に關する問題を黨爭の目的物とするのは時節柄國家の不利とするところなるが故に、今後は擧國一致的態度を以て努めて共同一致することにしやうといふにあるやうだ。果して然らば、一方に歐洲の戰亂を控へ他方に支那の動亂を控へて居る今日、此會同の趣意は時節柄極めて適切なるものといふべきである。

外交及び國防の問題の濫りに黨爭の具に供すべからざるは、謂ふを俟たない。而して從來此等の問題が黨爭の具に供せられたことは、實際絶無ではなかつた。如何なる問題についても意見の相違は元と〳〵免れない。正々堂々と政論を鬪はすことは立憲國通有の現象である。けれども爭の爲めの爭の目的物として政治問題を輕卒に取扱ふことは、如何なる問題についても結構なことではない。而して之より來る所の弊害は、殊に國防及び外交の問題について最も甚だしきを見る。具體的の例證を示さずとも、之が爲めに近年我國が如何に苦がい經驗を嘗めたかは、世人

の既に熟知するところであらう。而して今日の時局は、當に我々に向つて斯の從來の不祥なる經驗を再びすべからざることを警告するものではないか。かういふ考は恐らく心ある人の最近期せずして抱いて居るところであらう。而して三浦子爵は此等の點を最も痛切に感じた一人で、所謂蹇々の微衷已む能はずして遂に此三黨首會同の肝煎をしたものと見える。子爵の言ふところによれば、子は此目的を以て先きに元老總出を畫したとのことである。然しながら元老に自から出馬するの勇氣がなかつた爲めか、或は元老の總出によつて擧國一致の實を擧げ得るといふ時代が已に遠の昔に過ぎ去つた爲めにや、兎に角此策は不成功に終つた。苟も政界に確實なる波動を起さんとせば、之を各政黨の首領に諮るの外はないといふ事を發見して、子爵は轉じて此等三氏に手を伸ばした。三氏亦子の發意に贊同し、其仲介の勞を多とし又之を好機として、玆に會同協議を見るに至つたものであらう。

（二）

以上の趣意であれば、此會同は兎に角至極結構な企と言はなければならない。然るに世間のことは何事についても兎角贊否兩樣の批評を免れぬものと見え、此事についても亦世上にいろ／＼、難癖をつくる者が少くない。第一には各黨派を連ねて外交及び國防の問題について一致協同するといふ事其事が可けないといふ批難がある。外交及び國防の問題は、政治問題の大部分を占めて居るものである。之について協同一致するといふことであれば、其以外に於て政黨が各々其意見を闘はすといふ餘地は殆んど無くなる。即ち政黨の對立といふことは無意義になるといふのである。此批難の取るに足らざるは固より論ずるまでもない。外交國防の問題が政務の大部分を占むるといふ議論の、必ずしも正當にあらざるはいふまでもなく、又努めて一致協同するといふことは、全然議論を闘はさないといふ意味でもない。意見の相違は何處までも之を主張することを妨げない。只十分意見を闘はした上で、十分研究を盡した上で、和衷協同の精神を以て或一致點を見出し、其上で協同之が遂行の途を講ずるといふことは、寧ろ政黨政治の妙諦である。第二に今度の會同は、擧國一致の趣意を貫く上から見て多少手續を誤つたといふ批難がある。今度の會同が政黨をして國家の重大問題に無用の爭をなさしめまいといふ趣意に出づるなら、之に列席する黨首は十分に各自の政黨を代表するものでなければならぬ。然るに三黨首は何れも何等黨員に諮るところなくして此會同に出席した。之が即ち手續に於て缺くるところたりといふ所以である。同志會では加藤氏に向つて、『個人の資格を以て出席したのか黨首として出席したのか』と質問を發した者があつた。之なども此第二の批難を頭の中に置いて居る質問であらう。加藤氏は個人の資格で出席したと答へたが、然し個人の資格で極めたことだからとて、同志會としては此協定に全然無關係であるといふのでは、此會合は全然無意義に終る。予輩は此會合を斯くの如きものと見たくない。尤も黨首といふ資格で此會合に連り而して何等かの協定をしたとなれば、豫め諮ることゝなくして作り上げた協定を事後に於て黨員に強ゆることゝなるから、所謂幹

部專制の批難を以て黨員の文句をいふのも一應の理由はあると思ふが、然し此種の事柄は、もと豫め一般黨員に諮ることによつてなし得べきものでもないから、個人の資格で出席したとか、黨首の資格で出席したとかいふ野暮な質問は、起すべきでなし又起るべきものでもないと思ふ。

第三に會同列席の顔觸れについて批難がある。此會同には衆議院に於て一方の勢力を代表する中正會公友倶樂部及び無所屬を度外視して居る。更に政界に於て他の一方の勢力たる貴族院等をも無視してゐる。獨り同志會、政友會、國民黨の三團體の代表者のみが集つて天下の事を我物視するのは、僭越の沙汰であるといふのである。斯くして中正會なぞは相當に此會同に漫罵を加へて居る。官僚系の一派も亦或は公器を私するものなりとして之を難じ、或はどうせ碌な結果を生じまいと冷評して居る者もある。此批難には一應の理由はあると思ふけれども、然しながら貴族院の一部若くば官僚系の如く、主義として初めより政黨を敵視し所謂黨人と事を共にするを頭から欲せざる連中を除外したのは、已むを得ないと思ふ。衆議院に於ける他派の代表者を無視したといふ批難は、之を辨解するの十分なる理由はないやうであるが、然し適當なる代表者を見出し得なかつた、又は少くとも代表者として參會を乞ふべき適當の人物が他の黨派にはなかつたと言はるれば、之れ亦致し方があるまい。之を無視して可なりといふのではないけれども、原、加藤、犬養と伍すべき人格の他派に見出し難きの事實は、何人も之を承認せざるを得まい。

斯く各種の批難を吟味して見れば、其何れにも深い且つ正當の根據がないやうである。さすれば三氏會同して國事を協議したといふことは兎も角も今日の我國に在て結構な事であつたと言はざるを得ない。只殘るところの問題は、協定事項の內容如何といふこと丈けである。

(三)

協定の結果は次の甲乙兩種の覺書として發表された。

(甲號)外交及國防の方針は勉めて一定し、之が遂行の途に當りては各自黨派の消長に關せず誓て一致協同するは勿論にして、外界一切の容喙を許さゞる事、

(乙號)對支方針は東亞永遠親好の目的を以て相互利益の增進を圖る事國防費は相當の限度を定め其範圍に於て顯極處理せしむる事、

文字極めて漠然、事柄も甚だ抽象的で、之れ丈けでは今後の政界に如何なる實際の影響を來たすのやら解らない。然し三大政治家が三度も會合して、わざ〳〵此覺書を發表した以上は、何等かの實を將來に結ぶものであることは疑はあるまい。然らば如何なる實を將來に結ぶか。其事は此覺書の外に、會合の當時如何なる意見が銘々の間に交換されたか、此等の點を明かにせねば解らぬ。然し此事は今日詳に發表されては居ない。覺書を外にして我々のよるべき材料は、前記の八日及び十日關係當事者の世間に發表した談話のである。之も各人多少其言ふところに異同はあるが、此等を綜合して見れば大體次のやうな事になる。

第一乙號覺書については、對支外交の方針並びに國防費について、極めて大ザツパな當り障りのないところを掲げて居る。之では如何なる人

も異存を挾むことを得ない。極めて大體の主義を言ひ表はしたに止り、何等新らしい事項を含んで居ない。將來に於て執るべき細目の點は、其うち各黨より各二名の委員を出して協定せしむるといふ内相談もあつたといふことであるから、具體的の方針は總て此委員會の協定に委し、三黨首の會同に於ては、何等委しい話合はなかつたか、又は少くとも意見の一致を求め得なかつたのであらう。故に乙號の點については、將來如何なる事實上の結果を生むかは、專ら今後作らるべき委員會の行動によつて判斷するの外はない。

第二に甲號覺書については、乙號に反し此方は可なり大なる意義を有するものである。此中に含まれて居る内容は少くとも二つある。一つには外交及び國防の方針は勉めて之を一定するといふことである。成るべく一致協同するといふのである。各政黨が其野にある場合は勿論、其中の何れかゞ朝に立つた場合でも、努めて意思の疎通を計り、出來る丈け打明けて一致協同するといふのである。次には一旦決定した申合せは飽くまで之を遂行する方針を執り、之が爲めには内外一切の故障を排除するといふのである。此點を加藤男は其黨員に對する報告演說の中に、『出來る丈け意思の疎通を計つて、出來る丈け一致を計り、其一致の出來た事柄については、之を遂行するに當つて、内外何人の故障があるに拘らず勇往邁進する。他の故障反對によつて挫折することはせない』と斷言して居る。覺書の中にも『各自黨派の消長に關せず』とあるから、黨内に多少の不平があつても押へつけて行かうといふのであらう。又『外界一切の容喙を許さゞる事』とあるのは、世間の言ふが如く、元老軍閥等の外部の干渉を排斥するといふ意味であらう。三者の結束がどれ丈け堅いかは今俄かに斷定し得ざるも、若し此覺書丈けでも忠實に守るといふ事であれば、今後必ずや政界に一新生面を開かずしては止むまい。

（四）

甲號覺書が、右の如く頗大なる意義を有する丈け、それ丈け之については厳しき批難の聲も聞える。

第一の批難は元老軍閥の排斥に向つて加へらるゝ。尤も此點に對する各種の批難は、必ずしも總て同一の立場に立て居るのではないやうだ。或は自己の利害より打算する批難もある。即ち政黨者流が今度の申合せを喜ぶと同じ意味に於て、所謂官僚の人々などは之に對して甚だしき反感を抱くが如き之である。次に又過去の事蹟によつて可否の論を立つるものもある。例へば從來の政爭に於ける各政黨の不始末を數へ、輕躁なる民間政治家の盲動に對して、元老軍閥の牽制的勢力の存在が必要であると言ふが如き、又は元老軍閥の過去の功勞を擧げて其存在の理由を高調するが如き之れである。更に純粹なる法理論より、政黨が公器を私して排他的態度に出づるの不當を論ずる考もあるやうである。併し軍閥元老の排斥といふことは、軍閥元老の意見の排斥といふことではない。彼等が其地位を利用して政權に干與するの態度を咎ありといふのである。社會に於ける優良なる意見其者は、政黨者流の喜んで採用し聽從する所であり、又あらねばならぬ。

以上の枝葉の論を外にして、我邦憲政の發達といふ大局から觀るならば、予は軍閥元老の容喙の排除といことは、不幸にして之を是認せざるを得ざる理由があると思ふ。何となれば、よかれあしかれ政黨の存在が今日最早や已むを得ざるものとすれば、之が發達を阻害するは即ち政治を腐敗せしめ從つて國民を墮落せしむる所以であるからである。元老軍閥が多年政黨を敵視し、其發達を妨げ來つたことは今更ら之を言ふを必要としない。然しながら彼等の努力は、憲政草創の當時政黨の勢力尙微弱なりし時代に於てすら、其目的を達し得なかつた。如何に元老軍閥の跋扈を公許しても、到底政黨の盛力を消滅し得ず又其發達を阻止し得ざることは、今日までの歴史が之を明白に證明して居る。斯く政黨の存在はよかれあしかれ之を否認するを得ずとすれば、我々は之に對して如何なる態度をとるべきか。然るに一旦之が撲滅を企てゝ其不可能なるを見た元老軍閥は、轉じて出來る丈け其內部の攪亂によつて其勢力を衰へしむる方針をとつた。政黨今日の腐敗墮落の原因の大半は、元老軍閥の操縱攪亂の責に歸する。凡そ抑ふべからざるものを抑へんとするの無效有害なるは、例へば頑迷なる父兄が其子弟の青春の自由を抑へんとして抑へ得ず、強いて之を抑へて却つて子弟を墮落せしむるが如きものである。

自然の勢は之れを助長すべく阻むべからず。政黨の存在が國家の爲めに益ありや否やの閑問題を論ずるの時期は已に過ぎ去つた。今日は之を出來る丈け保護し出來る丈け助長し、一日も早く有力なるものに發達せしむることが必要である。然らざれば國家の政治は到底健全なる進歩を遂ぐることは出來ない。今度の歐洲戰爭は、將來政黨政治を著しく衰へしむる結果を生ずるであらうなどゝいふ議論は、全然とるに足らぬ。斯く觀れば元老軍閥の排斥は、少くとも我國に於て、政黨發達の前途を平坦にするといふ意味に於て、喜ぶべき理由があると思ふ。只彼等政黨者は果してよく元老軍閥の惰性的勢力を排除し得る程に、十分に結束を堅うするに成功するや否や。

第二の批難は、協同一致の實果して如何ほど擧がるかといふ點に向つて加へらるゝ。或人は言ふ。折角のお祭り騒ぎも碌な結果は生じまい。從來あんなに反目した連中が一致するなぞといふことは出來ることではない。現に加藤は協同一致といふことも絕對的の意味ではないなどゝ逃げて、『假りに此中の一人が當局者になると假定して論ずる時は、豫め事柄を話して意嚮を聽くといふ necessary ないこともあり、事柄については出來ないこともあるから、何でも彼でも相談せねばならぬといふことは到底行はれない。故に私はなるべく相談の出來る限り相談する。努めてといふことはなるべくといふことゝ同じ事と私は解釋して居る」と言つて居る。是れ彼に誠意なきの證據ではないかと。之は一應尤もの批難であるが、然し元來軍閥といふ恐るべき協同の敵の存在を深く自覺して居る筈の彼等としては、折角の約束を反古にして再び官僚と結托し、仲間に裏切るといふこともなるまい。從來一二の政黨が動もすれば官僚と結托し來つたのは、詰り各政黨の非政黨主義者に對する勢鋼が十分に出來て居なかつた結果である。予は三大政黨首領の政治的自覺に敬意を表して今

度の協定の決して無意義に終るものでなかるべきことを信じたい。只親の心子知らずで、深慮なき黨員の輕卒なる言動の結果として、一致協同の實を阻礙するやうな心配は全くないとも言へない樣な氣がする。そこで又或人は、黨員全體が感情的に反目して居つては、假令一時外交國防の問題で一致しても、外の問題では依然として無用の爭を繼續するだらうから、其結果結局全體に於て一致協同の實は擧らなくなるだらうといふ。國防外交の問題で一致しても內政の諸問題で感情的反目を恣にすれば、つまりは全部駄目になるといふ批難は一應尤もであるが、然し他の一面に於て又、外交國防の問題丈けで先づ一致協同の實が擧れば、自然他の內政上の問題でも無用の感情的の爭は止めるやうになるまいかとも考へらるる。畢竟今度の協定の結果無用の黨爭を止めるやうにあるか否かは、主として政治道德の問題であらう。故に一方から見れば、今度の協定は正に現代黨員の政治道德の試金石であると言つてもよい。政治道德の程度が今日の如く低級なものでは、此協定の前途も無論大いに心配にならぬではないが、然し之が動機となつて將來政治道德の進步を促がす新機運を作ることにならぬとも限らない。少くとも此の意味に於て今度の事は歡迎すべき理由がある。

此協定の果して世人の期待して居るが如き結果を生ずるや否やは、第一着に之を現內閣の外交方針殊に其對支方針に對する彼等の態度によつて略ぼ之を明にすることが出來やうかと思ふ。當初此會合は、現內閣の外交方針に三人共反對であるといふ意味に於て企てられたといふ風說もあつたが、それは必ずしもさうではない。現內閣の既定の方針を論議の問題とすることは、少くとも加藤男の立場として之を快しとしないといふ點からして、犬養氏が明白に言つた通り、相談の目的は未來に限り、既往については一切是非を論じないといふことになつた。加藤男も亦「今日の內閣が、外國に對して、殊に支那に對して種々な事をして居ると假定して、其事について可否の論を戰はすといふことならば、それは私の地位は外二君の地位と違ふから出來ない。其事は論議しないといふことを條件にすると言明しました。それには加藤の地位としては尤もだといふので、會合の趣旨から言つても之を諒とした次第で、話は將來について申合せをすることゝした」と言つて居る。從つて表面上彼等は現內閣の方針には贊否共に其態度を定めないことにしたのであるが、然し現內閣と加藤男との關係を諒とするといふ以上は、現內閣に對する態度につき特別の協定はしなかつたとしても、現內閣の既定の方針には全然干涉しないのみならず、現內閣既定の方針は之を妨げないといふ道德上の義務があると言つてよい。假りに現內閣は支部に對して今日種々のことをして居ると假定して、三黨首は果して之を默認するや否や。此事は何れ早晚何かの機會に於て、事實となつてあらはれざるを得ない場合が來るに違ひない。其の時に彼等は果して如何なる態度をとるであらうか。而して我等は之によつて始めて今度の協定が果して何處迄眞面目に受取るべきものかといふことを事實によつて判斷することが出來るのである。之を要するに、今度の協定の政治上の效果を完全に收むると否とは、

主としては政治的自覺の深淺、政治道德の高低如何に係る。從つて其事自身を直に誣歎するのは聊か早計に失するの嫌ないでもないが、只少くとも、玆に政治的自覺と政治道德との進歩發達の前途に横つて居つた一大障礙を除き我國の憲政をして正しき方向に向はしむる衝動を與ふるといふ丈けの效能は確に之を認めてやらねばなるまいと思ふ。予輩は政黨首領並びに黨員の今後の誠意ある努力を期待しつゝ、一般國民に向つては此等の努力に對して同情と奬勵とを寄せられんことを希望するものである。（六月十五日）

三黨首會議を評す

慶大教授　林　毅　陸

一

三浦子爵の斡旋に依り、加藤原犬養三黨首が、國家の要務に就いて懇談を遂げ、覺書をまで作りたるは頗る政界の寂寥を破つたやうである。從來長く立場を異にせる同志政友國民三黨の首領が、一堂に會し膝を交へて腹藏なき意見交換を爲し、外交及國防に關して努めて一致を圖らんと約束せるは、先以て國家の爲に慶賀すべき事である。此事實は其前提として少なくも四個の意味を有して居ると思ふ。第一は、外交及國防の問題は黨爭以外に置かるべきものなることを互に承認せる事、第二は、從來我政界に於て此二大問題が動もすれば黨爭の累を蒙るの弊ありたることを互に承認せる事、第三は、現下の政局に於て外交及國防の方針の一定し居らざることの頗る憂ふべきものなることを互に承認せる事、第四は、立憲的政治機關にあらざるものが、外交及國防の問題に容喙するの國家に有害なることを互に承認せる事、是れである。第一及第二は、覺書中に『各自黨派の消長に關せず、誓て一致協同する云々』とあるを見るも明白である。第三は、覺書の劈頭に『外交及國防の方針は勉めて一定し云々』とあるに依つて推斷し得らるゝ。若し方針一定に就いて、目下特に必要を感ずることなくんば、之を主要目的としての協議の必要もなく、又わざ〳〵覺書に之を特筆するにも及ばぬ筈である。又第四の點は、『外界一切の容喙を許さざる事』と覺書にあるに依つて、十分に立證せらるゝ。是は勿論他の黨派若くは他の立憲的政治機關の容喙を許さぬとの意味である筈はない。露骨に言へば、元老其他類似の非立憲的勢力の無責任なる干渉を排斥するの趣意に外ならぬと思ふ。

上記四項中第三の者が三黨首協議の主なる動機及前提となれるは、疑を容れぬ。想ふに發起人たる三浦子爵は上記各項に就いて憂を抱く其中にも、目下對支外交の實狀等より、第三の點に關して特に痛切に感ずる所あり、方針一定の頗る急務に屬するを思ひ、玆に其の斡旋盡力となつたのであらう。又三黨首に於ても、三浦子と感を同うする所あり、偶子の斡旋に依つて意見交換の機を得たるを幸とし、上記四項の結論とも謂ふべき申號覺書を作つたのであらう。此覺書の實際の効果如何は暫く別問題と爲し、其前提として右の如き四個の重要なる事項の三黨首に依つて承認せられ居るを見るは、我輩の大に滿足する所である。想ふに三黨首中には、此等の前提的承認を爲すに於て、多少の苦痛を感じたる者もあらん。就中政府黨の加藤男に於て然りしならん。されど黨狀並に國狀に於て滿足し難く且憂ふべきものあらば、淡泊に之を承認して矯正の道を講ずるは、即ち是れ政治家の任である。我輩は彼等が弊を矯め非を正すの意あるを認めて之を多とし、且同時に其の實行に勇ならんことを切望するものである。

二

外交及國防に關する問題を黨爭外に置くの趣意を誤解して、宛も政黨外に置かんとするが如くに解釋し、是れ政黨無視なり、是れ政黨無用論なりと言ふ者あるも、我輩は之に與することが出來ぬ。此點に關しては犬養氏の國民黨本部に於て說明せる所、最も要を得て居るやうである。曰く、「問題が至重至大なるが故に三黨の勢力を合して之に解決を與へんと欲するのである」と。即ち一黨の代りに各政黨の連合力を以てすると云ふだけである。決して政黨外に放棄するのではない。各黨其の見る所に依つて意見を定め、他黨と協議の上、一致の方針となり得たる部分に向つては、連合の力を以て當り、「一致せざる部分は退いて各自の意見を守り、互に批評の自由を留保すべきのみ。「勉めて一定」に達し得んことは共同の希望なるべきも、達し得ざる時はそれまでなり。兎に角進むにも退くにも各黨獨立の地步を占むべきが故に、決して是れ政黨無視に非ず。否『外界一切の容喙を許さず』との聲明に徵すれば、外交及國防の方針決定の實權を政黨の手に握らんとするものにして、政黨を重要視するの最も大なるものである。即ち政黨の力に依つて外交及國防の方針を定め、且政黨の力に依つて其遂行を期し、以て政黨をして政界の中心勢力たらしめんとするものである。更に換言すれば、外交及國防の問題を黨派根性の手より奪ふと同時に、之を政黨主義の手に握らしめんとするのである。是れ正に政黨政治論者の大に歡迎すべき事に非ずや。政黨無視又は政黨無用論とは天淵の差があるのである。

但しされぱとて政黨萬能の弊若くは各派小田原評議の弊の取越苦勞を爲すには及ばない。政黨間の協議に依つて方針の一定に努むるとは云ふものの、實際は加藤男の言へるが如く、外交方針の如きは責任ある當局者に於て之を定むるの外なく、唯之を定むるに當りて、各派有力者とも協議して方針の一定せんことを期すべく、若し又協議するを得ざりし場合には、事後に於て十分に說明して意思の疏通を圖り、以て方針の互に

背馳するを防ぐと云ふ事に歸着するのである。即ち對外的の重要問題に關しては、互に方針の背馳するを避くるに努め、而して其遂行には連合の力を以て當り、之が爲には『各自黨派の消長に關せず』、『又外界一切の容喙を許さず』と云ふのである。是は洵に結構な事であつて、我輩は唯加藤原犬養三氏の健氣なる決心に感服するのみ、何等懸念すべきものゝあるを認めない。

三

併し三黨首會議に就いては、別に言ふべき事なきに非ず。先づ三氏の決心は如何にも感服に値するも、其覺書なるものゝ實際の効果如何は、勿論一疑問たらざるを得ない。甲號覺書にある方針一定云々の適用として、乙號覺書に於て、『對支方針は東亞永遠親好の目的を以て相互利益の增進を圖る事、國防費は相當の限度を定め、其範圍に於て鹽梅處理せしむる事』と規定せるも、問題は、所謂相互利益の增進を圖るの方策如何又所謂相當の限度の標準如何に存するのである。此等が即ち意見の最も分かれ得る所である。從つて此等に於ての意見の一致を求め得るに非ざれば、其遂行上に於ての一致協同も起り得ない。又三黨首に於ては、努めて一致を期するの精神なりとするも、三黨々員は能く此精神に副はんことを期すべきや如何。此等を考へ來る時は、自然心細き感じも起らぬではない。

爲すに止めたことである。是は加藤男の註文に出て、事情無理ならぬ點ありと雖も、之が爲に彼等の會合が時務に適切ならざるの嫌あるに至りたるは、深く惜まねばならぬ。之に就いては我輩は三浦子爵に向つても不足を申述べたい。子の眞意何れに在りしやは我輩の知らざる所なるも、若し眼前の國事に關して憂ふる所あり、活問題に於ての方針の一定並に之に伴ふ一致協同を希望したりとせば、實際の國務擔當者たる大隈首相と各派首領とを一堂に會合せしめ以て活問題に對する實地の協議を求むべき筈であつたと思ふ。然らんには、其會議は實際的のものとなり、大に時務解決上に貢獻することを得たであらう。三浦子が大隈首相の參加を求めざりしは何故なるか。是れ伯を對手とするの無益なるを思ひたるに因るか。伯に對しては最早絶望せるの結果なるか。三浦子の三黨首會議斡旋は、隈伯に絶望したるを以て眞の動機と爲し、從つて隈伯無視は當然の成行なりと爲す次第なるか、若し斯る事情より無職無官の三黨首のみの會合となりたるものなりとせば、洵に致方なしと謂ふの外はない。我輩も強いて三浦子を責むるの勇氣はない。

四

然しながら乙號覺書の甚だ漠然たる中に於ても、多少捕捉すべきものの無いのではない。對支方針に於て、東亞永遠親好の目的を以て相互利益の增進を圖る事と言へるは、少なくも侵略主義の排斥を意味して居る。度を定め其範圍に於て鹽梅處理せしむる事と財政を無視せる國防策の排斥を意味して居る

此二點は頗ゝ重要なる性質のものである。我國二政黨の首領が此二點に於て意見の一致せることを表明したるは、國家の爲に喜ぶべき事である。發表は抽象的にして時務に適切ならざるの嫌あるも、上記二原則は甚だ有用なるを認めねばならぬ。又今後實地の問題に就いて意見の衝突を來し、若くは黨員の態度必ずしも黨首と一致せざるべし云々の懸念に至りては、要するに是れ三黨首の誠意と努力との問題である。三黨首に於て眞に誠意を以て覺書の實行に努むるの覺悟なりとせば、外交及國防の方針の一定を圖るに於て、大なる困難はなゝ筈なりと思ふ。元來外交及國防は、國家として一定の方針を有すべき筈のものである。此二問題は、不定無方針の間に迷ふを許さぬのである。故に有力なる政治家の間に於て、誠意を以て其一定に勉むる以上は、實現決して不可能ならざる筈である。加藤原犬養三氏は其の今後の行動が、其誠意の尺度たる所以を以て覺悟せねばならぬ。

且今後に於ける一致の實現の程度を暫く別と爲すも、三氏の記名せる甲號覺書が少なくも四個の重要なる前提的承認を含み、又乙號覺書の二個の重要なる意味を有するは、上に述べたるが如くである。此等は將來更に一歩を進めて一致の實現せらるると否とを問はず、加藤原犬養三氏の必ず尊重遵奉すべき筈のものである。覺書の文面に現れ若くは其中に含まるる意見は、三氏の私約に非ずして公約である。三氏は政治家として、公人として、紳士として、其の現に表明せる意見に對しては、責任を完うするの義務がある。三浦子爵は此公約の立會人として監視して居る。國民亦立會人として監視して居る。我輩に勿論此の尊敬すべき三政治家の責任觀念を疑ふのではない。唯議論の順序として、一應の理窟を述ぶるのである。

之を譬へば、三氏が三浦邸に會して漠然ながらも二個の覺書を作りたるは、宛も相携へて東京驛の待合室に集つたやうのものである。其の同行し得るは、靜岡までなりや、名古屋までなりや、將京都までなりや、或は又下之關までなりや。其邊は不明に屬すと雖も、兎に角相共に東海道線を下るべき筈なるは確實である。而して青森水戸若くは直江津等の方面に向ふに非ざるとは、互に公表明示せる所である。然るに東京驛に集まりたるのみにて同行の友を棄て、轉じて上野驛より青森行の列車に乗組むが如き事あらば如何。或は東京驛より出發するとするも、獨り山の手線を迂廻し、赤羽にて青森行又は直江津行に乗換ふるが如き事あらば如何。世人は必ず之を以て背信者と爲し裏切者と爲さん。斯る醜態は我政界に起らざるべきも、兎に角三黨首今後の旅行振は、大なる興味を以て見らるるに相違ない。

五

猶終りに國論統一若くは方針一定の道に就いて一言を附加して置きたい。外交及國防の如き重大問題に於て、方針を一定し國論を統一するの責任は、朝野の政治家相共に之を負擔するを要すと雖も、主としては政府當局者の責任である。政府は國務實行の責任者である。又内外形勢の實情を判斷するに於て最も適當の地位に居るのである。故に政府は國民

を不定無方針の迷路に立たしめざるだけの處置を取るべき義務がある。而して之が爲には、第一に一定の方針を立て得るだけの識見を必要と爲し、第二には此方針に向つて國民を指導し得るだけの手腕を必要と爲す又第三の條件として、國策の方針を定むるに當りて、豫め國論の趨向に顧み且識者の意見に聽くだけの思慮を有することが、國論統一の爲に必要である。然るに現在の我政府は此種の識見を缺ぎ、此種の手腕を缺ぎ且此種の思慮を缺いて居る。是れ實に三浦子爵をして三黨首會議を發起せしむるに至りたる所以である。政府當局者は往々にして民間異論者を目して國論統一の妨害者と爲すも、實は當局者先づ自ら異論發生を防ぎ得ざることを恥ぢねばならぬ。國論統一は國政遂行上の要件である。此要件を充し得ざる政治家は、國政料理の任に當るべき資格を缺ぐものである。自己の無資格者なるを思はずして、漫然他を責めて統一妨害者と爲すは、無禮千萬なりと謂はざるを得ぬ。我輩は國論の不統一を憂ふる朝野の政治家に向ひ、其の能く上記の諸點に注意を拂はんことを切に希望する。各派政治家の意見交換のみにては、國論統一問題の根本的解決は出來ぬのである。政治家苟も國政の局に當るに際しては、國論を統一し得るだけの識見と手腕と思慮とを備ふるを以て、根本の解決と爲すのである。或は斯る資格ある政治家をして國政料理の大任に當らしむるを以て、根本の解決と爲すのである。其實現或は困難なるべきも、之を以て進歩の目的と爲さねばならぬ。

又朝野の政治家が國事を議するに當り、互に雅量を以て相對するの國論統一の爲に必要なるは、言ふ迄もない。本年一月六日、英國第一回兵役案の第一讀會の時、レッドモンドは同志の愛蘭黨約六十名と共に之に反對した。然るに投票の結果は、贊成者大多數を制したるのみか、愛蘭以外の議員にして反對せし者は、其總數の十分の一に過ぎなかつた。然も兵役法は愛蘭以外にのみ施行さるるのである。是に於てレッドモンドは此大勢に顧みて反對を固執するの要なきを思ひ、一月十一日第二讀會の時には、淡泊に反對撤回の旨を聲明した。我輩は此淡泊を愛し且尊敬せざるを得ぬ。又去四月二十七日、英國聯合内閣苦心の末に成れる第二回兵役案提出の議場に於て、カーソン及ウォルシュ等が其案の姑息と不徹底とを激烈に攻撃し、議場の形勢亦甚だ不利なるに至るや、首相アスクイスは『議院の意向に從ふは政府の柔弱に非ずして寧ろ智なる所以なり』と稱して、即座に其案を撤回し、數日を經て訂正案を提出することにした。アスクイスの失敗は不面目の極に相違なきも、國家大危機の際に於ける態度としては、寧ろ其の淡泊なる讓歩を多とすべきであらう。我國の朝野政治家に於ても、レッドモンド及アスクイスの如き淡泊なる態度と君子の雅量とを以て念と爲し、讓るべきに讓るを辭せなかつたならば、政爭を緩和し國論を統一する上に於て、大に得る所があるであらうと思ふ。是れ亦一般の注意を促さざるを得ないのである。

近代的廣告術としての三黨首會合

早大教授　大山郁夫

一、政治的廣告

三黨首會合に對する世評は、隨分喧しかつた。此位世の中を騷がせたゞけでも、此會合の首唱者及び三黨首自身から見れば大なる成功である。――と云へば近時の國情に慨する所あつて此手段を採るに至つたと言ふ觀樹將軍及び其他の面々に對して、幾分失禮な申分の樣に聽えやうが、實は毛頭左樣云ふ事のない理由を、これから少々述べやうとするのである。

現代は廣告の世の中である。而して一切の廣告の中で、本人自ら平氣で濟まして居ながら、傍からやい〳〵騷がれるのが、蓋し廣告の上乘なるものである。斯く考へれば、今回の所謂三黨首會合程、此廣告の精神に適つたものは、近來に類例を見なかつた所である。素より此事件の當事者自身は、問題の會合其物を以て廣告であるとは意識して居ないであらう。併し乍ら彼等が自ら之を意識して居ると否とに拘らず、事實は事實である。

廣告と云ふものは、常に必ずしも士人の愧づべき事柄ではない。――どころではない、現代に在りては政治界に於ても、商工業界に於けると同じく、大なる事業を企てんと欲すれば、大なる廣告が必要なのである。殊に世間がデモクラチックなればなる程、廣告の必要が増大し、又廣告の利き目も顯著になり、從つて色々な廣告も盛に出る樣になる。政黨の宣言や政綱も一種の廣告であれば、その機關新聞雜誌の利用なども無論正直正銘の廣告術の應用である。今日に於ては國家までが新聞政策と稱するものに依つて、大規模の國際的廣告をさへ盛に行ひつゝあるは、耳新しくない――が、併し乍ら容易に廢たりさうもない――事實である。我日本國内に於ても、政治に廣告術が應用せらるゝ傾向は、年を趁うて段々烈しくなる樣である。政黨員の地方遊説の隆盛は昨今に始まつたことでないが、寡閣の各大臣までが選擧應援の演説に出馬する樣になつたのは比較的新しき時勢の變遷を反映するもので、それが政治上の廣告に多大の權威を加ふる樣になつたことは、昨年の總選擧の結果が之を證明して居る。

『廣告も亦一種の報道なり』とは、都下の或る大新聞紙の廣告勸誘廣告に使はれてある文句であるが、その正確不正確をさへ問はざる時は、然り、廣告は慥に一種の報道である。而も此一語は、それを掲げて居る當

般新聞紙の多分豫期せざる意義を有して居る。と云ふのは、我等は或る種の廣告が始終引切なしに反復せらるゝのを見る時は少くとも一面に於ては社會が其廣告の目的物たる商品を盛に要求して居る事實を知り、それより社會の風潮に關して樣々な fruitful な推論をなし得るからである。此意義よりして我等は化粧品や、寶藥や、性慾に關する書籍の廣告などを漫然に看過しないのである。

果して然らば、我國に於て近年殊に盛に流行する樣になつた政治的廣告は、抑も何を暗示するか。言ふ迄もなくそれは、一般社會に於けるデモクラシーの進歩と云ふ平凡なる事實を語るものである。古往今來專制國に於ては、多數民衆が政治上に何等の能働的作用を及ぼし得る地位を有して居ないから、少數の爲政者は自然其後援を求むる必要を比較的に感じないため、各自の政見を發表し廣告する必要もなければ、之をなすこともなく、又之をなさゞるを以て得策とすることは、モンテスキューが既に百五十餘年以前に説明してゐる通りである。けれども近代的デモクラシーの行はるゝ處では、政治家は最早多數民衆の勢力を無視することを得ず、又政治思想が一般に普及せる國に於ては、政黨なるものは究極は只民衆の意思感情を政府に取次ぐ職掌を有する一種のブローカーとしてのみ存在の意義を有する傾向を示すものであるから、縱しんば政黨の内部に於ては所謂幹部專制が極度に行はれて居るにせよ、世間（直接には選擧有權者）に對しては、普通のブローカー並みに、大に民衆相手の廣告をしなければ立行かない樣になるのである。

而して此傾向は憲政發達の常道であつて、別に悲觀すべき筈のものでなく、寧ろ大に歡迎すべき筈のものである。我等の先覺者たるマキアヴエリは、既に四百年の昔に於て、國家の建設はこれを偉人に俟たなければならぬが、國家の維持はこれを民衆に賴るべきものであることを述べたが、我等は今日に於てもそのまゝ之を服膺して居る。現代日本の小なるボスエーや、ホッブスや、フィルマーの徒が何を云はうと、我等の關知する所ではない。――と云ふのは、今日に於ては最早民衆には指導者を要しないと云ふ意味では決してなく、否、大に之を要するが、民衆の意思感情と風馬牛相關せざる專制的指導者を要しないと云ふ意味である。我等は今日尚ほ英雄崇敬心を有することを以つて誇りとして居るが、我等が求むる英雄は、自己の單獨の意思を强制的に民衆の上に行はんと計る英雄ではなく、民衆の胸裏に磅礴する意思感情を有效に聲明し、指導し、貪欲するを力むる英雄である。換言すれば、國民精神を利用する英雄ではなく、國民精神に殉する覺悟を有する英雄である。我等はカイザー維廉二世をば單に憫歎するに止るが、リンコーンをば心の底から憧憬し要求する。

二、三黨首會合の廣告的效果の大なりし理由

觀樹將軍及びその勸誘の下に會合を行つた三黨首は、該會合の廣告的效果を豫想して遣つたのでなかつたことは無論であらう。彼等は彼等の表明する如く、眞に國事を憂慮する餘り、此頃の炎暑にも拘らず、三回

迄も個を始めて懇談に及び、遂に三個條の覺書作製の段取りに迄立至つたのであらう。けれどもこれが意外の廣告となつて、折柄の國内政治の表面の沈靜を破つたのは何のためであるか。抑も其如何なる點が稍く時好に投じたのであらうか。

之を精論しやうと思へば、勢ひ覺書全部を評釋せねばならぬことゝなるが、余は左樣な煩を避け、其内の最も著しき部分を舉げて一言して見やうと思ふ。第一に注意すべきは、覺書が外交及び國防を黨爭の外に置くことを表明して居ることである。此點は從來世間で隨分盛に議論して盡されて居る上に、加藤總理の同志會に於ける報告中に條理を盡くした說明があつて、余はそれに向つて全幅の贊意を傾けるものであるから、今は此點に關して沈默を守る。世人が外交及び國防を外にしては、政黨の存在の意義が消滅すると云ふのは、それは蓋し杞憂であつて、國内政治の部分にも幾らも重大なる政爭上の問題となるべきものゝあるべき筈であり、且つ益〻多く起らんとしつゝある。殊に普通一般の財政問題の外に、國家事業と個人事業との分界線の決定及び國費負擔率の分配問題等の如きものは、今後社會政策の根本に關する意見が複雜となるに從つて、國政上益〻重要なる地位を占むるに至るべく、又これは將來のことであるが、政黨に階級代表の色彩が濃厚になればなる程、斯の如き問題を中心として幾らも花々しき政爭が試みらるべき筈である。且つ又政黨の立場が階級本位になればなる程、外交及び國防を黨爭の外に置く必要は切實になるべき筈である。されば時勢が一旦此方向に進む樣になれば今回の如き黨首會議が、益〻頻繁に催さるべき必要に際會すべきことを豫測し得る理由がある。自ら政治家を以て居り乍ら、此理を無視する者の比較的に多いことは、彼等の新時代の政治に對する無理解の程も知られて哀れである。兎に角外交を黨爭の外に置くと云ふことは、近年八釜しく唱導せられて居た所であり、殊に昨年の對支外交に關し、兎もすれば政黨者流が黨略上より當局者の袂を撒いて、多分無意識(!)に對岸の賊政府の御用を務め來つた痕跡もあつて、一部の國民の苦々しく思つて居た折柄であるから、該宣言が世人の注意を惹いたのは當然であるとも謂へやう。

次に三黨首會合の覺書が大に當つたのは、其中に『外界一切の容喙を許さゞる事』を、無遠慮に言つて退けたゝめである。此宣言の目指して居るものは、直接には元老の不當の勢力である。是は諸新聞紙に掲げられたる觀樹將軍の談片に徴しても明白である。維新以來世界政局の舞臺に打つて出でたる若き日本が、今日元老と稱して祭り上げらるゝ階級の恩恵に浴した事は、國民一般の好意的に認識し且つ感銘して居る所であるが、現今に於ては國民は最早元老なくして政治的に自立することが出來る樣になつたのであるから、今更時勢に後れかゝつた元老の助言を借らずとも國家を經營することが出來ると云ふ自信が生じたのみならず、此際一種の眩ぶしき超憲法的後光を有する元老の干渉は、國民の眼から見れば却て迷惑千萬とする所である。これが個人の場合ならば、厄介な老人の差出にも、其過去の功勞に對する感謝と、其老い先の短き豫測に

依る懺悔とで、大抵の處は之を默過することも出來やうが、國家國民の公事は斯の如き個人的感情で推すことを許すべきものではない。且つ一時國民は元老の勢力が漸次凋落しつゝあるものと思つて油斷して居た所が、近年に至つて各種の政變每に、元老の內閣を make or unmake する力の以外に强大なのに驚いたのである。殊に元老が表面自ら責任の地位に立つことを拒んで、裏面に小策を弄することを憎んだのである。且つ元老は憲法外の組織、即ち英語で所謂 extra-constitutional institution である。尤も憲法外の組織と云へば、政黨の如きも矢張りさうであるが、政黨は憲政發達上自然の現象であつて、それ自身憲政の兒であると同時に、憲政を有效ならしむるために必要なる機關であるが、元老と稱するものは、現今に於ては隱れもない憲政發達の阻害分子である。而して純粹の元老の數は自然淘汰の靈妙なる作用に依り漸次減少して行くけれども、其系統を引いた分子は當分絕えさうな見込なく、現に國民の油斷に乘じ、政界縱斷とやらを演じて內閣を乘取らうとする陰謀を策して居るとさへ京童が傳へる。此際發表せられた三黨首會合の覺書は、此種の元老及び元老系分子の陰謀に對する痛快なるデモンストレーションとして、一般國民に迎へられたのではあるまいか。

或は外界一切の容喙を許さずとの宣言を批難して、國民一般が外交及び國防の事に參する途を塞ぐものであると云ふ者があるが、是は政黨と國民との關係を無視する僻論である。政黨は其內部に於てこそ少數の幹部員が專制を行ふことを尋常とするが、國民一般に向つては、久しく專制的命令を行ひ得るものではない。最近の政友會の衰微が之を證明して居るではないか。現今に於て既に然り、況んや將來に於てをや、と云ふ寸法になるのである。我等は此宣言をば寧ろ、憲法の認めを道筋（チャンネル）以外の處より、竊に裏口から手を廻して國政に干涉する輩を除かんとする意味と解釋するを以て適當と思ふ。斯く視來れば此宣言は、元老が一個の國家公民 (Staatsbürger) として、他の國家公民と同じ徑路方法に依りて國政に作用することを否んで居るものでなく、只彼等が彼等の vested interest を根據として不當の勢力を揮ふことを排斥して居るものであることは明白になるであらう。而して是が恐らく此覺書の立案者及び贊同者の眞意の在る所であらう。ひねくれた邪推は、大抵の場合に於て無益である。

此他外交並に國防を黨爭の外に置く範圍如何、及び覺書乙號に示した對支外交の方針に關しても、議論の餘地が幾らもあるが、今は之を省くこととする。只最後に一言したきは、此三黨首で取決めた目的が實現せらるゝ蓋然性乃至可能性ありや否やが、評論の問題に上つて居る樣であるが、我等の見る所を以てすれば、此目的が縱し實現せられずとも（當分實現せられないであらう）、此會合は單なる廣告として慥に成功して居るものである。殊に「外界一切の勢力」に對するデモンストレションとして最もよく成功して居る。此會合の眞の目的は那邊に在りやと、眞面目に模索して居る者があり、或は現內閣破壞運動であると唱ふる人もあれば、或は現內閣維持に貢獻すべきものであると騷ぐ者もあつて、樣々

と相互衝突牴牾する損傷隠凋を逞しうして居る事實は、益々此會合の廣告的效果を高むるのみである。又此會合に列した三黨首の人物、其從來の相互關係、及び其對下の地位も亦、此會合の廣告的成功の重大なる要素を成して居ることは、言ふまでもない。自ら求めて廣告する新郎新婦の寫眞さへ、割合に人の注意を惹かぬ今日の世の中に、自ら求めずして偉大なる廣告的效果を收め得た此會合の發案者及び三黨首のために、茲に謹んで敬意を表し置く。

制度としての黨首會商

若宮卯之助

一

天下の竟に一人の天下にあらざること、否、天下は竟に上御一人の獨裁親政の能くする所にあらざる事、之を國史に立證して非凡の概括力を示した者は、新井白石の『讀史餘論』である。日本國民の政治的生活に於ける權力中心の移動を觀察して、大勢九變の迹を認取した白石は、『神皇正統記』と共に光孝より上の方は一向に上古、萬の例を勘ふるも、仁和より下つ方をぞと傍し、五十六代清和幼主にして、外戚專權の端を啓くに至つたことを、其の政變の第一に數へて居る。此の第一政變より其の第九政變の德川氏を終るまで、其の間凡そ一千年。此の一千年の間に於て、名實共に行はれた天皇の親政は僅かに二十一年に過ぎなかつた。而も其の二十一年より白河の院政十四年を除き、後醍醐の新政三年を減ずるときは、其の眞に天皇親政の光輝を放つたものは、僅かに後三條の四年である。此の一千年間のたつた四年は、日本政治史上の偶然事件として之を無視するに足るとせば、名實俱に備れる所謂天皇親政は日本國民の經驗に屬する事實である。

二

政權下移の歷史的積勢に孕まれた日本の政黨は、帝國憲法の必然の機能に依つて生じたものであり、而して其の帝國憲法は、之を成語で言へば、即ち『光輝ある國史の成績』である。別言すれば日本國民の政治的生活は、他の進步的國民の政治的生活と同樣に、簡より繁に、分化せざる單純より統一ある複雜に進むで帝國憲法の欽定となり、其の帝國憲法を離れて、存立し得ざるが如き錯綜せる一種の有機的生活となり、其の

帝國憲法の運用に必須なる一の機關として、適當なる政黨の發生を要求し、組織を要求し、展開を要求するに至つたのである。即ち日本國民の政治的生活は、今や其の生活に必須なる政黨の發達を離れて到底、發達し得ざるが如き狀態に達して居るのである。

帝國憲法は其の法文に於て、國務大臣を認むるも內閣を認めざるが如く、帝國議會を認めて而も政黨の地位を認めて居ない。法文に之を認めざるも已に國務大臣を認むる以上は、其の統一の爲めの內閣組織は、之を其の精神に含まれたものと認めざるを得ざるが如く、議會の議決に參與して贊否を表するの權を與へられて居る者が、其の團體的行動に依つて其の權利を行ふを便宜とするに至ることも亦必然の傾向である。此の意味に於て政黨の發生は憲法運用の結果であると謂はねばならぬ。

此の如く帝國憲法の精神に根據を有して居る政黨は、憲政の發達と共に、益々其の機能を擴大すべく、其の衰頹と共に益々之を萎縮すべきが如き有機的性質を具へて居れば、我が政治的生活に於ける政黨の地位の變化には毫末の疑が無い。

三

所謂超然主義も、所謂操縱主義も、或は撲滅主義も、遂に政黨の發達を妨ぐべき效果を得なかつたのは、政黨の根柢の如何に深く我が政治組織の中心に入り込むで居るかの何よりの證據である。此の政黨の如何なる障礙をも除いて開展の途を辿らんとするの傾向を以て、其の爲すべき一切を爲し、爲さざるべきの一切をも或は爲さんとした彼の元老制度の自然消滅の傾向と對照するときは、政黨の性質は益々其の明確の度を加ふるであらう。

政黨の發達は帝國憲法の精神の發動であるが、元老制度に至りては、其の精神を如何に寬大に解釋するも、帝國憲法とは全くの無關係である。然りと雖も、活ける仲達を走らす以上は、死せる孔明も活ける勢力である。況むや我が元老制度の如く、最高國務の一大要素として並び無きの權威を輝かして來たものは、單に之を不法の存在として理論上より一擲的に排斥せんとすることこそ、恐くは無類の不法であらう乎。元老制度は他の一切の制度と同樣に、或時は善く、或時は惡るき制度であつた。其の制度が我が最高國務の一大要素として、今日まで運用されて來たとの、當不當と便不便との問題は、觀る人の性質と、居る處の地位の如何に由つて解答を異にするも、制度其の物は、明に歷史的の存在である。此の點に於て我が元老制度と米國大統領の豫選制度との間に多少の類似がある。

此の二つの制度は各々其の憲法に於て何等の據ろを有せざるに於て同一であるが、我が元老制度の今や漸く自然消滅の傾向を示して居るに拘らず、一種の政治的必要に應じて發生するに至つたと同じく、米國の豫選制度も亦其の萬人が萬人に口を開かしむる、其はてし無き口數の制限の爲に、自然に發達したのである。然も豫選制度には發達の性質があり、存續の傾向がある。而して我が元老制度は兩つながら之を缺いて居る。

此元老制度の自然消滅的傾向は、日本國民の政治的生活に如何に影響す

る乎。

四

帝國憲法は日清戰爭を豫想せず、今尙ほ六三問題の存する所以である。帝國憲法は日韓併合を豫想せず、教育勅語の朝鮮に行はれ難き所以である。日本が工業國となる事も、出稼移民の二重國籍の國となることも、南洋に豆粒大の島を得て日本膨脹の飛石を得たかの如く心得る國となることも具體的には悉く憲法制定者の豫想の外であつた。然しながら相與に和衷協同して益々我が帝國の光榮を中外に宣揚することを欽定憲法の御趣旨と解するときは、小なる日本を大なる日本とし、貧弱なる日本を富强なる日本と爲し、無教育の日本を教育ある日本と爲らしめた一切の制度習慣は其の法律上の關係などには頓着せず、益々之を尊重して發達させる必要がある。我が元老制度の此の興國日本は貢献したことの性質と分量の如何は容易に決定される問題で無い。然しながら我が一切の政治的制度は悉く此の元老制度の認定の上に立ち、此の制度との關渉を豫想して運用されて來たのである。而して元老諸公は今や悉く八十前後の老翁である。之を支那流に言へば、諸公は今や壽翁にあらざれば耄翁である。元老補充の制度の已に否定されて居る今日に於て、漸次に凋落して殘り少なになれる諸公にして、一たび長逝せば、其の元老制度の職分と看做されて居た權力の歸趨に關して、果して紛爭の生せざるを保障し得る乎。此の點に關聯して最も意味深く想像されるものは、今や紛々たる世論の主題となつて居る三黨首領會の效果である。

五

元老當然の職分の如く看做されて居たものは、内閣組織の差出口を除けば、國防と外交とに關して報告を受け相談に與かることであつた。從つて如何なる國防政策も、外交問題も元老の同意を得ずに之を實行し之を解釋せんとするは、如何なる内閣も、到底能せざる所であつた。此の元老の同意は、如何なる政府も必ず厳守せざるを得ざる、强烈なる政治的慣習であつた。此の慣習は、或は便利なる或は不便なる慣習であつた。然しながら此の慣習は、其の總ての總てに於て、決して惡しき慣習では無かつた。如何なる場合に於ても、如何なる紛爭の渦中に於ても、此の慣習は必ず國家の統一を壞らざるの可能性を認められて居た。これ實に今日まで公けに認められて居らぬ元老制度の長處である。此の制度は或は進歩の速力を鈍らした場合があるかも知れぬ。而も一國の遠心力をして其の求心力よりも强からしめた場合は、一回も無かつたのである。人の性は、善事に對しては比較的鈍感に、惡事に對しては極めて鋭感である。已れに都合好き事柄は直ちに無頓着に過ぎて、其不都合の事柄に對してのみ痛心し焦頭する。快樂は瞬間であり、痛苦は永久である。元老時代の黄昏は到來した。我等は其の殷々たる晩鐘を聽かんとして、而も未だ其の元老制度の一切の恩惠を至當に評價すべき時期に達して居らぬであらう乎。

六

如何なる政治體も、如何なる社會體も、其の求心力と遠心力との相關に

依つてのみ持續される事は、如何なる有機體とも、無機體とも、異るのでは無い。日本の政治は今日まで求心力の比較的强かつた元老的勢力と、遠心力の比較的强かつた政黨的勢力との權衡に依つて支へられて來たのであるが、元老にして已に補充されずとすれば、其の元老の勢力に代るべき者の必然に政黨であるの結果として、政黨の性質は玆に一變するを要すべく、一變して而して求心力と遠心力とを併せ有するが如きものとなるを要するは、恐くは勢の然らしむる所と思ふ。然らば政黨は如何にして此の二つの性質を併せ有するを得る乎。

今日までの政黨は爭はんが爲に、爭ふの弊に陷り易き內政問題を焦點として火花を散らして居たが、此の爭は其の爭の公けの性質を失はざる限り、一國の元氣を刺戟して、社會の多數に思慮すべき或物を與ふるの利益があつた。而も外政問題に關しては、半ば自ら全責任を負はざる制度の爲に、半ば深く其の問題の性質を解せざるが爲に、內政問題に對するの態度を以て等しく此の問題に對して居たのである。自ら責任の地位に立つときは恐くは何人も此の態度の明に遠心的であることを覺るであらう。而して直ちに此の點に於ける元老制度の優越を認むるであらう。內國の問題は、問題の性質上、殆ど擧國一致の結果に到達するの機會を得ざるに拘らず、國防外交の對外問題は、問題の性質上、必ず擧國一致の結果を要するものである。內政問題に對しては日本人は單に日本人で無くて、日本人の何某である。而も對外問題に關しては、日本人は總て單一の日本人である。されば對外問題の大方針は必ず三黨首領の懇談を要すべきものと爲すは、明に我が憲政上の進歩である。

七

此の三黨首領の會商が、當面の政局に對して如何なる直接の効果を及ぼすかは、自ら我等の論外である。我等の主意は、黨首懇談の制度が元老制度の一部の機能を繼承して、有力なる、効驗ある制度となるを得る乎、此の如く爲すを至當とする乎の二つである。而して我等の解答が之に對して肯定的であるは故らに之を言ふの必要が無い。其の立場の聊か苦しきが如く想像される加藤男は自信ある政治家であり、操守ある紳士である。加藤男の過去を識る者は、恐くは何人も其の瞬間の立場の爲に、永遠の利害を犧牲にするが如き短見者流にあらざるを許すであらう。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

時勢の要求に應じたる

定價金廿三錢
郵稅金壹錢五厘

婦人公論

東京本郷區西片町十
中央公論社
振替東京三十四番

愈々其特色を發揮せる七月號の壯觀

●おしめの乾し方やお芋の煮方を教ふるには即ち他に雜誌あり

□現代女學校教育に對する女學生側の不平（平塚明子　宮島麗子　神近市子　鳩山薫子）

□我輩の女性觀……大隈伯爵

□夫のあとを慕うて……坪内ホームス

□娘を嫁入らす爲めに……山脇房子

□續カチューシャの話……島村抱月

□物あつての生命種……茅原華山

□汗の化粧法……マリー・ルイズ

□日本婦人の美德……福本日南

《小說》五大雄篇

（新短篇小說）

二人の女優……小山內薫

いつまで……田村俊子

（愈入佳境長編に）

情炎……長田幹彥

舞殿……笹川臨風

若妻……小栗風葉

□若い女の墮落の徑路……山室軍平

□氷の話……西中主任

□西洋の母と其趣味……中根環堂

□住宅の改良……伊東博士

□大正新女大學……高島平三郎

□職業調べ—婦人記者……一記者

□妖怪變化夜話……井上博士

□妻としての資格

□文學者の妻……德田秋聲

□實業家の妻……澁澤男爵

□政治家の妻……島田三郎

□軍人の妻……櫻井大尉

●智識と趣味の向上を圖り新時代に處せんとする高級婦人の爲に則ち本誌あり

（中付一の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

丸野内人著

退出より出勤迄の

充實生活

□袖珍形携帶至便
□總布上製頗美本

定價金五拾錢　送料六錢

最新刊

要目

■二十四時間の定收入
■現代勤め人の不安
■新生活の出立點
■家庭より事務所へ
■事務所より家庭へ
■週間本位の時間割
■事務室外の世界
■勤め人の社會的地位
■往きの電車
■返りの電車
■最初の二時間
■住宅と服裝

生活の革新は今や問題中の問題である。而かも收入幾許の研究は解決の全部では無く、當代の呪咀語たる『生活難』を破る眞個充實生活の爲めには更に新解釋を必要とする。本書の高唱と力說とは當に此缺陷を補ふべき提案である—著者

發行所　東京市本鄕區本鄕一丁目大通　日東堂　電話下谷四三六二　振替東京一二五五八

化粧用 カワイヤ石鹼　一個十三錢　三個入 三十七錢　一打 一圓四十錢　他店にては販賣せず

原料に不純物の含まざるは現品が證明し當店は斷言す
他の同質の石鹼に比して安價なるは多額の廣告料を費さゞるが故なり



雜誌と書籍
オモチヤと文房具
机と書棚の圖案及製作
雜誌合本及破本の製本
自費出版の印刷製本及發賣引受

カワイヤ
河合書店
東京下澁谷廣尾橋通

『新刊雜誌總目錄進呈』　二錢切手封入御申込乞

市內は電話芝四二三七番にてカワイヤを御呼出し御用命次第配達致し候
地方は振替東京二八二五六番へ御拂込次第送料無料にて早達を計り可申候

(中付一の二)

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絕す

早稲田大學教授中島半次郎先生
早稲田大學講師嶋村抱月生序

最新刊

エレン・ケイ女史原著

兒童の世紀

早稲田文學士 原田實先生新譯

正價金壹圓卅五錢 郵稅金八錢

四六判上製 美本全壹冊 紙數五百頁

（中付一の三）

エレンケイ女史の名は今や全く世界的である。大女流思想家大社會改革家特色ある世界的大教育學者これ總て女史の名である。女子の至純なる戀愛を高調し高尚眞面目なる結婚を主張するは何の故ぞ？其間に生れる兒童を眞の人格者たらしめんが爲である。兒童を眞の人格者たらしむるは人類たらしめて幸福と平和と悦びとを此世に齎し生命に輝く世界を創造せんが爲である。而して其第一の又最大の準備として先づ女子の主張するものこそ所謂兒童の世紀である。蓋之本書が世界的現代的の一大名著として世界を聳駭し居る所以也。譯者は夙に女子の偉大なる思想と人格とに敬服し多年其著作に親炙する者其敬仰の熱情遂に茲に女子が代表的著作の全譯となる。或は涙に濡れ或は力に輝く其原文を移植し得て餘す所無し。我が思想界教育界婦人界は本譯者を獲て一の至寶を加へたりと謂つべし。

（內容要目）
△小兒の其親を選擇する權利△未だ生れざる人類と婦人の勞働△教育△無家庭△學校に於ける心靈虐殺△未來の學校△宗教々授△小兒の勞働と小兒勞働の犯罪以上

好評激甚 **六版** 出來發賣

早稲田大學教授 內ケ崎作三郎序
早稲田大學講師 吉田絃二郎著

タゴールの哲學と文藝

四六判上製美本 正價金壹圓廿八錢 郵送料八錢

東京朝日新聞曰く……タゴールを紹介せしもの世既に多し。そして其著書の多くは飜譯せられたりしが而も其哲學と詩と人格との全面に渉りて斯の如く明快流暢にタゴールを語れるもの未だだ之なし。生硬の譯文半解の解説を拔んじて能くタゴールを本邦に知らしめ得たるもの本書を以て其首めなるべし。近來の好著なり（生の實現・園丁・新月・チトラ・暗室の王・郵便局・等著述の全部書中に有り）

本間久雄著 ■ **エレン・ケイ思想の眞髓** 全一冊 正價九拾錢 送料八錢

東京市神田區表神保町七番地 ■**大同館發行**■ 振替貯金口座東京八七貳番

滯支十七年



小山田劍南

黎元洪

袁歿して黎代り、而して天下未だ大動搖を來たさず。知らず、黎の力能く群雄紛爭の事局を拾收して、國家を危亡に救ひ得べき乎。吾人を以て之を見るに、此事未だ俄かに判斷し易からずと雖も、但だ、黎を以て袁に易ゆるは、夏物を以て冬物に入質れ換ゆるが如く、タシマエを出すの氣遣ひあることなく、寧ろ剩錢あるべきを信ずるのみ。請ふ之を黎の人物に看よ、而して且つ其閲歷に就いて僕の知る所を語らしめよ。

黎元洪字は宋卿、湖北省、黄州府、黄皮縣の人、年五十四歲、其先世々安徽省宿松縣の人なりしが、其祖

父と其父とに至り、湖北に客商したる縁故にて、遂に籍を黄皮に置けり。

黎、幼時家道甚だ振はず、出でゝ商家の丁稚となる。年十二三歳のころ、郷里の巨紳に給事中洪良品なる者ありて、黎の人物に望を屬し、其父に囑して黎をして名教師に就いて學ばしむ。然るに黎の性元と帖括を樂まざるより、乃ち天津に送つて李鴻章の北洋水師學堂に入學せしむ。學堂の總辨柯銘又た頗る黎の人物を愛重して、眷顧殊に厚かりしといふ。嘗て同窓の諸生に過失あり、事黎に連累す。黎直ちに身を挺して出で、衆に代つて責任を負ひ、且つ曰く「大丈夫當さに天下の事に任ずべし、かゝる區々の一小事、安んぞ避匿するに足らんや」と。遂に同學の爲めに敬重せらる。當時北洋の海軍、聲勢方さに熾んにして、淮將丁汝昌之が統率の任に在りと雖も、中級以下の將校は皆福建人にして福建閥の勢力極めて强盛なりしため、他省の者は槪ね志を展ぶるを得ず、黎も卒業の後、久しく下僚に沈淪しゐたるが、其平居重厚寡言にして寛裕能く容るゝを以て、英將ランウエリイの賞識する所となり、深く之と納交し、就いて海軍の戰術を精研するを得たり。

日淸戰爭の際、戰鬪艦鎭遠の砲術長として健鬪せしが、威海衛の一敗戰、山東巡撫李秉衡逡巡して援兵を送らず、提督丁汝昌藥を仰いで自盡し、河南の人牛師昶、丁の副將たりしが、濫りに丁の名を冒用して、降書を日本に送り、艦隊を擧げて投降するや、黎萬事窮するを見て、出でゝ降虜たるを欲せず、自盡を計りて海に投ず。會ま軍艦飛鷹の短艇に救はれ、僚友の勸諭によりて一死を思止り、日本が飛鷹を支那に還與し、之れに丁汝昌の棺柩を載せて芝罘に送り届くるや、黎も亦た飛鷹に乗組みたるまゝ芝罘に至りしが、其後流落輾轉して南京に入れり。

時に張文襄公之洞兩江總督代理の任に南京に在り。恰かも軍隊革新の事業に鋭意しゐたるが、人有り、黎を以て公の帷幄に薦む。公見て其爲人を賞し、「智勇深沈」の四字を書して與ふ。黎因て策を進めて、獨逸武

官を招聘して、新式軍隊二千六百八十人を訓練せしむ。これを自强軍と名く、兩江に新式軍隊有るの嚆矢なり。張公又た金陵砲臺の兵制改革を決行して、專任砲臺總司令官を設け、黎を以て之に任じ、且つ砲臺を增築せしむ。黎の器量これより漸く張公に知らる。

張公の湖北總督の任に返へるや、黎亦た隨うて武昌に赴き、軍隊訓練の職務に奮勉して、公の信任益々厚く、其聲名正に宿將錢恂の壘を摩すに至れり。

當時張公の幕中に在りて軍務に參する者に、尙ほ一人を數ふ。張彪といふ。張彪は張公が四川の學政使たりし時代より、公が身邊の勞役に服して扈從し、人に勝れたるの膂力あるによりて、護衛長に取り立てられ、忠順甚だ勤めたるを以て、公の殊遇を僥倖し、卑賤の匹夫は次第に頭を擡げて、千總となり、守備となり、游擊となり、世間より相當の尊敬を受くるに至りたるは皆公が推擧の賜物なり。公嘗て其侍妾を張彪に賞賜して其妻となさしむ。故に人皆張を呼んで了姑爺(イャーノウイエー)(侍妾の亭主)といへり。

張公の湖北に在りて軍務を視るや、謀議は多く決を黎の意見に取り、實行は獨り權を張の鞅掌に任かせたるを以て、張はこゝに利便を得て、擅まゝに私腹を肥やし、財力は勢力を增し、勢力は財力を增し、兩々相待つて彼れに附與するに非常の權威を以てし、動もすれば全省の政治にまでも容喙するに至れり。

張彪は山西人にて、由來山西人は貨殖の術に長じ、裸身一貫で國を飛出し、外で稼いで巨財を積むもの多く、北京などにて、錢舖質店を營む者は概ね山西人にして、山西人の錢屋といへば、山東人の料理人と並び稱せらるゝ程なり。張彪に至つては鄉黨の臭味殊に著るしく、肝甚の軍事の知識は皆無なれども、金儲けの方に掛けては、なか／＼人後に落ちず、慾の皮は面の皮と共に厚く、利息が慾しさに、家主もすれば、地主にもなる、賄賂は取る、口錢は貪る、兵隊の靴をカヂり、鐵砲丸を呑むに至つては、誠に以て言語同斷沙汰の限りなり。是故に漢口の三井大倉などが湖北の軍隊に我兵器を賣付くるには先づ彼れに食はしむるに巨利

を以てするを至便としたり。我陸軍少將本庄道三氏は嘗て張總督に招聘されて、漢陽造兵廠の顧問たりしが、張彪の根性の下賤なるを卑んで之と相見るを嫌ひ、終に其職を辭し、去るに臨んで、日本刀一口を以て張に贈り、請ふ君の心事を以て此三尺の物に問へと諷したる一事は、今猶ほ彼地邦人の間に好話柄として殘れり。宋の岳飛嘗て文臣錢を愛せず、武臣命を愛せずんば、國家安泰なりといへるが、本庄氏の意蓋し武臣にして錢と命と併せて之を愛するの徒は、天下に百害有つて一利なし、寧ろ早く死んだ方が人助けなりといふに在りしが如く、下郎を罵り得て痛快甚し。張は又た無學文盲にて、目に一丁字無く、人のソレとは知らず揮毫を依賴する者あるときは、自分を侮辱したる者とヒガんで感情を害するなどに至つては滑稽の甚しき者ならずや。

翻て黎は學識操行並び秀で、寡慾にして身を持すること淸廉なりしかば、張は却て之を忌憚し、嫉惡すること甚しく之を排去せんことを欲し、百方手段を盡して迫害を加へたるが、黎は深く鋒芒を斂め、抱負を包み、絕えて頭角を顯はさゞりしを以て、柳に雪折れなく、僅かに無事にして經過するを得たり。而して張の橫暴益々甚しく、其部下亦た上の爲す所に傚ふ者あり、良家の婦女を姦し、財物を奪ふも棄てゝ問はず、訴ふる者有れば强威を以て之を殘害するに至り、かくて張は良民の怨府となり、識者の指彈を蒙れるに反し、湖北軍隊の人望は翕然として黎の一身に集まれり。

甲午の役後、張之洞人材の缺乏を感ずること痛切なりしかば、黎間に乘じて言を進め、多く學生を派して海外に留學せしめたり。然るに張公は此等新人材の中、革命の思想を齎らし歸る者あらんを懼れて、容易に軍務に與からしめざりしが、黎中より斡旋して各々材を量つて職を授けたるを以て、深く黎を德とする者少からず。其後湖北軍隊を代表して日本の大演習を陪觀し、大に心得する所あり、歸來益々軍政の改革に心を致たしたるにより、益々張彪の反感を買へり。

從前第一師團第二師團と稱せられたる湖北の陸軍

か、陸軍部の改定編制に基き、第八師團及び第二十一混成旅團と改成せらるゝや、張彪は多財を散じ、百端運動してマンマと第八師團長となり、更らに進んで松藩鎭提督の榮官を博し得たるが、黎は僅かに第二十一混成旅團長として、常に了姑爺の下風に匍匐しゐたるを以て、湖北の全軍皆當路の處置に平かならず、いたく其不明を憤れり。然れども黎は區々の窮達を以て心を勞せず、益々職務に勵精して公餘自己を玉成するに勉め、部下と共に將校講習所の學生となつて、熱心に日本武官の講説を聽き、漢陽造兵廠の會辦を兼任したるより、火藥製造法の研究に留意して頗る自ら發明する所ありしなど、新知識の研鑽に沒頭しゐたり。明治四十年の秋、天高く馬肥ゆるの時、西風獵々たる河南の平原に、湖北河南の貔貅と、袁世凱の麾下に屬する北洋軍隊の精鋭と相會して對抗大演習を行ふ。偖、今の由良要塞司令官鑄方少將に隨うて、南軍の陣中に在り。一日少將と兩軍の武將を月旦して黎元洪に及ぶや、少將は南軍に於て能く一個師團以上の新式軍隊を動かし得る者、黎一人のみ、餘子碌々語るに足らず、若し夫れ張彪に至つては强弓を拉き重石を扛ぐるの適材のみ、師團命令すら書き得ざる者なりと言へり。以て黎の軍事的知識の分量を推見すべきなり。彼は能く日本語の書籍を讀み、英語は讀むことゝ語ることゝ共に堪能なり。

明治四十四年秋九月、革命黨の急先鋒、劉汝夔、楊宏勝、彭澤藩の三人、漢口露國居留地寶善里に爆彈製造中官憲に捕へられて、革命の犧牲となり、累は牽ゐて武昌の軍隊に及び、事態決裂して滅滿興漢軍の蹶起となるや、黎は擁立されて其總大將となれるが、黎は從前より革命運動に從事したる者にあらず、而して其擁立せられたるは、全く平生衆望を負へるに由るのみ。當時革命黨をして假し黎を擁立せざらしめば如何。實際黎元洪なる名は、湖北の軍民間に於て、九鼎大呂よりも重きをなしたるを以て、當時猶ほ形勢を觀望する者多く、去就何れとも定まらざりし人心を統一するに於て、此名を揚ぐることが非常に効力ありしは爭ふ

べからざるの事實なり。要するに革命軍が肝甚要めの發足點に於て、しかく易すくと破竹の勢を以て奏功したるは黎が平生の德望の力に待つ所極めて多大ならずんばあらず。假し黎の代りに、張彪を推し立てたらんには、事は直ちに失敗に歸したらんこと疑を容れずして、革命事業の成就は更らに數年、十數年の後を待たざるべからざりしやも知るべからず。因に張彪は武昌の暴動突發するや、倉皇として逃れて漢口に匿れ、一たび手兵を糾合して江岸停車場に據つて防戰したるが敗衂し、其後亡命して日本に在り、袁世凱に泣附いて、僅かに中將格の俸給を受け、辛くも一家三十餘口を支へゐたるが、今は杳として其消息をだに知らず。

南京に共和民國の臨時政府設立せらるゝや、黎は推されて副總統となり、武昌都督及び總參謀の重任を兼ね、仍ほ北伐軍大元帥の印綬を帶びたり。嗣後南北の媾和成立して、袁世凱が大總統となりし事實が、果して支那の爲めに幸福なりしか、不幸なりしか、そは別問題として暫くこゝに論ぜず、兎角、此媾和の成立に就いて、黎の斡旋の力與つて少からざりしは事實なり。而して黎は袁の術中に陷りて利用せられたるの嫌いなきにあらざれども、其の此擧に出でたるは、中心より國家民人の爲めに必要なりと確信したるが故なれば其衷情たる寧ろ諒とせざるべからず。當時袁世凱は新たに作成せらるべき政府の主權を掌握せんと欲して、盛んに智術を弄し、先づ己の統率せる南方征討軍の動作を手心して、恩を南方に賣り、時分を見計らひて南北の妥協を企て、北伐軍の氣鋒を緩和するの方法として、日露兩國の侵略的野心を大袈裟に吹聽し、時の偏將段琪瑞を黎の陣中に派して鬩墻の得計ならざる所以を說いて黎の心を動かしたるを以て、黎は終に媾和を贊襄すべき旨を約し、即日北伐中止の諭告を全軍に配布したり。蓋し袁は敵國外患を聲言して自己の野心を遂げ、黎は敵國外患を憂惧して國內の爭鬪を停めたるなり。心事の美醜固より同日にして論ずべきにあらず。

李烈鈞の徒第二次革命旗を彭蠡湖畔の風に飜へして、天下再び亂るゝの時に當り、黎は武昌に堅據して

動かざりしより、薄志弱行を以て彼を責むる者少からず。然れども過激と突飛とは彼れの深く戒むる所なり。彼れの動かざりしは形勢の不利なるが故に動かざりしにあらず。徒らに禍亂を醸成して蒼生を塗炭に苦むるを欲せざりしが故に動かざりしのみ。彼れが溫健以て國事に處し、妄動以て大局を誤るを欲せざるは、かの張振武事件に對する彼れの處置に觀るも首肯せらるべし。其後黎は袁の强徵により、武昌を去つて北京に赴けり。抑も湖北の軍隊は彼れの赤子にして武漢の山河は彼れの金城鐵壁なり、據つて以て天下に號令するに足る。而して當時の北京は彼に取りて極めて危險なる虎穴なり。然るに其の此れを棄て丶彼れに就けるは、唯時局を錯亂の中より救ふには、是非ともシカせざるべからずとの誠心より出でたるのみ。而して一方袁よりして之を看るに、黎の湘北に據るを以て猛虎の嵎を負ふの觀をなせるが故に、その彼れを北京に羅致したるは、固より彼れの羽翼を絕ち、彼れの爪牙を奪ひて自己の後患を除き、且つ彼れの人望を利用して自己の行動に對する責任を分擔せしめんとしたるが爲めに外ならずして、場合によりては一刀兩斷の擧に出づるの決心なりしこと歷々として睹るべき者あり。故に黎の足一步北京に入るや、直ちに進退の自由を奪はれて體裁よき囚徒となり、湖中の離嶋瀛臺は彼れを幽閉したる銕獄に等しく、出入共に嚴重なる監視あり、一たび擧措を誤らば、身首忽ち所を異にすべく、危きこと薄氷を履むが如し。帝制問題の發生するや、黎は中心より之を不可とし、且つ袁の心事を看破して慊焉たる者あり、而して袁の擅肆益々甚しきを以て、久しく北京に留まるを欲せず、袁に請ふて故山に歸棲せんことを以てして聽かれず、怏々として樂まず、羞を包み恥を忍んで靜かに天命を待てり。袁の愈々帝位に即かんとするや、袁は黎を封じて武義親王と爲し、年俸二萬元を賜ふ旨の申令を發したれども、帝制は黎の心斥する所なれば、固より肯受すべきにあらず。英のグラッドストーンは授爵の沙汰を固辭して、予はミストル、グラッドストーンにて足れりといへるが、黎は共和民國

の黎元洪君の稱呼を以て無上の光榮とせり。雲貴獨立を宣して討袁の氣勢國内に猖獗するや、南方の諸領袖は頻りに望を黎に屬し、獨立諸省の統一政府廣東に成立するに及んで、黎を推擧して大總統とする旨を宣言したり。此次袁の後を承けて大總統となるや一人の異議を挾む者なく、殆んど全國の輿望に副へるの觀あり。

第一次革命事變の際、孫逸仙が大總統として臨時政府に莅みたる當時、僕、事を帶びて、武昌、南京の間を奔走しゐたるが、會ま、頭山、犬養、寺尾の三老、游んで南京に滯る。僕、窃かに計策する所あり、三老に請ふに、武昌の重鎭黎元洪と一たび把晤せんことを以てして、幸に其快諾する所となり、即ち僕の嚮導にて、長江を溯り、黎を其陣中に訪へり。主客坐定まるや、木堂起つて、革命事業に對する黎の心勞を多とし、併せて將來を依囑する所あり、次いで寺尾博士のテーブル、スピーチあり。黎は極めて簡明にして、莊重なる答辭を述べたるの外、終始默笑を以て卓上の辭令に易へゐたるが、頭山翁が此日も例に仍て無言の英雄振りを發揮しゐたると絶好のコントラストなりき。辭し去つて後、木堂僕に向ひ、黎を評して「ドンヨリした好い人物だ」といへり。木堂の此一語善く黎の人物の全豹を言ひ盡したり。

「ドンヨリ」といふは、一見不得要領なるが如しとの義、悠揚迫らず大人の風有りとの義、若くは古川市兵衛の所謂運、鈍、根の義にも通ずべく、我頭山翁なども正しく此タイプに入るべき人物なるが、但だ翁は黎の如く腹のドン底まで「ドンヨリした」人物にあらず。表皮一枚の下、渾べて是れ快刀利刄なり。而して其快刀利刄は動もすれば表皮を突破して閃々たる鋒芒を發露し、往々にして驚天動地の大活劇を演ず。黎に至つては則ち然らず、同じく「ドンヨリした」人物なれども、彼れは木堂の所謂「好い人物」なり、惡く言へば御人好しなり。然り彼れは運、鈍、根の御人好しなるが故に支那の如き國柄の社會に處して成功することを得るなり。彼れが常に隆々たる人望を負へるのみならず、幾度か敵人險危の地に處して其身命を完うするを

得たるも、全く御人好しなるが爲めのみ。若し彼れにして御人好しならざらしならんには、彼れはトウに張彪の奸計に斃れたる筈なり。然らずんば則ち袁の毒牙に斃れたる筈なり。而かも其今日まで大變なきを得たるは黎の黎たる所以なりとす。僕、嘗て武昌に在り、日本武官の班末に列して教鞭を張之洞の陸軍學堂に執る。僕等、時に事を以て黎に謀ることあれば、黎は自ら多く言はず、唯だ是、是（ハイ〳〵左様ですか）の一語を以て人の意見を聽き了りて後、可以（宜しい）とか不可以（いけない）とか極めて簡單なる採決を下だすを常とせり。要領を得たる男ならずや。

實に黎は健鬪性に乏しく、冒險性に乏しく、反撥性に乏しく、何事にも至つて感じの鈍き、暢氣な男なり。然れどもグータラベイにはあらず。彼れは困厄に處して狼狽せず、危地に入つて大膽なること驚くべき者有り。漢陽の守失つて全軍潰亂し、湖南の驍將王隆中先づ武昌を去り、黄興次いで江南に遁れ、將士惶惑し、風聲鶴唳、人心兢々たるの時、黎獨り武昌に踏留り、徐ろに敗殘の兵を糾合し、尙ほ一決戰を思ふて意氣軒昂たり。會ま伊東知也等革軍に武器を供給するの計畫を齎らして、來つて漢口に在り、僕、一日伊東を伴うて江を渡り、黎を洪山寶通寺の幕中に訪ふ。黎談笑平日の如く、伊東が小銃は要らずやと問へるに對し、願くは我に授くるに機關銃數門を以てせよ、一矢以て北人に報ゐるを得ば死も亦た可なりと豪語し、目に餘る敵の軍勢を事ともせざる健氣さは誠に敬服の外なかりき。彼れの武昌を去つて北京に赴くや、人皆其身に萬一の變あらんことを危みたるが、彼れは僅かに三十餘名の部下を率ゐて袁が雲霞の如き堅甲利兵の間に入れり。此時彼れは殆んど捨身の處作に出でたり、大膽にあらずと謂ふべけんや。然れども彼れの膽力は積極的に發動すること少し。彼れは生來飽くまで善良なるが故に、是非曲直の判斷明かにして、惡事を憎むこと甚しく、自ら惡事を爲さゞらんが爲めには如何なる犧牲をも忍ぶの勇氣はあれども惡事を爲す者を打破するの勇氣に乏し。公憤の爲めに自殺するの勇氣はあれども、

天下の爲めに起つて謀叛を企つるの大膽は無し。武昌の革命も、之が導火線に火を點じたるは、孫武、劉宗文、蔣翊武、楊玉如の輩にして、黎は寢衣のまゝ逃れんとして遂に捕へられ、そのまゝ擁立されたるなり。

黎嘗て日本留學生の監督として東京に在り、同國人にして巧戲を市中に賣る者あり、觀客の歡心を博せんが爲めに、自ら卑んで、予は日本の馬前に敗れたるチヤン〱坊主なりと高呼す。黎偶ま群衆の中に在り、之を聽いて、鼠輩恥を知らず、祖國同胞を辱むる者なりとて、怒心頭に發し、血湧き肉躍り、起つて鐵拳を振つて之を亂打して警官の調停を煩はしたること有り。又た僕、往年雜誌「支那及日本」を發刊せんとして、題號の揮毫を黎に依賴したるに、彼れは「中華及日本」ならば肯て囑に應ずべきも「支那及日本」にては斷じて筆を執り難しとて拒絕されたることあり。蓋し支那なる稱呼は往昔北胡强盛の時代に泰西人が附與したる者に係り、支那人は一般に此名稱を以て輕侮の意義を含むものと思惟すればなり。此の如く黎が愛國の至情に富めるは事實なりと雖も、而かも彼れをして、起つて國家の危急に赴いて、能く時機を失せざらしめんとならば、必ずや人の之を强要する者なかるべからず。彼れは自ら進んで撥亂反正の大事業を決行するが如き積極的人物にあらず。要するに彼れは藉つて以て木偶の用に供するには恰好の君子人なり。然れども君子は欺くべし、木偶は惡用すべし。而して今の時に方り黎を善用し得る者は、段にあらず、岑にあらず、孫、黄にあらず、馮、張にあらず、獨り我大隈伯あるのみ。何となれば日本は東洋平和の爲め、支那を共欲するがまゝに料理するの責任を有し且つ實力を有すればなり。吾人は此意義に於て黎が袁よりも夐かに支那今日の急需に適應したる人物なるを認めずんばあらず。

亡國の忠臣

支那大陸の芝居は今や正に佳境に入れり。僕の友人、馬賊の頭領天鬼は義人川島速浪君等と共に壯圖を懷いて、滿蒙の天を指して去れり。宗社黨が淸朝復興の大

旆を翻へして蹶起するの機運は漸く目睫の際に迫れり。彼等が宣統幼帝若くは肅親王を擁して旋乾轉坤の大活劇を演出すべき柏子木は已に旅順、青島の幕内にて打たれたり。袁世凱歿後の共和民國は事勢の促す所、或は宗社黨と土地を爭ひ、勢力を競はざるべからず。而して清朝復興の聲勢一たび張らば、民國に向つて干戈を倒まにして起つの虞れ有る者、僅かに張勳、馮國璋、張作霖の輩のみにあらず。戎馬一たび滿蒙の野に起らば風雲忽ち四百餘州の全土に動搖すべく、宗社黨の意氣今正に斗牛を衝くの概あり。彼等の計圖、滿蒙を席卷して更らに北支一帶を掩有し、民國の政府を南京方面に放逐せずんば止まざる者の如く、而して此計圖の必ずしも不成功に終らざるべきは、少しく日支兩國交涉の機密に通ずる者の信じて疑はざる所なり。宗社黨の前途多望なりと謂ふべし。吾人是に於てか亡國の忠臣升允字は吉甫其人の勞功を偉なりとせずんばあらず。

僕、先年西安に滯ること兩星霜。時に升允此地に巡撫たりしを以て、屢ば把晤の機會を得たるが、素朴にして邊幅を飾らず一見野人の如く、事物にコセ付かざる輪廓の至つて大なる人物なり。刀筆の材に非ずして統率の器なり。嘗て露西亞に遊びたることあれども、西洋の氣習を好まず。海外遊歷當時の感想を問へば莞爾として西洋は立派で大きな建物が有るとのみ答ふ。稚氣愛すべき者あり。元と蒙古人にて漢軍八旗に屬す、その氣風は明かに北方支那人を代表し居りて、輕佻なるハイカラを嫌ふこと蛇蝎の如し。嘗て管下の學校に諭告して濫らに飜譯語、新熟語等を使用することを嚴禁したることあり。又た學政使沈衞が浙江人にて諸事新奇を好みたるより、之と意見合はずして隙を生じたることあり。北清事變の際、兩宮の車駕を西安に迎えて頗る忠勵を拔んでたるを以て、西大后の寵遇殊に厚く、後升任して陝甘總督となり蘭州に駐節しゐたる際、かの團匪の巨魁端郡王、董福祥等と結托して、盛んに回々教徒の間に勢力を扶植したり。立憲政治問題發生して、全國の民論沸騰するや、彼れ頑として君主

獨裁政治を主張したる爲め、大に民間志士の怨慊を買ひたるが、當時朝廷は民心慰撫に努力しゐたるを以て、止むなく彼れを革職して野に下だせり。元來北支那人は一般に古雅を愛するの念强く、新弊を惡むの情熾なるが、升允の立憲政治に反對したるは、適ま以て南北思想の乖離點を表示して明かならしめたり。第一次革命事變勃發して、共和民國成を告げたるの際、彼れは猛然起つて恢復の師を興し、陝、甘の地に轉戰したるが、事敗れて日本に亡命し、以て今日に及べり。亡命中は困苦缺乏頻りに到り、嚢中屢ば空しく、一時支那料理店を營んで口腹の計に充てんとしたることさへ有り。而かも造次顚沛にも忠義の志を失はず、日夜復興の大策に苦心したり。彼の如きは洵に人臣の龜鑑たるを恥ぢずと謂ふべし。

西安の會晤、僕彼れに贈るに來國光の一刀を以てせり。彼れ今往いて滿洲の野に虎嘯す。知らず此物今猶ほ彼れの篋底に潛んで、紛綸を裁斷するの日を待てる否や。

京都奈良印象記

田村俊子

京都

葵祭り

加茂の葵祭りを見た前夜は、丁度宇治で夜あかしをしました。

大阪の秋琴亭を夜の十一時半に切り上げ、荷物全部を纒めて其の場から宇治に引き上げたのです。中書島から浮舟園まで、朧月に薄明るい土堤を自動車で走つ

て其所に着いたのはもう深更の一時を過ぎた頃でした。月に透かすと浮島の寳塔が白く夢のやうに浮んで、宇治川の水が昏々と暗く流れてるのが知られます。其の川に臨んだ、蔦の絡んだ丸窓によつて、名に高い浮舟の女將の人なつかしい待遇し振りに浮か／＼と一夜を語りつゞけてゐると、やがて興聖寺の鐘の音が川の周邊に惨泌み、餘韻が水を啣んで遠く空に消えていつた頃から、ほの／＼と山の端が明るんで、一と筋の路が白く宇治の曉の色を帶び初めました。それから二時間ほどを熟睡んで、京の葵祭りを見るべく急いで宇治川を船で中書島まで下つたのです。岸に立つて私たちを見送つた浮舟の人たちの肩にかけた朱色の日傘、濃い淺黄の日傘。其の背景の碧綠の山々。對岸の興聖寺の門の朱。急流の水の面は日光にうね／＼と光り、船に覆ひをした葭簀が其の反映の陰翳を私たちの髮や肩に漂はしてゐます。濃い陰影、明るい水、綠の色――其れ等が悠く私たちの視界の限界の内に交錯し、流れ、纏絡りしてゐる内に船は、靜に中書島に着きました。

停車場へ行く途中、暗く閉ざされたやうな遊女町の一廓を過ぎて樓名を墨で書いた門行燈を眺め、溜色に塗つた千本格子の内に肌ぬぎになつて化粧をしてゐた大きな半裸身の女などを覗いて行つた。

時間が遲れて下加茂の祭りに間に合はず、停車場から車を連ねて上加茂の祭りだけを見物しやうと其の方に向ひました。そうして加茂の堤へ掛る手前の、ある道の一角で行列を一瞥しました。舞人の素襖色の袍が日に乾いた色を展べ、勅使の黑い袍が日に濡れた色を見せてゐます。白粉を塗り鬘をつけた童のいたいけな藁靴、勅使の風流傘の菊の花、內藏使の風流傘の藤の花などを車上からとり／＼に美しく眺めてから、車は行列の途とは道を代へて、遙に加茂の堤を隔てた一道の畦を走りました。遠く加茂の堤に抜けるやうに生えた松の形がまるで大和繪のやうな趣きを持つてゐます。紺青に晴れた空の色を疎らに區劃つた綠青の松の色の柔らかさ。其の松樹の間を、今一瞥した行列の行くさまなどを想像すると、まことに其の自然と、平

安京の昔を忍ぶ其の麗雅な風俗との配合の餘りの美しさに、私の感情は初めて古るめかしい藝術の匂ひの奥に泌み憧れて行くやうな氣がして、胸が躍りました。

車は加茂の堤に出てからみその橋へかゝりました。其の邊に女學生の一群がゐて、樹の蔭に行列の來るのを待つてゐました。京都の女學生は汚いと云ふ事をよく聞いてゐましたが、誠にこゝで見た海老茶袴の女學生は少しの脂粉の氣もなく、直に優美濃艶と云ふ感じを聯想させる京の女の扮装の内の一とつにして考へると、此近代の女學生風は殺風景に厭ふものに思はれます。京の女生徒に限つて昔の上﨟を思はせるやうな緋の袴にすべからしで、濃い化粧でもさして置きたい樣な氣がします。殊に京都の女學生は校風で白粉を厭ひ奢侈を禁じてあるやうに聞きましたが、全く、東京の女學生の方が遥に奢侈でそうして扮装にも洋趣味の上から心を凝らしてるやうに見えます。其れだけに東京の女學生の方が繪になる趣きが多く、美しい風姿を其の中から選び出すことも出來ると思ひます。京都の女學生の風は海老茶の袴などを穿いてゐて、土臭くまるで田舎染みてゐるやうでした。名物の舞妓と同じやうに、京の女學生風俗の上にも、優美の聯想から來る京都風の美しい幻影を持つてゐた私は、此所に集つてゐた女學生の一團を見て失望しました。海老茶の色が全く加茂の堤の自然の色彩と調和しない事夥しくて反感を持ちました。みその橋を渡つて其所で下車し、加茂の祉の境内に入つて其邊の風趣を味ひましたが、此所にも變な田舎ハイカラの風俗の女や男が澤山に群れてゐて、例の海老茶の袴を穿いた女學生も三々伍々そこいらを歩いてゐました。

みその橋の外れで一旦休んでから、やがて神前に着した舞人の舞が初まる頃に再び境内に入つて行きました。御手洗川の縁に見物の群集が押寄せてゐました。御手洗川の水は清く、緑樹が其れに映つて蔭が深く、舞殿の勾欄を途切れ〳〵に若楓の葉の繁みを透して眺める畫趣も、この見物人の爲に興を殺がれますが、ずつと御手洗川の末の方に行くと、役官たちの乘つた馬

が木の間〳〵に繫がれてゐたり、淺い縹色の袍を着た雜色が彼方此方の誰れも見えない蔭で、木の根に腰をかけて居眠りをしてゐたり、童が髮を垂らした鬘を着けた儘で其雜色たちの間を何か京言葉で饒舌りながら往來したりしてゐて、其の邊りを逍遙してゐると、又自づと現代から離れた古るい情緒がにじんで來ます。私はそんな間を洋傘を持つて縫つて歩きました。勅使の告祭文が濟んで奏樂が初まり、六人の舞人が舞殿に上つた頃に、再び御手洗川の上の方に行つて水際に繫つてゐる楓の隙から其の舞を見ました。綾の側面に古雅を帶びた舞人の赭黑い顏や、其の古典的な舞振りを遠く疲れた眼に眺めて、舞人が上の素襖色の袍を脫ぎ、下の縹色の內衣になつて再び舞殿に上つた時に私たちは其所を去りました。若い年齢の內藏使が神前からはずつと離れた距離にぢつと腰をかけて、赤い袍の脊に日光をいつぱいに浴びてゐた背面の姿を目に殘しながら。

　物見車の跡のこぼれなどを忍ぶには、餘りに周圍が喧しく、多くの群集で騷然としてはゐましたが、其れでも役官たちの染裝束の模樣の優しさなどに、古るい時代の懷かしい面影を一層夢幻的に描いて、何となく陰滅した感情に落ちながら、又車上の人になつて加茂の堤を都の中心へと引つ返しました。さうして砂に塗れた汗を流したり食事を調へたりする爲に木屋町の西村家に通りすがりの足を留めたのです。

一力の夜

　西村家で夜に入るのを待つてから万亭へ出かけました。途中先斗町を通つて兩側から燃るやうな華やかな灯の間を摺りぬけて行きましたが、其の小路で白粉と油の香とが一所になつた一種の化粧の匂いが鼻をつきました。私はこゝを通りながら京の色町の灯は不思議に紅の色に濕ほつてゐると思ひました。紅と云ふよりは臙脂の色です。これは何から來る視感なのか分りません。京都の空氣の故爲ではないかとも考へました。四邊山に圍まれてゐる其の濕潤な水分を含んだ空氣に、灯がやんわりと反映して其の光りが濡れる故爲で

はないかとも思ひました。先斗町の灯の色はかうして一層幽に媚めいて、しつとりと沈んだ匂やかな情緒を感じさせました。然し祇園へ出ると、其の邊は又陰順にさも京の賣女が露な戀を封じてゐるやうに街が薄暗く、二重三重に奥まつた暗い家ばかり並んで、棟の高い其の樓屋に夜氣がひつそりと冷めたく靜に身に應えました。さうしてこの色町には戀に笑つたり泣いたりする女の情の興奮はまるで絕對に失はれてるやうな冷やかな淋しさを感じました。

同じ薄暗い大阪の北の新地の印象には、其の薄暗さの中の秘密の情感が人を唆つて戀の放縱の中に爛れたやうな氣分が染みついてゐたと思ひました。さうして、これはやがて万亭で逢つた京の藝妓たちの上にも感じられたのです。京の藝妓はみんなすつきりと優しく靜です。大阪の女のやうに戀情で熟れてるやうな唇を持つてゐません。薄手な雪白な皮膚、細い煙のやうな眉、愛らしい口許、上品な肩付――舞妓は大阪のが牡丹ならば京都のはあやめの樣な感じがします。藝妓は白藤とでも云ひたいやうです。其の扮裝と同じやうに京都の女は擧動でも言葉でも銀箔のやうな感じに脆く、然し靜に自分の姿を保つてゐると思ひました。それは決して自分から戀に溺れて行く姿ではありません。さうして大阪の女のやうに戀に無智ではなく、京都の女は戀そのものを始終考へるやうに見えます。無論京都の女には肉の感じが伴はない。――大阪の濃艶に比較して京都の女はたしかに端麗です。

暗く燭を點して座敷の中で昔の儘の氣分を味ふと云ふので名高い万亭にも、この頃の設置だとかで座敷には電氣が點いてゐました。比較的に、今までの情調を壞さない爲に薄暗くさせてあると云ふ迄です。幾時代の空氣の徹み込んだ煤けた眞つ黑な天井に黑塗りの緣を取つた蓮花形の絹張りの笠が電氣の球を包んで、朧な電燈の光りが幻のやうに座敷に擴がつてゐます。仲居が少し座を隔てると、緋の紋縮緬の前垂が微な色に浮き、眉毛を拂つた白粉の其の顏が仄かになるほどな微弱な光りではあるけれ共、天井を仰ぐと何となく文

明の灯が顔を包んでお芝居をしてるやうで擽つたい心持がします。こゝで見る仲居の様子はまことに情趣があります。容貌が好ければいいほど仲居の姿は一層美しさを増して見えます。襟付の縞の着物の裾を曳いて赤い前垂れを側に挟んだ姿は、其れがすらりとした姿ほど一層見好げに思はれます。お筆さんと云ふのがきりゝとした美い顔をしてゐました。仲居が小供を呼ぶと、恐しく語尾を長く曳いた返事をします。

だん子と云ふ可愛らしい剝き玉子のやうな舞妓や、富ぎく、小文、桃龍などゝ云ふ美しい舞妓もゐました。かず榮や小鶴などゝトランプをして遊んでる内に此家でも夜が明けてきました。雑居寐の部屋へ伴れられて行くと、塗り骨の障子に白んだ空が映つたのを舞妓が見て、「もう夜が明けたのやわ。」と云ひながら、皆がめいめいに緋の長襦袢一とつとなつて枕などを拵へたりしてゐます。私たちはその舞妓を脊負つて座敷の中で鬼事をして駈け廻つたりしました。私の床に入つたかず榮が、島田の髷をほつらしながら腹這ひになつて煙草の煙りを吐き吐き、床の上にトランプを並べて待ち待ちの辻占をかけてゐる其の横顔などを眺めながら、私も旅寐の一夜に紅い夢を樂しむやうな醉ひ心地になつて、燃えるやうな友禪の長襦袢の袖のかげに慊な眠りを結びました。

京都の諸寺院

京都の諸寺院を殘る隈なく見るつもりで考へてゐた私は、思ひかけない遊興の引つかゝりに一日の暇を作ることも出來ずに一力で夜を明かした翌日は再び宇治へ戻りました。そうして其所では新緑の匂ひの中に僅な晝の眠りを取つたばかりで、夜は又京都から來た人たちと舞妓の二人とざんざめいて、曉方の四時過ぎる頃までも宇治川に船を浮べて、遊んでしまひました。暗い空、暗い水、暗い山、――夜露を外ける爲に浮舟園で貸してくれた、荒い紺絣の綿の入つた半纏を羽織つた舞妓の、船の舳に二人並んでゐる姿が、まるで幻のやうに浮んで見え、前挿しの金簪のぴらぴらばかりが仄々と光つて見えるのなど、まるで夢の世界に遊ん

でゐたやうな朦朧とした氣分を殘して、殆んど二た時の睡眠時間も保たずに、私は頻りに急き立てられるやうな心地で朝早く一人で京都へ向つたのです。

そうして、のろい車に揺られながら、東山一帶に所在する寺々をほんの二三見物しました。清水寺、高臺寺、知恩院、南禪寺、銀閣寺、永觀堂、八坂神社、吉田神社などだつたと思ひます。丸山公園の新綠が爽やかで、池には紫の杜若が咲いてゐました。朝からじつと雲の垂れてゐた空はやがて雨になり、新綠がこまやかに細い雨の縞の中に織り込まれて、巨刹の高い石段を疲れた足で上つて行く私の袖や髮を濡らします。清水寺から高臺寺へ廻つた頃は雨が一旦降り止み、知恩院を出る頃には傘に雨の雫が垂れるほどはげしい降りになつてゐました。

私はこの寺々を廻りながら、京都の自然の景が一とつ一つ悉く複雜な變化を持つて、其の寺院の周圍の趣致を作つてゐるのに驚きました。清水寺の華麗、知恩院の靜寂、そうして南禪寺の森嚴、黑谷の淸楚、眞如堂の優婉、永觀堂の瀟洒――ある所は杉が鬱蒼と暗く、ある所は松林の中に其の四五百年前の建築の樓門が隱見してゐたり、ある所は若楓が優しく庭園のやうな趣きに其の殿堂を包んでゐたり、又は竹林が道の兩側に迫つてゐたりして、一個所として似寄つた自然の景趣を選ぶとも出來ないやうに變化の妙を極めてゐます。そうして私の見ただけの內では南禪寺の景趣を最も好みます。

新綠を最も美しく眺めたのは淸水寺の舞臺から丸山をのぞんだ時でした。若葉の匂ひが咽せるやうに私の嗅覺を刺戟して、恍惚と私は其の新綠の色の鮮かなのを見詰しました。淺綠、濃綠の間に幾百種類とも分らないやうな綠の色を鏤めて、まるで天鵞絨の織り模樣のやうに柔らかく、そうして綠の色が一々異つた光りを帶びて輝いてゐるのです。桃山時代の建築だと云ふ西門も、遠く聳えた新綠の頂きを背景にして、折からの小さな雨が其の甍にはら／＼とかゝりました。こゝで私の眼に一番趣味的に感じた事は、高い石段の下か

ら、それ〴〵の異つた様式を持つた建築の線を空に描いた殿堂の屋根や、半ば地に隠れた鐘樓を仰いだり、又は寺門樓門と樹木の配置を石段の上から見おろした時の、これ等の寺院に見る特殊な風景美です。そうして私は清水寺でも知恩院でも、この石段を一番美しく感じました。私のやうに東京に生れて東京にばかり埋まつてゐるものは、せい〴〵増上寺のぎざ〴〵とした非美術的な石段を見てゐる位のことで、稀には池上の本門寺の石段を上つて見るだけですが、清水寺や知恩院の整然とした、低く、又は聳えるやうに高い、そうしてあらゆる風致の美を中心にして、白く悠やかに傾斜してゐるこの石段を私は何よりも美しいと思ひました。知恩院では傘を傾げながら高い足駄で其の石段を幾つか上つたり下つたりしました。そうして其の時私を案内して呉れた吉歌の女中が毎日信心參りをすると云ふ「濡がみ大明神」と云ふ一番頂上の稲荷明神まで參詣がてら行つて見ました。

つまらなく思つたのは銀閣寺でした。(金閣寺は見ませんでした。)所謂足利義政の山荘だつた此銀閣寺の庭は、錦鏡池を中央にして、こま〴〵とした樹木に配置を氣取り、庭園らしい風情に富んでゐるだけに私には却つておもしろくありませんでした。金閣寺の方がもつと庭に勝れた景趣があるやうに聞いてゐましたが、然し庭園としての趣きだけならば銀閣と大した差違もないのではないかと思ひました。銀閣の二階に運慶の作だと云ふ岩坐觀音の像が安置してありましたが、これも拙らないものだと思ひました。(八坂神社の社前の狗犬も運慶の作と云ふことで國寶になつてゐるのだそうですが、これも大して感心はしませんでした。)東求堂の一室に陳列してあつた相阿彌の屛風を見て、其の圖案的な意匠の勝れてゐるのに感心しました。桔梗の花や露草のやうな畫であつたと覺えます。色彩の剝げた中に桔梗の花の白緑らしい繪の具の色が鮮かに殘つてゐたのが目に沁みてゐます。

高臺寺では高臺寺蒔繪と稱する蒔繪が、如何にも意氣に優美なものだと思ひました。高臺院の後に建築さ

れたとか云ふ其の建物は大抵燒けて、表門と開山堂と御靈屋だけが當時の建築の儘に殘つてゐるのだと云ふ事です。高臺寺では今盛に普請をしてゐました。開山堂へ入つて見ると其の裝飾の立派なのに驚きます。御靈屋の方には狩野元信の筆になつたとか云ふ北の政所の乘り物の天井の美麗な極彩色畫が、そつくり其の天井に用ひてありました。桃山時代の豪華な樣がこの一端にも窺はれます。狩野永德の筆だと云ふ龍の畫は開山堂の方の天井です。高臺寺蒔繪は御靈屋の内の厨子の扉や其の臺などに一帶に施されてゐるので、この蒔繪はあつさりと線が細く優美な好尙だと思ひました。小堀遠州侯好みの庭と云ふ一札の立つてる庭の池に、雨に濡れた杜若が古い昔を忍ぶやうに、褪せた紫の色を見せて咲いてゐました。時雨亭、傘亭は見る事が出來ませんでした。（次號完結）

第二の妻を娶つてから

松崎天民

月日の經つのは、ほんとに早いもので、それから一年は、夢の如くに過ぎた。――

○

俺も來年は、四十歳に手のとゞく中年に爲つたが、顧みれば三十年の半生は、何の爲す事もなくて、徒らに前額が脱け上つたばかり、國家に對しても、何だか申譯の無い樣な氣持がする。百萬の富を蓄へたと云ふでも無く、不朽に傳へ得る傑作を殘したと云ふでも無く、空しく老行く月日に對して、何だか恥かしい樣な氣持がせぬでも無い。

それでも長男の哲郎は、十五歳で中學の二年生となり、次男の達郎は十一歳で、尋常四年生になり、三男の俊郎は七歳で、今年から小學校へ通學する樣になつた。俺は名も無い新聞記者として、無學なる一種の賣文者として、碌々たる半生を過ごしたけれど、三人の子供達の上には、上帝の恩寵も豊であらう。今では第二の母たる人を得て、兎にも角にも希望ある月日の下に勇躍して居る。幼うして生みの母を失つたと云ふ、悲しい運命には遭遇しても、苦み多かつた俺の幼年時代に比較べると、三人の子供は決して不幸で無い。

平凡人の四十年、俺の生涯に若し誇り得るものがあるなら、それは三人の子を人並に敎養して居るだけの事である。全く今の俺は、頭に兩手をあてゝ考へて見ても、四十年の歳月の間に、何一つ自慢して宜いやうな仕事は爲なかつた。二十三歳の夏に、大阪の新聞社に入つてからが、謂ば俺の本舞臺であつたが、それとても看客を唸らせる樣な、正念場の科白を演ずるとは出來なかつた。殊に幼い時の俺には、更に好い運の玉が轉んで來なくて、たゞ飯を食ふためにのみ、いろんな苦勞の蹠を嘗めさせられて來た。俺は何時でも、三人の子供の顏を見ては、俺の幼い時分の事を思ひ起して、「俺は不幸であつたが、俺の子供は幸福だ」と思ふ。何しろ俺は十一歳の春から丁稚奉公をして、父母の深い慈愛と云ふものは知らずに、不幸不運な間に人と爲つたのだもの、子供達の幼い時とは、其の生立ちからして異つて居た。

俺は何もこゝで、俺の一代記をさらけ出す譯ではないが、思へば俺の樣な平凡人の半生にも、それ相應の波瀾はあつた。俺が生れて六七歳までは、俺の家もまだ人の手には渡らず、村でも「金川屋の坊ちやん」で育てられるだけの幸福が、俺の周圍に輝いて居た。俺は今でもチャンと覺えて居るが、俺が六歳の明治十六年までは、俺に附き切りの女中が二人も居て、毎日その二人の女中に背負はれては、よく駄々を言つたものである。それから妹が生れた七歳の冬になると、俺の家にも俄に心配事が出來たと見え、祖父や父が裏の倉

庫に入つて、七八人の下男を差し圖しては、米や麥や大豆などを、他所の倉に運んだ樣であつた。俺は其の時、子供心にも、何だか心細い悲しい氣持がしたことを、今でも明瞭と思ひ起すことが出來るが、それから後の一家の轉變は、子供心の俺にも、一層痛ましい悲しい思ひ出を植ゑ付けた。村でも男勝りの賢夫人と云はれて居た俺の母が、俺の家の祖先から傳はつて居た日蓮宗の信仰を破つて、其の頃、海を渡つて來たばかりの基督教を、村人に卒先して信仰し初めた事や。祖先の位牌を川に投げて、「恐しい偶像破壞者」の樣に、村人や親族から忌み嫌はれた事や、俺は今も其の頃の事を思ひ起しては、幼かつた自分の姿を懷しむで居る。

初等五級の八歲の秋になると、俺は三里山奧の勝山と云ふ村に、私塾を開いて居る合田塾に預けられた。これが生れて父母の許を離れた最初であつたが、俺は其の時の悲しかつた事や、毎日、夕暮になると部屋の窓にもたれて、故鄕の方へ飛で行く雲を眺めては、「お母さん〳〵」と泣き叫んだことなどを、明かに覺えて居る。舊正月が明日と云ふ前夜、雪深い三里の道を生れた家に歸つて見ると、俺の家は隣の狹い借家に移つて居て、店では菓子を商つて居たことや。その菓子店が時計屋になつたり、時計屋が鹽物屋になつたりした事や、幼かつた俺の年月は、決して春の樣に長閑ではなかつた。俺の生れた家は、何時の間にか耶蘇敎の會堂になつて居て、そこには西洋人のケレーさんが來たり、上代知新、渡邊源五郎、松崎謙吉など云ふ牧師が來たり。果は何も知らぬ俺までが、母の膝に腰かけて、「父と子と聖靈の御名に依つて」バプテスマの冷たい水の滴りを浴びせられたりした。

小學校へ通ふことゝ、安息日の敎會堂で、讃美歌を唱ふことゝが、俺の樂しい月日であつたが、是れも長い間のことではなかつた。傾き盡した家運の挽回を、漁業で儲けようとの夢を見て、北海道へ旅して居た父が戻つて來てから、俺の家には一層激しい動搖が起つた。母より他には信ずる者を知らぬ幼い心で、讃美歌を唄

つて居た俺の生活が、生れて初めての大動亂に遭遇したのは、妹が四歳で俺が十歳の明治二十年の春であつた。

　其の頃の事を思ひ起すと、死なれた母も戀しいし、死なれた父さ戀しくなる。不幸不運で死だ妹も不憫だし、半生、何の爲す無き俺自身の姿さへ、哀れに悲しう眺められる。今まで何人にも話した事の無い、斯うした俺の生育ちを背景として、俺に生れた三人の子供達も、不思議な運命に支配される事になつたのである。

○

　親子四人が、生れた村を背後に見て、流人に似た旅路に出たのは、俺が十歳の春であつた。一先づ兵庫の湊川に近い花壇の一室に落着いて、父は父としての職業を求めに、母は母としての立つ瀬を得るために、神戸から大阪と、知人を頼りに彷徨ひ歩いたりした。

　もう其の頃から官廳や役所には、針金で言葉が傳はる電話と云ふものが、不完全ながら私設され初めた。

母は神戸の某幼稚園の保母となり、父は大阪で人造肥料の發明事業に關つて、夫婦別々に起臥する日が續いて居た。俺は國から從いて來た下女と、妹と三人連になつては、湊川の界隈を遊び歩いて、子供心にも都會生活の嬉しさを感じて居た。生れた村を出た悲しさよりも、父と母と妹と四人とならば、何んな貧しい生活も、苦勞ではないと思つて居たのであらう。流落の旅の空にあつては、子供心にも父母を懐しむの情が、村に居る他の子供達などよりも、一倍に强かつたのであらう。

　けれども親と子四人が、何時までも一つ家で暮される樣な、そんな仕合せは俺達の上に續かなかつた。母は妹を抱へて兵庫に勤め、父は俺を連れて大阪へ赴き、互に其の日の生計を立てるより他には、何とする事が出來ない樣であつた。父と母とが聲高く罵り合ふ日が、二三日も續いたかと思ふて居る内に、俺は父に連れられて、初めて汽車に乘つて、大阪へ運ばれた。男の子と云つても、まだ九歳や十歳の幼さでは、母に別れる

のが何んなに悲しかつたであらう。それでも母よりは俺に甘かつた父が、俺と一所に寢てくれると云ふ事を、何よりの心賴みにしながら、俺は泣く泣く大阪へ連れて行かれた。俺達二人を停車場へ送つて來た母は、涙一滴こぼさなかつたけれど、幼い妹は聲を上げて泣いた。國から來て居た下女は、「市さま、泣くんではないぞな、泣くんではないぞな」と云ひながら、自分は袂を眼にあてゝ泣いて居た。

　大阪へ行つてからの父と俺は、西區幸町の工場の樣な大きな家の二階で、國で知合の中風病みの男と三人、淋しい半年餘を過ごした。人造肥料の材料を集めるため、父は朝から晩まで他出して、「市、今、戻つたぞ」と云ふ聲を聞くのは、何時も日が暮れてからであつた。遊び盛りの子供の俺にとつては、何と云ふ淋しい、賴りない、寺の中の樣な月日であつたらう。「今に金をたんと儲けたらな、汽車の大けいのを買うて進る」などゝ云つて、俺を抱きしめて寢てくれた父の肌には、人造肥料の樣な臭氣が泌み込で居た。子供心にも物の哀れを知り初めて居た俺は、兵庫の母を思ひ起しては泣いたり、父の苦勞に瘦せた顏を見ては、人知れず涙をこぼしたりして居た。暗い冷たい臺所の地べたの上へ、粗末な白木の卓子を置いて、父と俺とは椅子に腰を掛けては、冷たい飯ばかりを食べた。父と一所に漬物屋へ行つて、蕪の鹽漬を買つて來たり、茄子の漬物を買つたりして、三度〳〵の副食物にして居た。時には父の仕事に從いて出て、千日前の一膳飯屋に入り、蛸の酢の物か何かで、大きな丼に盛つた飯を食つたりした事もあつた。俺が此の年になつた今でも、おでん屋の飯を好いたり、蛸や茄子の漬物が好物なのは、其の頃の味が忘れられぬためかも知れない。

　父は俺に對して萬事が寛大で、子煩惱の方であつたが、母は離れた兵庫に住で居ても、俺に對する注意を少しも怠らなかつた。遂には母も妹も下女も、兵庫の方を引拂つて、大阪で一家同棲することになつたが、懷しい母の慈愛も、父よりは怖いと思ふ樣な事があつた。今から思ふと、其の頃の兩親は、何うして暮らし

て行かうかと云ふ問題のために、窮迫の極に落ちて居た樣であつた。何も知らぬ俺と妹とが、二厘錢や天保錢を強請むでは、町の辻に來るおでんを買に行く姿を見て、母が人知れず泣いたと云ふのも、難波で佗住居をして居る時であつた。さうした窮迫の中にあつても、基督教に對する母の信仰は、益々堅實になるばかりと見えて、俺や妹は日曜日毎に、母に連れられては島の內教會の門を出入して居た。「家のお父さんにも困つたものです」などゝ、母が能く知合の女に云つて居る言葉を聞いたのも、難波の狹い家に住で居た其の頃のことであつた。

　それから間もなく、俺は國の人の周旋に依つて、北久太郎町の楠問屋へ、丁稚奉公に遣らされた。九歲の秋に私塾へ預けられて、他人の飯の味を知つて居た俺も、丁稚奉公の茶粥の味は、生れて初めての經驗であつた。「この子、何やね、市郎て、けつたいな名やなア、市郎どん、市どん、助か吉やと好いのやけどなア、構やへんわ、市郎どんと呼びいな」。中川傳兵衞と云ふ楠問屋の若旦那から「市郎どん」と云ふ呼名を貰つた時、俺は何だかめふな氣持がした。村に居た時には、貧乏しても「若樣」とか、「市樣」とか呼ばれて居た俺も、大阪の夏を迎へた十一歲には、「市郎どん」に落ぶれたのであつた。

　水色唐縮か白木綿の兵兒帶の他には、帶らしい帶を知らなかつた俺は、小倉織の堅い角帶をしめることが、何うしても出來なかつた。バケツに一杯汲み入れた水を、臺所から店口まで持て出るのも、並大抵の骨折ではなかつた。それでも俺は、泣かねばならぬほどの悲しいこととは思はず、一滴の涙もこぼさずに冷たい茶粥の味に、我が世の流轉を不思議に思つたりした。

○

　暑い盛の一ケ月を、「市郎どん」で過した俺も、「この子、役、立たへん」の一言に依つて、長のお暇が出る事になつた。小倉の帶を兵兒帶にしめ交へて、久し振りに生れた儘の「松崎市郎」に復つた時、父と母とは難波の住宅を引拂つて、再び兵庫へ移つて居た。

父母の許へ歸り得る嬉しさと、丁稚奉公に落第した爲め、叱られはせぬかと云ふ不安と、子供心にも變な心持を抱いて、俺は兵庫の假住宅に歸つた。俺に甘かつた父は、何も云はずに直ぐ笑顏を見せたけれど、睨み付けた母の眼には怒りと憫れみの涙が浮かんで居た。「坊ちやん育ちは仕樣がない……」と云つて、母が冷淡らしい蒼い顏を見せた時、父は「そねい云ふなよ、そねい叱るなよ」と云つて、俺の頭を撫てくれたりした。俺のためには重いバケツの水よりも、小倉の角帶をしめることよりも、丁稚奉公で一番辛いと思つたのは、朝の茶粥と古澤庵とであつた。

其の頃から父母の間には、何事か最後の相談が熟して居たと見え、兵庫の假住居にも其の前の樣な、溫い風は吹いて居なかつた。何時の間にか、國から來て居た下女は歸り、同居して居た國の若い男も、それ〲下宿へ轉じて居た。「知らぬ他國ではなア、好い事も無いからなア、今度は皆で落合へ戾るのぢや」斯う云つた母の言葉を聞いた時、何も知らぬ俺は躍り上つて、「嬉しいなア、嬉しいなア、國へ戾るのか、嬉しいなア」など〱騷ぎ廻つたりした。村で親族の叔父さんと叔母さんとが、神戸から歸國するのを幸ひ、俺達も一所に歸るとの事であつた。國へ歸れば丁稚奉公をしなくても、父母の許から學校へ通うて、山遊びや川遊びも出來ると云ふ、俺にとつては、それが何よりの樂みであつた。「早う戾らう、何時ごろ國へ戾るのかな」俺は斯う云ひ續けて、生れた村へ歸るべき日を樂み待つて居た。

いよ〱其の日が來て、一行は神戸から小蒸汽船に乘り、備前岡山に向ふ事となつた。正午過ぎに榮町の船宿へ落合つて、これから船に乘らうと云ふ時になると、母は俺を二階の一室に呼び入れて、意外な事實を語り聞かせた。それは「母と妹の二人は、知邊を賴つて上州の前橋に行き、何とか糊口の途を求める事、父は大阪に滯在して居て、生計の途を探す事、お前一人は村へ歸つて、知合の林屋へ丁稚奉公し、そこから小學校にだけは通ふ事」と云ふ話であつた。その日その

時まで、父や母と一所に國へ歸れると信じ切つて俺は、母の此の言葉を聞いた時に、どんなに驚き悲しむだであらう。「一人で戻るのは、厭ぢや〳〵」とばかり、俺は聲を限りに泣き叫むだけれど、もう何ともする事は出來なかつた。「可愛相ぢやから」と云つて、俺を引止めたさうな様子をして居る父の眼にも、熱い涙が浮かんで居た。「あなたは、それぢやから困ります」と云つて、俺を叱つたり、なだめたりした母の眼にも、恩愛の涙が流れて居た。それでも俺は叔父さんや叔母さんになだめられて、泣く〳〵小蒸汽船の三等室に乗込んだが、思ふても思ふても、父や母に別れて歸るのが悲しくて、船が和田岬を背後に見る様になるまで、俺は船の中で、泣いて〳〵泣き續けた。

別れる刹那は悲しくても、月日が過ぎ行くに從つて、忘れるともなく忘れるのは、何事にも淡い子供心と云ふのであらう。村へ歸つてからの俺は、林屋と云ふ荒物や小間物や、何でも商ふ店の丁稚になつて、傍ら村の小學校へ通學した。習字よりも圖畫よりも、算術よりも地理よりも、讀本と作文が百點だと云ふので、學校の先生から激賞されたり、俺の作つた「猫の記」と云ふ作文を、他の生徒に筆記させたり、丁稚兼小學生徒の生活は、思つたよりも幸福であつた。俺は其の林屋の店に居て、砂糖を嘗めたり、煮乾魚を盗み食ひしたりしながら、初めて新聞の小説を讀み初めた。殊に大阪朝日新聞の小説では、宮崎三昧、岡野半牧、本吉欠坤、須藤南翠、西村天囚など云ふ名前を覺えた。自分では確と氣付いて居なかつたけれど、俺は其の頃から小説家か、新聞記者かになる様な傾向を有つて居たに違ひない。

群馬縣から東京方面を徘徊しても、遂に何一つ得る事なかつた母は、俺が尋常四年に進んだ時、妹を連れて歸つて來た。一家の窮迫に同情して、俺を客分の様に遇うて居た林屋では、快く俺を母の許へ戻してくれる事になつた。極めて狭い一軒の家を借りて、父と母とが麥粉の機械製造を初めた時、俺は久し振りに父母と同棲して、村の小學校に通學した。當時の尋常

四年を卒へて、高等一學年を卒へる迄が、俺にとつては最も樂しい月日であつた。けれども高等三年生になつてから、僅かに三四ヶ月を經た後には、再び他人の飯を食はねばならぬやうな、意外な運命に囚はれて居た。

平凡人の歩いて來た少年時代は、實に愚な思ひ出であるが、俺の生活の根柢に巣うて居る一脈の哀愁は、遠く少年の昔に育てられて居る。俺は今、その外廓だけなりとも追憶して、運命の不思議な默移を、三人の子供達の上にも、眺めようと思ふのである。

○

岡山新西太寺町の角に在つた、兒椎藥館と云ふ藥劑師の許へ、俺が生れて三度目の丁度奉公をしたのは、國會が初めて開けた十三歳の春であつた。村に居る母からは、月に二三通づゝの手紙が來て、何時も「御辛抱の上、立派な實業家になられ度く候」と云ふ樣な文句が、力強く認めてあつた。

度々の丁稚奉公に依つて、他人の飯の味にも、多少の美味あることを知つて居た俺は、もう昔の「市郎どん」ではなかつた。店の朋輩と喧嘩しても、容易に負けぬだけの修練と横着とは、何時の間にか俺の心の中に喰入つて居た。謂れない怒罵を浴せかけられた時、それが復仇の手段として、貴重な藥瓶を破壞したり、僞病の床に呻吟するだけの圖太さが、何時の間にか第二の性と爲つて居た。そして「藥屋なんかに奉公して居ても、落着く先は極つて居る」と云ふ樣な、投げ遣りの心が先に立つて、果は身を入れて働くことが、何だか徒勞に歸すると云ふ樣な、考へさへ抱くやうになつた。

暑い夏の夕凪（ゆふなぎ）や、冷たい冬の鹽風や、岡山の丁稚奉公も思ふたほどに容易ではなかつた。十四歳の春を迎へた頃から、主人の方でも俺の方でも、何だか氣まづくなつて來て、其の年の櫻花（さくら）の咲いた頃には、もう藥屋の丁稚ではなかつた。母に依賴して村に戻らして貰ひ、教會堂になつて居た舊宅の二階で、二年越しの疲勞を休めた時には、「生れた家」が嬉しくて、嬉し涙に

咽むだりした。それでも母は何も云はず、默つて俺の顏を凝視めたが、其の沈默の凝視の中には、腑甲斐ない子の行末を、何んなに心細く嘆かれた事であらう。「市や、若い者が遊んで居てはいけん、何でもして働かねば噓ぢや」と云ふ風に、母は俺に對して、少しも甘い顏を見せなかつた。さうした母の仕向け方が、俺の今日に何のくらゐの藥になつて居るか、そんな事は何うでも宜い。俺はたゞ母に依つて、「遊んで食ふな」と敎えられ、「働いて食へ」と訓へられた、其の事のみを覺えて居る。

岡山の藥屋から歸つた俺は、母の嚴しい鞭韃に依つて、天秤棒を擔いで歩く行商人の群に入つた。鹽鯖、鹽鰯、燐寸、煮乾魚の類を笊に入れて、それを擔いでは二里四方の農家を歩いて、三錢五錢の純益を得て歸るのが、俺の毎日の日課となつた。星を頂だいて村を立出で、月を踏で家に歸る少年の行商人が、日に利する處は五六錢の金額であつたが、それでも母は滿足さうに、「御苦勞、御苦勞」と云ふのが例であつた。丁稚奉公して居るよりも、骨身にこたへる苦しさも、母の激勵の言葉一つに力を得て、俺は勇んで働いた。母の慈愛と云ふものを、しみ〲と深く感じたのも、實は其の頃の事であつた。俺は能く行商の歸途、村外れの砂原で憩ひながら、本覺寺の晩鐘を聽いては、母を想うて落涙した。「お母さんが死だら……」そんな不吉な事を想像しては、たゞ一人、聲を上げて泣いたりした。太平無事であるべき少年の四五年間に、あはたゞしい流落離散の憂き目を知つた俺は、何時しか感傷的の涙もろい少年になつて居た。「俺は行末どんな身の上になるのか」さうした淋しい思を抱きながら、其の日〱を行商に出た俺は、生れて初めて「親孝行をして居る」と云ふ様な、美しい慰めの言葉を、心の中で繰返したりした。

けれども運命の黒い潮は、何時どんな場合に、人々の上に押寄せて來るやら、殆ど計り知られぬものがある。かりそめの腸胃の煩ひに、天長節の翌日から病の床に就いた母は、病むこと僅に一句にして、其の月の

十七日、父と俺と妹とを殘して、天國の人となつた。傾き盡した家運の挽回も待たず、可愛い俺と妹の成人も見ずして、不幸不運の中に不歸の人となつた。十五歳の俺と九歳の妹とは、母の骸に縋り付いて慟哭するより他には、何の考へも浮かばなかつた。妻を失つた初老の父と、母を失つた少年の俺とは、教會堂の陰氣な一室內で、淋しい冷たい生活を續けた。四十歳餘で死んだ母も不幸であつたが、母に先立れた父も俺も、不幸の上に變りはなかつた。其の頃まで賣食をして居た一家の生計は、母の死後より一層悲慘になつて、果は三度の御飯を二度で濟ませたり、五碗の量を三碗に減じたりして、父と俺とは「神よ御惠を垂れ給へ」と祈つて居た。

勞役の割合に、一日の純益が少い行商は、母が死でから廢業してしまひ、俺は新に小說講談類の貸本行商を初めた。日に十錢乃至二十錢の收入はあつても、これとて純益は知れたもので、汗を流した報としては、極めて僅少なものに過ぎなかつた。母の歿後、妹は同情ある知邊に養れる事となり、父は何うやら此うやら一人の糊口を過して居たが、何とかして然るべき方途を立てねばならぬのは、俺の身の上であつた。米一升の價が四錢何厘より五錢となり、五錢何厘より六錢となつて居た時代に、少年の俺が一人口は、月一圓五十錢か二圓で充分であるのに、それさへ思ふ樣には行かなかつた。

さうした時に村人の某は、俺のために月給口を周旋してくれた。「村役場の受付兼小使になりさへすれば、月に一圓五十錢は何でも無い事ぢや。」勞働に疲勞して居た俺は、父に相談する迄もなく、村役場の使丁に雇はれやうと決心するに至つた。「金川屋の坊ちやんでも、飯だけは食べずに居られぬ」、俺は斯う考へて、樂んで村役場の小使さんになつた。

○

それは俺の隣村の瀨田川村の役場で、當時の村長は俺の村から通うて居た、有給の飯田薫氏であつた。その飯田さんは、後に村井吉兵衞さんに知られて、今で

は銀行の方に勤めて居られる。同じ村役場に居た小使の一人は、其の後立身出世して、今では〇〇地方裁判所の監督判事として、相應に羽振りを利かして居る。

十五歳の暮に初つた俺の小使生活は、十七歳の春まで繼續した。俺は其の小使生活の間に、努めていろんな書物を讀だり、好きな文章や歌などを作つて見た。瀬田川村役場が面白くなくなつたので「瀬田川の岸邊に匂ふ山櫻、今日散るぞとは思はざりけり」の一首を、村長たる飯田さんの机の抽斗に入れて、無斷で役場を飛出した事もあつた。後に俺の此の歌が大評判になつて、松崎には文才があるとか、後世必ず文壇に立つべしとか、いろんな噂をしたと云ふが、俺は村役場を出るや否や、父にも無斷で備前の岡山へ急行した。

辯護士石黒涵一郎氏方を訪ねて「書生に置いて下さい」と云つて見たり、山陽新報社に野崎左文氏を訪ねて「新聞記者にして下さい」と云つて見たり、俺も大分、世間馴れて居た。遂には舊縁を頼つて兒樋藥館の厄介になつたり、京都に居る友人藤井辰治郎君を頼つて、堀又三郎氏方の食客になつたり、又は堀牛乳店の配達夫になつたり、十八歳になる迄の間には、さうした不安定の月日ばかりが續いた。京都で瀕死の脚氣を病み、一生を得て村へ歸つた後は、村役場の筆生として、日給十二錢で雇はれ、十九歳の秋まで勤續した。それから後が最初の上京となつて、勞働組合期成會の書記から、東京毎日新聞の配達夫、九段坂頭の人力車夫、民友社の小使など、東京に於ての生活も、思へば多岐多樣であつた。二十歳の春に東京から京都へ歸り、寫眞師の玄關番から、村井兄弟商會の大阪分工場に入り、更に關西貿易會社の刷毛工場で、勞役に從事したのが、新聞記者になり得る迄の走馬燈の樣な徑路であつた。

然し俺がこゝで云はうとするのは、さうした平凡人の愚な半生の回顧ではない。俺が貸本の行商を廢して、瀬田川村役場の小使となり、役場の中に起居して居た時、父は「茶飲み友達」だと云つて、一人の後妻を迎へ入れた。その頃は父も教會堂を出て、饅頭屋の二階に同居して居たが、五十歳になつて居た父も、母に

死別れてからは、何と云ふ事なしに世間が淋しかつたのであらう。或る日、隣村の役場から歸宅して見ると、家には見馴れぬ四十前後の女が居て、父と差し向いで何事かを囁き交して居た。父は唯簡短に「市郎、お母さんぢや」と、頗る上機嫌の體で、その女を俺に引合せたりした。俺は突然の事にドキマギして、手持不沙汰で居たが、俺のために第二の母なる人は、「市郎、私がお母さんになつて、これから何かを見てあげるぞな、遠慮をしんさらいでも宜いけえ……」と云つたりした。死なれたお母さんよりも、若くて美しい此の人が、俺のために「第二のお母さん」になつたのかと思つた時、俺は何だか心丈夫な氣持がした。それに第二のお母さんの顏を見て、嬉しさうに機嫌の好い顏をして居る父の樣子を見て、俺は何だか幸福な樣な氣持がした。此のお母さんが恐い顏さへしなければ、俺は心から甘へて見たいとも思つたりした。

今から思ふと、俺は其の頃の父の心持を、充分に理解もし同情もする事が出來る。――その第二のお母さんは、父が餘りの貧乏に愛想を盡かして、僅に一ケ月ほど居たのみで、逃げて歸つたと云ふ事だが。――それからまた他の女が、茶飲み友達として來て居たが、それも間もなく姿を隱した。—俺の父ばかりでなく、俺の家は一種の系統的に、女房に夭折されるのが例である。俺の曾祖父も女房に死別れたし、曾父は又女難の相とやらがあつて、女房を三四人も迎へた樣であつた。事情があつて生別したのや、病氣のために病歿したのや、兎にも角にも松崎家の近代史には、偕老同穴の契を全うした者は一人もなかつた。俺の父が俺の母を迎へる迄にも、二人の妻を去らしたと云ふ樣子、さうした先例を見るに付けても、女房に先立れた不幸は、單り俺一人の上にのみ落た災厄ではなかつた。

考へて見ると俺の父は、俺の知らぬ母を二人有ち、俺を生だ母を持ち、俺の知つて居る母を二人娶つた譯である。祖父の方は正妻として三人を娶つたのみで、初老の頃まではいろんな女に關係しても、決して妻としては待遇しなかつた。晩年を淋しい孤獨に終つた點

は、祖父も父も同樣で、二人とも女緣の薄い生れ合せであつたと見える。それにしても、たとへ僅少の間にもせよ、俺のために第二の母であつた人は、其の後何うしたことであらう。更に然るべき人妻となつて、幸福な餘生を送つて居るか、或は既に佛樣になつて居るやら、俺は今でも其の「第二のお母さん」の事が忘れられない。

斯うした生育ちと、斯うした父母を有つて居た俺が、此の二三年の間に、父祖と同じ樣な徑路を經て來たのは、何う考へても運命の不思議な廻り合せである。それでも上帝は此の俺に幸して、第二の妻を娶つてからこゝに一年、一家の上に慶福を與へられて居るのは、衷心より感謝する處である。

○

俺の少年時代は數奇であつて、多くは人間の溫情と云ふものを知らずに、東西南北に人と爲つた樣なものであつた。けれども俺の子供達は、幸にして俺の足跡を踏まずに、三人俺の許で衣食をしながら、それ〴〵學校に通學して居る。此の點から見ても、俺の三人の子供達は、俺の幼い時よりは非常に幸福であらう。

然し幼うして生みの母を失つた俺は、自營自活して生育したが、俺と同じく生みの母を亡つた三人の子達は「第二の母」の情愛に依つて、兎にも角にも今日を送つて居る。生みの母よりも育ての母と云ふ言葉に、絕對の眞理は無いにしても、子供達の立場から云へば、今のお母さんに對しては、十分に感謝の誠意を表せねばなるまい。第二の母たる人の苦勞は、子供が成人すると云ふ、たゞ其の一事に依つて償はれるにしても、成人する其の長い月日の間には、樣々の苦しい暗闘が續くことであらう。俺は今「第二の妻」に對して、其の人知れぬ苦勞に酬ゆるに、如何なる道を以てしたら宜いであらう。

前の妻が病死した前後の感想や、事件の經過などは、此の前に著した「同棲十三年」に書いた通りで、俺は第二の妻たり、第二の母たるべき人を、さう早く娶らうとは思うて居なかつた。殊に女房緣の薄い俺の家の

記錄を見ては、容易に後妻を娶るなど丶云ふ、そんな考へにはなれなかつた。生活上の不便や、經濟上の不利は忍んでも、出來る事なら獨身で暮す方が、理想的であるとさへ信じて居た。少くとも第二の妻たるべき女が、戀愛若くは戀愛に近い形質に依つて、俺の相對者として出現せぬ限りは、求めて「第二夫人」を娶るの意義がないとまで主張して居た。そして獨身者の生活が、外的にも内的にも孤獨寂寥であることを、むしろ開放されたる自由であるかの樣に解釋して、そこに强て慰樂の世界を發見しようと努めても見た。全く其の頃の俺は、自分を主として生きようか、子供を主として生きようかと云ふ事に就て、一代の危期に立つて居た樣である。

其の頃の俺の考へを、正直に有體に云ふと、俺は母を失つた子供も不憫であつたが、妻を失つた俺自身も、隨分可愛相な男だと思つて居た。そうして名狀し難い寂しい思を、酒の醉に依つて忘れようとしたり、白粉の香に依つて消さうとしたりする事は、可愛相な獨身者に許されて居る特典であるとまで强辯して居た。母を失つて淋しかるべき子供には、まだ俺と云ふ父があるけれど、妻を失つた俺には、「孤獨」と云ふ俺があるばかりだ。さうした片手落の理窟にも、强て道理がある樣に片付けては、色香の强い女の群を漁り歩いたりした。妻と云ふ内に賴るべき强い根柢を失つた男の心は、如何なる女性に對しても、動搖し易い危險性を帶びて居ることを、俺は初めて經驗することが出來た。先立つた妻に對しては、敬虔なる追慕の念を抱いて居ながら、其の心の他の一面では、それと同じ程度に於て、更に第二の妻たるべき人を物色して居る樣な、奇怪にして眞實なる心意の狀態を見る事も出來た。「第二の母」としての要求よりも、「第二の妻」としての要求の方が、如何なる場合に於ても强度であるのが、眞實であるとも氣付いたりした。若しこれ等の一切を否定する者がありとすれば、それは自ら知らずして、自己を欺くものであらう、と一人で昂奮し切つて居る時もあつた。

けれども俺は、第二の妻を娶つては何うかと云はれても、容易に其の縁談には乗らうとしなかつた。妻の一周忌が終つた前後から、俺の心を動かす様な縁談が、恰度六口ほど持上つたけれど、悉く俺の方から御免を蒙つた。第二の妻たり母たるべき人の素質を是非する迄もなく、俺はたゞ第二の妻たり母たるべき人を迎へると云ふ其の事が、何うした譯か早いと云ふ様な氣持がして居た。何うせ何處かの何人かは、俺の第二の妻となり、第二の母となるにしても、さう急がずとも宜からうと云ふ様な、其の時のがれの心持がして居たに違ひない。當面の寂寥を慰めるに足る酒色さへあれば、さうした眞面目な問題は、幾日でも考へない方が宜からうと云ふ、其の日暮しの心持になつて居た様である。女房に死別れた經驗の有る男は、其の忘れ形見の有無を問はず、一度は斯うした心持に依つて、凡ての愛苦を不徹底な理不盡の中に忘れようとするものである。

斯うは云ふものゝ、俺だつて子供等のためには、第二の母を迎へる事に就て、人知れず様々の思案をめぐらして見た。他人の子を我が子同様に愛して、心から養育し得る女があるなら、世にそれほどの幸福はないが、然しそんな女は百人に一人有るか無いであらう。母としての情愛は持ち得なくても、親切な伯母さんとしての溫情さへあれば、世に云ふ繼母繼子の忌はしい風說などは起るまい。俺に對しては柔順な妻であり、子供に對しては溫情ある伯母さんであるべき人、さうした婦人が宜からうなどゝ考へたこともあつた。けれども第二の妻は得易くても、第二の母は得難い問題であると云ふのが、俺の最後に得た答案であつた。

いろ〳〵と思ひ悩むこと一年餘り、ふとしたはづみから今の妻と知合になつて、第二の妻、第二の母として、迎へることになつた。同棲こゝに一年、長からぬ月日の間にも、俺には俺としての涙があり、妻には妻としての苦勞があり、三人の子供には又子供としての、いろんな驚異があつた事であらう。

○

全體、女房に死別れた男が、後妻を娶ると云ふ事は、娶る側から考へても、娶られる側から見ても、決して虛心平氣であるべき問題でもなく、亦た易々たるべき事件でも無い。殊に俺の様な過ぎ來し方を有つて、傳統的に「一人の妻では濟まない」骨肉の中に人と爲つた者は、餘計にいろんなことが考へられた。

女房に死別れたのも、第二の妻を娶らねばならぬのも、それが前世からの約束であつたにせよ、それを俺自身の上に落ちて來た問題として取扱はねばならぬのは、隨分苦しい悲しい經驗であつた。今の妻と知合になつてからは、すべてを感情の奔放にまかせて、何事も右顧左眄せず、一氣に結婚式を擧げてしまつたもの、當時の俺の生活狀態にとつては、さうする事より他には、適當な歸着點が無いのであつた。子供等に對しては、不忠實な父であつたとの反省が、理智に復つた今の俺を苦しめようとしても、それに對して俺の感情は、今でも更に少しの悔る處が無い様に思ふ。

それにしても、第二の妻を娶るべき男としては、俺の上にある傳統的事實が、俺に弱味を加へて居たばかりでなく、俺の當時の生活狀態に於ても、多くの弱味が俺の心を卑怯にした様であつた。新聞社を辭退して、筆硯勞働に從事して居た折柄、第一當時の俺の一家には、豫定さるべき收入と云ふものが無かつた。所得税法の上からは、免除さるべき性質の不定收入に依つて、一家の生計を立て居る場合に、第二の妻を娶ると云ふ事が、俺には何よりも苦痛であつた。新妻に對して收入の多額を示し、男甲斐あり亭主甲斐ありと信賴されたいと云ふ、さうした淺間しい虛榮心は無いにしても、全く一定の收入無き家庭の中に、新しい人を迎へ入れると云ふ事は、いろ〳〵な意味に於て不安の種であつた。けれども今の妻に對する當時の俺は、さうした物質生活の不安定などを考へて、大事の上にも大事を取ると云ふ様な、そんな悠長な事を省みる餘裕も無ければ、分別も無かつた。

生活の不安定と云ふ事よりも、強く嚴しく俺の精神を刺戟したのは、第二の妻たるべき女のためには、生

さぬ仲の三人の子があると云ふ、厳粛なる事であつた。それも第二の母を得てから後の子供達の生活が、何んな風に變化するかと云ふ、子供等を主とした考へでは無くて、專ら第二の母たるべき人の側に立つての取越し苦勞であつた。けれども曾て人妻として、子を生み子を育てた經驗を有つて居ると云ふ事や、其の子を家に殘して置いても、俺の許に嫁し得ると云ふ決心を確めた時、俺は多くを憂ふるの要なしと安心した。生みの子に對する切なる愛情が、やがては生さぬ仲の子供の上にも移つて來やうと云ふ、さうした受け身の考へよりも、生みの子と親しく、同棲し得ぬ心淋しさを、生さぬ仲の子達に依つて慰め得るなら、それが何よりの幸福であると考へた。俺の妻になると云ふことが、動かすべからざる既定の事實でありとすれば、生みの子を殘して他へ嫁ぎ行く女の人知れぬ慰藉は、此の一點より他には無い。斯うした考へを有つて、來てくれることが出來るなら、俺に三人の子供がある事は、反つて第二の妻たるべき女の慰藉にこそなれ、決して苦勞の種になる樣な、そんな世間並の結果を見る事はあるまい、などゝ考へたりした。

けれども、戀なればこそ夫婦にもなれ、誰が好んで貧乏暮しの生さぬ仲の子のある男に、妻と呼ばれ、お前と呼ばれて、心から微笑む者があらう。第二の妻を娶らねばならぬ俺自身も、考へて見れば不幸であつたが、第二の妻として嫁がねばならぬ女の身にも、不運の暗影が着きまとうて居た。前の夫君にして壯健(すこやか)に世に在らば、生みの子と生別の憂き目を見る迄もなく、共月日は華やかに、樂しく愉快に幸福であつたらう。けれども嫁した女の身では、其の長子を亡夫の家に殘し、其の次子を淋しい懷中(くわいちう)に抱へて、生れ故郷へ歸るより他には、行くべき道が無かつたのであらう。それも三十や四十を過ぎた中年ならば、亡夫の冥福を祈りながら、忘れ形見の成人を樂しむことも出來たであらうが、二十歳を過ぎたばかりの若い身空では、未亡人としての月日を送ることが、何としても淋しく頼りなくて、つい華やかな世界も夢見る樣になつたであら

う。

俺は斯うして、女の立場ばかりに同情して、第二の妻として娶つた後の事などは、少しも考へようとはしなかつた。戀愛の素質を有つて現れた相對者である上からは、衷心より愛情を寄せさへすれば、其のすべては炎々たる情火に依つて、何の樣にも感化し得るだけの自信を有つて居た。子達の母としてよりも、先づ俺の妻として娶つた後、子供に對する愛情の發露は、これを自然の栽培に任せるより他には、多くを望むのが無理かとも思つたりした。今の妻に對する俺の戀愛狀態は、斯う云ふ風に其の總體が同情であり、洞察であり、讓步であり、且つ一種の冒險であつた。

何も彼も承知の上で、他にあつた緣談を斷つてまでも、俺の許へ來た妻の心持も、それと明ら樣に云はぬだけ、それだけ俺には推察する事が出來た。要するに二人の再婚は、不幸な男と不幸な女とが、其の不幸な過去から脫けて、「幸福な將來」へ旅立たうと云ふ、其の門出の努力であつた。

○

去年五月二十五日に結婚して、滿一ヶ年を過したばかり、二人が夫婦としての生活は、いよ〳〵これから後の月日にある。泣いたり笑つたり、時には聲高く罵り合ふ日があつても、二人の夫たり妻たる生涯は、墓場に入る其の日まで、冷たくなる其の夜まで、今の樣な姿の儘で續くであらう。

けれども俺は正直に云ふが、「第二の妻」は娶り得ても、「第二の母」は斷じて迎へ得られるものでは無い。第二の妻に對する感情は、亡妻との差別を超越して、たゞ「妻」たることの眞實性を、完全に發見し得るものである。第二の妻自身にとつても、妻たる任務の上に發揮する情緖の流には、最初の妻たると二番目の妻たるとの差別が無いのは當然である。夫たり妻たることは、其の相對者の異動に頓着なく、何時でも眞實たり得るだけの性情が、暗默の間に訓練されて居る。俺は此の見地からして、「妻」には前妻も後妻もなく、第一も第二も無く、何時でも唯「妻」であり得ると思ふ。

「第二の母」に至つては、これは「妻」の場合と同一に言ふのが間違つて居る。女は一生の間に、幾人の夫に侍へても、何時でも「妻」たり得るだけの可能性を有つて居るけれど、「母」としての可能性は、「妻」の樣に普遍的では無い。僅に生むだ其の子の上にのみ、「母」としての眞實性を有つて居るだけで、其の他の子供に對しては、何時でも路傍の人であり、おばさんであるに過ぎない。さうした女に向つて、「第二の母」たれと强るのは、妻としてのみ眞實性なる女から、「母」と云ふ道德的の美しい虛僞を發見しやうとするものである。世間にはさうした努力を、無謀な企圖とは氣付かずして、反つて失望したり、憤慨したり、果は樣々な悲劇を醸して居る者が多い。俺も「第二の母」を迎へたならば、或は愚な結果を見た一人となつたかも知れぬけれど、幸にして俺は「第二の母」を迎へず、先づ「第二の妻」を娶つて、次で「第二」の二字を抹殺すべく努めた。

斯うは云ふものゝ、俺とても今の妻が、「お母さんお母さん」と呼ばれて、「第二の母」の樣な姿をして居るのを、決して不快に思つたり、惡いと云つたりするのでは無い。出來る事ならば、「第二の妻即第二の母」たり得ば、俺一人ばかりか子供達も、何んなに幸福であるか知れないと思ふ。けれども物心ついてから、生みの母に死別した子供達は、「亡くなつたお母さん」の面影と慈愛とを忘れてまでも、「今度のお母さん」を眞實の母と思ふことは出來まい。同じ「お母さん」と呼ぶ聲にも、そこに人情自然の差別が生じては、「母」と云ひ「子」と呼むでも、要するに「美しい虛僞」に過ぎない事となる。「第二の妻」たる女が、其の自然の眞實を詐つて、努めて純なる「母」の資性を發揮しやうとしても、さうした感情の微動が煩ひを爲して、遂には「第二の母」たる形態さへも、損ね失ふやうにならう。俺は此の一年間に、さうした「人間の眞實性」に觸れて、人知れず大に悟る處があつた。そして子供達のために、「第二の母」を迎へずに俺自身のために「第二の妻」を迎へたことを、何んなに喜んだことであらう。何も彼も斯う成り行くのが運命で、これが又、人生の眞實である

かと思ふと、更に少しも憂ふる處はないと思ふ。

俺は可愛い子供達のために、優しい伯母さんとしての「お母さん」を得さへすれば、それで滿足しなくてはならない。妻は幾人娶つても、「妻」たることに變りは無いが、母は此の世界の中に、唯一人しか無い「母」であつて欲しい。日常生活の方便から、生さぬ仲の母と子までも、眞實の親子の樣に云ひ馴れて來たが、俺はこれが第一に間違つて居る樣に思ふ。忌はしい繼母繼子の問題や事件が、今も尙ほ世間に絕えないのは、母で無い者を母と思へと強いたり、子で無い者を子と思へと強いたりする弊ではあるまいか。虛僞なる親子の愛情よりも、眞實なる同情相愛の關係の方が、どんなに氣持好いか知れなからう。生さぬ仲の母に侍へたり、生さぬ仲の子を育てたりする者は、常に此の痛ましい虛僞の感情と鬪つて居る樣なものである。さうした中から生れた事件は、美しいローマンスよりも、悲慘な物語の方が多いではないか。

それにしても俺の子達は、俺と云ふ「父」が壯健に働いて居るため、俺の幼年時代の樣に、一家離散の憂き目も見ずに、其の日〳〵を莞爾に暮して居る。少年の頃に母を失つた俺は、「母の死」を中心として、樣々に困頓落魄の生涯を送つたが、三人の子達は母に死別しても、俺よりは幸福な月日を送つて居る。これから後、何んなに成り行くにしても、三人の子達だけは、丁稚奉公をさせたくない、村役場の小使もさせたくない。小學校も卒業し得なかつた父とは異り、それ相應の學問だけは修めさせて、國家のために人類のために、有爲な活躍をさせたいと思ふ。

第二の妻を娶つてから一年、俺の生活は外的にも內的にも、いろんな動搖と波瀾とを辿つた來た。「第二の妻を娶るまで」にも「第二の妻を娶つてから」にも、物語の材料は盡きない。俺は何時の日になつたなら、それ等の事實を語り得るやら、今は何事も途中にある。

○

以上は其の途中の感想錄である。――

――大正五、六、十六夜――

中平文子君に引導を渡す

高島米峰

（一）

女の多い中に、特に君を選ンで、引導を渡してやるといふとは、君に取つて、頗る光榮であるべき筈である。と言つたところで、君が、僕の宅へ、「お目見え」に廻はつて來た譯でもなく、僕が、君を、「やとな」として、招いたことがあるといふのでもない。全く以て、面交心交、共に絶無の間柄であるのみならず、ツヒ近頃まで、君といふ女の存在をさへ、知らずに居たのである。ところが、先月上旬、高楠霽村博士に招かれて、杉村楚人冠君等と共に、神田川で鰻を食べたことがあつた。その時、楚君言ひけるやう、「今月の『中央公論』に出て居る、中平文子の文を讀ンだか。」僕答ふらく、「まだ讀まぬが、一體、何を書いたものだ。」「あれを讀まないやうでは、共に人生を語るに足らぬ哩」と。大に楚式を發揮して來た。口惜しけれど、知らざるは知らずとせざるべからず、蟲を抑へて歸宅そこ／＼、その謂はゆる「中平文子の文」なるものを讀ンで見た。これがそも／＼、君といふもの丶存在を知つた始めである。そして、僕の君から受けた第一印象は、……憚りなく言ふことを許せ、……男をたらし込む手練手管、海山千萬年のしたゝかもの、しかも、一度そのたらし込みたる男に捨てらるゝや、可愛さ餘つて憎さ百倍といふものか、その男の地位名望に向つて、極度の破壞を試みむとする恐ろしい女。……氣の毒ながら、先づ、此くの如くである。衆生濟度は佛の慈悲、殊に淨土眞宗に於ては、惡人正機と說き、女人成佛と敎ふ。これ僕が、君のやうなものに、臨終引導生極樂の大慈悲を垂れる所以である。

（二）

謂はゆる新しい女と稱する團體以外に在りて、別に一種の女として、世間に知られて居る女は、君の外に、丹いね子君といふのがある。これも、或る會で、卷烟草を吹かして居る不作法の女が居たのを見て、不快のあまり、隣席の人に、その名を尋ねて、丹いね子君たることを知つた位で、まだ言葉をかけたこともなく、勿論、かけられたこともない。たゞ、彼と親しい青柳有美君に依つて、彼の性格素行などに關して、割合に同情ある説明を聽いたことがあつたが、要するに、これは、「女の岩谷天狗」で、たゞ如何にして、より多く、自己を廣告し、依つて以て、生活の資を得むかといふことに苦心する位の、極めて淺薄な女であつて、到底、君即ち中平文子君の如き、惡辣なる手段を弄して、男子を負傷せしめずんば止まないといふやうな、恐ろしい力を有した女ではないらしい。或は、丹いね子君も亦、キッスの安賣り、秋波の景物、○○の切賣り、相當に魔力を逞しうして居るといふ評判もあるが、彼を知れる青柳君の語るところに相違なくば、少くとも、彼は、君の如く、三人の子供を持つたこともなく、古植庄一郎君、及び某探偵、某大學生、その他の男に關係して、プラチナの時計を買つて貰つたり、電話を架設したり、手切金を取つたり、……といふ様な、噂を立てられる程の女ではないらしい。そは兎も角もとして、その丹いね子君も、僧侶の子であり、君も亦、お寺の娘であるといふのが事實だとすると、如何に末法濁世とは言へ、揃ひも揃つて、二人とも、世の指彈を蒙らざるを得ないまでに墮落したことを、佛教のために悲しまざるを得ないのである。これ亦、僕が、君に對して、引導の勞を執る所以の一つである。

（三）

中平文子君、僕は、以下、君に對して、君といふ敬語を用ゐることをやめて、お前と呼ぶことにする。それは、君と敬稱する程の價を、見出し得なくなつたからといふ譯ではない、僕は今、三界の大導師として、君に臨ンで居るからである。

お前が、「中央公論」に書いた、吉植庄一郎君とお前との關係、あれを、文字通りに讀ンでも、お前に、暗いところのあつたといふことは歴々として蔽ふことは出來ない。況んや、その光紙背に徹する僕の烱眼は、お前の暗黒面を、看破せずんば已まないのである。滔々たる世間の薄ノロは、あれを讀ンで、吉植君が、お前を挑んで、遂に目的を達し得なかつたのであつて、お前は、能く、その處女の操（三人の子を産ンで後の處女の操）を保ち得たのであると、速斷するかは知れないが、否、お前のあの文を書いた目的は、正に、世人をして、しか思はせやうといふにあつたのであらうが、世間は、そンな薄ノロばかりでない、少々は、厚ノロも居る。

お前が、「中央新聞」の女記者であつて、吉植君は、その重役である。三人の子までなしたる夫婦仲を、お前の不行跡から、夫に捨てられたとさへ評判される程のお前が、吉植君といふ誘ふ水があつて、なンで、いなんとぞ思はずに居られやう。僕は、寧ろ、吉植君の方が、据膳の箸を取らぬは男の恥辱と、妙なところで、茶氣を出したのではあるまいかとさへ、思つた位である。お前が如何に自ら辯護して、お前の操を金鐵の如くであるといふことにし、吉植君を、色魔のやうに言ひくろめやうと謀つても、お前のためには、不幸にして、楊震四知の數は、今も尙、儼として光り輝いて居る。

殊に、電車の中で、某新聞記者が、吉植君とお前とが、いちやつきながら、乘つて居るのを見たのみならず、その時、お前が、吉植君に、プラチナの時計をねだつて居たのをまで、聞いたといふのである。そうして、日ならず、お前の帶の間には、プラチナの時計が、チクタクとお前の罪惡を、お前の胸に刻みつけ始めたといふのである。若し、お前と吉植君との關係が、單に、お前の語つて居るやうに、重役對低級記者としての關係であるならば、電車の中なんぞで、どうして、そんな要求をすることが出來やう。吉植君の妾と言ふことが出來ないまでも、肉の交渉が開始せられて居たとい

ふことは、想像するに難くないではないか。

（四）

僕は、吉植君に對しても、亦、面交心交絶無の間柄であつて、恩怨共に無いのである。又、吉植君も、政治界に於ては、多少の地位も有して居るのみならず、社會の木鐸、無冠の帝王を以て任ずべき新聞記者、殊に、妻あり子ある一個の紳士ともあらうものが、待合とやらの女將風情に囚はれて、男妾同樣の境遇に甘じて居るといふさへ、見下げ果てた代物なるに、かて〻加へて、自分の配下の女記者など〻關係して、社會の風教を破壞することを顧慮しないなどは、これを教育なく識見なき痴漢冶郎に比して、何の異りありとなすことが出來るか。その愚誠に及ぶべからざるものがある。されど、今、お前が、吉植君心機一轉の結果、解職せられたる犬の糞の敵を取るべく、徹頭徹尾、吉植君のみを惡黨にし、色魔にし了せむとするを見ては、吉植君に對して、多少の同情を禁ずることが出來ないのである。

殊に、汽車中に於て、吉植君が、政友會の先輩に對して下した、人物評の素破拔きの如き、飽くまで、吉植君を困らせてやらうといふ、陰險なる手段に出でたものであつて、如何に吉植君愚なりと雖も、あんなべラボーなことは、言はなかつたであらうと想像されるのである。縱令、事實言つたにしたところで、今の當面の問題と、全く沒交渉な政治家の評判など、あの場合に引出して來る必要は、毫末もないのである。若しありとすれば、たゞ、一意、吉植君を傷けむとする奸策に出たとより外、解することが出來ないではないか。

（五）

貞操に於ての前科者たる中平文子、元來、お前なんぞは、筆を執つて文章を書くすべを知つてさへ居なければ、縱令、どんな不行跡をやらうとも、縱令どんな罪惡を犯さうとも、憚りながら僕なんぞが、輕々しくまかり出でゝ、引導なんぞ、渡してやるべき筈のものではないのである。たとお前が、盛に禿筆を揮つて、恥しげもなく、自己の不行跡を暴露するがために、國

民道徳の破壞せらるゝことあらむを恐れ、社會のため國家のため、お前のやうな一種の害蟲を、驅除せむとするのである。尤も、此くの如きは、單にお前に限つたことではなくて、此頃の新教育を受けた、そして、何等かの事情で、妙にひねくれた女共の間の、共通の弊であるが、兎角、舊道徳を破壞することだけは知つて、新道徳を樹立することを知らない、且つ、自己の純潔を保つといふことが、人間としての、重大なる徳性であるといふことを無視して、敗徳亂倫も、己が本能の滿足のためには、進んでこれを肯定する。若し世に、自己の住宅、壁落ち軒傾きたるにも拘はらず、これを修繕することをさへ知らないで、平然としてその中に起居するものと、この舊屋を捨てゝ、別に新宅を建てゝ、これに移るものと、而して、舊屋を破壞し去つて、新宅建築の用意さへ成らず、雨露を凌ぐに困難しつゝあるものがあるとするならば、前者の頑冥、もとより度すべからずと雖も、後者の雨ざらし生活に比して、尚、多少の勝れるあるを見ることか出來るではないか。要は、中間の、新宅建築の理想を實現するに努力するのが、人間の仕事であつて、人生の向上、人類の進歩も、こゝに意義を求めなくてはならないのである。お前の如き、又彼の新しい女の如き、正に、住むに家なくして、二六時中の雨ざらし、ぬれしよぼたれて居るが如きは、眞に笑ふに堪へたことである。寧ろ、せめて、天幕の用意にでも取りかゝる方が、お前のためでもあり、又世間のためでもある。

（六）

お前が若し、三人の子供まで産ませて與れた夫の外に、たゞ一人、吉植君を旦那として、それによつて扶養されて居るといふのならば、不都合なことではあるが、まづ妾奉公をして居るものとして、これも、生活難に伴ふ已むを得ない社會現象として、默過したかも知れない。しかし、お前自らほのめかして居るやうに、某大學生とも關係し、某探偵とも關係したといふに至つては、最早お前は、世の賣淫婦と、選ぶところの無いものとなつて居るのである。即ち一種の私娼である。

恰も好し、今や警視廳は、府内の私娼に向つて、一大斧鉞を下して居る。お前の如き、自ら進んで、丸山保安課長の制裁を受けてはどうであるか。

少しく餘談になるが、僕等が、警視廳の、私娼撲滅公娼保護の方針は、本末を轉倒し輕重を誤つて居るものであると言つて、これに反對して居るのである。そしてその然る所以のものは、主として、宗教上道德上の立脚地から、默視することが出來ないとするのである。今お前は、一種の私娼であるとして、さて、他の一般私娼と同樣に、これを公娼廢止の後に、處分すべきものとするかどうかと言へば、僕は、氣の毒ながら、お前は、公娼と同樣に、他の私娼に先つて、まづ速に廢止して、冥土へ送りつくべきものであると言ひたいのである。何となれば、お前は、他の私娼の如く、窃に淫を賣つて居るのではないからである。恥づべきを恥ぢ、隱すべきを隱すと云ふ、一般私娼のやうな、殊勝な氣分が現はれて居ない。否、却つて、盛んに魔筆を弄して、自己の賣淫的不行跡を、世間に公告して居るからである。お前自身の惡德は、救ふ必要がないとしても、これによつて被る、社會の傷手を傍觀して居る譯にはゆかないではないか。

（七）

一種の「新らしい女」、否、「あだいやらしい女」なる中平文子、佛祖の大慈悲を思へ、雙親の鴻恩を思へ、而してお前の三人の子供（若し確かにあるならば）の現狀及びその將來を思へ。お前も、既に、三十歲を超ゆること少くなるまい、三十にして立つといふのは、男ばかりのことではない、いつまでも、妾でもなく私娼でもないといふやうな、中腰で暮して居て、中年の悲哀が、しみ〲と身に泌みて來てから、俄に立たうとしても、もう腰が利くまい。如是畜妾頓生菩提、喝。

――大正五年六月十九日――

人物評論（七十三）

三浦觀樹將軍論



▽大彗星の如き三浦子

鵜崎鷺城

三黨首協定の觸元になつたといふので、三浦子爵は加藤、原、犬養と共に、政界に於ける話題の中心となり、子の名は政治上一種の勢力を象徴して居る。政界には幾多の恒星、遊星、衛星、惑星があるが、子は大遊星のやうにもあり、大惑星のやうにもあり、又た大彗星のやうにも見える。平素は世事に與らずと稱して悠々閑日月を送り、娑婆を餘所に見た形ながら、時々思出したやうに姿を現はして世人を驚

かすことがある。現に一昨年權兵衞火事の燃盛つた時、早稻田の大喞筒を引出して、大隈内閣の產婆役になつたが、今度は二年振りに三役顔見せの大芝居を打つて人々の注意を引いた。其倏忽として政治面に出現し、一種の軌道を描いて運動する點は、寧ろハリー彗星に似て居る。

子は長州陸軍の先輩で、高杉東行の騎兵隊出身である。山田顯義、鳥尾小彌太、三好重臣等は既に世を去つて、現在先輩として殘つて居るのは山縣と子爵位のものであるが、軍人としては兵部大丞、陸軍第三局長廣島鎭臺司令官、東京鎭臺司令官、西部監軍、士官學校長等に歷任し、何でも二度目に東京鎭臺司令官になつたのが陸軍の奉公納めであつたと思ふ。子が陸軍と緣切れになつたのは自發的に罷めたのではなく、藩閥から逐はれたのである。當時は藩閥の生々しい時代であるから、薩長互ひに牽制し或は妥協し、陸軍は情實で固まつて居た。子は其時から薩閥の遣方が癪に障つて堪らなんだから、明治八年の臺灣征討を無名の師と稱して反對し、開拓使拂下事件の時は同志の軍人を語らうて反對同盟を造り、或は月曜會といふ團體を作つて盛んに軍事上の議論を鬪はし、最後に軍制改革意見を立てゝ當局に迫るなど、長州にも薩摩にも八ツ當りに當り散した。之れが爲めに二三度免職になつたことがある。山縣からも睨まれたが、取別け薩摩の軍人は子の振舞を憎んだ。或時陸軍の上役達が紅葉館に集つた時、子は薩摩の軍人と大激論を交へ、果ては稍や障子が倒れ膳や猪口が飛ぶような騷を演じたことがある。そこで子は終に陸軍の謀叛人として首になつた。陸軍で初めて藩閥に反抗したのも、又た最初の犧牲になつたのも三浦子である。而も子は同じく藩閥出身である丈けに一層面白い色彩が加はる。

子の陸軍生活が衝突の歷史を以て始終した如く、それ以來今日に至るまでの歷史も反抗の繼續であつた。學習院長の時、井上や伊藤が條約改正の手段として風俗壞亂的の歐化政略に現を抜かした揚句、大隈が屈辱的條約改正をやらうとしたので、怒氣鬱勃たりし子は今は是れ迄なりと死を覺悟して參内し、事の仔細を天聞に訴へた。學習院を罷めてから暫く宮中顧問官の職を奉じ、一年餘り貴族院議員になつたと記憶するが、日清戰爭後井上の尻拭ひをさせる意味で、時の首相伊藤は子を朝鮮公使に任じた。處が赴任後間もなく王妃殺しの凄い一幕を演じて内外の耳目を驚かした。此破天荒の活劇も元をいへば政府の對韓方針に對する不平と反抗に出來して居る。といふ理由は當時子は伊藤に面して、自分は外交といふ物を知らんから、此亂暴坊主を出使させるからには磁石丈けは授けて貰ひたいと、對韓方針を質したけれども、當時政府の方針は定まつて居ないから、伊藤も明かに答へることが出來なんだ。そこで子は併し己れが出向くからには藪醫者の眞似をしてキニネ許り盛るような事はしなぜと棄臺辭を殘し、又た知己の人々に向つても、自分が朝鮮に行くのは座敷の上に糞を垂れに行くようなもので、必ず後掃除が面倒だ抔と言つたが、案の通り將軍一流の荒療治をやつた。是れは日本を立つ時既に子の胸中に定つた筋書で、此人なればこそアレ丈けのドラマが演じられたのである。

其後二三年間寂として跡を韜晦して居たが、第十三議會開會前地租增徴反對同盟運動の起るや、突如として彗星的に姿を政界に現じた。子は進步黨の客將となつて此運動に加つたのであるが、增租を發案した時の政府は山縣内閣であるから、明に山縣に對する反抗であつた。それ故に政府は日夜探偵を子に附けるし、同鄕の軍人中絶交狀を送るものがあるし、直接間接に壓迫を加へたれども、子は別に意に介する處もなかつた。四十四年樞密顧問官に擧げられたのは、故桂公がいつまでもアノ儘にして置くのを氣の毒に思ひ、松平正直と船越衞と同時に推薦したのであるが、山縣も厄介な男だとは心に思つても、反對すべき筋でないから桂の言ふまゝに從つた。當時世間には三浦將軍もトウ〳〵意地を張り通せなくなつたと、樞密院入りに慊らず思ふものもあつたが、子は顧問官になつたからとて月給縛りにされる程素直な老人でない。元來樞密顧問府に官するものは政治運動に關係出來ぬことになつて居る。嘗つて大隈伯は樞密顧問官たりし時、自由黨の總理と會見したといふので、官紀紊亂の名を以て諭旨免官になつたことがある。然るに三浦子は在野黨の首領と會して政府の惡口もいふし、内閣組織の世話も燒くし、時どしに白晝公然國民黨本部に車を乘入れることがある。又た或時はアバレ者の會に出て演說の一つもすることがある。現に今度自分が術元黨肝煮になつて三黨首領と政治向の相談をしたなどは、之れを嚴格に律すれば樞密顧問官に不似合なことかも知れぬ。而も敢てピクシヤクもせず、誰からも尻が來ず、其儘濟んで行く處に、三浦子特有の除外例があるのである。

三黨首協定覺書は子の草案を修正したものであるが、其覺書中文字以外に重大なる意味の含まれて居る一點は、外交及び國防の大方針を一定遂行するに當て、外界一切の容喙を許さずといふ事である。恐らく是れが協定の骨子とも將來の活動の前提ともいふべきもので、之れあるが爲めに畫龍點睛になつて居る。蓋し外界一切云々は字面より見れば範圍が廣いが、此には主として元老、軍閥及び官僚系等總て議院以外の一種の勢力を指し、特に元老に對して最も强く利かしたものであらう。元老といへば山縣の外に松方、大山等が居るけれども、從來國政に容喙し、事實に於て政府の運命を支配して居るものは其の筆頭たる山縣である。それ故に此取極めは無論軍閥の人々も面白く思ふて居ない。貴族院に巢をくつて居る官僚派も不滿足であらう。最初から外界の一種の勢力に支配されて居る現内閣の人々も耳が痛からう。が、特に目白の權現樣が不機嫌に違ひない。乃ち外界云々を此意味に解して之れを三政黨首領の側よりいへば、元老に對する一種の宣戰布告である。又た之れを三浦子の側よりいへば、山縣に對する一種の彈劾狀ではあるまいか。

今まで山縣に楯を突いて來た子は、是れからも猶ほ楯を突かうといふのである。顧問官の月給を貰つても山縣に降參しないと言つたが、實際其通りである。それ故に子は最初から長州では繼子の格である。元來子は木戸系の人であつて、陸軍時代に隊長の妥協政治に反對したのも、又た今日立憲の本筋で行かねばならぬと三黨首の會同を思ひ立つたのも、元をいへば木戸の感化に負ふ處少くない。政治向に就ては山縣及び其一

味と反が合はぬけれども、元々同郷人であるから箇人としては出入りもするし、時として忠告にも出掛ける。此に二三の實例を擧ぐれば、日露講和問題で燒打騷動が持上つた時、子は桂の不都合を山縣に談判せんとて椿山莊を訪ふと、家令が出て來て御前は不在だといふ。其行先を聞けば不明だと答へる。其實山縣は在宅したのだけれども、ビク〳〵もので奧の一室に潜伏して居たのである。子はそれと感附いたから態と奧へ聞えよがしに大きな聲で『今や天子のお膝元に騷ぎが起つて、戒嚴令を布き軍隊を繰出すといふ容易ならざる時に、元帥ともあらうものが行先が分らぬとは何事でござる。主人歸宅せば三浦梧樓護衛に罷り出たと傳へてくりやれ』と怒鳴つて歸つた。昔から子は犬養を自慢の一品として稱揚して居るが、或時山縣は何故おぬしはアノ男の肩を持つのかと尋ぬると、子は開き直つて、卿は常に御用閥の謗を聞て天下の士を誤解し、心を塞うして其言に聽從しないから、衆怨の府となり延て國を誤るに及ぶのだとキメつけたので、山縣は苦い顏をして横を向ひたさうである。一昨年山本内閣瓦解後、子は目白に行つて大隈起用を說いた處が、山縣は妙な面をして可否を言はない。其時子は山縣の意中に淸浦あるを見て取つたから、淸浦といふ男は昔しお前の手許で使つた時と同じだと思へば大間違ひだぜと、散々ケナシ附けると、山縣は苦笑して話を他に轉じた。恐らく山縣に對してザツクバランに惡まれ口を叩き得るものは子以外にあるまい。

三浦子は若い時から一種の天分を有つた人で、奇兵隊に居た時、淸石の高杉もゾンザイに遇しなかつた。天性旋毛が曲つて居る處へ、陸軍を逐はれてからます〳〵反對横町に入り、人が右といへば左、左といへば右と横紙を破つて意を縱にするが、チヤンと守る處があつて、物の本筋を行くこと丈けは決して誤らない。誰の前でも皮肉な惡口をいひ、スツパ拔をいひ、棚卸しを爲し、少しも遠慮といふことが無い。一寸した坐談の中にも警句百出で、人物にも言ふことにも禪的機鋒と諢味とがある。山縣でも寺内でも權兵衞でも大隈でも、子の機鋒とヘラズ口には手古摺つて敢て逆らうとはしない。樞密院の寄合に出ても振つた惡戯をして一座居連をヘラ〳〵させることが間々ある。或時外相の内田康哉が樞府で外交經過を報告じて居ると、子は大きな欠伸を二つ三つ連發して『オイ高島、護談人形のお談義は暑苦しいのう』と、隣席の高島將軍を連出して別室で碁を打つて居た。又た昨年對支交涉で揉んだの時、大浦が樞密院に行つてペラ〳〵要得を得ぬ說明をして居ると、子は鉛筆を走らして『待ち網や雜魚まで馬鹿にしてかゝり』、『待ち網の後の始末や春霞』『ぢやによつて役者次第よ支那芝居』の三句を紙片に書いて 隣りの都筑馨六に渡し、之れを大浦の處へ持つて行けと言つたが、都筑も大浦に見せること丈けは止せと留めたさうだ。今度の覺書には三黨首各々記人調印したさうであるが、無遠慮な子のことだから、短兵急に覺書を突付けて否應なしに判を捺させたのである。

子は自ら浪人を以て任じ、隨つて浪人の氣分を解し、好んで浪人交際もすれば、努めてアバレ者の寄合に出る。容易に人に欺かれぬ點に聖智

的であると同時に、涙脆い處があつて人の世話をする點は情の人である。此浪人肌に加ふるに、彌次馬趣味と游俠肌とが子の一種の人格を形造つて居る。即ち一口にいへば子は天性の大彌次馬にして、又た政治的俠客である。七十といふ齡になれば、大抵のものは餘計な事に手出や口出をして苦勞を求めるよりも樂隱居をして後生願ひするのが普通であるのに、子はイザとなれば一肌脱いで面倒を見るし、世間が騷げば家の中にジッとして居られない。從つて齡の割に氣分が若く、今でも熱海に若いのを置いて曾孫のような兒を產ませたのは、老てます〳〵壯なる證據である。子が縄納簾を潜るのは有名な話であるが、是れに就て面白い逸事がある。或年朝鮮の首取りが子を追跡するといふので、家人が心配して外出をさせない。そこへ碁相手の浪人が來たから、オイ縄暖簾へ行かうやと家人には、成田不動のお守を見せて、是さへあれば大丈夫ぢやと安心をさせて家を出た。電車に乘ると丁度日暮方であるから電車は滿員で、眞ッ黒になつた職工が切符を急立てる。車掌は面喰つて四本も五本も手がありませんと言ふと、吊皮にブラ下つて居た子は、手が四本も五本もあれば化物だと半疊を入れたので、乘客は子の顏を見てドッと笑つた。今はあるか無いか知らぬが、駿河臺邊に『きよしの』といふケチな飲食店があつた。浪人が店の主人だといふので、支那浪人などが飲みに行つたが、子は時々入つて來つてネギマか何かで一杯傾けながら毒口を叩いたものだ。屋號も來やすいといふ意味から子が命名したのである。今でも同志の宴會へ行つて興が乘ると、都々逸を唄ひ裸踊をやつて、若いものを辟易させる。

子は飄逸自ら街ひ、殊更氣紛れをして快とする人でなく、其血管には一片の眞氣が溢れて居る。三黨首會合の企に就ては世間の一部に何か子に政治的野心でもある如く、又た背後に策士が附いてやらせた如く揣摩するものがあるけれども、國の現狀を餘所に見難いといふ眞氣と俠骨から出たに相違なく、若し何物か加はつて居るとすれば、或は若干持前の彌次馬趣味が交つて居るかも知れぬ。平生犬と猿の三人を一堂に握手せしめたといふ事は、迚も他の顏では出來ない芝居であるが、日頃男を賣つた蟠隨院――遠からんものは音にも聞け、近くば寄て目にも三浦の老將軍――が勸進元になつたればこそ此まで運んだので、俊傑時務を知るの果といはねばならぬ。

一言にしていへば子は痛快なる老人である。子が野武士の間に人氣があり、政界に一種の潛勢力を有して、特殊の位置を占めて居るのは、大久保彦左衞門と幡隨院と高杉東行とを搗交ぜたような風格があつて、七面倒臭い關門を突破る丈けの力と、木戸御免的の資格があるからである。政府も政黨も一閑翁に指導されるといふ事は變則のようであるが、一人位子のような師範役が控へて居るのも好からうと思ふ。子は色氣も名聞もなく、一に天下の指南番を以て任じて居るらしい。

▽三浦觀樹將軍の人物

石川半山

觀樹將軍三浦梧樓子の事は、曾て十五六年前に東京毎日新聞の當世人物評に於て、城北隱士の名を以て五十餘回に渉て批評したことが有るが、當代に珍らしい人傑で有て、兎ても今日の教育法では出來ない人物で有る、全く維新の風雲が産出したる一種特別製とも謂ふべき人で、其のあたりの出來合ひには無い人格だ。

山縣公の直系

我輩が初めて山縣公を目白の大御所と見立てた時、桂公を二代將軍、兒玉伯を三代將軍となし、而して此の三浦子を秀康とした事は、多くの先輩から首肯された所で有る、或る先輩は我輩の此批評を見て『三浦を秀康とは良い見立てだ、博士土肥慶藏の黴毒傳播に關する説に依ると、秀康は黴毒に感染して、鼻が落ちたと云ふ事だが、三浦も道樂の方にかけては、三百年前なら隨分鼻も落つべき男だ』と言つた、我輩は三浦子が果して道樂に於て秀康と匹敵するや否やを知らないが、其の山縣公に對する關係に於て、家康の長男たりし秀康の地位は、三浦子で有つたと思ふたのだ。

三浦子が山縣公と深い關係の有る事は、長州人の悉く知る所で有る、何しろ奇兵隊以來の關係で有て、山縣公が槍を以て、英佛の兵と戰ひ、腰を打たれて動けなくなつた時に、之を肩にかけて助けたのは三浦子で有つたと云ふことだ、佐々友房君が負傷した時に、國友重章君に助けられたと一對の話で、此の如き深い關係は切ても切れるワケの者ではない、されば維新の後、山縣公が陸軍の全權を掌握した時、三浦子は年齒尚少壯にして重要の地位を占めた者だ。

記録に依れば明治四年には既に陸軍少將で、兵部少丞で有つた、彼れは弘化三年の産だから、明治四年と云へば、尚二十六歳の青年で、早くも陸軍少將となり、明治九年三十一歳で廣島鎭台の司令長官、即ち今の師團長に任ぜられて居る、西南戰爭の時にも出征して、偉勳を奏し、凱旋の後勳二等旭日重光章を賜はつて居る。

西南戰爭の後、少將から中將へ昇進したる者は、僅かに五名で、谷干城、大山巖、野津鎭雄、山田顯義とそれから三浦將軍で有つた、小澤武雄、黑川通軌、野津道貫、福原實等の諸將軍は、此時大佐から少將に昇進した者で、三浦子の如きは陸軍に於ては餘程の先輩で有つたが、是れ全く山縣公と深い關係が有つた結果で有る。

陸軍失墜の事情

三浦子が何故に陸軍から退いたかと云へば、彼れが薩派と衝突した爲めで有る、抑も陸軍に於ける薩長の軋轢は、維新以來の事で有て、此の兩派は互ひに相對抗して居た、文官として薩の大久保が長の木戸に對抗したる如く、武人として薩の西郷隆盛は、長の大村益次郎に對抗し、其の後も薩長の將軍は常に相對抗して居た、黑田清隆に對して山田顯義あ

り、大山巖に對して山縣有朋ありしが如く、三浦子に對しては高島鞆之助子と云ふ對抗者が有つた。

山縣公が陸軍を薩派の大山公に明け渡して、内務に轉じた時、三浦子は陸軍の全權を再び長閥の手に受取らんことを畫策した、彼れは當時東京鎭台司令長官として、此の畫策を進行し、小松宮殿下を說き來りて、此の計畫を成功せんと企てた、明治十四年に大隈伯が岩倉公から有栖川宮殿下を透して、憲法創定の議を奏し、大に政治上の飛躍を試みんとして、却て薩派に叩き落されたる如く、三浦子も皇族を推戴して其の計畫を進めんとして、却て薩派に叩き落された、當時彼れの對抗者たる高島子は、大阪鎭台司令長官として彼れの計畫に大打擊を加へ、其の結果三浦子を熊本鎭台司令長官へ左遷することになつたので、彼れは斷然之を辭し、それから全く陸軍と離れる事になつた、之れは明治十九年の夏の事で、小松宮殿下が急に御洋行になつたのは、此の事件の後間もない者だから、當時世間では殿下も暫らく東京を離れて居た方が良いと思召したので有らうと理解したと云ふことだ。

朝鮮公使としての將軍

陸軍を去て後の三浦子は、宮中顧問官に任ぜられ、次で學習院長となつた、學習院長には谷子や曾我子も任ぜられたが、三浦子も亦此の任を受けた、然かし此の間に何等の特記すべき事も無かつた樣で有る、世間では一代の怪物が、學習院に蟄居をして居る位に思ふて居た樣で有る。

然るに日淸戰役が終て間もなく、彼れは井上侯に代て朝鮮公使となつた、之れは意外なる人物が飛び出した者だと思ふて居ると、忽ち又王妃殺害事件が突發し、彼れは捕へられて獄中の人となつた、三浦子が公使として京城へ赴任したのは、明治二十八年九月一日で其の十月八日に王妃殺害事件が突發し、同二十六日には廣島監獄に收監の身となつたのだから、彼れは唯此の騷動に參加する爲に出かけた樣な者だ、而して翌二十九年一月二十日には證憑不十分で無罪となつたが、其事件に關係した者は、岡本柳之助、柴四朗、國友重章、杉村濬、安達謙藏、山田烈盛、佐々正之等を初め、志士四十八人で有つた。

三浦子は此の事件の爲めに、全く伊藤公の感情を害した、故に伊藤公の存在する間、彼れは官吏となることは出來なかつた、伊藤公が薨去し、朝鮮併合の實が擧がつたので、山縣公の斡旋で、樞密顧問に任ぜられる事になつたけれど、伊藤公にして生存して居たら、今日と雖も尙浪人で有つたかも知れない。

浪人の隊長

朝鮮事件で浪人となつて以來、彼れは浪人志士の隊長となつた、今日樞密顧問官の重任に有りと雖も、尙其の門には浪人者の出入が絕えない樣で有る、彼れの意氣は天下の志士の衆望を集めるに適し、其の風骨は浪人共の崇拜を博する樣に出來て居る。

我輩は明治時代に長州から出したる三個の人傑として、品川彌次郎、鳥尾小彌太兩子と此の三浦子とを指摘したいと思ふ、此の三人は共に子爵で有る、何れも一種の氣骨が有り、何れも佛教信者で有る、鳥尾子は

禪宗、品川子は念佛を唱へ、三浦子は禪宗から眞言に歸依したのださうだが、何れにしても抹香臭さいことは相似て居る。而して三人共に政治に指を染めた、鳥尾子は中正黨を作り、品川子は國民協會を作り、三浦子は別に政黨は作らないが、非地租運動などは随分熱心に奔走し、今日と雖も、政治上の問題に好んで手を出して居る、三人共に學問も有り、識見も有り、弁も上手なり、少からざる崇拜者を有し、元老から畏敬され、常に侃々諤々の論を吐き、愛國の至誠を有し、而して其の言行が時々脱線する所は、誠に能く似て居る、品川氏と鳥尾子は既に墓の人となつて十餘年を經過して居るが、三浦子が一人殘つて、其の得易からざる人格を發揮して居るのは、我輩共の誠に喜ぶ所で、或る意味に於て彼れは國の寶で有ると謂ても宜しい。

三頭會同の發起人

三浦子が近頃三頭首の會同を發起したので、世間の評判區々として歸する所を知らないが、我輩は彼れが國家を思ふの至誠から發して、此の會合を催すに至つたことを疑ふことは出來ない。

犬養氏及び國民黨の窮境を憐れんで、之を救ふ爲めに之を發起した者だらうとの説も有る、三浦子と、犬養氏との平生の交情の親密なるを想へば、幾分か左様なる意味も無いとは言へないが、然かしながら彼れにして苟くも之れが國家の爲めに必要なりと考へない以上は、單に一人の利害や、一黨の消長を思ふて、此の如き事を發起することは無い。

彼れは此の三頭を握手せしめて、局面展開を策し、之を以て擧國一致内閣の前提となさんとせる者なりとの説が有る、甚しきは之に依て三浦内閣を夢想せりと言ふ者も有るが、之れは彼れの性格を十分に知らざる人の邪推で有る、我輩も彼れが之を擧國一致内閣の前提となさんとする心は、必ずしも無いとは言はぬが、然る時には其の頭に寺内伯を持て來る積りに違ひない、彼れの目から見れば寺内伯は其の弟分で有る、而して山縣公の直系で有る、彼れは寺内内閣の出現に對しては、之を望むべき十分の理由が有るので、彼れの胸中には或は之を描いて居るかも知れぬ、然かし三浦内閣などと云ふ事は、彼れの夢にも想はぬ所で、彼れは此の點に於ては清浦子や芳川子とは、少しく其の人格を異にして居る、陸軍の改革を行ふ時でも、彼れは薩派を排斥したる後の陸軍大臣には三好重臣將軍を推す積りで企畫を進め、自分が大臣になる積りはなかつた。ソコは一片の俠骨、名利の外に超脱して居る所が、彼れの價値の存する所だ。

又我輩の信ずる所を露骨に言はしむれば、三浦子を内閣總理大臣にしたら、それこそ大變で有る、朝鮮公使にしてさへアレだけの脱線をした人だ、内閣總理になつたならドンな途方もない事をやり出すやら分ッた者ではない、要するに彼れは意氣の面白い人で、浪人の隊長が一番適任だ。元來樞密顧問と云ふガラではない、從二位勳一等などと云ふ肩書からして、頗る不似合ひで有る、觀樹居士で褞袍を平氣でくゞる所に、彼れの無限の價値が有るのだ、權威赫々たる山縣元帥の前で、アグラをかいて啖呵を切る所に、天下一品の風骨が現はれるのだ、矢張り野に置

け蹇蹇草だ、亂世が生んだ英雄には、金ピカの大禮服がウツらない、唯其の無慾にして、愛國の至誠を有し、一片稜々の氣骨で、天下を睥睨して居る所は、誠に當代の珍で有る、我輩は國民と共に此の得難き人傑に向て無限の敬意を表する者で有る。

▽問題の人三浦觀樹

鐵拳禪

▼局面展開——斯う云ふ氣運が、何れの方面にも孕んでゐる。殊に此の氣運が政界に激しく動いてゐる。幾たびか現内閣の危機が去來し、第三黨組織がおぢやんと成つても、現狀に甘んずる事の出來ない焦躁の氣味が、梅雨晴の暑さよりも強く政客の神經を尖らせてゐる。現内閣倒壞の低氣壓が去つたかと思ふと、新に現狀打破の低氣壓が襲うて來る。陰晴豫め測られざる慌しさ、騷々しさは、宛ら今日此頃の天候に似てゐる。政界の梅雨期の去ると共に、果して局面展開の光明を認め得るやは疑はしいが、此の活動裡から何物かを生み出すであらう。

▼政界の低氣壓は、陰謀團の櫻田倶樂部から小石川の高坂方面に移動しつゝある。全く別個の低氣壓のやうに見えるが、矢張陰謀團の低氣壓に促されてゐるのである。で、目下低氣壓の中心は、高坂方面に在つて、専りに政界の興味を唆つて居るが、驟雨となるか、暴風雨となるか、まだ分らぬ。驟雨一過の後、塊が固まれば結構だが、暴風雨と變ずるに於ては、現内閣の危機を豫想せざるを得ない。其の低氣壓の中心人物は、即ち中高坂の高臺に第宅を構へて居る觀樹將軍三浦梧樓子である。

▼三浦子は山口出身の軍人だが、奇矯狷介な爲めに、長閥と親しみが薄く、從て山縣一派から毛嫌されて居た。何故毛嫌されたかと云ふに、其の理由は二つある。一つは、彼れが無遠慮に長閥の成す所を批評し、其の反感を買ふやうな事を敢てしたからである。も一つは、長閥の好まざる政黨に關係し、若くは浪人の間に一種の勢力を持つて居たからである。曾て憲政本黨の客將であつた際、山縣公等は、彼れの成す所を見て眉を顰めた。彼れを可成遠ざけるやうにした。が、其後彼れは政黨と手を切つたので、漸く樞密顧問官の椅子を與へられ、山口出身並の取扱を受くるに至つた。或は祭り込まれたと云ふ方が適當かも知れぬ。

▼三浦も到頭骨抜きにされたと評されたのは、此の時分の事である。彼れの、長閥に酬ゆる皮肉と毒舌とは漸次尠くなつたが、浪人との往復は依然として繼續された。浪人會の開かれる毎に、彼れは必ず顏を出した。彼れは談話の中心であつた。彼れと頭山滿とは、浪人會に缺くべからざる二つの顏であつた。浪人會の領袖——若し然う云ふ稱呼を許すならば、彼れは確かに浪人會の隱然たる領袖であつた。頭山とは無二の莫逆で、屢往復して居た。默せる頭山と、毒舌の三浦とは、好個の對照であつて、而も不言不語の間に肝膽相照して居たのであつた。

▼頭山は長閥の一敵國である。其の手段の立憲的、非立憲的の如何は暫

、賦き、斯うと思ひ立てば何を遣り出すか分らぬ。福岡の玄洋社が政府者の心膽を寒からしめ　と同じ意味に於て、頭山も亦長閥の心膽を寒からしめた。彼れ一個を怖れるよりも、寧ろ彼れの一指頭に動く生命知らずの乾兒の多いに怖れて居るのである。三浦子は然う云ふ點に於て、浪人の間に親分視されるのでは無いが、山口出身であり乍ら長閥に屈從せぬ、一種の叛骨を買はれて居るのである。其の叛骨が又、尠からず長閥に憚かられて居るのである。

▼最う故人となつたが、革丙將軍高島鞆之助子も其の叛骨あるが故に、浪人の間に持て囃されて居た。彼れは薩州出身である所から、長閥に當らせる必要上からも、多くの政客に指目されて居た。山本權兵衛伯失脚後は、殊に政友會から囑望されて居た。國民黨も亦、彼れに心を寄する者が尠くなかつた。が、何分にも彼れは借金の山を積んで、手も足も出ないやうな境遇にあつたので、折角擔ぎ出さうとしても擔ぎ出し得なんだ。彼れ自身も一度は、内閣を組織しようとの野心がないでも無かつたが、黄金の翼を持たぬ彼れは、思ふやうに活動し能はなんだ。

▼革丙將軍は觀樹將軍に比すれば、何程か懐合の大きい所があつた。豪傑風な所があつた。金錢を貯ふるに巧みな薩州人には、珍しいほど無頓着であつた。觀樹將軍は狷介ではあるが、長州人だけに却々悧巧な所がある。猜疑狩で、怒りつぽいが、夫れは我儘の然らしむる所で、實に細かい所まで氣の付く性である。一は蠻骨で、豪放で、茫漠としてるが、一は奇骨奇行の上に、何となく理智が緻密に活いてるやうに見える。夫れだけ革丙將軍よりは才子肌で、包容力が乏しいやうに思はれる。長閥に反抗するやうに見えて、實は大に反抗し得ないのも、其の才の有るが爲めであらう。

▼此の兩叛骨は、往々疾風迅雷的の決斷を敢行するが、其の間に幾分の距離がある。高島子は、露骨に蠻勇を揮つて、前後左右に多く注意を拂はなんだが、三浦子の武斷には智識が伴つてゐる。落著く先を見測らつて、事を運んで行く。其處が、前者のヤッつけろ主義とは、聊か趣を異にするのである。彼れは韓國王妃殺害の嫌疑で、禁錮の厄に逢つた爲めに、天下の耳目を聳動したが、證據不充分で釋放された所を見ると、ヤッつけろ主義の無鐵砲では無かつたやうである。駐韓公使の遣り口としては亂暴であつたかも知れぬが、之が爲めに彼れが一時に高名となり、浪人側に持てる事になつたのである。

▼高島子は或は新に芽を吹かうかと豫期された際に、病に罹つてころりと斃れた。非政府黨の面々は失望の色を湛へた。其の頃より政界の眼は、三浦子に注がるゝやうになつた。高島ほどの大きさは無いが、其の奇骨を適所に用ゐれば、必ず奏功すると思はれたからであつた。所謂擔ぎ甲斐があると認められたからであつた。國民黨でも、浪人でも、局面展開は、三浦の力を借らねばならぬ者のやうに思つて居た。陰謀團の連中も亦、彼れを利用しようと目論んで居た。元老と對抗させるにも、現内閣を倒壞するにも、彼れを押立てる事が、黨人乃至浪人の單獨運動よりも、より多く便宜であり、有力であるからであつた。

▼三浦子は自ら、二十餘年間世を退いて、側面から時代の變遷を眺めて居たやうな事を云つて居るが、彼れの活動らしい活動をやつたのは、駐韓公使時代だけであつて、其の以前にも何等大なる活動をやつて居ない。彼れは軍人であるから、軍事上には相應に働いて居たが、政界には夫れ程勢力ありとも思へなかつた。最近二十餘年間が時代の傍觀者であつたとすれば、其の以前も矢張時代の傍觀者に過ぎなんだ。今日の地位は、發老職のやうなものではあるが、比較的政治上に發言するを得る境遇に立つてゐる。山縣有朋公とか、井上馨侯とか云ふ巨頭が、元老の專權を振廻して居たから、彼れは凝と世に拗ねて居たのであつた。然るに、井上侯が逝き、山縣公が危い今日、彼れが三政黨を操縱せんと、暗中飛躍を試みたのは、決して偶然ではない。

▼理窟は何とでも云へる。心私かに將來の内閣を組織しようと思つて居ても、國家の爲め眞に深憂を抱いて、黨派的軋轢を排除するに努めたとも云ひ得るのである。三浦子の變心は其處にあつたかも知れぬが、彼れの周圍者は尠くとも、局面展開の爲めに彼れを利用しようとして居た。井上侯も國家の爲めに、大隈内閣の外交を攻擊した。三浦子も國家の爲めに、加藤外相の所置を痛罵した。が、其の國家の爲めの裏面には、陰謀閣の煽動があつた。浪人組の畫策があつた。一侯一子の變心は、夫等の輩に由つて大に高調されたかの感があつた。されば其の攻擊や痛罵は、政府者に對する誠意の忠告と云ふよりは、寧ろ無責任な大隈伯等に任せ切れないと云ふ、内閣倒壞の氣勢が見えて居たのであつた。

▼井上侯は唯譯もなく癇癪玉を破裂して居たが、三浦子は擧國一致内閣を組織しようとの考案を抱いて、切りに奔走した。貴族院の平田東助子、衆議院の長島隆二、臼井哲夫等の相呼應するが如く飛躍をやつたのも、此の時分の事であつた。其の名分は國家の爲めであつたが、其の目的は大隈内閣を倒壞するにあつた。山縣公の功名心は尠からず動いて、元老總出の擧國一臨內閣を組織しさうに見えたが、政黨の軋轢を緩和するに良策を發見し得なんだので、桂公の最後を繰返すやうな事があつてとの懸念から、如何に三浦子や乾兒等の勸誘でも、之ばかりは尻込みして御免を蒙つた。元老總出の活劇は、ほんの筋書だけで、昨年の八月末日に畫餅に歸した。夫れ見ろと云はぬ許りに、大隈伯は民意未だ吾輩の内閣を去らずと、自慢の鼻をうごめかした。

▼三浦子の變心は、大隈内閣の對支外交に萌してる樣である。彼れは政友會の如く政權爭奪の爲めに、現内閣を倒壞するのでは無く、國論を統一して對支外交を甘く運びたいと云ふにあるやうだ。夫れは屹度國民黨の犬養毅君や浪人組の頭山滿君あたりと、脈絡を通じて居るからだと思ふ。大隈内閣が改造されて、早稻田の家の子郎黨が大臣の椅子を占め、官僚分子が如何に少なくつた所で、三浦子の擧國一致内閣の希望は變らないのである。元老を纏める事が出來なければ、黨爭を緩和して、元老の容喙を防止する事にしようと考へた。遂に元老活用が一轉して、元老排斥となつたのである。

▼三浦子の背後には、犬養君が隱れてゐる。元老の容喙防止は、彼れの

手を拍つて歡ぶ所のものである。政友會の原敬君でも、同志會の加藤男も、共に異議の有らう筈はない。三浦子と原君の意見は、汽車の遷延に於て交換されて居る。加藤男と三浦子の會見は、桃山の片岡直温邸で行はれて居る。昨秋の御大典は、端なくも浪人會の領袖三浦子と、三政黨の首領とを接近せしめたのであつた。爾來徐々に其の歩を進めて居たが、對支問題の解決愈よ急を要する場合となつたので、去月二十四日、三派領袖の初會を開いて、相互の意見を交換するに至つた。案ずるより生むが易いと云ふやうな喜びが、三浦子の皺の多い眼尻に浮んだ。

▼此の初會に於て、稍前途の光明を認めた彼等は、更に第二回の會合を去月三十日に催し、次で本月六日第三回の會見を遂げた。其の場所は、無論肝煎役の三浦子の邸內であつた。最初は好い加減な話で落合つて居ても、愈よ取極めとなれば、態度の鮮明するは何種の會合にもある事だが、矢張三浦邸の會見にも、取極めの段となると、非常な八釜敷い議論があつた。夫れを一々取り上げると、迚も纒まるもので無いから、大體の一致點に於て、茫漠な申合をして、兎も角も鬼を付ける事となつた。

▼其の覺書は甲號と、乙號との二つになつてゐる。甲號は『外交及國防の方針を一定し、之が遂行の途に當りては各自黨派の消長に關せず、督つて一致協同するは勿論にして、外界一切の容喙を許さざる事』と云ふので、外交及び國防を黨爭外に置き、元老の干渉を排除するのが主眼である。乙號は『對支方針は、東亞永遠親厚の目的を以て、相互利益の増進を圖る事。國防費は、相當の限度を定め、其範圍に於て顯棒處理せしむる事』の二項に分れ、一は對支問題の根本策を樹て、一は軍閥の專横を制する爲めの要件である。何れも今日の如き非常時に際し、擧國一致の必要を認めたからの申合である事が明かである。

▼覺書の字句には、可なり非難すべき點はあるが、其の精神は飽までも非常時に際する申合で、三浦子及び三首領が國防や外交の事を私議すると云ふのでは無い。夫れを黨爭の外に置くと云つても、黨には黨の歴史もあり、行掛りもあつて、然う單純に考へる事の出來るもので無いから、之も擧國一致を要するが故に一致すると見るがよからう。されば內政は黨爭に委するが、國防外交の二問題だけを特別に取扱ふとの意では無からう。外界一切の容喙を許さずと云ふも、黨人の意見を聽かず、國民の聲にも耳を閉ぢようとの專制觀念ではなく、唯之まで干渉、壓迫、制肘のあつて、情弊を醸す所の元老の監視から脫すると云ふ意味であると思ふ。此の排元老は何人も望む所で、之を實行に現はす事が出來れば誠に結構なことである。

▼然るに現下政權を握つてる者は、大隈伯以下の閣僚である。閣外の一子三首領がどんな申合をしても、彼等が依然として元老の鼻息を窺ひ、國防及び外交に關しても亦彼等と見る所を異にする以上は、如何ともする事が出來ないでは無いか。與黨の加藤男が居るから、政府者も亦此の覺書の趣意に同意し、擧國一致事に當るだらうと思ふのは、見當違ひである。現に與黨の中正會や公友俱樂部は、同志會の態度に反感を抱き、尾崎法相の如きは三首領の申合を非難しつゝあるでは無いか。蓋し尾崎

君の剛慢な態度を表示するに至つたのは、其の會合に除外されたからの不快に起因する。此の與黨の漸く感情の疎隔するを見て、舌を出して笑つて居るのは陰謀團の連中である。

▼三首領の申合を實行するには、先づ現内閣の同意を經るか、然らざれば大隈伯に圓滿辭職をして貰つて、彼等自身が内閣に立つ事で無ければならぬ。即ち現内閣を倒して、擧國一致内閣を作らうとの底意が無ければ、こんな申合は出來ない筈である。縱令三浦子には其の野心は無いとしても、原君にも犬養君にも、恐らくは加藤男にも其處まで進むの考はあらう。殊に此の會合の筋書は、犬養君に依つて書かれたと見るべき形跡があるから、彼れは必ず三浦子を擁して内閣を組織する考を持つて居るだらう。大隈伯は曾て民黨糾合の上に内閣の土臺を据ゑる事が出來ようとの期待で、内閣を組織するを得たのだから、三浦子が三首領と握手する以上、内閣組織の不可能ならざるを信ずる。三浦内閣説は、つまり此の邊から生れ出たのである。

▼今次の會合に尾崎君を除外したのは、三浦内閣の顧觸の中に彼れを入れない爲めだと觀測する者が多いやうだ。して、大隈伯は何うするかと云ふに、伯は特に侯爵となり、樞密院に祭り込まれるだらうとの事である。併し之は將來三浦内閣が出現するとしての觀測で、伯が最う一兩年も頑張ると云ふなら別問題である。今議會の難關は伯にも豫想する事が出來ようから、前途に對して思慮を費しつゝある事と思ふ。或は彼れは其の高慢の鼻を廣く開いて、現内閣を基礎として擧國一致内閣を造らうと云ふかも知れぬ。が、之は談容易にして、行ふに至難な事と思ふ。如何に伯は民意を高唱しても、國民は久しく彼れの無責任に飽いてゐる。閣僚尾崎君の變說改論に呆れてゐる。一たび現内閣を打破して、其處に擧國一致内閣なり、理想内閣なりを新立して、局面展開を圖るより仕方が無いのである。

▼三首領の申合に呼應する爲めか、或は對抗する爲めか、近日大隈伯の早稻田邸に軍事外交懇談會が開かれた。會する者は、陸海軍當局者と外務當局者とであつた。して、其の會合の企てられた理由は、從來軍事外交の方針に關し、外務と陸海軍と往々扞格があつて、兎角感情の疎隔を來す事もあり、他方には三黨首領の申合もあり、此の際内閣は一層部内の統一を圖る必要あるからだと云ふ事であつた。一見呼應のやうであるが、此の主唱者の參謀次長田中義一君だと云ふを聞けば、暗に對抗の勢を示すものとも見られる。同じ軍閥出身でも、三浦子などの出婆娑るのは、山縣系乃至官僚系の喜ばない所である。三首領申合の排元老、軍備制限等に對しては、尾崎君と違つた意味に於て、不快の感を抱いて居る。申合の實行を不能ならしめる策略位は、暗に講じつゝあるのである。

▼三浦子の出現を耳にしては、寺内伯も安閑として居る譯には行かぬ。彼れ自身は夫れ程痛切に感ぜぬにしても、其の周圍者が承知せぬ。彼れの出京を促すの羽檄は、頻りに朝鮮に向つて飛んで居る。伯も何やら近く中央部に乘り出して來るさうだ。此の行他意あるに非ずと云つてるだけ、夫れだけ臭いのである。寺内内閣建立の念願者は、絕えず暗中飛躍

を試みてゐる。山縣公が弱くなつたに付けても、何うかせねばならぬとの思案に、銘々の頭に浮んで居る。寺内伯の下に、大臣にならうと云ふのは、先づ後藤新平男、大石正巳、原敬、仲小路廉、井上勝之助侯等ださうだが、政友會を與黨として、難關を乘り切らうとするのは容易で無い。縱令貴族院の多數が援助するとしても、一寸考へ物だらうとの事である。

▼すると、矢張三浦子の擧國一致內閣で、加藤男、原、犬養の兩君を列ねるのだが、之には軍閥と貴族院の反對がある。擧國一致は名有つて實の無い事となるが、三浦子の伴智の武斷主義で、何とか旨く新しい途を拓いて行くかも知れぬ。犬養君を外務に据ゑて、對支問題の根本策を樹て、夫れを遂行させたら面白からうと思ふ。彼れは僅かに十七名の黨員を率ゐて、他の二大黨首領と折衝し、克く自分の意見を通じて居る。今次の申合は、殆んど國民黨の主張を基礎としたのでは無いかとさへ思はれる。犬養君も從來の拗れ方を改め、此處一番大に腕を揮つて一花咲かせてから、或は咲かせる事が出來なかつたなら、其の時こそは政界に見切を付けて、書道や刀劍道樂に隱れたら可からうと思ふ。(大正五、六、一八)

▽晩年の海舟翁に似てゐる

杉浦重剛

私は三浦將軍とは數十年來交際を續けて居るけれども、それかと云つて別段入懇な間柄といふものではない。唯時々將軍の門を叩いて、精神上の先輩として其敎を乞ふ位の事である。それも年に數回と言ふに過ぎないから、將軍の日常に就ても世間に傳へられてゐる以外に特別な事を知つてゐる筈はない。殊に私は育英の事業に關り、數年前より又東宮御學問所御用掛りを命ぜられてゐるので、政治の方面には全く交涉がないから、今度の將軍の行動に就ても、新聞が報道した以上の事は判らない。唯、將軍の今日までの地位と云ひ、其政界に對する態度と云ひ、飽くまで世間の蔭に隱れて表面に現はれず、而かも隱然諸方面に目を注いでゐた所は、どうしても晩年の勝海舟翁其儘であるやうに思はれる。强いて言へばまづ此位である。

▽三浦の殿様

繩暖簾菊の屋主人

三浦の殿様は手前共へは左様、七八年前からゐらつしやつて下さいま

す。大抵は袴をはいて居られますが、袴羽を着て來られる時もありますので、初めのうちはそんなエライお方とは少しも存じませんで、柔術の先生か保護師ぐらゐに思つて居りましたところ、後になつて『あのお方が陸軍中將子爵三浦觀樹將軍だ』と承りまして、家内一同びつくり致しましたやうな次第でした。何ういふキツカケから手前共のやうな處へお出で下さるやうになりましたのか、其處のところはよく存じませんが、なんでも最初は或骨董屋さんが手前共を紹介して下さつたのではないかと存じます。近頃は餘りお出でになりませんが、四五年前は始終ゐらしやつて下さいました。其時分は相撲か何かのお歸りにはきつとお立寄りになりました。御散歩のついでにブラ〳〵とお一人でお出での時もあれば、御內樣御一同、若御新造樣まで御一所にお出での時もありました。其中でも殊に骨董屋さんとはよくお出でになりました。伊豆の御別邸の方へお出ましになる時などは、『伊豆の方には貴樣の內のやうなよい魚がないから』と、色々の魚を御註文下さいますので、手前共では汽車でお送り致しましたことも御坐ります。又直接に小石川の御屋敷へ御料理を持つて上がる時もありますので、手前がまゐりますと、皆樣が『上がれ〳〵』とおつしやつて下さいます。先日お客樣が御座りましたね。はい、あの犬養樣や加藤樣原樣がお出でなさつた時です。その節の御料理も手前共に御註文下さいました。あのお客樣は何方もお酒をお召し上がらないのですか。なんでも殿樣丈けがおあがりなさるのだとか、その樣なお話を承りましたがね。

手前共も只今こそこんな二階建なんかで商賣を致して居りますが、丁度五年前までは誠に少さい汚い掘立小屋で御座りました。殿樣には其時分よくお出で下さいましたので、矢張り他の者と同じやうに特に親しくお掛けになつて、左樣お銚子は二本ぐらゐの程度で、ちびりちびりとおあがりになりました。『乃公が貴樣の處へ來るのは料理がうまいからといふ丈けぢやない。貴樣が其處で料理を造へて居るのを見ながら、又みんなの話を聞きながら、儀式張らずに自由に食ふのが、なんとも言へない面白味だからだ』とおしやつて居られますが、全く殿樣は我々下々のくだらぬ世間話をお聞きになつたり、又八公や熊公と打ち解けて話し合つたりなさるのが御愉快と見えまして、見も知らない者とでも、お話がはずんで調子がうまく合つた時などは、すぐ其場で、字を書いてお遣りになることなどもありました。又或時こんな話もありました。それは殿樣が淺草の仲店の通りを煙草をスパ〳〵燻ゆらして步いて居られますと、半纏着の兄イが通りかゝつて、煙草の火を一寸かしてくれと言ふので、殿樣も氣輕に煙管を啣へたまゝ兄イの啣へて居る煙管に火を移して遣らうとなされたが、うまく移らないので、兄イはじれつたがつて其まゝ行つて了うとしますので、殿樣は『まア待て』とお止めになつて、袂からマツチを出して御自分で擦つて兄イの啣へて居る煙管につけてお遣りになりました。ところが兄イは『旦那は苦勞人だね』と言つて、其まゝ行つて了つたさうです。殿樣はこの『旦那は苦勞人だね』と言はれたのを、非常にお喜びになつて、其歸りを手前共へお寄りになつて、お酒をお上

がりながら、嬉しさうに其話をなされました。

殿様は又知らない事を知つたか振りをするのが極くお嫌ひで、『知らないことは知らない』と言ふのがお好きな人です。それについてこんな話がありました。それは殿様が伊藤さん（博文公爵）のお弔ひにゐらしやつた時のことです。其日はなんでも雨が降つて居つたさうですが、殿様はお一人で歩いてお出でになりますと、後ろから名前は忘れましたが或大臣が馬車で追つて來て、殿様を見ると直ぐ馬車から下りて、大臣自身で殿様に傘をさしかけて、一所に式場へ行かれました。ところが式場の入口に居る門番が、殿様が這入らうとなさると、『お前はなんでもないから、這入ることはならん』と突除けたさうです。當り前の者なら腹を立てるところですが、殿様はそれが却つてお氣に入つたと見えて、其お歸りに手前共へお出でになつて、嬉しさうに其話をなさつて、『知らないから仕方がないのぢや。又さうするのが當り前ぢや』とおつしやりました。

殿様とよく手前共にお出で下さつたお方は、田中舍身様、伊東知也様、古島一雄様、櫻井熊太郎様などでした。殿様は此方々をお相手の時にはよく、『元老などゝいふ奴は、高く止まつて何時も上の方ばかり見て居るから、下の方の事は一つも知らぬ。乃公は下の方を見る爲めに縄暖簾に飛び込むのだ』なとゞ言ふて居られました。左様、なんでも明治四十三年の冬のことでした。其時殿様はゐらつしやいませんでしたが、此等のお方が七八人御一所に夜遅くになつて、手前共にお出でになりました。なんでも惑星會とか浪人會とかゞあつた其二次會に、『観樹将軍の縄暖簾を攻撃しよう』といふのでお出になつたのでした。方々を歩き廻つてお探しになつて、やつと手前共をお發見(みつけ)になつたのださうです。其時は二時頃までお飲みになりまして、紀念の爲めだからといふので、之を書き下さいました。それは、

『よい事を菊の屋なれば十六か十八羅漢御ざれ皆様』（小久保城南）

『終夜(よもすがら)たづねあぐみし其宿を思ひがけなく知る今宵かな』（佐々木照山）

『月夜よしあちらこちらを夜遊屋まづは三浦の里に來にけり』（犬養木堂）

『惑星がとんだ所の酒盛や
醉ふた同志の縄暖簾
是もつながる縁かいな
お染はどこぢやの
はなうたでエンヤラ
ヤットコラサの是わいな
先は菊屋へ着きにけり
先は菊屋へ着きに鬼』（鈴木天眠）

それから二三日して殿様がゐらつしやいましたから、その話を致しまして此書をお目にかけますと、『彼奴等(あいつら)は政界の落武者で可哀相なものぢやから、只でうんと飲ましてやれ』とおつしやりました。只今縄暖簾の代りに玄關口にかけて居ります白麻の暖簾に、あの『暖簾考辨』とい

ふ字をお書き下さつたのも其時でした。之はなんでも易の何なのださうですが、手前共にはなんの事やら解りません。それから又二階にかけて居りますあの額も、殿様がお書き下さつたのです。

形影如蓬轉
窮通運命奇
放吟時過酒
任他呼狂痴
　巳酉秋日　碌川隠士

最初お書になつた時には、此の中の一字（『過』の字）が拔けて居りましたので、後からお書き加へになつたのでした。

▽三浦觀樹と大久保彥左衛門

黑頭巾

其一

●子三浦梧樓は竊に、「大正の彥左衛門」を以て自ら任ずるの志ありと傳ふる者あり。吾輩は、此の說の眞僞を保證せず。然れども若し此の說をして眞ならしめば、誠に聖世の祥事なり。而して彼の外、能く「大正の彥左工衛門」たるを得可き者無く、彼も亦た、かくの如く自ら任ずるを以て、彼の晩節を効す所以なりとせずんばあらず。

●彼の智勇、武勳は彥左衛門に讓らず。彼は明治以來、陸軍先進者の中に於て、戰術家としても、軍政家としても、錚々者たるを失はず。將帥としては彥左衛門の上に在り。尤も彥左衛門は將帥たりし事無し。然れども固より將帥の器なりし。

●彥左衛門には三河物語の遺著一卷あり。此の書が、能く三河武士の眞面目を發揮し、吾が武士道の發達に貢獻したる事尠からず。吾輩を以て見れば、近世三百年間に於て、三河物語と、薩摩の「關ヶ原御合戰進退祕訣」と、及び肥前の葉隱集とは、武士道に於ける三名著なりといふ可し。

●觀樹、學問文事、固より彥左衛門の上に在り。彼が禪に於けるは何程の造詣ありやを知らず、禪に凝りたればとて、高僧、善智識たるには遠し。然れども多く佛書を讀み、禪機を談ず。彼は是程の學問文事ありて未だ世道人心に影響するに足る可き一卷の著書あらず。此の點に於ては、彼は彥左衛門に對し、全く遜色あり。

●彥左衛門の著作といふは學問文事に意ありしに非ず。三河物語を見れば、述作の動機は炳焉たり。彼は死して朽ちざる所以の精神を披瀝したるなり。披瀝せずんば已む可らざるものを披瀝したるに過ぎず。大正の彥左衛門」を以て任ぜん者は、また其の眞精神を披瀝して後世に傳ふるに足る可き述作一篇無かる可らず。

●彥左衛門の眞面目、後人の眼中に躍如たるを得るは、必ずしも講談の大久保武藏鐙の傑作あるが爲に非ず、實に三河物語あるが爲ならずんば

あらず。觀樹居士の爲に武藏鐙を作る者は、或は之あらん。三河物語は彼自ら作らざる可らず。

其二

●大久保武藏鐙に見たる彦左衛門は極めて機智に富みて、而して如才無き人と見ゆ。堂々の論、奇警の言。實に富婁那の辯あり。觀樹は、才辯彦左衛門の下に在らず。彼の話才は驚く可し。彼の話才、恐らくは、近來の政治家中に獨歩する者なるべし。

●若し、尤も眞摯に、彼の聲調、話調を寫し得る者あらば、觀樹話錄の興味は、優に、大久保武藏鐙の上に出でん。元老先輩者の懷舊談は、史料として有益なるもの少からず、感興湧きて已まざるは、觀樹の舊話に若くもの無し。伯大隈は能辯にして、能く舊事を語ると雖、觀樹に比すれば一籌を輸す。乙は鯛のあら煮の如く、甲は鯉の洗ひの如し。一は和製のサーデンにして、一はからすみなり。

●觀樹の話才、啻に其の構想の妙なるのみに非ず、其の記憶の精詳なるも亦た人を驚かすに足る。彼は奇警なる觀察、批判の力と、非凡なる記憶力を有す。

●伯大隈の舊話は、一の著述たるを失はず。著述といふよりも編纂なるべし。彼はかねて種々の材料を參酌し、自己の記憶を經緯して、一篇の舊話を組織す。觀樹は書史を讀まず、直ちに其の記憶に探りて、話す。故に、觀樹の話才は獨創なり。編纂に非ず、創作ならずんばあらざるなり。

●觀樹の話才と、其の說話の興味とは、或は、彦左衛門以後始めて見たる第一人なるやも知れず。殊に此の二人者の話調が、殆んど全く罵倒錄なる事は、符節を合するが如し。

●彦左衛門の說話といふものは、罵倒錄なり。觀樹の談鋒、つねに罵倒に流る。彼は人を罵倒し、世を罵倒し、罵倒に、興、乘り來る時、舌端、火焰を吐くかと疑ふ。舌、動くこと、眞に大蛇の如し。彦左衛門も或は此の如くなりしやも知れず。

●彼が舊話を試むる時、維新以來の天下の諸豪傑、彼の舌端に飜弄せられ、罵倒せられ、高杉晉作を除く外、顏色あるを得る者、一人も無し。所謂諸豪傑の槪ね虛名に過ぎざる乎。彼が舌の偉なる乎。抑も生ける觀樹をして、此の如く敬服せしむるを見れば、高杉の人物、想像するに餘あり。

●彼の眼を見よ。彼の目、彼の舌。警句湧くが如く、罵倒を逞しくし來る時、鋭鋒、無敵の槪あり。彼も亦た一世の才なる哉。

其三

●明治以來、罵倒の大才二人あり、觀樹と海舟となり。海舟は、舊幕臣なれば、多く彦左衛門に似たる可くして、却つて觀樹の罵倒こそ彦左衛門に相似たるは、其の氣質、出身の然らしむるにも因るべし。

●海舟は、稍、哲學的なり。觀樹は禪を好むと雖、劍氣を帶ぶ。當年、

奇兵隊の驍將たりし而目、彼の談鋒の中に在り。海舟に海軍奉行たりしと雖、實戰の人に非ず。

●海舟には野趣無く、觀樹には野趣あり。共に樞密顧問たりしも、海舟は隱居趣味あり、觀樹には浪人趣味あり。伯大隈も觀樹と同じく野趣あり、田舍趣味あり。然れども伯大隈は脂濃くして、垢脫けせず。

●話題の尤も廣博なるは伯大隈たる事、論莫し。海舟之に次ぐ。人世を說くの事に至りては海舟は更に博く、深し。觀樹が得意の話題は、殆んど人事、政治に限らる。話題を同じくし、而して其の局面の狹くして、銳利を極むるは、觀樹と彥左衞門と尤も相似たる也。

●吾輩の見たる觀樹の罵倒錄の中、第一傑作と稱す可きは、大正三年元旦號の日本人に載せたる觀樹將軍人物觀なる可し。木堂、咢堂、立雲、天臺諸人の人物觀を併せ載す。流石の木堂の毒舌を以てすと雖、之を觀樹の人物觀に對照すれば、陣笠たるを免れず。是等の諸人の舌鋒、能く觀樹の壘を摩する者だもあらざるなり。

●罵倒の趣致は毒舌に非ず。毒舌と罵倒とは自ら別物なり。罵倒には愛嬌無くんばある可らず。愛嬌ある罵倒は、人をして聽くことを樂しましむべし。此の意味に於て、罵倒の上々なるものは、自から藝術なり。觀樹も彥左衞門も、其の罵倒は、藝術の妙境に入れり。此の二人者の罵倒は天品たるを失はず。自から一家の風調を成し、他人、其の範圍を窺ひ得ず。

●木堂は毒舌なり。毒舌は人を傷く。罵倒は必ずしも人を傷けず。雄辯家と雖、必ずしも罵倒を能くせず。伯大隈は雄辯家と雖、毒舌は木堂に及ばず。罵倒は遠く觀樹に及ばず、唯だ多辯は遙に二人者の上に出づ。

●伯大隈には、時に、箝口の必要あるべし。木堂の毒舌は双刄なり、敵を刺し、併せて味方を傷る事あり。觀樹の罵倒は、必ずしも人を傷けず。

●觀樹の罵倒が人を活殺、吞吐するは、大蛇の如くするには非ず。壺中仙人の如くするものならずんばあらず。斬ると見えて傷かず、吞むかと見えて、また吐く。麁造たるを失はずと雖、又た一の快心事たらずんばあらず。

●吾輩、時々、彼の談を聽きし事あり。彼の眼、爛々敢て聲色を動かさず、悠々、綽々然、奇句、警句、口を衝いて發する時、人をして恍惚として、其の罵倒に醉はしむるなり。

其四

●罵倒の妙は、其の辯に非ず、氣合なり。故に、速記錄を以て、罵倒の極致を想見することを得ず。能辯は、或は、速記錄を以て足れりとすべし。罵倒の妙は、目睹するを要す。吾輩、觀樹に依つて、彥左衞門を想像す。

●伯大隈には能辯あり、這般の氣合無し。氣合は劍氣なり。禪學の語錄より來らず。觀樹の機鋒を禪に得たりとする者あらば誤れり。彼の機鋒は劍氣より來る。禪に依つて劍氣を練磨するのみ。

●觀樹と得菴と、木堂との三人者は、同氣相求むるところあり。稍、類型の人物にして、悉く異采あり。觀樹は木堂を許して、百世稀出の一人

といひしが、觀樹も得菴も、齊しく百世稀出の一人なり。彼が木堂を珍重するは、自から珍重する所以たらずんばあらず。

●此の三人者は、皆尖りたる人物なり。其の中、風調、自から異彩あり。若し塔を以て、此の三人者を象徵せば、觀樹は三角塔に似たり。尖りたるも、底に膨味あり。得菴は、天王寺の五重塔なるべし。亭々然として、蜿偉の觀あり。木堂は、愛宕公園の伊能忠敬碑乎。尤も痩せて、尤も鋭く、尖りたり。

●三人者の比較は暫らく措く。觀樹は、三人者の舌才の中に、傑出したる一事を有す。比喩の妙是なり。實に、彼が比喩は、彼の天才なり。然れども其の比喩の妙なる所以を、解剖せば、彼が自然觀察の精鋭なると、彼が學究的臭味を帶びざるとに歸著すべし。

●嘗て聞く、帝國憲法發布の時、彼、新聞記者に語りて曰く、憲法は、青大將を竹筒の中に入れたる如き乎。聽者驚く。彼曰く、曲がろう曲がろうとするを、餘儀なく、眞直に行かしむるなり。

●又聞く、彼、木堂を評して曰く、木堂が國民黨を擁するは、猿が柿を有するが如し。敢て、或は、人に奪はれん事を恐れて、一生懸命に護ると。木堂の面目、覩るが如し。而して比喩、皮肉を極め、人をして笑倒せしむ。

●彼、嘗て木堂を語りて、天下、木堂を識る者、唯だ吾輩一人、吾輩を識る者も亦た木堂一人なりと言へり。此の二人者が相許すの深きこと此の如し。彼が木堂の爲に謀って忠なるは、世人の知るところなり。而して彼、則ち此の第一知己を許するに、得意の罵倒を以てす。

●罵倒は觀樹の藝術なり。譬へば畫家が其の知己者の肖像を畫くが如し。畫家は筆を以て描き、觀樹は罵倒の舌を以て、描き出すなり。

●又聞く、新聞記事に據れば、彼、去年、耳を傷け、繃帶す、木堂は之を評して外耳炎といふ。其の說にいふ。觀樹、少婦の膝を枕にして、耳を掻かしめ、少婦に戲れ、誤つて、簪の爲に傷つくと。若し此の風說をして事實ならしめば、彼、老齡、既に七十を過ぐ。また『好色の彦左衞門』たらずんばあらず、然れども彦左衞門の時、新聞紙あらしめば、彦左衞門と雖、或は、一週般の英雄的逸事を留めしやも知れず。

其五

●彼は政壇の肝煎役を以て任ず。彼が則ち『大正の彦左衞門』を以て自から擬する所以なり。然れども彦左衞門の勢力は、內閣の改造にまで及ばず。三黨首を會合するに至つては、到底、彦左衞門と、其の舞臺を異にす。

●彼と彦左衞門と相似たるは、肝煎役たるに在り。然れども此の二人者が肝煎は、全然、其の方面、性質を異にす。此の事、彦左衞門が在天の英靈の爲にも辨ぜざる可らず。

●彦左衞門は嘗て政治上に肝煎りし事無し。觀樹は專ら政治上の肝煎役なり。伯大隈を出し、また之を退かしめんとす。彦左衞門は大老、老中の顏觸に頓著せず。彼は專ら君德の爲に、士風の爲に肝煎りす。故に、

彦左衛門の肝煎役たると觀樹の肝煎役たるとは、其の意義、抱負を同じくせず。

●此の古今の肝煎役は、壯年時に於て、共に、武勇拔群の戰士たり。人爵に於て、壯年時同功の人と共に進まず、地位、稍、低に居り、老來、漸々、地歩を占め來り、先君の功臣といふを以て、新君の時に、肝煎役を發揮するに於て、古今一轍なり。

●觀樹は陸軍中將たるに留まる。若し其の中將に進みし閱歷を以て論ずれば、彼は公山縣に次いで、元帥第二位に在る可かりし人、而して樞密顧問、子爵たるに留まる。彦左衛門の大名たる可くして、僅に旗下たると相去ること遠からず。

●此の二人者が、肝煎役たるを得るは、共に、其の素質、閱歷、功勞に比して、自から高科に居らざるに在り。素質、閱歷、功勞の割合に、低位に居るは、潜勢力を一身に蓄積するなり。潜勢力の豐富なるに非れば大なる肝煎役たるを得可らず。

●或はいふ、觀樹の罵倒の痛快なるを以てして、元老先輩の前には如才無しと。如才無しといふは、觀樹のみに非ず。武藏鐙に見たる彦左衛門が、老中、大官に對して、如才無きを見よ。蓋し一面に、圓轉滑脫なるに非れば、鋭邁の機鋒を逞しくするを得ざるは、觀樹に始まらず。彦左衛門は好先例なり。

●彦左衛門が傍若無人、一世に横行するの概あるは、彼が攻勢に立つの時なり。彼の攻撃力は恐る可し。然れども攻撃力に常住するの人無し。利鋒は鞘に收まらざる可らず。彼と雖、守勢に居るの時、閑然消極の城郭に籠るの外無きなり。

其六

●觀樹の肝煎事業は遙に彦左衛門よりも大きく見ゆ。事功は彼、勝れるに相違無し。然れども彦左衛門の及び易からざるは其の氣魄に在り。彼の抱負は、君德を涵養し、君德の後見人、一世の風紀の大監査役を以て自から任ず。此の如き大抱負、大氣魄、眞に、百世の大丈夫といふ可く三黨首會合の如きも、之に比すれば區々たる當面の一事業たるに留まる。

●觀樹の才識、彦左衛門の上に在るを疑はず。然れども彼の惡戯は彦左衛門に及ばず。彦左衛門の惡戯は、其の才幹に非ず、其の氣魄ならずんばあらず。

●彦左衛門には『權現樣の御墨付』あり。先君の遺書の前には、今君も敬屈せざるを得ず。彼は、御墨付を、眞向に翳して、君德の涵養、士氣の振厲に從事したり。彼の惡戯は唯だ人の注意を喚起するが爲に過ぎず、いはゞ彼の廣告手段なり。惡戯の後には、御墨付現はれ來る。

●才識、觀樹先生の如き、必らず、君德の涵養者、一世の士風の大監査役たるの大氣魄無くんばある可らず。唯だ惜むらくは、彼には、先君の御墨付無し。彼が、彦左衛門の惡戯を學ばんとするは難し。

●彦左衛門は三百年前の老茶目公ならずんばあらず。『權現樣の御墨付』を奉戴せる彦左衛門が、惡戯を弄して諷諫の志を遂ぐるを見れば、彼は

才人なり。彼の惡戯は才氣爛熳たり。才人たるに於ては彦左衞門も觀樹も同型なり。

●吾輩を以て見れば、今の觀樹は未だ彦左衞門の大惡戯、大茶目、大氣魄に及はざるものあり。然れども彼が、彦左衞門を以て自ら居るは、其の志の存するところを見るべし。吾輩、彼の志を多とす。

●今、老人の世の中と見ゆ。先帝以來の老人功臣、各方面に雄視しつゝあり。老人の模範は彦左衞門なり。誰も、彼も、皆、彦左衞門たれ。彦左衞門たらずんばある可らず。觀樹が、率先して、彦左衞門を以て標榜するは、則ち、觀樹たる所以ならずとせんや。

觀樹居士の巨眼、高鼻、巨口を、思ひ浮べつゝ、此の稿を草す。彼の面前に執筆するの思あり。

六月十九日　黒頭巾再記

▽觀樹將軍の人物

川尻東馬

一

▲長州出身者でありながら藩閥は大嫌ひ、陸軍の先輩でありながら軍閥は大反對、友人知己悉く官僚としての成功者でありながら、自分は常に浪人の味方を以て任じて居る。身は樞密顧問官の重職にありながら、時々電車に乘つて雜踏を潜る、かと思へば眞心愛國の熱情禁ずる能はず夙夜元老大臣間に奔走して、國家の前途、社稷の大事に我を忘れた侃々諤々の立論、一般世間からは旋毛曲りの老人、繼子根性の我儘老爺と見做され、勢力階級權力社會からは眼上の瘤、口八釜敷小父さんとして敬遠さるゝに引代へ、眞心憂國の志士からは嚴父良師として畏敬崇慕せられ、又衒名無責任の山師連、不平恒心なきの奴輩からは、動もすれば神輿同様に擔ぎ廻される不思議の人傑、一寸考へた丈けでは三浦觀樹將軍の正體、如何にも解すべからざる奇々怪々の變人と云はねばならぬ

▲併し能く／＼考へて見ると、別に何等の不思議もない、又奇でもなければ怪でもない、要するに俗慾のない普通の老人で、只常人に異る點は所謂脱俗した私心のない夫れに悧巧で眼先の見える先覺といふに外ならぬ、私心がないから信ずる處を臆面もなく云へる、世俗に媚びて人氣を博さうといふ吝な名譽心がないから、直情徑行、何人にも遠慮會釋なく振舞へる、別に勢力を振ふて見たいとか、又位階を得て見たいとか、左樣な俗念がないから、阿諛諂佞の必要もなく、又毀譽褒貶を眼中に置く必要もない、但し餘り俗社會に慾望がなく又色氣がない爲め、時々は我儘が出る又旋毛も曲げる、脱俗したと云つても根が大野心家であるから君子人の度量、聖者の慈愛は迚も會得することが出來ない、無論修養は平素懸命で怠らぬと聞いて居るが、素質が素質丈けに兎角癖に障る場合が多い、自然詰らぬ事にも角立て叱りつけることもあれば、又怒りを心頭から發することも珍らしくない、斯て脱線もする獅子吼もする又我儘一杯に荒れ回ることもある。

▲浪人の大將を以て任ずるのは世の權力者勢力者に對する一種の示威運動で、只彼等の橫暴跋扈を抑制膺懲せんが爲めの一種の手段、眞心から痛浪人は國家の重要階級だ抔とは信じて居らぬ、云はゞ放蕩息子に勘當の强過るお灸も、あな勝ち不必要でない位に感じて居るに外ならぬ、從つて彼の浪人を賣物看板にして、無責任の街名に東奔西走寧日なき徒輩に對しては、彼等は天下の浪人でない、巧妙なる詐僞師だ、口幅たい乞食だとひどく貶して居る、而して彼等の面前に於ては、實に口穢く惡罵し又侮辱を加ふることを痛快事として居る、痛浪人連、動もすれば觀樹將軍がどうとか、三浦子は何とか、宛も自分等の總大將であるかの如く吹聽し廻つて居るが、焉んぞ知らん是等の徒輩、其面前に罵詈せられ凌辱せらるゝ有樣は、傍で見る眼も氣の毒の感に堪へぬのである、只彼等は大概計劃を立派に立てる、而して其趣旨も國家本位で飽迄堂々と持ちかけて行く、內心では又例の手かと思ふが、終ひ迂濶にも乘せられて了ふ、果ては何時の間にか神輿になつて擔ぎ廻されるといふ段取、近頃は警戒の上にも警戒して居るそうだが、詐僞師は時世の進步に伴ふて新工夫新趣向を案出すると同じく、浪人商賣の連中も却て新手を考へ出し到頭巧みに將軍を擔ぎ上げて來る、此點に就ては內心少なからず困憊して居るらしいが、併し今更ら浪人大將の古看板を卸す譯にも行かず、結局自棄自得を喞ち居るとの事である、但し例の負けん氣の老人であるから何處々々迄も表面は困つた樣な顏さへ見せることは斷じてしない。

二

▲講釋師に依て傳へらるゝ大久保彥左衞門は、實に稀なる人傑であつた、微身一個の旗本を以てして、時の閣老連中を自由自在に叩いて行く處、殊に天下の將軍樣に向つて面を冒しての諫言忠告、遺憾なき民意の代表、而して善政の指導と風敎の矯正、假令傳ふる處の十分の一であつても、其功勞は確かに明宰相に比敵して餘りあるの功績を首肯せしむるが、將軍の現代に於ける位置行動、而して其存在の價値は、丁度彥左衞門の夫れに似寄つた處がある、第一眞面目に國家の前途を憂ふる赤誠、第二私心を抛つて社會公事に貢献せんとの決心、第三、直情徑行人を人とも思はず、自信を明々白地に披瀝して決して他を憚らざるの勇氣、第四、自己の欲心俗念を去り、俗論世評以外に超然として常に公明正大の行動に出づるの膽力、第五、權者强者に對抗して弱者庶民の味方たらんとするの念願、第六、熱情あり痛癖强く、時に旋毛を曲げ又脫線、猛斷、我儘の極並を發揮する行動、第七、時に無法の壓迫を加へて無理無體に强制し、時に大惡戲を演じて國家の大茶目に快を遣る惡洒落其他反動的行爲に人心を快ならしむる事、膽略あり自信あり一度決すれば些の躊躇心なき事、常に庶民階級を代表して權者强者の反省自覺を促す事、身を奉ずる甚だ薄く他を羨まず又阿らず、自ら國家の刺激劑たるに甘んじて、貧に座し利に走らず、至平の先覺者を以て任じ、絕えて榮達資名を欲せざる事等算し來れば此外にも尙は幾多共通の長所短所を備へて居る。

▲無論講釋師の云ふ大久保彦左衞門程に偉い人物だとは云はぬ、又夫程に私心を去り、念頭存する處只社稷の大事のみといふ、無類偉大の傑物だとは思はぬが、兎に角能く似寄つた特質行動をする人物たることは、恐らく世間に大なる異論はあるまい、但し見樣と立場に依ては、全く厄介老爺、我儘老人物騒な不良長老と云ふ人もあらう、八面玲瓏と云はるゝ富士山でさへ、甲州方面から見れば形狀は夫程美しくないのであるから、況して缺點間隙の甚だ多い老人のことであり、眞面目正直な人から見ては、如何にも故意に平地に波瀾を起す、無責任物騒な厄介者に思はるゝ廉が多いので、之を其の彦左衞門に比するのは、餘りに論を失する贔方だと怒る人も相當に多かるべく、這般の批議は吾人又之を豫期せぬでないが、人間の眞價は棺を蓋ふて初めて定まることを知るが故に、余は是等批議者に向つて、乞ふ短かくも三十年後に於て相見えんと答へるものである、要するに今は互に論議しても結局水掛論、其人逝いて然る後虚心冷靜に事歷を判斷すれば、自ら分明し首肯し得るものであるから、今は喋々の辯明、呶々の論難畢竟するに無益の事業だと思ふ。

▲然らば即ち何故に斯樣な境遇行動を敢てする樣になつたか、勿論多少素質は備へて居たに相違ないが、自ら好んで榮達を欲せず、權勢と遠ざかり、冷嘲熱罵、獨り快をやつて、世態を警め人心を導くべく發心するに至つたのは、抑々何の爲めであるか、根が野心家であり、殊に政治に多大の興味を有して居ながら、飄然實社會を離れて純然たる批評家に滿足せねばならぬ其動機理由や果して如何、余は前にも云へる如く、將軍を目するに君子人又は聖者の素質ありとは絶對に思はぬ、寧ろ大俗なることを信じて疑はぬ、從つて今日の境遇、言動は蓋し止むを得ざる結果の發露で社會に生き自己の存在をして意義あらしむる爲めには、今日の境遇、行動を最も捷徑妙諦なりと、自覺自信したのに外ならぬことを斷言する、勝海舟の晩年頻りに熱頭冷語、爲政者を揶揄し、世態を嘲笑し人情を諷刺して從横無盡に其批評建議を公にし、一は以て半生の不平不滿をやり、他は以て世道人心を啓發指導せんと努めたのも、畢竟するに自己の境遇、外に詮術のなかりしが爲めなることに想到すると、將軍の現在また推知するに難からぬものがあらう。

▲是に於てか余は露骨に斷言する、將軍の今日あるに至りしは、即ち彼の陸軍改革に失敗して、終ひに失脚の止むなきに至りしことを其動機とし、爾も性來の大野心謀叛氣は到底市井に雌伏するを許さず、雲照律師の門下に參禪して錬膽修養、終ひに新生面を開拓せんと企てたことを其出發點とする、爾來藩閥と戰ひ軍閥を罵り、長州閥を嘲り薩州閥を憎み事毎に閥族官僚を貶して、却て大隈伯と親密の提携を爲すに至つた、加之一方天下の志士と交友を結び所謂浪人の大將たるは夫れ以來の事である、其後學習院長たり又朝鮮公使たることとあつたが、要するに軍職は再び其手に戻らずして、軍閥からは永久に葬られて了つた、現任樞密顧問官は桂公の例の八方美人主義に加ふるに、藩閥としては猛獸にも比すべき將軍を永く野に放從することの不得策を悟り、更らに先輩優遇の途として奏薦任官されたもので、將軍としても桂公には別に感恩なく、只山

縣公に對してのみ、終生忘るべからざる怨恨憤怒の情を禁じ得ぬのであるから、任官内意の傳達に對しても、何等異存なく承諾した次第である。

三

▲伊藤、山縣、井上の公侯等に對して、殊に山縣公に向つて最も反對する理由に就ては爰に一應辯じて置く必要がある、將軍は元來木戸松菊の愛顧を受けた人で、同じ長閥でも山縣公とは全然系統を異にして居る、即ち木戸系統に屬する人物である丈けに、政治上に對する考へは、當時に於て珍らしい程公平眞面目なものであつた、元來木戸公の念頭には、德川幕府に代ゆるに薩長土肥の藩閥を以てするの、他日民心動搖の一大禍根を貽すものとして、夙に之が病源を芟除し置く必要を確認して居つた、從つて將軍等同系統に屬する後進者は、不知不識の間に其感化を受け、斯くは至公至平なる意見を抱持して居た次第であるが、他の閥族者流からは、一概に臆病者杞憂者流として排斥されたのである。

▲木戸公歿後は、是等至正主義正義派の旗色甚だ惡しく、山田顯義伯等主として此派の中堅であつたが、所謂閥族主義の跋扈日一日に甚しく、後には台閣の風潮亦如何ともすべからざる狀態となつて了つた、將軍等の陸軍改革意見は、即ち此主義の上に置かれた計劃であつたが、結局失敗に終りて身も亦軍職を擲たねばならぬ羽目に陷つた、國家の爲めには返す〲も遺憾のことであるが、時代の思潮と勢力の實在には、如何にするも對抗が出來ぬ、斯くてさなきだに系統を異にして居る山縣公との間益々意見感情の乖離を來し、相互殆んど讐敵の觀念を以て相對する樣になつたのも、蓋し又止むなき次第と云はねばならぬ、而して又將軍の藩閥、軍閥を嫌ふのも、單に彼の陸軍改革失敗以後の意見でなくして最初から主義として藩閥、軍閥の排斥者であつた經路も之で好く判明する、自然薩長藩閥の聯合軍に不意打を食はされ、終ひに失脚の止むなきに至つた大隈伯の同情者として、他日到る處に之が勢援を與ふる樣になつたのも元を質せば決して不自然無理窟な、單純の感情論から許でないことも明瞭になる。

▲最も高杉東行に私淑し、常に諸先輩中東行程の偉い人は絶えてないと斷言して居る丈けに、談一度東行の事に及ぶと、直ちに襟を正し容を改め、平生見る能はざる謹嚴な態度で話す、聞けば東行も最も將軍を愛顧し、奇兵隊中最年少者であつたに拘らず、特に推稱し專用したものである、山縣公以下年齡に於ては將軍に比し七八才の兄である、是等の人々に對してさへ、常に其名を呼下して敢て怪しまなかつた東行は、獨り將軍に對してのみ『若い先生』と呼んで之を愛し、當時才氣煥發なる將軍は時々策を獻じて宛も秘書官兼顧問たる待遇を受けつゝあつた、將軍の今に景慕し私淑して措かざるのは當然の次第であるが、東行も亦非凡の少年を見るの明あつたことは、此一事に依つても明白である、東行の事で思ひ出したが、本年一月五日將軍はフト東行の夢を見た、急に思ひ出して死去した年代を調べ出したが、丁度今年は五十年に相當するので、早速思ひ立つた五十年祭、先づ防長俱樂部の世話役大將柴田家門氏を訪ふて、

之れが計劃發起を奬勵した、夫れから夫れと贊同者同意者が殖えて、過般九段に行はれた、盛大なる五十年紀念祭を見るに至つた次第であるが、昔ならば東行、觀樹の夢枕に立つとでも傳へらるべき逸話、何は兎に角として東行との因緣淺からぬことは此一事に徴するも推測することが出來る。

四

▲野心あり謀叛氣滿々たる將軍であるから、今迄に種々雜多な計畫もし又仕事もしたが、中に余の記憶する大事業大企劃とも目すべきものは五つある、第一は陸軍大改革の計畫、第二は學習院の大刷新、第三は有名な朝鮮事件、第四は曹洞宗の大紛擾調停、第五は大隈内閣の產婆役、夫れに今度の三黨首會同をも加へると、都合六つになるが、何人も知る如く陸軍改革の結局失敗に歸した以外、他は皆相當に成績を收めて居る、只最後の三黨首會同丈けは、龍を描いたのみでまだ點睛されて居ないが若し假りに點睛なしに了るとしても、兎も角龍は確かに描いたのであるから、決して無意味な計畫、失敗の最後とは云はれぬ、現代の政客中、將軍を除いて誰れか加藤、原、犬養の三頭を一堂に會せしむる資格あり威力ある斡旋者が居やう、余は會同せしめた丈けでも却々の成功だと信ずる、況んや國家を本位とした根本主義の申合せ成りて、其覺書は互に交換されて居る處を見ると、今回の會同は單に徒爾ならざりしのみならず、現在及び將來の政治社會に對し、有形無形の尠少ならざる功果を結ばしめたものと斷言して憚らぬ。

▲陸軍改革の計畫失敗は何人も記憶する有名な事實、殊に朝鮮事件大隈内閣の產婆役は、今更ら事新らしく云ふ迄もない天下公知の問題、之れを玆に敍述するも、餘り人を馬鹿にした話であるから略するとして、餘り世間に知れざる學習院の刷新と曹洞宗紛擾の調停問題、此二つに就て極めて簡單に記述しやう、畏れ多くも今上陛下の尙ほ御幼少に在らせられ、學習院御在學時代の事である、校内の風習一般に文弱奢侈に流れ、各皇族殿下を御敎育申上ぐる場所としては、洵に寒心に堪へぬ傾向であつた、斯て先帝陛下には深く宸襟を惱まし玉ひ、特に將軍に命じ學習院長たらしむべしとの御沙汰があつた、聖旨に感泣した將軍は、非常の決心を以て内部の改革、弊風の掃蕩に從事し、内外より蝟集し來る攻擊反對壓迫妨害を排して、只管聖旨に副へ奉らんことをのみ專念したが、弊害の浸潤根柢深く、情實の纏綿範圍擴大にして、容易に根本的の芟除に成功する能はず、其間幾度匙を投げんかと落膽の境涯に沈んだこともあると傳へられて居る、併し顧みれば君命は重く一身は輕しである、卓勵風發一頓挫ある每に、更らに勇氣を倍加して奮鬪した結果は、終ひに功を收めて僅かに君命に答へ奉ることが出來た、而して其改革なるものは、宛も後年乃木將軍院長として尙武敎育を强制勵行せるが如く、極端なる軍隊式敎育法に依て、外科的大改革を斷行したのであつた。

▲曹洞宗の大紛擾事件は、時代人名等を總ひ記憶を呼び起し兼ぬるが、何に致せ非常の大騷ぎで、其儘に放置すれば油々しき社會問題となり、

又宗教界大混亂の恐るべき狀態に陷るは當然の結果、斯て時の當局者も全く當惑の外はなかつた、是に於てか何人か威壓的調停を試みる外なき場合となり、結局井上侯に依て其調停は試みられることとなつた、侯は自己一流の一大威壓で抑へつける決心を定め、彼等圓頂黑衣の徒幾何程のことかあると、一夕自邸に招致して刺身、燒肴の配膳に先づ其度膽を拔かんと企てた、然るに一僧毅然として容を改め、堂々と抗辯して曰く、愚僧佛門に歸して以來、三食會て精進を廢したることなし、然るに今夕の饗應生魚を盛るとは何事ぞ、之れ俗社會の權力威力を以て佛門に臨むもの、愚僧は最早侯の誠意を認むる能はず、從つて其心事の親切正直ならざるや亦明白也と、妥に調停者の誠意に關する先決問題起つた爲め、折角の威壓計畫全然失敗に終り、流石負け嫌ひの井上侯も終ひに施すに術なく、全く手を引かねばならぬ場合になつて了つた、其後將軍に依て再び新なる調停會合催され、十二月三十一日夜一同を自邸に集めて將軍一流の威壓的斡旋結局功を奏して圓滿なる解決を與へ、一時は危機に瀕して將さに破綻せんとの瀬戶際にありし曹洞宗紛擾問題も、玆に新年を迎ふると共に目出度鬼をつけ得る事となつたが、夫れ以來曹洞宗各派の將軍を德とすること夥しく、現に永平寺の如きは、將軍夫妻の木像を安置し、以て永く感謝の意を表することとなつて居る。

五

▲何人に對しても無遠慮に振舞ひ、自由勝手に批評し、殊に惡罵百出、冷罵嘲笑往々にして骨を刺し咽を抉ぐることがある、從つて敵も甚だ多いが、成るべくは障らぬ神に祟りなしで、權力者金力者からは多く敬遠主義を取られて居る、故を以てか若し假りに狙はれたるものありとせば、开は止むなしと觀念して、成るべく此方から機嫌を損ぜぬ樣に努める、又破壞力に於ては案外强烈なものを有して居る爲め、イザ戰ひとなれば敵も味方も皆一樣に將軍の機嫌を取るに出かける、而して假令味方とならぬ迄も、何れも自派の反對側に回らぬ樣に持ち込む、斯て實は全く厄介視されつゝも、常に何かと持て囃さるゝ次第で、俗に恐持てすると云ふのは將軍に對して好個恰當の形容詞であらう、今回の三黨首會同に、加藤男の行つたのも、赤原氏の赴いたのも根本を洗へば趣旨に贊同といふよりは、此恐持ての結果に外ならぬ、あの老人を敵にしては萬事不便損失であるから、先づ機嫌を損ぜぬ樣にして置くが悧巧と、共に厭々ながら集會したのが抑々の眞相であらう、併し一旦會同した以上は、將軍の顏も立てねばならず、若し面前で反對して機嫌を損じた日には、第一會同を承諾したといふ最初の忍耐心我慢からして棒に振る次第、遂ひには止むなく深みに入つたものであらう、俗諺に『淺い川ぢやと褄褊からげ深くなる程帶を解く』といふが、全く今回會同した三黨首の心裡狀態方さに之れに相違あるまい。

▲惡罵と冷罵は寧ろ其天賦の發露であらう、如何なる場合にも咄嗟の間に出る、加之夫れは悉く切瑳洗錬された名句のみである、將軍自身は左程に感じないらしいが、鋭鋒を向けられた本人こそ穴あれば方さに入り

度き心地、時には側で見るさへ氣の毒な場合がある、殊に謹厳方直な人物に向つてなど打ち込んだ際は、傷人倘ほ且其餘りに慘酷な行爲に憤慨したくなる、而して此惡虐冷罵は決して相手の如何を顧みない、紳士軍夫老弱男女、其邊は一向に無關係である、若し惡謔冷罵の天才なるものありとせば、將軍は明かに其資格を具備したるものである。

▲最後に一言して置きたいのは、薩閥を憎む事の最も强烈な點で、若し薩摩と爭ふ場合になると長閥の圏内に立籠ることをも辭さない、而して是も辛辣に猛烈に突擊する、其時になると理窟もなければ主義もない、全くの感情と意氣で行く、故に長州の先輩間には、薩摩を敵とする時なら此方から頼まんでも三浦自身が出て味方して吳れると云つて居る。

▽警敏無比の人

匿名氏

▽我輩に三浦將軍の批評をさせるのは酷い。それや知つてるさ、寧ろ知り過ぎてゐる。だから批評は出來んのぢやよ。批評は御免〳〵。然し折角の御依頼だから、一寸一つ二つ何か話して見ようか。

▽將軍は趣味の人で、何事にかけてもなか〳〵趣味が廣い。熱海にある別莊も、小石川の本宅も皆自分の設計でやつた。餘り金をかけずに巧みに雅致のあるものを拵へる。庭などは崖を利用してなか〳〵よく出來て居る。大磯の所の庭には鶴を放つが、俺の庭には鹿が出ると云ふのが、將軍のよく云ふ警句である。

▽書畫骨董に對する將軍の造詣と鑑識眼は餘程深い。然し何事に依らず俗惡と云ふ事は將軍の最も嫌ふ所だから、書畫にしても骨董にしても所謂成金が近頃金を出して買ふやうなものは少しもない。將軍の所にある骨董の最も有名なものは螺鈿の卓であらう。之は確かに唐代以前のもので、天下一品といはるゝものだ。先頃の伊達家の競賣にでも出たら十萬圓以上の札の入るとは疑のないものだ。斯う云ふものを買ふ時の將軍の熱心は非常なもので、大晦日の仕拂などに全部停止してやるのである。何でも自分の氣に入つたものには何處までも行くのは將軍のすべての事に對する遣口である。

▽將軍の骨董眼は近來骨董屋仲間にも認められ、彼等は非常に將軍を大事にする。之は一面、將軍の鑑識眼は鋭いものだから、將軍の眼を附けたを見て置いて、アトからそつと買ひ取つて儲けようとするのと、他面將軍の惡口は鋭いから、御機嫌を取つて惡口の口留めをしようといふのらしい。將軍は氣に入らなければ大きな聲で、客の値踏みをして居る最中でも、「こんな下らん物」と貶す、それをやられては商賣にならんのだから、商人共は手で將軍の口を抑へぬ許りにしてハラ〳〵して居る。乃木大將の書などは將軍の函書がなければ通らん位だから、さう云ふものを取扱ふ骨董屋などは大分將軍を大事にして居る。

▽わる口は實に上手だ。矢張り天品のわる口言ひだネ。其方にかけては

他人にヒケを取らぬ犬養氏も將軍の惡口には時々弱らされる。犬養氏が支那から掘り出して來たアノ蘭亭帖、あれに函を拵へたが、其函は本式なものでなくて聊か貧弱なものであつたから、早速將軍の乘ずる所となり、「オイ犬養、あの函には三越の切手でも入つてゐるのかい」と來た。「三越の切手は酷い」と犬養氏も兜を脫いでゐた。又犬養氏が庭を作つてコンモリとした松を一本植ゑると將軍は「あの松はよく田舍の小料理屋にある奴だネ」とひやかす。然し惡口で先づ犬養氏と旗鼓相當る好敵手といつてよからう。

▽將軍は快濶な人で、酒でも飮むで調子に乘ると、都々逸も歌へば、踊も踊る。昔は隨分遣つたものでせう。まア高杉晋作直傳と云ふ風でサン〳〵に飮む、サン〳〵に歌ふ、サン〳〵に踊る。其間に惡口も云ふ、なか〳〵元氣な、面白い、賑やか老人だ。

▽將軍は萬事に無頓着で、身輕く氣輕く出來て居るから、繩暖簾も潜るし、道具屋も覗くし、又燒打でもあれば人先に出かける。だからよく下情が分つて世態に通じて居る。將軍の處に來る客も、書生もあれば浪人もあり、道具屋もあれば軍人もあり、官吏もあれば政黨首領もあると云ふ風だ。氣が向けば誰とでも會ふが、向かぬと誰でも門前拂を喰はす。

▽然し將軍の人格を最も其際立つた點に就て簡單な言葉で評すれば、警敏の二字が一番よく當るでせう。打てば響くと云ふのは將軍の事でせう。一言いへば其先きの先きまで分る性質(たち)で、天下の大事件でも僅話で以て話が出來、又大事を決するにものゝ五分とかゝらぬ方だ。其警敏な點に於ては我輩の知つて居る範圍では將軍と頭山、犬養の三氏に及ぶものはない。三人共訪客があると、頭の先から足の尖まで見え、又話さぬ中から用向までも悉皆分つて了ふ方だ。然し犬養氏と將軍とは、それを顏にも出し、口にも出さずに居られぬ方で、「貴樣はこう云ふ用事で來たらう」などゝやつて了ふから、相手は取りつく島がない。そこになると頭山氏はどこまでも知らん顏で濟ましてゐて、相手の話を聞いてからでもまだ「ウーン」と云つて空嘯いて團扇使をして居ると云ふ風だ。將軍は其長所犬養氏と相若くが、頭山翁には此點が及ばぬから、多分頭山翁を一番尊敬して居るでせう。

▽天下一品の人物

法學博士　寺尾亨

◎三浦將軍は何と云つても天下一品の人物です。あんな人だから多少の癖はあるに極つてゐるが、あの位硬骨な、私心のない、何時如何なる場所に於ても、誰に向つても何事をも云へる人は外に一寸見當らない。それが爲めに、同鄉ながら、元老の山縣公には餘り良くないと云ふ話だ。又長州人では鳥尾とあの人とは一寸聯想するやうな處がある。又出世の早かつた事も全じやうだ。あれが普通の上手をやつて並の事をして居つたら、大臣ともなり、又更に元帥にもなつたであらう。然しそれよりも

つと以上の人物だからナアハヽヽ。大臣とか何とか云ふものは中位の人物の適するもので、少しエラクなつたら馬鹿げて出來るものでないんだ。

◎私は大分前から知つて居るが、つひぞあの人の家に行つた事がなかつた。先達用事があつて初めて一寸行つて見たが、なか／＼變つた所がある。品物なども大抵支那の古いものであつた。骨董と云つても普通の骨董でなく、昔の漢學先生の趣味で行つて居る。誰も知つて居る通り書が上手だし、又眼も利くから、額でも衝立でもなか／＼立派なものだ。又座敷の模様なども大變氣に入つた。建築は先生の設計に成つたものなさうで、谷のやうな處を利用して、餘り金を掛けないで、廣く、且つ風雅に出來て居る。居間が十二疊半、次の間が十疊になつて居るが、其の十二疊半の方には床の間や肘掛窓などがあるけれども、緣側なしで疊の敷いた端から直ぐ崖につゞいて居る。之は先生が廣い所が好きなので、狹い地面を成るべく廣く使はうと云ふ處から考案したものらしい。

◎其時こんな話があつた。どうもいろ／＼な所から書を賴んで來るが、煩さくて仕様がないから、只では書かぬ、羊羹一本で書くことにした。處が先達羊羹三本を持つて來て四枚書かさうとしたから、三枚丈書いてもう不可ん／＼と云つて刎ね附けてやつたと云つて笑つて居つた。地方から依賴して來るものはよく小包で何か食物などを添へてあるさうで、昔はよくペロリ喰べたものだが、喰べたら屹度何か書かなければならぬ事になるので、近來は直ぐ送り返すことにしたさうだ。之について犬養の方のやり方を聞いた。犬養にも紙とか絹とかを盛んに送つて來るが書けない。それを一々返すのも面倒と云ふので、先生旨い事を考へた。それはかうだ。紙や絹が屆くと直ぐにハガキを出す。三ケ月間留めて置くから其間に取りに來い。取りに來ぬと其後は保存の義務がないと云つてやる。詰り沒收するんだと。これも犬養氏最近の直話だ。

◎先きに三浦將軍にも癖はあると云ふたが、よく理窟を云ひたがるのなども一つの癖だ。どうも下らぬことにも理窟をいひたい。默つてゝもよい所に、老人に似合はず大人氣なく理窟を云ふ。一寸面白くないと思つたら笑つて濟ますことの出來ぬ性質だ。それは一つは先生の天眞爛漫から來て居るので、先生の長所も無論そこにあるが、少し理窟を云へ過ぎるのは先づ癖と云つてよからう

◎あの人は御承知の通り極端な平民的の人で、服装なども一向無頓着の方で、曾て隣家の頭山(滿)の家で乞食と間違はれた事があるさうだ。從つて風采は餘り揚つた方ではないが、顏に一種キツイ所があり、頭腦はなか／＼よい。物の表裏がよく分る。口矢釜しく云ふのも詰りは物が見え過ぎるから默つて居られんのだらう。惡口なども旨いもので犬養氏のと大分似て居るが、犬養氏のは少し殺に過ぎて物の肺腑を剔るが、三浦子のはどこかに多少の愛嬌があるやうである。

詩聖タゴール來朝紀念出版・現代印度精神界研究の栞

詩聖來朝の紀念として印度文藝研究書として最も意義あり價値あらしむる爲に數多の紀念寫眞及び現代印度の名畫等を收めたる畫帖に添ふるに特に印度の宗教哲學文藝に造詣深き我が思想界一流の諸名家及びタゴール氏とは印度以來深き交を結べる諸名士の興味深き論説を得、之に加ふるに氏來朝以來の講演所感日誌等を掲げ眞に本邦唯一の紀念出版也

〔口繪と挿畫〕

・詩聖最近の面影・冥想せる師の君（門下生チャンドラデー氏寫生）・タゴールの祖父・タゴールの父・初めて日本の地を踏める聖者の喜び・東都に入れる日・寛永寺大歡迎會に於ける詩聖と朝野の名士・菩提樹下に於ける聖者の教へ子・詩聖を育める靈山の秀峯　四葉
・アボネンドロナート、タゴールの代表的傑作　一葉
・ガゴネンドロナートタゴールの表面

最新版

七月一日發行



四六判三百頁全一冊
正價金六拾錢
郵税金八錢

東京神田區鈴木町十六
同文館雜誌部
電本一五三九番
振本三壹六七七番

内容目次

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

興趣滿幅！一味の清涼劑

▽東京音樂學校長 湯原元一先生新著

自傷錄

定價九十錢 郵税六錢
四六判總布金文字函入美本

報知新聞評 著者の觀察力の非凡なるは世人既に之を知る。本書に論ずる所、「文明の一特徵」以下三十七篇！孰れも皆傾聽に價するものたらざる無し。

大阪朝日評 本書は啻に教育家として其の識見を認めらるゝのみならず、一般社會政策的の方面に於ても亦常に一家の見を有する著者が世態人情に關する其所見並に平常の感想を語りたるものである。

▽日本評論主筆 茅原華山先生新著

半生の懺悔

定價七十錢 郵税六錢
三六判總布金文字函入美本

半生の懺悔一篇、文章流麗、波瀾重疊、神韻縹渺、一個の自敍傳小説とも見るべく修養錄とも見るべし。其幼年時代を敍しては兒童の生活心理を活寫して生氣潑溂、苦學時代の筆に至りては泌々胸を裂く、然して華山其人の風丰性格面目の愈々出でて愈々躍如たるは其記者時代の描寫なり。一讀清趣滿幅！

一讀三歎！趣味津々たる修養隨筆 自己の半生を描いて波瀾曲折！

東京市京橋區南紺屋町十二番地 實業之日本社出版部 振替口座東京二三六番

(中付 二の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

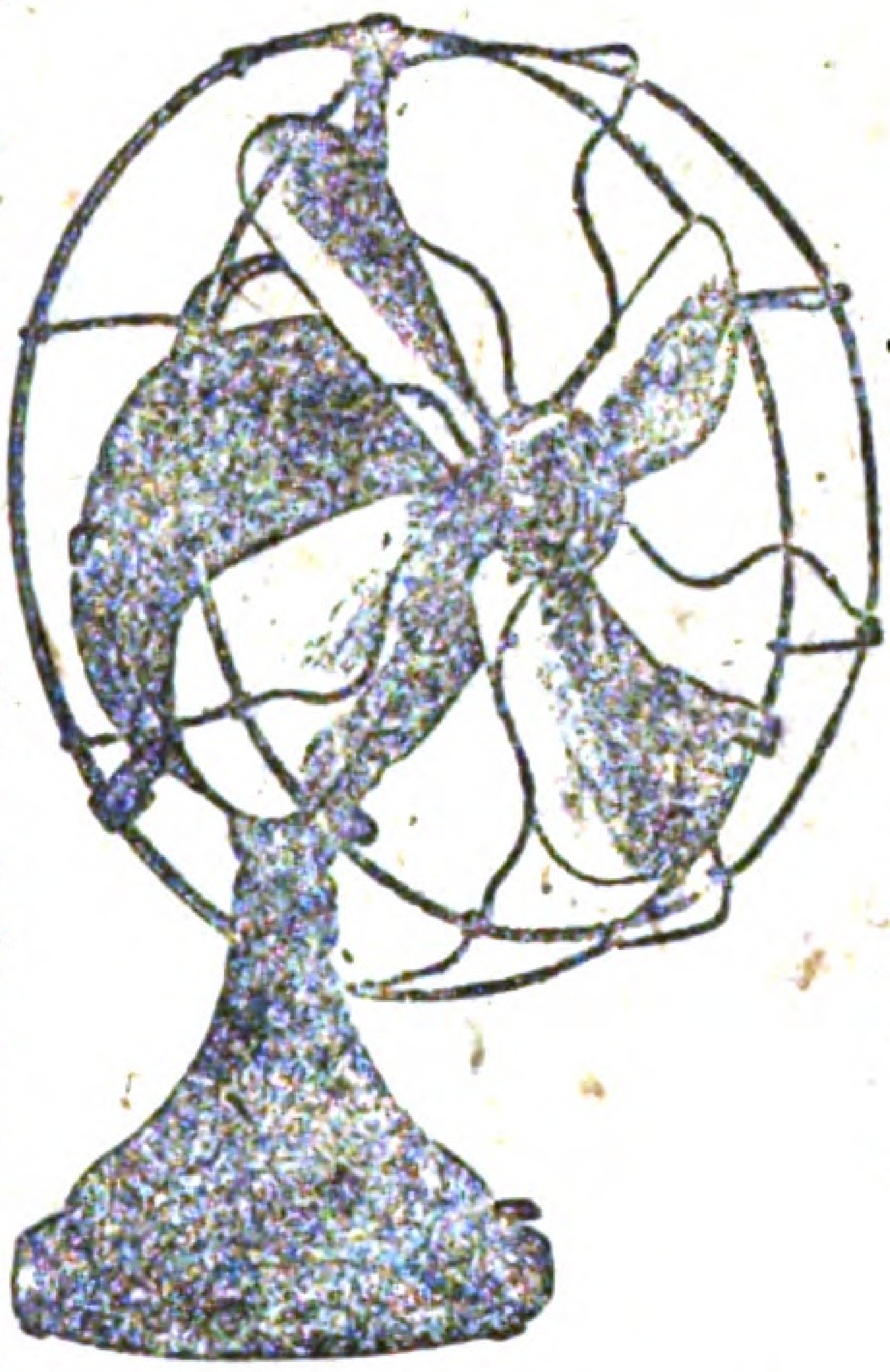
The Best Fan Motors

TRADE B.K MARK

兩羽電氣扇



是眞ニ模範的國產品（我國唯一の特許扇風機外國品に比して毫も遜色なし）



Desk and Bracket Fan.
12 inches and 16 inches.

專賣特許
實用新案登錄
普通形卓上電氣扇

第二六一二一號
第二九一九三號
第三一九〇三號

第二六一二二號
第三一二五七號
第三三五〇七號

第二七五七九號
第三一九〇一號
第三三五二六號

各國特許出願中
第三一九〇二號
第三三九三一號

特色

一、成績　頗る優良にして回轉圓滑風力强き割合に電氣の費消甚だ少なし

一、構造　堅牢にして永年使用に堪ゆ

一、體裁　優美高尚にして室內裝飾に適す

一、應用　自在にして調節自由に强弱を變ずることを得

一、種類　十二吋羽根、十六吋羽根、交流用、直流用普通形及び自働回轉式兩羽根付き等數種あり

東京大正博覽會に於て多數扇風機出品者ありたれども受賞の榮譽を負ひたるは獨り弊商會製品あるのみ

在庫豐富
豫約及多數御注文に對しては特に割引仕候、御申越次第目錄進呈仕候

サンデン電氣商會本店

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
電話新橋二四二一番
振替口座東京一八四七三番

支店
東京市日本橋區吳服町十八番地　電話本局一九五六番
大阪市東區心齋橋筋博勞町南入　電話南二二〇五番　振替口座大阪七三四四番
横濱市吉田町一丁目二十九番地　電話一九三一番

電氣器具材料製造販賣

（中付二の四）

評論

内外時事評論

袁總統の逝去と支那最近の政局

法學博士 古川學人

▽袁總統の逝去

六月六日午前十時四十分中華民國大總統袁世凱は逝去した。發病の報の初めて外界に洩れたのは五月廿七日である。五十八歳の壯齡を以て斯くも急に殪れたのは、病名は尿毒症といふ重い疾患ではあつたけれども、畢竟心勞の結果であらう。彼は年よりも十歳位は老けて見えた人ではあつたが、本來健康な質(たち)で、一面非常に小心な所もあつたけれども、他の一面には所謂元氣旺盛であつた。而かも此壯齡を以て殪れたのは、善く言へば國家の爲め、惡く言へば野心の爲めに犧牲になつたものといふべきであらう。國事多端の際、而かも四面楚歌の裡に死んだのは、寔に氣の毒ではあるが、之よりいよいよ雪隱詰になると言ふ間際に、戶に手を掛けた儘で殪れたのは、一方からいへば好い時に死んだとも言へる。而して彼の長子袁克定(本年三十八歳)は、或人の言ふが如き不肖の子ではないが、又或人の言ふが如き多策智謀の士でもない。聰明ではあるが、畢竟世間知らずの片々たる貴公子に過ぎずして、父親に離れては一家の後始末さへも如何(いかゞ)かと思はれる。兄弟姉妹ばかりが二十八人、それに親の妻妾自分の妻妾幷に子供や奴婢などを加へたら何十人と言ふ大家族であらうが、其の跡始末をするものは、予の知る範圍に於ては、彼にあらずして寧ろ目に一丁字ないが、然し常識の非常に發達して居る正夫人(太々(タイタイ)といふ)の外には無からう。之も毒を仰いで殉死したと言ふ報道を眞なりとせば、危く九五の位を踐まんとした袁家の遺族

は、今や誠に慘憺たる狀態にあると言はねばならぬ。尤も袁世凱親子は、其私生活に於ては汚いと見えるまで金錢のことに細かかつたから、假令一部の人のいふ如き莫大の財產を殘さないとしても、必ずや相當の金を有つて居るに違ひない。徐世昌邊の保護の下に、河南の草廬に引込んで村夫子を氣取る分には差支あるまい。新政府が何人の手に歸するにしても、眞逆袁の罪を憎んで罰を遺族にまで及ぼすこともなからうから、中華民國の一平民として安穩なる生活を爲すことは出來るだらう。一代の成金たる袁世凱の遺孤を放つても、中華民國は何等危險を感ずる事はない筈である。

（註）一旦傳へられた正夫人の殉死は、後に至つて嘘だと取り消された。然るに其後支那より到着した新聞の所報に依るに、大姨太(ダーイーダイ)、二姨太(アルイーダイダイ)、五姨太太(ウーイーダイダイ)の三人毒を仰いで殉せんとしたが、後二者は幸に蘇生したけれども、前者は其儘息絕えたとある。大姨太太とは第一の妾で、次は第二第五の妾の事である。正夫人の殉死のことは一言も書いて居ない。シテ見ると、日本の新聞は第一の妾のことを正夫人と間違つたのであらう。第一第二と番號の附くのは妾のみで、正夫人は只太太(ダイダイ)とのみいふのを、第一夫人とあるから正夫人の事だらうと誤解したのであらう。

扨て袁總統の逝去は支那當今の時局に如何なる影響を及ぼすであらうか。之を明かにするには先づ彼が生前に於ける政界の形勢を一瞥するの必要がある。

▽袁氏生前の形勢

袁氏生前の支那の政局に於て、最も著るしき現象は南方革命派の勢力の發展であつた。三月央ば頃までの南方の形勢の、頗る振はなかつたことは既に說いた。其後に聞いた所に據ると、南方の振はなかつたに就ては、少くとも二つの大なる原因がある。一つは四川方面に於ける手違ひである。動亂勃發の當初、南軍は四川省の劉存厚及び周駿の內應の約束を信じ、周駿をして早く重慶を占領せしむる計畫であつた。重慶が手に入れば將軍陳宦の加擔は當然のことである。然るに劉は早く味方したけれども、周の方には計畫に手違ひを生じて重慶はやがて北軍の據る所となり、爲めに周自身豫ての約束の通り南軍に應ずることが出來なくなつた。も一つは南京の馮國璋の違約である。彼は帝政反對の熱心なる主張者として早く蔡鍔一派の注目する所となり、雲南擧兵に先つて上海及び東京の革命同志が人を南京に派して說かしめた結果、彼は雲南と前後して事を擧ぐべきを約束したのであつた。然るに彼は中途モリソンの說得にあつて寢返りを打つたと言はれて居る。以上二つの事情は、南軍の勢が計畫者の當初の

豫期に反し第一革命當時の如き急速なる發展を見なかつた重大なる原因である。斯くして長江以北は南軍をして一指をも染めしめず、其上四川省へ派遣せられた北軍も、却つて着々蔡鍔の軍隊に壓迫を加へて居つた。當時北方の意氣込は飽くまで武力を以て南方を壓倒すべしと言ふ旺んな意氣込であつた。

然し乍ら此北方の意氣込は、三月十五日廣西の獨立宣言に因つて鼻先をへし折られた。四川の形勢不利なりと見るや、革命派は或は山東、或は滿蒙方面に事を起して頻りに北方を牽制せんとしたが、之れにも增して大勢挽回の爲めに最も有効な働をなしたものは、上海の同志が梁啓超を送つて陸榮廷を説かしめた一事である。陸榮廷は固より同志の士ではあつたが、廣東を憚つて容易に起たなかつた。梁が佛領海防より梧州に入り、陸の部下の陳炳焜と心を合せ熱心に彼を説くに及んで、彼が雲貴討伐の大命を拜して北京から莫大の費用の送附を受けた翌日、乃ち梁と連名で廣西の獨立を宣言したのである。之より南方は大に勢を盛り返す事となつた。當時岑春煊は日本に在つて或種の運動に從事して居つたが、其運動の多少の成功を收めたといふ報道も亦、廣西を動かすに與つて力があつたらうと想像する。

廣西の獨立はやがて廣東の獨立を促がす事になつた。一體廣東が起たなければ廣西が起つことが出來ない形勢にある。强いて廣西が先に起つた以上は、無理にも廣東に迫つて提携を强要せなければならない。果して廣西は三月廿五日陸、梁の名義を以て廣東に最後通牒を送つた。然るに先にも述べたるが如く、廣東將軍龍濟光は袁世凱の幕下であり、且つ嘗て革命黨に大迫害を加へた來歴があるので、容易に南方に加擔することが出來ない境遇にある。北京政府も亦廣東に離れられては大變だといふので、頻りに牽制運動に努めた。茲に於て廣西はいよ／＼兵を以て迫るといふとになり、三月廿八日には兵を入れて欽州を取り、更に雷州半島に旗を進めた。其上廣東省の內部には陳炯明一派の暴動があり、汕頭、潮陽等の獨立を宣言するあるに及び、北京より蔡乃煌を遣はして切に龍を說得せしめたに拘はらず、大勢に抗することを得ずして龍は四月六日を以て兎も角も廣東獨立を宣言した。斯くして南方の氣勢は益々昂つた。

此頃恰度岑春煊は日本から歸つた。兩廣の有志は多年此方面に勢力ある岑を擔いで兩廣統一の計を立て

た。之は南方獨立諸省聯合の前驅と見るべきものであるか、或は龍濟光の態度に未だ煮え切らざるものあるが爲めに、岑を擔いで兩廣統一の名の下に龍を抑へる爲めであつたか、能く分らないが、兎に角「廣東廣西兩省の軍隊を統轄し、一切の軍務を管理し、政務財務を兼籌」せしむるといふ趣意で、四月卅日兩廣護國都司令部といふものが組織された。岑春煊は擧げられて都司令に任じ、梁啓超、李根源は各々都參謀、副都參謀に任じて參謀部を組織し、其他外交財政等の部局をも設けられたのである。尤も之に先ちて龍濟光の態度が獨立宣言後も曖昧であると言ふので、廣西は再び討伐の決心をなしたのであるが、日本領事の調停により、四月廿四日袁世凱の派遣したる密使蔡乃煌を銃殺して他意なきを示し、辛やく纒つたのであるが、それでも龍の態度に十分心を許せないと言ふので、都司令部も廣東に置かずして之を肇慶に置いた。

南軍の形勢は更に五月六日、兩廣が雲貴を合して四省を包括する軍務院の組織成るに及んで更に大に振張した。軍務院は雲南都督唐繼堯を撫軍長とし、岑春煊を副撫軍長とし、更に劉顯世、陸榮廷、龍濟光、岑春煊、梁啓超、蔡鍔、李烈鈞、陳炳焜の八人を撫軍とするものであり、畢竟兩廣雲貴の主たる當局者を以て組織するものではあるけれども、其自ら任ずる所は一地方機關を以て居るものではない。「大總統に直隷し、全國の軍機並びに交戰の事及び其前後一切の政務を統一籌辦」するといふ意氣込である。即ち彼等は袁世凱の不軌を謀れるによつて中華民國大總統の職は當然黎元洪の繼任する所となれりと解し、而かも黎は所謂「賊圍」に陷り自由の意志を以て國務を親裁することは出來ない、畢竟目下の支那は無政府の狀態に在るから、玆に暫く軍務院を設けて、正當なる政府の成立するまで軍國一切の事務を執行ふと聲言して居るのである。此意味を以て全國に宣言し、此意味を以て外國代表者に宣明を發した。本部を依然肇慶に置いて、廣東まで乘出し得なかつたのは、些か齒痒く思はるゝのであるけれども、而も彼等は之を以て交戰團體としての承認を諸外國に求むるの下準備を示さうとしたのである。

實權の岑にあることは言ふを俟たない。撫軍長の地位を唐に讓つたのは、起義創唱の功を雲南に讓つたのと、又平素政敵の多い岑を表面に立つるを憚つた爲めであらう。之より南方革命派の中心點は益々明白になつた。即ち南方に於て實際事を擧げて居る所謂軍人派

とでも言ふべきもの丶中心は岑春煊であり、之が唐紹儀を中心とする在上海の所謂文治派と兩々相俟つて、討袁の大旆を翳して居る譯になる。

斯く南方の旗幟鮮明になると、所謂護國軍加入の名義の下に、獨立の宣言をするものが段々と殖えて來る。南軍が湖南省に進出して段々北するに從ひ、所在獨立の聲を擧ぐるもの少からず、五月央ば迄に湖南の南方地方は殆んど護國軍の風靡する所となつた。五月の五日浙江省も亦獨立を宣言し、態度曖昧なりし朱瑞は斥けられて新たに呂公望は推されて都督となつた。彼が革命派中の少壯頭目であることは人の知る所である。又四川省では三月末より南北兩軍の間に休戰の約成り、其間屢々蔡鍔の軟化說などが流布されたけれども、結局陳宧を丸めて五月廿日過ぎに獨立の宣言をなさしむるに成功した。廿四日北京政府の策令で、陳宧を免官し其上京を命じたのは、四川の北京に對する絕緣を明證するものである。新たに四川將軍の任命を受け成都の討伐に向つた周駿が、本來南方に款を通じて居るものたることは先にも述べた。北軍を代表して一時蔡鍔の軍を困しめた重慶の曹錕までが、大勢に推されて獨立を宣言せんとして居るといふ事である。之と相前後して陝西省に於てはまた陳樹藩の三原縣に於て獨立を宣言し、將軍陸建章を追うて遙かに四川に呼應するものがある。陳樹藩は實は四川省の獨立するのを待つて居つたのである。曾て袁世凱の意を迎へて國民黨員の大虐殺を行ひ、殘忍の度遙かに趙秉鈞に超ゆると稱された陸建章が、其身危しと見て逸早く西安を見捨てたのは無理もない。廿五日陝西省の全部獨立成り、更に動搖は山西に及ばんとして居る。五月廿七日には新疆の獨立、廿九日には湖南の獨立を報じ、江西も亦大に動搖して居ると言ふことであつた。

是より先、孫逸仙の一派は山東及び上海に於てまた事を擧ぐるの計をなして居る。上海に於ける陳其美の軍艦策電乘取事件(五月五日)は、見事に失敗して之に加擔せる日本の豫備軍人八名捕虜となつて日本官憲に引渡されたといふ醜態を演じたが、居正を謀主とする山東の擧兵は、五月四日夜の濰縣城攻擊に初まり、屢々失敗したるに拘はらず、遂に廿四日を以て北軍の守備隊長をして開城退却せしむるに成功した。濟南府に於ても暴動相踵ぎ、將軍靳雲鵬は大勢に押されて危く獨立を宣言せんとしたが、北京に呼返へされ途中天津で姿を隱くした。五月卅一日新に張懷芝其位を繼いだ

が、固より革命軍を撲滅するの見込は立たない。山東居正の運動は、陰に陽に日本人大に之を援けて居ると言ふ。風説の眞僞は固より之を知らないが、兎に角此運動の成功は著しく北京を脅かすものであり、假令十分成功せずとするも、少くとも徐州の張勳を牽制するの効能は大にある。上海の方面は一敗地に塗れたけれども、久しく日本に在つた孫逸仙を五月三日此地に迎へてより、彼等の運動は又更に一新生命を開かんとして居つた。孫の片腕たりし陳其美の暗殺（五月十八日）は、惜しい事ではあるが全體として大なる損失ではない。

孫派の事に就ては、玆になほ一言註解を加ふるの必要がある。此一派は舊國民黨中の過激派として從來餘り世間の同情が無かつた。從つて今度の討袁運動についても、國民黨中の溫和分子は、進歩黨とは提携しても孫逸仙の一派とは事を俱にすることを欲しなかつた。固より孫逸仙は革命運動の元動なるが故に、成功の上は厚く之を本國に迎へると言ふ考ではあつたらうであるが、然し大事の成功するまでは、寧ろ彼等を除外するを必要と認めて居つたさうである。孫逸仙の一派も亦自ら中華革命黨なるものを組織し、自分一流の考で革命を遂行する決心を堅め、敢て他人の計畫に參加するといふ考を持つて居ない。故に今度の革命運動に就ても、初め孫派は全く無關係であつたが、之が三月の末に至つて兩方の妥協成り、所謂大同團結玆に成立して其上で孫逸仙が上海に歸つたのである。此事は又支那に於ける各派の革命主義者を精神的に統一する上に、頗る有效なものがあつたらうと思はれる。

斯くの如き形勢であつたから、最近の北京政府の狀態といふものは、宛かも懸軍萬里重圍の裡に陷つて居るが如きもので、袁氏の運命は言はゞ風前の燈火であつた。唯南方には一擧に敵を挫く爲めに必要なる金と武器とを缺いて居る。これさへあれば天下は忽ちにして袁を離れるのであつた。或人は南方諸派の折合が付かないとか、或は黃興派と唐紹儀派との間に暗鬪があるとか、又は文治派と武斷派との間に十分の疏通が出來て居ないとかいふのであるが、一部分斯くの如き事情もあつたらうとは思ふが、然し之は討袁運動の遂行に大した邪魔になる程ではなかつた。討袁の目的を達した後、新政府を如何に組織するかといふ問題を論ずべき時代になつたら、無論幾多の暗鬪、幾多の反目を見るであらうが、彼等は差當り討袁といふことに餘りに熱心であるので、此目的の爲めの結束は頗る堅いも

のがあつたやうだ。故に或一部の人の言ふが如く、南北は結局妥協するであらうなどゝいふのは、當時の形勢に於ては斷じて有り得ないことであつた。討袁の遂行は主として南方武斷派の希望であり、上海の文治派は必ずしもそれ程極端ではなかつたといふやうな說もあつたが、然し之は事實ではないやうだ。上海に集つた二百餘名の舊國會議員が三月下旬、自ら上海に於て正式の國會を召集すべきことを協定し、四月上旬には所謂國會議員通訊所なるものを設け、五月十七日にはいよ／＼國會議員の召集を決議發表したのは、彼等が全然袁政府を度外視し、肇慶に於ける軍務院と呼應して南方に於ける獨立の議會と政府とを作るといふ決心であつたことが分かる。即ち彼等は兩院議員を六月卅日を限つて上海に召集し（後報に依れば七月十日開院式を擧くべしといふ）、以て曩に袁世凱の蹂躙する所となつた議會を恢復しやうとしたのである。日本の二三の新聞に、此議會の召集を袁世凱の死後に決定されたやうに書いたのは誤りである。支那の新聞には五月の廿日頃から此廣告が發表されてあつた。

要するに五月末より六月にかけての形勢に依れば、北京政府は正に累卵の危きに在り、南方革命軍は遠からず一大飛躍をなして討袁の目的を貫徹すべく見えて居つた。此時に當つて我々の最も注目して居つたのは、黃興の日本に於ける運動畫策である。彼は今度の運動に全然無關係ではないが、然し革命遂行の功を蔡鍔や唐繼堯等に讓り、自分は暫く傍觀の地位に立たうといふ當初の考であつたらしい。けれども本國並に在日本の同志の、急を說いて彼の歸國を求むるものあり、遂に五月初め旅裝を東京に解くことになつたのである。爾來彼は客を避けて頻りに東奔西走して居るやうであるが、彼が奔走の功を奏していよ／＼歸國するの時は、即ち南方革命派の一大飛躍をなすべき時であつた。然し是等の計畫は袁世凱の死に由つて、一大變轉を見ることになつたのは固より言ふを俟たない。

翻つて更に袁世凱を中心として彼の生前に於ける北方の形勢を觀察しやう。前にも述べたる如く、袁世凱は初め武力討伐の可能を信じて居つた。而して此信念に冷水を注いだものは廣西の獨立の報である。三月十七日總統府に開かれたる重要會議は、武力討伐案を斷念し、南方の鋭鋒を挫いて天下の形勢を我に有利なるやうに轉ぜしむるの策を取ることに極めたらしい。是より彼は凡ゆる策略を弄して、體面と實益とを損ずる

事なくして南方と妥協し、所謂名を捨てゝ實を取るの奥の手の策略を連發することになつた。第一着に取つた方法は、所謂帝制の取消によつて南方より反抗の口實を奪ふといふ方策である。此事は廿一日の重要會議で決定したので、廿二日の申令で以て明白に帝制取消といふ事を宣言したのである。同時に洪憲の年號を廢し、又大典籌備處をも廢し、皇帝推戴狀を代行立法院に返附し、斯くして一方には人望の恢復に資し、他方には南方をして反抗の口實なからしめんとした。同日更に徐世昌を起用して新内閣を組織せしめ、又段祺瑞を擧げて參謀總長に任じ、以て南方と妥協するに意あるの態度を裝ひ、更に又南京の馮國璋に賴んで南北調停の勞を執らしめやうとした。之と同時に袁世凱は又南軍に向つて休戰の申込をした。南方では形勢の惡るかつた四川方面に於ては、此申込に應じて一ヶ月の休戰を約したけれども、景氣の好い湖南方面に於てはどんどん進兵を熄めなかつたやうだ。兎に角斯くして袁世凱は南方に向つていよ〳〵妥協を申込むといふ段取りに進んだのである。即ち三月廿四日の日附で、袁は黎元洪、徐世昌、段祺瑞三名の連名を以て陸榮廷、梁啓超、蔡鍔、唐繼堯等に書面を送り、帝制取消の詳細を通牒し、斯く南方の目的が達せられた上は直ちに兵を收め、速かに善後策を講じやうではないかと提議せしめたのである。けれども南方は固より輕々しく此提議に乘るものではない。彼等は互に電報を以て意見を交換し、三月廿六日、(一)一定の日を限つて袁世凱其職を去り且つ國外に去る事。(二)袁世凱の子孫の參政權は永久に之を剝奪する事。(三)帝政元兇楊度、段芝貴等十三人を誅戮する事。(四)帝政籌備費及び此度の軍費は袁世凱及び前記十三名の家產を以て賠償する事。の四ヶ條を承認するならば妥協の申込に應じやうといふ返事をした。其後三月廿八日、北京政府は再び雲南・貴州・廣西の三省に向ひ、例の所謂某國干涉の禍害を說いて國家の爲めに妥協するの急要を迫つたけれども、革命派は斷然之を斥けた。そこで袁政府は然らばせめて上海派だけでも動かさうとしたのであるが、上海派も亦共和主義の維持、民國約法の復活、袁の退位及黎の繼任並に袁の處罰を條件とするにあらざれば、其提議に應ずる事が出來ないと返事したので、折角の妥協策も遂に成功する事が出來なかつた。

　老猾なる袁世凱は、一方休戰妥協の爲めに努力して居りながら、他方討伐の用意をも決して怠らなかつた。

北京政府が比較的優勢なる兵力を有しながら武力討伐に成功し得ざりし所以のものは、一般の人氣を失して居るといふことの外に、財政に困難して居つたといふのが最も大なる原因であつた。外國の管理の下にある鹽税の收入は交附されない。各省の分擔金は減じ　僅かに平時の三割を得るに止まつた。日に〳〵財政が困難なるので、遂に五月十六日には兌換の停止を見るに至つた。其間政府は頻りに鹽務顧問デーンを通じて鹽税剩餘金の交附を嘆願し、又頻りに米國方面に向つて借款の運動をした。之は單に一般政費の缺乏を充たす爲め許りではない。其證據には外國公使團が鹽　剩餘金の交附は即ち支那に於ける一方の勢力の助長になるからといふので、其交附を承諾しなかつたのでも分かる。此時外交團は、既に北京政府をば事實上支那に於ける一地方的勢力に過ぎずと觀て居つたものらしい。要するに借款の運動は其聲の大なりしに似ず殆んど一つも成功しなかつたやうである。

各種の手段に失敗して、袁は最後に段祺瑞の力を籍りて疏通の道を講じやうとした。彼が自ら國務總理にして陸軍總長を兼ね、袁の家の子郎黨を集めて所謂責任内閣を組織したのは四月廿二日である。段祺瑞は素と袁世凱の幕下であつたけれども、最近袁の忌諱に觸れ、一度は彼の暗殺の毒手に付け狙はれたこともある。帝政問題の起るや、堂々と反對の意見を發表して南方の連中をして密かに痛快を叫ばしめた。久しく北京に蟄居して一身の安全を計つて居つたが、今や時局の急を救ふべく、袁世凱の懇望辭み難く政府に起つたのである。彼は豫て時局の收拾には武力の討伐か、根本的の妥協か、二者其一を執るべく、姑息の小策は却て大局に妨げありと云ふ議論を發表して居つた。今や武力討伐不可能なりとすれば、大に南方の意見に讓歩して妥協を計ると云ふのが彼の立場であらねばならぬ。此點を利用して袁世凱は彼を起して妥協の功を遂げしめんとしたのである。然れば段祺瑞を擧げたといふ事は、一面に於て袁に大なる讓歩の意思ありといふ事になる譯である。然しながら南方革命派は、假令幾分段の意を諒とするものありとは云へ、袁の退位といふ根本點の一致を見るにあらざれば、斷じて妥協に應じないと云ふ決心を固めて居る。袁は固より之を欲しない。そこで段は遂に袁に退位を迫つて時局を收拾しやうと考へたのであらう、其爲めにや彼は四月廿七日袁世凱が引續き持つて居つた廿四萬の軍隊の總率權を内閣に移

さんことを乞ふたのである。けれども袁世凱は所謂大元帥總率辦事處を廢して全然孤立無援の地に立つことを欲せず、段の要求を斥けた。而して五月一日には總統府内に重要會議を開き、予は敢て地位に戀々たるにはあらざれども、今日を以て退位するは即ち國家の爲めに計つて忠なる所以にあらずと稱して明白に留任の決心を宣明した。是に於て段祺瑞の苦心も亦水泡に歸し、妥協の望は全く絕えた。唯彼は袁世凱の兵力に脅かされつゝ、責任内閣の首班たる空名を維持するに過ぎないものとなつた。

段祺瑞の妥協失敗に次いで起つた問題は南京會議である。南京の馮國璋は五月五六日の頃蚌埠に倪嗣冲を誘ひ、連れ立つて徐州の張勳を訪ひ、相談の結果、未だ獨立を宣言せざる各省に打電し、各々全權代表一人を南京に派遣して、時局解決の會議を開かんことを提案した。此會議招集の魂膽は如何なる點にあるかと言ふことは、今日尙疑問である。然しながら馮國璋の人と爲りを考へ、又當時北京の情勢等を考へ合はするに、之れ恐らくは段祺瑞を出し拔いて時局解決の功を全うせんとする袁世凱の策略に出づるものではあるまいか。袁は一旦段を呼出したが、彼に自家の兵權を奪つて退位を迫らんとするの腹あるを見て、卽ち彼の事には見切りをつけ、更めて馮に依つて最後の解決を計つたものであらう。一體馮は帝政問題に對する是非の論盛なるに方つては、之に反對の意を發表し、又南方の動亂起つて後も頻りに退位勸告を繰返して、只管强硬の態度を裝うて居つた。蓋し彼は前にも述べた如く、其初め南方に款を通じ、而かも寢返りを打つて南方の計畫を齟齬せしめた者であるから大に南方から恨まれて居る。然ればと言つて袁世凱からも喜ばれない。一度南方に通じた位だから、北では彼を以て一種の危險人物視して居る。所謂二兎を追ふ者一兎を得ずで、彼は南北兩方から賴み甲斐なき人物と見らるゝ事になつた。そこで彼は一方に於ては頻りに强硬の態度を執つて居るが如くに南方に衒示(みせびらか)し、他の一方には或は密使を袁に送つて、「强硬の言論をなすはもと其本心にあらず」など、辨解せしめ(四月廿九日)、他方は頻りに南方に打電して擧兵を勸めた。老猾なる袁世凱は馮の不忠を憎むよりも、寧ろ彼を羅致して我用を爲さしめんとしたのであらう。乃ち彼に征討軍總司令官の大任を與へて北上を勸めたが、彼もさたさる者、病と稱して再三之を辭退した。其間に彼は切りに袁世凱から時局を

調停するの業は君を措いて他に之を完うすべき人はないなど〻煽てられしものと見ゆる。斯くて彼は五月一日遂に所謂時局解決案八ヶ條なるものを掲げて、南北の間に斡旋せんと試みた。南方の之を容れざるを見るや、乃ち彼は策を轉じ、自ら主盟となりて未獨立の十五省の勢力を糾合し、其威力を以て解決を南方に强制しやうとしたのである。斯くして張、倪を語らつて協同連名の通電を諸方に發したのは、其外貌だけで判斷しても、之は馮國璋の策と言はんよりは寧ろ袁世凱の策らしい香ひがする。人によつては此策の出所はモリソンで、親しく之を馮に説いたのも亦モリソンであるといふものもある。通電を發したるは五月六日。而して其後發表された議題なるものを見るに、馮の從來の説とは勿論、五月一日の提案八ヶ條とも著しく異り、第一の主題は國家存亡にあり、袁世凱の退位と否とは第二の問題であると云ふ名目の下に、明白に袁擁護を標榜して居る。之を段祺瑞の解決案に對する袁世凱の面當と想像して見れば、其間に言ふ可からざる皮肉味がある。然し袁擁護を既定の條件としては時局の解決が容易でないけれども、甘く行けば政界の中心勢力たるの地位を占め得ると言ふので、彼はこの果敢なき容望に動かされてうま〱袁の策に乘つたものであらう。果して彼の空望は眞に空望に終り、其結果は決して豫期の如きものではなかつた。第一に馮の鼻柱は唐紹儀等の上海派が發表した痛激なる反對意見に依つてへし折られた。此反對意見は「二十二省旅滬公民唐紹儀等反對馮電之宣言」といふ名の下に、其計一萬三千九百七十一人の名前を以て發表せられた。勿論此中には田舍に居り、全く相談を受けない人も有るやうだ。現に日本に滯在して居る人の名前も見えて居る。けれども此宣言書の發表は、著るしく馮の計畫の人氣を落し、未だ開會せざる先きから世間では餘り多くの希望を掛けなかつた。されば開議の豫定日(十五日)までに代表者の集まるもの少く、偶々集るものも獨立の議決權なき地位の低きものが多くして、爲めに數日の延期を餘儀なくされた。十七日、十九日豫備會議を開いたが、何の纏る所もない。而して大勢は袁の退位を以て時局解決の爲めに根本的に必要なりと言ふにあつた。二十日いよ〱本開議を開き、更に二十二日の會議に於て、袁の退位は既定の方針である以上、我々は宜しく獨立各省の代表者をも入れて善後策を講ずべしと云ふ、丸で當初の趣意とは違つた決議が通過することに

なり、爲めに二十三日を以て雲貴兩廣浙の五省にも代表者の派遣を電請することゝなつた。然しながら獨立五省は此請求に應じない。却つて肇慶の一派は馮國璋の主張の一顧に値せざることを明言し、且つ袁退位するの後にあらずんば、絕對に調停を問題とすべからざる旨を宣言した。そこで折角の南京會議も目的を達することが出來ないと言ふ事になり、二十七日更に正式の會議を開くべき筈であつたにも拘はらず、代表者にそろ〳〵歸國するものを生じ、自然會議が不可能となつた。斯くて有耶無耶の間に終り、六月四日遂に馮をして北京政府に打電し、南京會議己に解散せるを以て、時局解決の方法は內閣自ら速に之を講ぜられんことを乞はしむるに至つた。

尙之に關聯して一言すべきは、南京會議に對抗して段祺瑞が企てた北京會議の事である。各省の代表者を集めて時局解決の途が附くものならば、馮よりも己れの方が寧ろ便宜があると言ふ考であらう、段も亦各省より代表者三名を呼んで北京會議を開くの計を立てたが、然し之は實現せらるゝに及ばずして袁世凱の逝去を見たから結局立消えに終つた。

以上の如く袁世凱は苦心に苦心を重ねて時局の收拾に骨折つたが、同時に彼の陰險辛辣なる亦決して南方攪亂の手をも緩めなかつた。其結果として顯はれたものに、五月十八日の陳其美の暗殺がある。過激に過ぎて孫逸仙も多少持て餘したといはるゝ陳其美、他の革命派からは却つて之と事を共にしては最後の目的の貫徹に妨げありと厄介視せられて居つた陳其美を殺したと言ふ事は、一方に於ては徒らに袁世凱に對する反感を强め、他方に於ては南方の結束を動もすれば妨げんとする障害物を除いた事になつて、結局北方の爲めには何の役にも立たない。梁啓超が母の喪を秘して國事に奔走して居つたのを素破拔いたのも北方であると言はれて居る。爲めに啓が喪に服して實際の活動から暫く離れても、南方は大して困る事はあるまい。人によつては比較的に保守的なる思想を有する彼の引退は、結束を鞏むる上に寧ろ都合がいゝなどゝ言ふものもある。斯くして袁の爲す所、爲さしめたる所は、結局彼に取つて大した利益にはならなかつたやうであるが、然し兎に角南方の足並を亂すことの用意を怠らなかつたことは疑が無いやうだ。

生前一兩月間の袁の活動は、縱横の奇策をやるに不屈不撓の精神を以てし、其情形頗る素晴しいものがあ

つた。然し大勢は彼に不利にして、今や殆んど百計將に盡きんとするの有樣にあつた。けれども彼は最後まで退位の決心を爲さなかつた。然らば彼に最後の勝利を占むるの確信あつたかと言ふに、必ずしも然うではあるまい。聰明なる彼に大勢の見えぬ筈はない。それにも拘はらず、彼が最後の勝利を確信せるかの如き態度を以て、飽まで留任の意思を翻へさなかつたのは、或は南方の運動は日本の後援に由ると誤信し、而して近き將來に於て或は來るべき日本の政變は、南北對峙の勢力關係に重大の影響あるべき事を豫期したのか、又は更に他の一面に於て、密かに英米の後援を便りとして居つたのではあるまいか。三月二十九日北京發電として三十一日の「東京朝日新聞」に載する所に據れば、袁は腹心のものを派して馮に說かしめた中に「帝制を取消して日本をして干涉するの餘地なからしめたのは、豫て日本の野心を憂へて居つた英國公使ジョルダンの勸告に從つたのである、日本にして此上我國に干涉するが如き事あらば、英國は米國を語らひ協同して日本を壓迫する譯になつて居る」と言はしめたとある。此報道にどれ丈けの根據ありやは、予の知らざる所なれども、北京政府が英米の後援をば心窃かに賴んで居つた事は疑が無いやうだ。英人自ら袁等をして斯くの如く信ぜしめたかどうかは、今の所分らない。何れにしても斯の如きは固より空望に屬するものにして、局外より觀察するものに取つては、袁の地位の將に累卵の危きにあつたことは疑が無かつたのである。北方の勢力がさう容易くは落ちないとしても、袁の運命だけは、慥かに風前の燈火であつた。沒落に先だつて死んだのは、却つて其終りを全うしたるの感がないでもない。

▽袁の逝去による形勢の變動

袁の逝去が南北兩方に少からぬ變動を及ぼすといふ事は、何人にも異議は有るまい。唯如何なる種類の變動を及ぼすかゞ問題である。

第一に南方の態度に如何なる變動が起るだらうか。此點を考ふるには先づ南方の運動の眞の目的は何かといふことを見ねばならぬ。表面の目的は言ふまでもなく討袁であるけれども、然し彼等の結局に於て目的とする所は、一つには袁世凱によつて代表せらるゝ舊式政治の根本的打破であり、も一つには自家の手に政權を獲得することである。此二つの目的が達せられるまでは、假令直接の相手が死んでも、直ちに引込むもの

ではない。最後の目的を達するまでは何處までも運動を續くるの必要がある。然るに袁世凱の死は此最後の目的を達する上に如何なる關係を及ぼすかと言ふに、成程一方より觀れば、自分達の運動に對する最も强大なる障害物が無くなつた事になるから、喜ぶべき出來事のやうにも見える。然れば逝去の報道の傳はつた當初は、性急なる一部の革命主義者は袁逆遂に天誅に服すなどと云つて盛に祝盃を擧げたさうだ。が、然し他の一方から觀れば、袁の死は亦彼等の運動を繼續するの口實の消滅になる。其故如何といふに、元來支那には弊政改革の意義が十分に民間に徹底して居ない。少くとも革命の必要を純粹に感じて居るものは極めて尠い。加之一面に彼等は亂を好まぬ人民である。此の人氣に逆うては、折角事を擧げても容易に成功を見ることは難い。殊に革命派は其運動に必要なる金を一部は外國から借入れるならんも、他の重なる一部分は所在の商務總會等より得るのであるが、是等の豪紳はもと國民中最も平和を欲する部類である。漫りに亂を起せば彼等より糧道の補給を受けることが出來ない。如何に革命者が彼等の人氣を顧慮して居るかは、現に彼等の後援の下に革命運動を遣つてる今度の連中は、一面に於て成る丈け避けられる丈は戰爭を避けやうと勉めて居るの事實を以ても分る。今日の革命運動が徒らに筆舌の論戰に走つて、捗々しき進行を見ないのは、强ち武器彈藥の不足の爲ばかりではないのである。然ういふ次第であるから、單純な政治改革と云ふこと丈けで旗を擧げると云ふ事は、支那に於ては實は餘程困難だ。そこで何等か他の、民間に時によつて蟠つて居る政府反對の不平の念を利用するの必要がある。之れ辛亥の第一革命が排滿思想を利用して起つた所以である。今度の第三革命は又實に帝政問題の結果として起つた激烈なる袁世凱排斥の機運に乘じて起つた。之れが今次の革命運動の非常な勢を以て發展した主要なる原因であるが、同時に之れが又革命運動の中に潜在する隱れたる弱點でもある。此弱點は袁世凱の死に由つて玆に圖らずも遂に暴露せざるを得ないことになつた。是等の事情は、恰度第一革命の時と其揆を一にして居る。袁世凱の巧妙なる奸策によつて滿洲朝廷の退くや、即ち排滿の目的達せりといふことになつて、此上戰亂を續くる事を許さなかつた。革命黨は革命の事業漸く其緒に著いた許りで、見す／＼袁にしてやられると言ふ事を知りながら、袁と心ならずも妥協せねばならな

かつた。今次の第三革命も亦今日、同樣の難關に遭遇して居る。袁世凱死後の內外の議論は、今現に討袁の目的已に達せられた以上、須らく兵を戢めて妥協の途を講ずべしと說いて居るではないか。最も南方革命派の精神を理解し、之に厚き同情を有つて居ると言はるる我國の操觚界の輿論すら、今や南方に向つて妥協を迫り、此上强硬の態度を固執するならば、徒らに亂を好むの謗と責任とを彼等の上に嫁せんといふの態度を示して居る。して見れば、折角此處まで進んで中途にして方針を改むるのは寔に殘念ではあるが、大勢には抗し難く、彼等は玆に恨を呑んで妥協するの外はないことになる。要するに今や妥協は已に內外の輿論となつた。遣り方によつては後害を貽さずに濟むこともあるが、然し妥協では如何しても舊思想舊勢力の幾分殘存するは已むを得ないし、且つ反袁運動に協同したもの丶中にも實は舊思想の人も大分あるのであるが、若し最後まで運動を續ければ、純粹の革命派丈けが十分の勢力を占め得る見込もあるのに、半途で止めては、同志中の異分子たる舊思想の人も相當なる勢力を占むると言ふことになる恐れがある。斯く考へて見ると、袁世凱の死は彼等に取つては實は少し早過ぎた。然し兎に角大勢が斯う變つた以上は、彼等の欲すると欲せざるとに拘はらず、形勢は玆に一變し、支那の時局は所謂妥協によつて終りを告げることになつたと觀なければならぬ。唯如何なる形式に依つて妥協さる丶かは、今後南北交涉の掛引に由つて定まるのである。

南方の頭目は、固より大勢の變化に從はざるべからざるを知らぬではないが、妥協するとしても拙い妥協はせぬと言ふ用意は、なか／＼細かに考へた樣だ。卽ち彼等は妥協と言ふ大勢の下に於て最善の立場を得んが爲めに、又まかり間違へば之に由つて再び抗爭を續け得るの口實を作らんが爲めに、早く已に善後策の協定に對していろ／＼の主張を掲げて居る。其第一は新大總統の自由と言ふ事である。彼等の大多數は、袁世凱生存の當時より已に袁の大總統としての地位は國體變更を企てた時より消滅せりと解し、法律上正當なる大總統は黎元洪であると主張し來つたから、今や袁の地位を黎が繼ぐと言ふ事に就ては何等の異存はない。中には四川省・陝西省・浙江省・湖南省の如く、黎の就任に滿足して獨立を取消したものすらある（後に此說を否認するの報道もあつたが）。然しながら他の多數の革命主義者は、黎の就任丈けでは滿足が出來ない。彼が名

實共に大總統として其自由の意思を以て一切の政治を敢行し得るにあらずんば安心が出來ない、と言ふ意見であつて、中にも六月七日上海の唐紹儀邸に集まつた廿餘名の團體の決議の如きは、袁派が尙殘つて黎の自由意思を拘束する以上は、先づ北京に於ける袁の殘黨を掃蕩するの必要があると說くのであつた。然らざるも、實權を有する段祺瑞政府の態度を見てから、徐ろに自分達の態度をも定めやうと言ふ說が多かつた。此等の考は一面に於て黎元洪をして北京に於ける名實相副ふの元首たらしめん事を求むると共に、他面に於ては段祺瑞其他の北方的勢力をして政界の表面に於ける唯一の發言權者たらしめざらんと要求するものである。此考に對して北方が如何なる態度を執るかは、何れ遠からず內閣改造の問題と關聯して明かになるだらう。

次に南方は舊約法の復活、舊國會の回復といふことを要求して居る。舊約法といふのは、民國元年三月十一日臨時參議院の議決を經て臨時大統領の公布したものである。之は天下の權力を全然參議院に集めたもので、臨時大總統及び副總統は其の選擧する所に係り、國務大臣並びに大使公使の任免黜陟は固より、宣戰講和並びに條約の締結も齊しく參議院の同意を得ねばならぬとなつて居る。行政部の首腦が斯くの如く無力では困るといふので、袁世凱は此約法を喜ばなかつた。國會と彼と屢々衝突したのであるが、二年十一月四日遂にクーデターを斷行して議會を閉ぢ、翌三年の五月一日を以て非常に專制的な現行約法を公布した。南方の革命派は即ち此新約法を以て袁の私意に出づるものとなし、元年三月の約法を眞に民意に基く民國の根本法として復活せしめんことを要求するのである。又舊國會の回復といふのは、民國二年十一月のクーデターによつて議會を閉ぢた際の議員を其儘招集して、民國今日の議會としようといふのである。此等の要求は、名を舊法舊制の復活に藉るけれども、其實は今日の革命運動の中堅を成す國民黨進步黨の掌中に全體の實權を收めようといふ次第なのである。北方の政府が之を喜ばざるは固より當然である。尙此問題と牽連して、新大總統の地位に關しても、其據るべき法規について議論があつた。即ち新大總統の地位は袁世凱の拵へた新約法によるべきや、又は舊約法に次いで正式の憲法の一部をなすものとして民國二年十月特別に離して制定された大總統選擧法の規定によるべきやの問題である。舊約法は假りの憲法で、正式の憲法は追々制定さ

るべきことになり、其爲めに憲法起草委員も選ばれて居つたが、袁世凱は之を待ち切れず、少くとも臨時大總統の地位丈は急いで之を變じ、一日も早く正式の大總統とならう、以て速かに列國の承認を得んとあせり、爲めに取敢へず大總統選擧法丈けを先きに造つて、正式の選擧を急行せしめようとした。之が即ち民國二年十月の大總統選擧法である。扨て袁の死するや北京政府では取り敢へず新約法第二十九條によつて、副總統黎元洪を以て中華民國大總統の職權を代行せしむと宣告し、諸外國にも其旨を通知した。之れ舊法復活の精神に背くといふので、反對の聲喧しく起つた。其爲めにや北京政府は十日を以て改めて黎元洪の就任は繼任である、代行でないと訂正して來た。之れ大總統選擧法第五條本任總統の殘餘任期を副總統の繼任するといふ規定によつたのである。即ち南方の意見に此點は讓歩した譯になる。けれども舊法並びに舊國會の復活の一般問題については、今日まだ意思の合致を見ない。

（註、後に得たる報道に依れば、新約法第二十九條に據る大總統職權の代行といふことは、袁世凱生前の告令といふ形式で宣告された。實際は死後に於て王式通といふ人の起草したものださうだけれども、正式に喪を發せずして徐世昌・段祺瑞等が自動車を驅りて黎を訪ひ、袁の命と稱して代行の事を告げたのださうだ。して見れば黎の代行は袁の生前に於ける其職權の代行であつて、袁の逝去は當然此命令の效力を停止せしめ、何人が大總統の地位を嗣ぐべきかは、別に法規の定むる所によるべきことになる。故に十日黎が改めて大總統の職を繼任したといふて來ても、何等不思議はない。併し此等の點を明白に意識して取扱つたか如何は予の知る限りでない。）

次に新大總統の下に於ける新政府の組織についても議論がある。現在の段祺瑞内閣を袁世凱の作つた僞政府なりとして承認を拒むの態度は、諸派の革命主義者の一致するところである。而して正式の内閣は本式の國會の成立した後に相當の手續をとつて組織すべしとする議論にも異議はない。只それ迄の間無政府では居れぬから、臨時の經過的の政府の北京に發生することは之を許さないわけには行かない。此事も亦各派の間に異論はないやうだ。北京に正當の政府なしと爲し、自ら臨時國政の籌辦に當ると聲言して起つた肇慶の軍務院ですら、此事を承認して居る。只流石に彼は北京に出現すべき臨時政府は豫め軍務院の承認を要すると言つて居る。其他の革命派はそこまでは行つて居ない。無條件で臨時内閣の存在を認むる考のやうだ。只現在の段祺瑞内閣をして臨時善後策の處置に當らしめるか、或は臨時内閣は別に之を組織せしむるかゞ議論の

岐るゝところである。然し此事は南北兩代表の會同協定の上でなければ定るまい。それ迄の間は何と言つても段內閣の存在を認めざる譯けには行かない。それでも段內閣に許すに正當なる政府の資格を以てせざること丈けは明白である。段祺瑞を其儘國務總理にするか、或は單純な一陸軍卿に止まらしむるか、或は全然彼の引退を迫るかは豫斷出來ないが、兎に角內閣の近き將來に於て改造せらるゝことは疑はない。而して此改造に際して、南方の意思希望が大いに重きをなすべきことも亦、之を想像するに難くない。

最後に南方派は帝政元兇の處罰を要求して居る。帝政元兇として目指されて居るものは、先づ第一には雲南革命軍が擧兵に先つて其處罰を要求した梁士詒、揚度、孫毓筠等十三人、續いては袁世凱一家のもの丶中帝政に關係したもの等であらう。袁世凱の沒落した今日、此等を窮追することは、革命派の必ずしも絕對に必要とするところではなからうと思ふ。けれども國體の顚覆を計らんずるもの丶將來の見せしめの爲めに、又新政府をして革命派の希望を容れるといふ誠意を明示せしむる手段として、此要求は或は案外に強く主張もされ、又相當の程度までは容れられるかも知れない。然し之よりも實際に必要なるは帝政贊成者にして地方に在つて偉大なる兵力を擁するもの丶處分であらう。例へば奉天の張作霖の如き、蚌埠の倪嗣冲の如き、徐州の張勳の如き之れである。張作霖は僻遠の地に在るから暫らく之を不問に附しても可なるべきが、倪と張とは中支肝要の地を占めて居る丈け、之を如何樣にか處分せねばなるまい。六月十四日の電報によれば、黎は特使を派して張、倪を慰撫し、從來通りの優遇を保障して輕擧盲動するなからんことを戒告したとあるから、北方では穩便に事を收め、出來るならば彼等に大勢の趨くところに從つて貰ひたいのであらう。然しながら彼等は南方より觀れば、到底事を共にするを得ざる頑迷不靈の輩である。而かも實際に强力なる兵隊を有つて居る丈け、彼等の中支に蟠居するを許すは非常に危險である。彼等自身と雖もまた到底南方の連中と事を共にし得ざるものなることはよく知つて居る。倪嗣冲は元來帝政問題の主唱者であり、而かも帝政の實現の爲めには武力を用ふるも之を辭せずと熱心に主張した人であり、今度の動亂に對しても初めより絕えず武力討伐を唱へて居つた。南京會議に於て最も强硬なる說を吐いたのも彼である。六月一日彼は王古元を

武昌に訪ひ、湖南の獨立に對する武力討伐の計を密議し、機先を制して長沙を責むべきことを協議したと傳へられて居るではないか。袁世凱の死後、彼の態度についての報道は杜絶えて居るが、彼は決して馮國璋などの如く軟化するやうなことはなからう。若し夫れ張勳に至っては、五月廿九日武力解決の旗幟を翻して「部下三萬の兵を奉天の兵二萬に合し、更に南京濟南等より各一萬の出兵を求めば、優に十萬の兵を集むるを得べく、斯くして自ら總司令官として南方討伐の擧に從はん」との通電を北京及各省に發した。彼はまた六月初旬、先きに南京會議に參列した北方の代表者を更に徐州に集め、前淸皇室の優待、袁世凱遺族の生命財產の保護の外更に、雲貴兩省其他獨立各省に其獨立の取消を迫り、若し應ぜざる時は武力を以て之を解決する事、及び革命を職業とし屢々秩序の紊亂を計るが如き連中には、絕對に政權に參與せしめざる事等前後十ヶ條の決議をなし、これを北京及び各省の大官に通牒した。之れ正に彼が斷乎として南方革命派の主張に反對するといふ決心を示すものではないか。斯ういふ態度を執って居る以上は、南方の革命派が觀て以て彼等を兩立して事を共にし得ざる不靈の徒とするは當然である。單にそればかりではない。彼等がこゝまで極端に走るのでは、北方に於ても却つて贔屓の引倒しの感を抱かざるを得ないのである。尤も張勳は、一方に於て六月十一日わざ／＼入京して、黎に就任の祝意を述べ、直ちに徐州に歸つてわざ／＼黎の時局解決の盡力を邪魔せざる旨を辨じたといふことである。けれども、今までのやうな頑迷なる態度を固執しては、南北兩方から厄介視せらるゝことは免れない。北は兎も角、南の方から云へば、自分達の趣意の徹底の爲めには、倪、張の兩名を何とか處分するにあらずんば、到底安心が出來ないだらうと思ふ。此點について、南北双方は果して如何なる點に於て意見の協定を見ることが出來やうか。

序に申すが、南京の馮國璋は、初め張、倪の相棒であつたのに、袁世凱の逝去と共に逸早く其態度を改めたものらしい。十三日上海發の電報によれば、彼は北京政府より時局收拾に關する意見を求められたるに對して、舊約法を復活すべき事、南方の黨人を赦免し、北方帝政の兇首を嚴罰すべき事、舊國會を招集すべき事、南北協商して責任內閣を組織すべき事を答申したとある。之では丸で南方の提灯を持つやうなものだ。

最近到着せる革命派の機關新聞の態度が、馮に對して急に一變したところを見ると、利に敏き彼は袁世凱の死と共に再び秋波を南方に寄せたものと見える。然し悧巧ではあるが、浮草の如き動搖定めなき彼は、將來の政府に於てもどうせ重き地位を占むることは出來まい。

第二に袁の死後に於ける北方の態度は如何。彼の生前に於ける北方の問題は、南方の要求に應じて袁の退位すべきや否やといふ事にあつた。而して彼が死んだ後でも、彼に便つて南方に對抗して來た勢力の仍ほ北京に殘存して居る間は、而して南方が討袁の外に此北方の勢力を掃蕩すると言ふ實際的目的を有する以上は、今後に於ても南北兩方の爭は殘らざるを得ない。そこで袁の死後に於ても、北方に取つて南との爭を續けるか或は妥協の方法に出づるかは、依然として一個の重大問題たるを失はない。爭ふとしても袁世凱ほど手強くは爭ふまい。さりとて南方の言ひ分に一も二もなく屈することは出來なからう。斯くして所謂時局收容といふことは、到底北方の責任として殘る。唯彼等は如何樣に收りを着けるか。又誰が其當面の責任者になるか。

袁世凱の死後、北方の中心勢力となり得るものは、先づ黎元洪と段祺瑞の外にはない。袁の家族的後繼者袁克定の其器にあらざるは已に述べた。外に一代の策士梁士詒ありと雖も、彼は表面に立つて縱横に馳驅する人ではない。手腕と聲望とより言へば段であるが、その外に溫厚平凡の稱ある黎にも亦、袁の政治的後繼者として自ら其地位に備はる所の勢力がある。そこで黎、段の二人が先づ以て注目の的になるのである。而して黎はもと南方の士と多少脈絡の通ずるものあり、又第一次革命に於ける旗頭であつた丈け、少くとも南方と意氣投合する素質を持つて居るのであるが、段に至つては最近袁世凱とよくなかつたけれども、元と元と袁の引立によつて立身した人であり、且又袁の部下たりし舊勢力を率ゐて起つべき直接責任の地位にある丈け、勢自ら南方の勢力に對抗せねばならぬ關係にある。故に此二人が全然心を合せて時局收拾の任に當ると言ふ事は一寸六つかしいかも分らぬ。そこで袁の死後に於ける北京の政治的中心點が此二人者の中の何れに歸するかは、國内の人に取つても、外國の人に取つても、非常に大切な問題であつた。而して今日までの處では、其中心點はやゝ黎に傾き、而して中心勢力と

しての黎の立場が今や日に〱鮮かとなりつゝあるやうに思はるゝ。勿論兵馬の權を有つて居る段が傍に居る以上は、全然之を無視する事も出來ないので、一擧に中心點を自分の足元に踏み附けると言ふキビ〱した態度に出で得ないのは已むを得ない。

黎が段々中心勢力となつたことに就ては、袁の逝去の前後に於ける列國公使の態度がまた大に與つて力があつたやうだ。袁の重病の事は餘程秘密にして居つたものと見えて、初め外部にはよく分らなかつた。偶ま侍醫の中に佛人ボッシュ氏があつたので、佛國の公使が最も早く袁の危篤を知つた。逝去の朝驚いて之を日本公使に報告し、袁の再び起たざるべきを見越して茲に日、英、佛、露、伊、白六國の公使が日本公使館に集り、萬一の場合に於ける處置の申合せをすることにした。一應段に面會を申込んだけれども、三日來大總統府に詰め切つて居ると言ふて來なかつた。其中に逝去の報道に接した。そこで取敢へず外交總長に面會を求め、車を連ねて外交部を訪うたが、曹如霖と會見中段祺瑞も來合せた。其際差當り誰を後任者にする積りかと言ふ質問に對して、段は無論黎を擧げる、自分は今後の治安維持に極力盡力すると宣明した。斯くして外國に對する表向きの代表者は黎元洪であると言ふことに極つた。此言質を取つて列國公使は段を差措いて黎元洪と直接交渉することを得たのである。黎が袁の地位を繼任すべきことは法規上固より初めから極つて居つたことではあるけれども、若し彼の地位を名義上のみのものとし、段が國務總理として一切直接交涉の衝に當ると言ふ態度に出でたならば、支那昨今の形勢は幾分か趣を異にしたであらうと思はるゝのに、有意か無意か、六國公使の機敏なる行動に由つて之を妨げ得たのは、支那の爲めにも幸福であつたと思はれる。

此際に於ける黎の行動も亦頗る機敏にして且つ機宜に適したものであつた。傳ふる所に據れば、彼は非公式に或人を通じて我國政府の內意を叩き、誠意を以て南方と妥協するならば列國と共同して彼の時局收拾の努力に大なる便宜を與ふべしとの返事を得て、彼は或は起るべき周圍の反對を顧慮せず、堂々と其善後の方針なるものを發表した。卽ち六月七日彼の大總統就任に際して發表せる所は、段內閣に信賴して政務軍務を處理する事、舊國會を召集し速かに憲法を制定して共和の實を完うする事、及び市場救濟の法を講じ中央交通兩銀行の兌換を復舊せしむべき事の三ケ條を掲げ、更に十日には大總統令を以て大元帥軍事統率辦事處を廢して兵權を全然政府及び參謀本部に還し、以て彼の誠意を明白にした。彼自身の發意に出づるか或は他の勸告によるか、何れにしても此處置は最も大局に通ずる名策と言はなければならない。當初段は舊國會の召集などゝいふことには反對であつたと傳へられたけれ

ども、斯く黎が大勢に乘り出して來た以上は、段の實力を以てしても、最早如何とも爲る事が出來ない。且つ黎は擅斷で以て頻りに南方の頭目と電報を交換し、革命派の希望を容れて妥協の効を收むるに意ある旨を露骨に明言して居る。段は心中必ずや之を喜ばなかつたらうと思ふけれども、外國の手前反對も出來ず、さればと言つて此際辭職をすると言ふ無責任な態度にも出で兼ねる。此一幕は何う見ても策士の段が無能の評ある黎に一杯喰はされた形になる。

外國の態度も亦此際大いに段を抑へて黎を引き立てた傾がある。其最も明かな證據は例の鹽稅剩餘金交附問題であらう。鹽稅剩餘金が五國銀行團の保管に附せられ、從來袁世凱の屢々其交附を求め來れるを排斥して居つた事は已に我々の知る所である。今や袁の死によりて南北妥協の端を開かんとする。そこで政府は秩序の維持、市場の救濟の二目的を限定して再び其交附を求めたのである。初め梁士詒が六月九日を以て內相談に來たのであるが、其話の出所は言ふまでもなく段內閣である。十日にいよ／＼正式の申込が來たので銀行團は轉じて公使團の意見を求むる事になつた。尙序でに申すが、此時支那政府側は市場救濟の急を訴へて、鹽稅剩餘金の外に尙數百萬の別口借款をも申込んで來た。公使團は十二日英國公使館に會同して協議を遂げたが、大體要求には應ずるといふ方針を執り、唯尙二三調査すべき點ありとの口實で、即刻引渡す事はしないと言ふ事に定めた。之れ時局の收拾に誠意を示せる新總統の努力を援助せんとは欲するも、段內閣が果して黎と同一の精神で此金額を公使團の希望するが如く使用するや否やの見極めが附くまで、實際の引渡しを延期するといふ考に出でたものではあるまいか。果して然りとすれば、段內閣は厭やでも應でも黎の方針に服從しなければ、時局收拾の責を完うする事が出來ないことになる。斯くして段內閣の方針は當初舊國會舊約法の復活に反對だと唱へられて居つたに拘はらず、日に／＼其態度が改まつて來て居る。唯全然黎の方針に屈しては自分の將來に於ける立場も危くなるし、然らざるも袁世凱より引繼いだ部下の統御に苦しむといふ點もあると見えて、一擧して其來るべき所まで來るといふ勇斷に出で兼ねて居るやうである。從つて時には黎、段の意思の阻隔などゝ言ふ報道も傳はるのである。要するに段は如何に悶掻いても、今日は黎の考に撥を合はして妥協の方針を進むるの外に途はない。今日までの所は、彼は尙未だ南方の要求に全然屈して居ないやうであるけれども、今日までの形勢の變化丈けを見ても、彼の近き將來に於て到るべき地の如何なるものなるかは、之を想像するに難くない。

新大總統の下に於ける時局拾收に關する最初の重要

政務會議は六月八日に開かれた。此會議に於て段は舊法舊制の復活に絕對に反對したと謂はれて居る。然るに次いで開かれたる十日の會議にては彼は此問題を國務院會議に附することに同意した。國務院會議に於ける多數の意見も舊法舊制の復活に贊成であつたが、只少數の反對者が極めて强硬の態度をとり辭職を以て其主張を爭ひしが故に、別に八名の參議を選び、其調査の結果を待つて、此問題を決しやうといふことになつた。十二日參議會調査の結果が、復活贊成論多數なるも、事甚だ重大なるが故に、各省より三名づゝの代表者を招ぎて臨時約法會議を開き、之に最終の決定をなさしむべき旨を答申した。之れ恐らくは、大勢の趨くところを熟知しても段一派の意嚮を憚つて明白な宣言を避け、各省會議を召集して之に責任を轉嫁せんとする例の慣用手段に出づるものであらう。而して此間北京政府の態度に對する南方の批判は益々辛烈を加へる。其聲に屈して大總統は袁世凱の職權の代行なりといふ先きの宣言を取消して、改めて繼任なりといふ宣言を發表し、斯くして自ら新約法の非認を事實に於て明白にした。而して今問題になつて居る約法會議についても、反對批難の聲が多いので、遂に十五日の國務院令會は之が取消を發令し、其代りに改めて各省文武の高官に舊法舊制の復活に關する贊否の意見を問合はせるといふことにした。尤も別報によれば、各省を代表する南北重要の人物を北京に召集し、所謂中央國事協議會を開いて、善後策を講ずるといふ電報もあるから、全然各省會議を止めた譯ではないやうでもあるが、然し之は單に約法問題のみを議するのではない、即ち北方政府の主宰の下に、北方側の執るべき時局收拾策を講ずるといふ狹い意味の會合ではなく、廣く南北兩方の重要人物を集めて、大規模の妥協會議を開くといふ廣い意味のものであるのかも知れない。果して然らば、之は大に南方に讓歩したものであつて、南方も之ならば別に異議はあるまいと思ふ。段にしても黎にしても、たゞ南方二三の人物と協議を遂げたといふ丈けでは、餘りに屈辱的で體面に關する。さらでも彼等の軟弱なる態度に對する憤慨の聲は、已に北京政府の內部に於て聞えぬでもない。外にあつて此聲を强く呼ぶ者に、張倪の輩がある。內にあつて高官の間に多少の不平あることは、內閣の動搖已に之を想像せしむる。王內務總長、周農商總長、金交通總長、章司法總長、梁稅務督辦等は已に辭表を提出したといふことである。從つて結局の解決がつくまでには、今後尚多少の波瀾はあらう。如何に圓滿な妥協でも、多少の犧牲者なしには行はれない。列國の懇望によつて、日本は北清に多少の增兵をなし、且つ萬一の場合には更に有效な手段を

取る丈けの準備が出來て居るから、北京方面には大した紛亂の起ることはあるまいと思ふ。それでも多少の動搖を見ることは免れぬだらう。北京を外にしては張、倪の輩がある。其外最近の報道によれば、滿蒙に於て宗社黨の事を起すものがあるといふ報道がある。十五日の電報には、升允恭親王を奉じて滿洲に向ふといふことを傳へたが、結局は物になるまいが、多少の波瀾は之を覺悟するの必要があらう。斯く多少の波瀾は免れぬとしても、大局から觀れば、支那の形勢は今日已に定まつたと言つてよい。況んや列國の此の形勢を後援するものあり、現に我國の政府は十三日列國の意向を代表して、黎新總統の時局收拾の努力に好意的便宜を與ふるといふ決定をなしたといふ。其の結果にや、我が政府は駐支公使領事に訓令し、十四五日の頃、黎・段・岑・唐・馮等の南北諸頭袖に對して、徒らに感情に走り自說を固守し以て時局を紛糾せしむる勿らんことを勸告せしめ、諸領袖は何れも帝國の誠意に從ふべきの返答をなしたとの事である。然らば近き將來に於て南北の妥協は必ずや何等かの形に於て實現するであらう。

只多少問題として殘るのは、舊國會の復活と新內閣の組織との二點である。舊約法を復活するとしても、民國二年當時の國會議員を其儘召集するか、或は復活せられたる舊法によつて新たに議員を選擧するか、此點はまだ協定がついてゐないやうだ。後者によれば新議會は無論北京で開かれるだらう。前者によれば六月三十日を以て自ら集會する筈になつて居る上海の會議が、其儘新政府の議會となる。議會開催地が何れに定まるやは、將來の政治に多少の關係はある。之に關聯して遷都問題もあるが、然し首府を南方に移すといふことは、差當り革命派の人々に於て必ずしも深く之を要求してゐないやうだ。次に政府の組織であるが、現在の段內閣を其儘で承認せぬことは言ふまでもない。只問題は全部作りかへるか、一部改造に止めるかである。何れにしても段祺瑞は新政府に殘ると想像さるゝが、只彼が國務總理として留任するか、或は一陸軍卿として留任するかゞ問題である。六月十一日の電報に黎元洪は或る外人の問に答へて、我が意中の總理は唐紹儀なりと言つたとあるが、固より此報道を本當とは信じないけれども、然し今度の革命の一方の首謀者たる唐紹儀が內閣を組織すべしといふ考は、確かに多くの人の頭にあることゝ思はる。此等の點は何れ袁の葬儀の終つた後に定まるといふことであるが、之れ亦支那政府の將來の方針を知らんとするものゝ、最も注目を要する問題である。(六月十八日)

白耳義外務大臣
前駐獨公使男爵　ベーエンス著

新刊

獨逸戰前の眞相

白耳義總領事館飜譯官　町田梓樓譯

四六版美本
三百七十頁
正價
金八拾五錢
郵税八錢

獨國の秘密の鍵は是れ!!

慓悍無双なる獨逸の實情を知らんと欲するものは本書を讀め、著者は大亂勃發の際に駐獨公使として伯林に在り親しく樽俎の衝に當れる卓絶の外交家にして列强外交の機微に通じ獨逸の眞相を穿つ鋭利精到、餘蘊を殘さず、本書凡て九章、カイゼルの眞人格と宮廷及び政界の機密とを赤裸々に曝露し、海陸軍より軍閥を説き、モロッコ問題、近東問題を捕へて開戰の動機を論じ開戰前後に於ける時局の推移曲折を論述して其筆を結べり、近時獨逸に關する新著尠からずと雖も未だ耳聞目睹の實際に基きて獨逸の眞相を抉摘曝露せる本書の如きはあらず、蓋し本書は獨逸を知るの絶好著なり。

獨逸ベルンハルディ將軍著
早稻田大學編輯部譯

自國を誤り世界に災せる

獨逸の主戰論

（好評十版）

正價九十錢
郵税十二錢

發行所　東京牛込早稻田　振替東京一一二三　早稻田大學出版部

（賣捌）神田東京堂　日本橋至誠堂　京橋北隆館　京橋東海堂　大阪盛文館　名古屋星野（其他）

トルストイ著＝加藤一夫譯

吾等何を為すべき乎

トルストイが著作中此書程最深最强の感動と覺醒とを世界人心に與へしは無し、本書は彼が人類的生命の良心的苦悶と其解脱なり、眞に人類最高の福音にして我か悩める現代に對する唯一最善の贈物たるを信ず。

四六判六百頁
布製美本箱入
價壹圓六十錢
送料十六錢

文學士 柳宗悦著

ヰリアム、ブレーク

詩人、畫家にして且神秘家たる英國最大藝術家の巨大なる姿は本書に依つて發輝せり彼は人類の驚愕にして又現代の榮光也此種の書中本邦空前の出版たり

菊判壹千頁
挿畫六十枚
價参圓
送料二十錢

ロマン、ロオラン著＝木村莊八譯

ミケランゼロ

ミケルアンゼロは人類の驚異なり、彼を説く者多し、されど其本體を傳ふる者少し。ロオランの此著は其の點に於て理想的評傳たり、本書を讀む者はアンゼロを知ると共に又ロオランを知るを得。挿畫卅枚鮮麗を極む。

四六判四百頁
繪畫三十余枚
價一圓八十錢
送料十六錢

武者小路實篤新著

感想 後より來る者に

白樺に依つて現代文壇に特異の色彩を造り其思想に創作に最も自己の投影を明白にし、殊に現代、思想生活に最も深き啓示と刺戟を與ふものは著者の特殊なり、眞實に生きんとする人は本書に來りて不朽の生命を得ん。

四六判六百頁
美装箱入
價一圓六十錢
送料十二錢

長與善郎新著

長篇小説 彼等の運命

著者の最近一年間の最大努力の結晶たる長篇小説で「盲目の川」の姉妹篇である。眞劍に人生に生き眞劍に藝術に生きんとする著者の。熱烈なる要求及び態度が此一篇に最もよく現はれて居る。近時我文壇一大雄篇たり。

菊判六百卆頁
極上美本箱入
價一圓九十錢
送料十六錢

ソロウィヨフ著＝關竹三郎譯

神人論

本書の原著者は露國近代隨一の哲學者にしてトルストイと並び露國思想界の二大柱なり。彼の哲學は深く宇宙實在の根本義に觸れ本源的生命と其表象を語れり

四六判三百頁余
布製半裝箱入
價一圓二十錢
送料八錢

(中付三の三)

發行所 東京市麹町區平河町五丁目 振替口座東京二〇一九一四番 洛陽堂 電話番町(八五二四)

夏季特別號

早稲田文學

□小説 母と子…正宗白鳥
□小説 草の上…小川未明
□小説 出立…谷崎精二
□小説 吹雪の渦…景山哲雄
□小説 三之助…犬塚松之助
□小説 光を求めつゝ…小野美智子
□戲曲 土の子供…秋田雨雀

□啞女房(喜劇)…フランス 坪内士行譯
□親ごゝろ(小説)…ギッシング 花園緑人譯

詩歌(兒玉花外、富田碎花、西條八十、兒島義人、齋藤未學、石川宰三郎、田邊若男、石川貫重、)

最近思潮 歐米及我國に於ける文藝教學思潮の紹介

(俳句)海の風…井泉水
山藤…零餘子

▼ドフトエフスキイ編年表…山村暮鳥

初夏の越後より(小品) 相馬御風

■バリモント氏迎送記…尾瀬哀歌
■タゴール翁に對する感想…武田豐四郎
■最近のロシャ文學に現れたる女性問題…エロシエンコ
■文學に於ける藝術才能…グリアーンス

■文藝のユーモア要素(評論)…長谷川天溪
■恐怖のムンク(評論)…森口多里
■女性として目覺めよ(評論)…岩野清子
■價値の哲學(評論)…稻毛詛風

倍號 本號七月に限り 定價五十六錢 郵税三錢

東京神田表神保町
東京堂書店
振替東京二七〇番

(中付三の四)

はうと計畫した。第一に始末をつけなければならないのは、或る年上の女との關係だつた。それは案外にも易く成就されたが、その顚末は茲には省く。次に

□小說 母と子……正宗白鳥

□啞女房（喜劇）……フランス 坪内士行譯

世界を橫行濶步せよ日本男子

倫敦戰時日記……東大助敎授 穗積重遠

支那第三革命情話 雪茄……大逹逸人

世界に於ける賣淫取締制度……匿名氏

世界一づくし……若月紫蘭

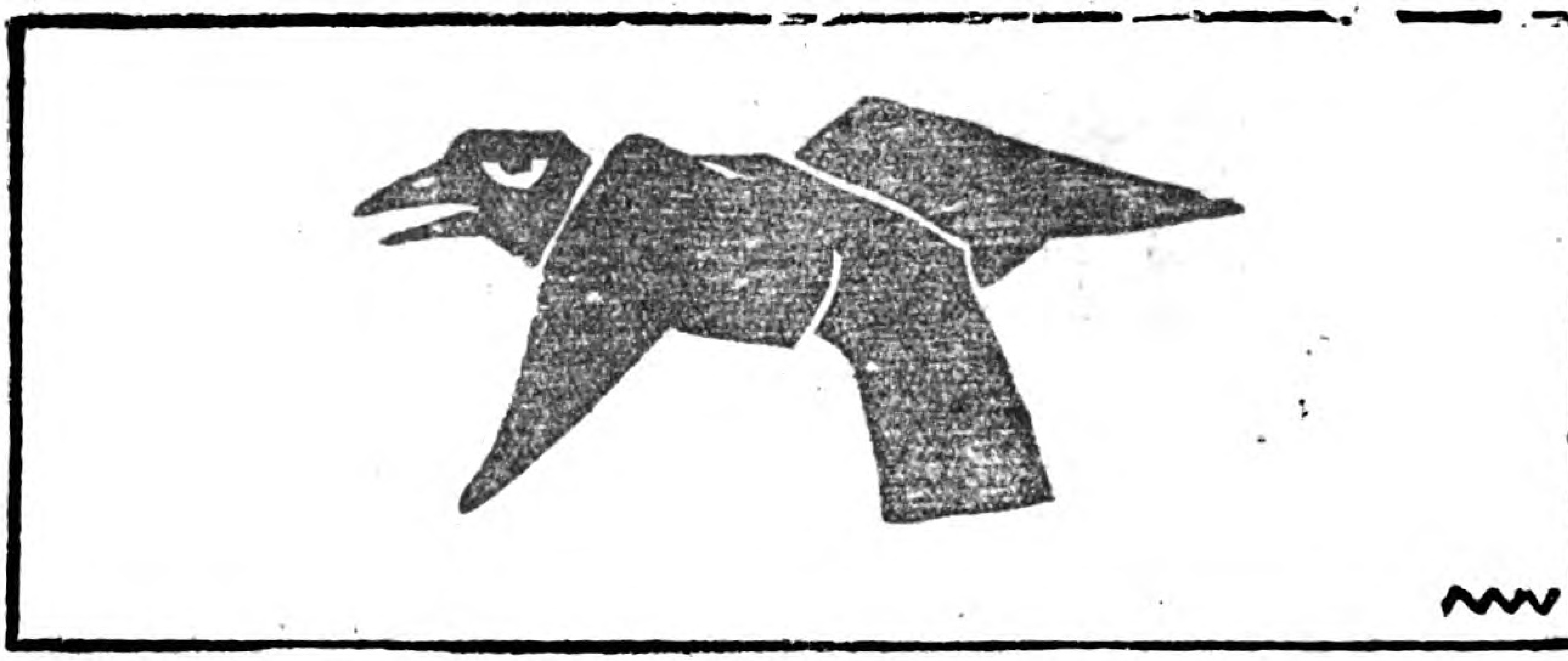
米國海軍の將來……海軍大學校長 海軍少將 佐藤鐵太郎

世界に於ける日本民族分布の現狀……外務高官

日本に於ける世界的人物……諸名家

▽中央公論臨時增刊 世界大觀號△

定價六十錢 郵稅四錢



善心惡心

昌造〃作者
佐々〃志賀直哉

里見弴

てきぱきしない昌造の性分では、種々な對象との間に結ばれた困つた關係が、根を斷たれないで、いつまでも、ぐづり〳〵尾を引いて殘つた。さう云ふ幾條かの尾に纏はられて、彼の生活が次第に息苦しく、甚だしく活氣を失つて來た。彼にはそれを可なり切實に感じることは出來た。悶掻いて、そこから浮び上らうと希ふ心も決して弱くはなかつた。唯それを實行に持ち來たす意力の點になると、彼は全くだらしがなかつた。こゝに問題は元に還る――昌造は若いに似合はない、誠にてきぱきしない、歯切れの惡い青年である……

二十五歳の春、彼は今度こそいよ〳〵、今迄の生活からすツぽり蟬脫して了はうと計畫した。第一に始末をつけなければならないのは、或る年上の女との關係だつた。それは案外にも易く成就されたが、その顚末は茲には省く。次に

は、もう一人の年上の女――お京――との關係だつた。

ところで、彼には、「俺はもうお前がいやになつた」と、女に面と向つて云ふだけの勇氣は未か、さう考へる勇氣さえもなかつた。――かうして、さうは考へなかつた。

相手が自分に對して好意を有つてゐると考へられる間は、誰に限らず、こつちからその人に對して惡意を抱くことの出來憎いのが、彼の性分の一つだつた。併も、その女とは、兎も角も三年越しの關係だつた。そこで、彼がいやで堪らなくなつた「生活」と云ふものゝなかゝらは、その女は全く控除されてゐた。實際彼にはその女に對してまだ仲々未練もあつたが、それよりも、自分の方から先に相手が嫌ひになり、隨つてまた、その女から薄情者のやうに思はれ、さう記憶されることの方が更に辛かつた。別れて了つた後までも、女の胸のなかで、懷しい昔の戀人として永く生きてゐたい慾があつた。そこで「生活」を一變すると云ふ漠然とした考から發して、女とのこれまでの關係を續けると云ふことが、勢また不可能になると云ふ結論の方へ自分を導いた。然し彼は夢にもさう意識的に工らんだ覺えはない。そんな悖徳(?)なことを自分の考へとして考へ得るだけの勇氣があれば、もつと手ッ取早く事が運ぶ。自分を悖徳漢なりと意識することを恐れる故は、その恐れてゐると云ふことをも意識にのぼせないでゐる。(かう云ふ融通の利くあたまを必ずしも狡猾と譏ることは出來ない――それよりももう少し惡い「怯惰」と呼ぶ方が、もつと適當である。)だから彼は自分を、お目出度いほど善い人間だと思つてゐられた――決してほぢくらうと試みなかつた或る微かな不滿足な心持を除けば。(さうだ。さうして彼は慥かにお目出度いほど善い人間だ――たゞ、大分卑怯なだけで。そしてまた、善い人間には多くの場合、大抵かや

うな弱點が伴ふのを常とする。）

この女と、決して再び會はないつもりで別れて來る、歎ばしかるべき日は、實際彼にとつて隨分悲しかつた。房事と飲酒とでヒドく衰弱してゐたあたまは、可なり感傷的に傾いてゐたとは云へ、彼は永い間疊の上に泣き伏して、いつになつたらこの悲みが忘れられるだらうと思つたりした。イゴイストなる彼は、別れて行く自分を潔くするために、同時にまた善良なる彼は、女い幸福のために、それまでに女から立替えて貰つた遊蕩費の二三倍にも當る金を女に贈ることにした。それを以て女が、ヒドい商賣に繫がれてゐる身の自由を購ふことが出來るだけ多く。そのために昌造はかう云ふ犧牲を拂つた。

四月中ばの埃立つ日だつた。彼は定期預金の證書を懷中して京橋の銀行へ向つた。この預金は名義上にも事實上にも彼に屬したものではあつたが、彼自身の勞苦とは全く無關係に、親から傳はつた彼の財產の一部であつた。その上それは、實印と共に、堅く母親の保監の下に置かれてあつた。その朝、母親の留守中にそつとその證書を取り出し、裏書をして、實印を捺した彼は、如何に自ら辯護しても、懷中してゐるものと、「贓品」と云ふ意識とを引き離すことは出來なかつた。鉛のやうな罪の感じは胸いつぱいになつて、時々體が微かに顫えるのを覺えた。勿論それは決行する前から當然覺悟されてゐた筈であつた、その盜みであることは。それにしても、この胸の暗さは全く豫想外であつた。

「お出しになるのですな」

預金係の男は彼の顔を見ながら慥めた。いま彼の運命の毬（いとだま）が、この生若いへッぽこ行員の手に握られてゐると思ふと、彼は忽ち自分の顔から血の氣の引いて行くのが感じられた。

「さうです」と喰ひ締めた歯の間から纔かに答へる。暫くして、

「これはと、何んですな」別な行員が停車場の出札口のやうな穴へ顔を差し出して云つた。「これはつい先達書變えになつて居りますが」

「はア、期限前だと出せませんのですか」彼はもうそれを證書の儘で返して貰ひたくなる。もうその上恐ろしい瞬間に堪えきれくなつた。

「いえ、さう云ふことはありませんが、たゞ利子が何んですが、それさえ御承知でしたらこちらはいつでもよろしいので」

彼は危機が去つたのを感じると急に圖々しくなつて、一と思ひに承知の旨を答へて了つた。ほどなく札の束を握つた時に、彼にはもう犯罪人らしい自棄（やけ）くそな度胸が据つて、直ぐその足で、女の手へ渡して貰ふ約束になつてゐる友達のうちへ、それを屆けた。一時間ほどの後で、彼は十四五の時分から貰ひ集めた錦畫を攫えて、今度は顔名染の古道具屋の店に現はれた。そこで、まるで踏みつけられるやうな思ひを我慢しながら、愛着の深い秘藏の品を二束三文で金に代へた。盗むだ金で義理以上の慈善をなした彼は、まだその上にも、こんな血の出るやうな金を、女やその周圍の者ども（彼を度々隠險な手段で苦しめた者ども）に贈らうとする。それで別れの紀念になるやうな品を調へて貰ふことを頼まうとし

て、また以前の友と、今度は出先に近いミルクホールで落ち合つた。盗むだ金の一文も自分の手には殘らず、總ての計畫が一と先づ滯りなく片づいたので、彼の心は今やゝ落ちついてゐた。そして、この大きな犧牲の報酬としては、彼は二度と再び言葉も交はさない筈の女と、電話で話すだけの釋辯(エキスキユース)を、自分自身に對して拵えた。そのミルクホールの帳場に近い電話口で、友達が呼びだしてくれた女と、何か、この大きな犧牲の報酬としては甚だ平凡なことを二分間ほど話し合つて、滿足して、電話を切つた。

前からの約束があつて、友達と別れると、その儘すぐ帝國劇場へ、そこで兩親や兄弟たちと一緒になるために急ぐ。或る不愉快な社會劇の幕が明いてゐる。扁平な頭をした畸形兒のやうな子役が、彼と同じ名の少年の役を勤めてゐる。この少年に何か惡い遺傳が現はれて來る場(シイン)が演じられてゐた。

「昌造さん、あなたまア……」甲高(かんだか)な女優の聲が響く。——その一日種々(さまざま)な、色の濃い刺激に惱まされた彼の神經は衰れに瘦せ細つてゐた。丁度聲がわりの時期にゐる畸形兒のやうな少年が、頻りに昌造昌造と呼ばれるたびに、彼は腹も立たないで、擽(くすぐ)つたいやうな、泣き出したいやうな氣持になつた。やがて時間を見計らつて、家(うち)の者に別を告げて、直ぐ新橋の停車場へ行つた。そこから彼は、逃げるやうに、京都への旅に上つた。

夜汽車のなかの昌造を外的に寫し出すならば、それは悔恨と不安とに身の置き所もなく惱むでゐる青年の、立派な、然しどこか空虛な記述が出來上つて行くだらう。彼は非常な速さで走つてゐる汽車のなかにゐて、併も刻々追ひ縋つて來るものがあるやうに感じた。ふと、殺人犯が高飛びをする場合の心理

が思はれる。母親の用簞笥に鍵を差し込む時の、戰く胸の、恐ろしい瞬間を思ひ出す。彼は頭を振つて、立ち上つて、食堂車へ酒を飮みに行く。その酒が醒めて行く時分にまた飮む。――かう云ふ風に書いて來ると、然し、その次に來るべき「たうとう彼は、翌朝米原で目を覺ますまで、何んにも知らずにぐツすりと深い眠に就く」と云ふ本當の記述が、前半と互にその功果を食ひ合ふやうな形を免れなくなる。然し玆で作者が出會はなければならないこの矛盾は、そのまゝ作中の主人公の方へ轉嫁して差し支えない。彼は體中の筋肉を搾り上げながら心で叫ぶ。「あゝ俺もたうとう泥棒だ！」と。さうして肚のなかで何か呻きながら杯の酒をガブツとあほる。然し次の三分が經たないうちに、彼は今度は冷かな笑ひを浮べる。「不安と悔恨か。筋書通り！」そして酒飮みらしい手つきで唇へ持つて行つた杯を一寸嘗めて味ふ。「お前が今日一日に仕遂げたことを、何故杯を擧げて祝す氣になつてはいけないんだ！お前は何か惡いことでもしたのか？」更にまた次の三分が經たないうちに、「いくら自ら欺かうとしたつて、良心の聲に耳を塞ぐことは出來ない！」――かくの如くにして、決局どつちが本當の自分の心なのだか、決して彼には解らなかつた。解らうとして、深く追究しやうともしなかつた。作者も亦その孰れにも與しない。「彼は煩悶する」「彼は安眠する」小說的功果を互に相殺するこの二つの事實も、そのまゝ事實として止めるより仕方がない。――既にこの小說の冒頭にも云つた通り、彼は少し卑怯なだけで、慥かに善い人間で、正直であるから。さうして、さう云ふ型の人間は、二つの全く矛盾した思想に支配されることに馴れてゐるから。

京都には全く違つた春が彼を待つてゐた。着いた日の晩、彼と友達の佐々とが工事中の四條大橋の竹矢來について、御影石の破片が澤山落ち散つてゐる泥濘に悩みながら、假橋の方へ曲らうとした時に、大學の制服を着た市村が、突然うしろから「オーイ、昌坊主」と聲をかけた。痩せてヒヨロ〱とした體が、ダブ〱な、薄い夏服のなかでピエロオのやうに氣輕で、滑稽で、放埒に見えた。その印象と、旅先で久し振の友達に會つた喜びとで、昌造は急にウキ〱して來た。京都に住むでゐる市村は彼等をお茶屋へ案内すると云つて自働電話に這入る。昌造は遊びの興を色々に豫想しながら半鐘の梯に凭りかかつて待つてゐた。

ほどなく彼等が銘々の間に脇息を控えて座つた、(それと調和するにはみんな痩せて見すぼらし過ぎたから、やゝ荷厄介に持て扱つてゐた)茶がゝつた庭に面した座敷に、猿のやうに赤い頬をして、髮の仰山な飾にそぐわないボツ〱とした裝の娘が、何か叫びながら飛び込んで來た。これが、昌造が初めて見る舞妓だつた。頬を思ひ切り臙脂で染めて、眉を粗雜に紅で引いた顏の扮りは、遠くから見るによい都踊のこしらえで、髮も同樣、たゞ衣裝だけが近くで見るによい自分の襟かけの着物に變つた所から起る不調和であることも聞かされたが、當分の間どうも彼には美しくは見えなかつた。直ぐ、やゝ小ぶりで同じものがその隣に座つた。

その晩彼等はそこの二階で雜魚寢をした。その時分には舞妓の言葉がいくらか昌造にも通じるやうになつたが、彼は故ら選むで市村と同じ布團のなかで寢た。夜中に彼は何かヒドく堅いもので頭を打たれて目を覺ました。佐々が獨でクックと云つて笑つてゐる。丁度目を覺してゐた彼の話で、初め市村も昌

造も自分たちの枕を外してゐたが、そのうち昌造は自分のでなく、市村の枕をして了つた。すると暫くして、市村も枕をしやうとして、いきなり昌造の頭へイヤと云ふほど自分の頭をぶつけたのだと云ふことがわかる。一部始終を見てゐた佐々の可笑しさが思ひやられて、彼等も痛い頭を擦りながら長い間笑つた。床の上に延び上つて、ほの暗い行燈の光影に舞妓の寝姿を眺めて、「相手があゝ云ふ脆弱な破れものでなくつてよかつた」などゝ云つてまた笑つた。

その翌々晩位には昌造はもうすッかり舞妓好きになつてゐた。唐木の机を前にして彼等は纒まりのないことを話す。寧ろ舞妓たちの話してゐるのを傍聞きする。サイダアのコップのなかを箸でくる／＼掻き廻してから、玉蟲色に光る小さな唇へ持つて行くのを眺める。中で年かさの勝彌が生意氣にコップ酒など飲むでトロンとなつて、獨で喋つてゐた。その容子に、才はじけた一奴が何か適評をした。小さな酔ッぱらいが聞き咎めて、一人前らしく、グッと開き直つて、

「一奴はん、あんたあてをあなづつとゐるえなあ」その「あなづつとゐる」の邊で呂律が廻り切れなくなる。

「へえ、あなづつてます」一奴は平然として受ける。昌造は何んとも云へず嬉しくなつた。――そとには春雨がシト／＼と降つてゐた。

翌る朝雜魚寝の布團の上に市村が起き上つて、宿醉の脂ぎつた蒼白い顏をして生欠伸を嚙みながら、帶しろ裸になつて了つた前をかい合せてゐた。

「まアま、市村はん帶とつて情のあること」この一奴の言葉に市村は、「こいつ」と云つて立つて捕えに

行く眞似をして見せた。彼の隣には、まだもの心もつかないほどの少さな子が口をあけてスャ〳〵眠つてゐた。

或晩昌造はヒドく酔つてどうして寝たかも覺えなかつた。ふと目をあくと、雨戸をたてない部屋のなかに紫色の美しい曉が靜かに立ち止つてゐた。寝返りを打つと見ると、一つ布團のなかで、思ひかけなくおそめが寝てゐた。この悧口な舞妓はいつからともなく昌造の心を惹いてゐた。彼は自分の酒臭い息を恥ぢる。おそめの寝顔をつく〴〵眺めてゐるうちに、いつかそつと小さな掌を握る。それは案外にもさう柔ではなかつた。仲々起きさうもないので段々にジッと力を入れる。さうしてゐると、涙ぐましいやうな戀心が起る。若しや、寝てゐると思つたおそめの方からもそつと握り返しはしないだらうか、極く微かにでも。さう思つて掌に神經を集注して待つてゐたが、どんな微かな手答もなかつた。彼は悲しく、泣きたくなつた。

活動寫眞小屋の椅子に、おそめと小龍とを彼等の間に腰かけさせてゐた時には、たうとう昌造も市村もすッかり勞れ切つて、感傷的になつてゐた。この五六日殆ど晝も夜もぶッつゞけに一緒にゐて、都踊の花道と見物席とでも目と目で笑ひ合ふ位までに心やすくなつて了つた可愛らしい舞妓が、まるで彼等のもの悲しい心とは沒交渉に、時々何か面白さうに私語き合ひながら、一生懸命活動寫眞ばかり見てゐる。それは當然のことで、それ以上可愛らしいことで、併も彼等の心を苦しめた。それならばどうすれば滿足するかと云ふに、それは彼等にも解らなかつた。たゞ何んとなくそれでは物足らない氣がした。

そこを出てからみんなに別れて、彼等は久し振りで自分たちばかりになつた。まるで憑ものが落ちたやうにポカンとして、何故かお互ひ同仕でうら恥しいやうな氣持もする。俄に、ウカ／＼と遊び過ぎて了つたことが、取り返しのつかないことのやうに、他愛もなく心苦しくなる。惡戯をして、先生の叱言が目前に迫つてゐる小學校の生徒のやうにたよりない氣がする。二人とも默つて、薄ら寒く曇つた夕方の町をぶら／＼歩いた。

「あゝあ」思はず一人が洩した溜息で相手が噴飯して了つた。いかにも同感なので。そのまゝ又默つて歩く。銘々色々なことを、反芻動物の食物のやうに、一つ／＼丁寧に味ひ反してみながら。

彼等の充分でもない小使は、「男性の gallantry（婦人に慇懃なること）」と云ふこの遊蕩の間に新らしく出來た、冗談とも本氣ともつかない箴言が繰り返えされる度ごとに、小間物屋の帳場などへまでも滑つて行つて了つた。昌造は黑谷に住むでゐた友達から歸りの旅費を借りて來たが、市村はまるで豫算が狂つて了つた財布を持つて、それから暫くの間下宿の二階に立て籠るにしては、餘りに「男性の gallantry」が發達し過ぎて了つた。たうとう彼は、もう目の前に迫つてゐる試驗も顧ずに、昌造と一緒に東京へ歸ることにした。それでも彼等は、東京へ着いたら一文なしになる覺悟で、先に歸つてゐた佐々に電報で、金を持つて新橋に出迎へろと云つてやつて置いて、大風な顏をして晝の急行の二等に乘つた。

彼等の話は舞妓遊びで持ち切つた。おそめや一奴やコップ酒を飲むだ勝彌などが代る／＼彼等の話頭に上り、同時に眼前に髣髴した。全く覺える氣もなしに聞いてゐたつもりの唄の一節などが、どうかした

はずみにヒヨイと口に出た。

「羅の輕き袂に通ふなり」云々と云ふその年の都踊の立唄を頻りに繰り返す。

「(どんたくお見舞申します)か」

「(オヤ〳〵お前はどんたくさん)サ。(そこは端近いざまづこれえ)か」

「(然らば通るで御座んせう)だね。(然しゆうべの……」

「(夜前の)だよ」こんな稽古を初める。

「(づうき〳〵とするであろ)」

「(オホヽ)」

「(アハヽ)」

「(ヨヽイガヨイ)」

「ツヽツヽ、トントロ、ツテツヽトントロ」彼等は夢中になつて同時に聲を合せる。そしてあたりの人に聞かれはしなかつたらうかと見廻して、その當座だけ低聲になる。――まるで京都に浮かされてゐた。そのくせ二人とも殆ど戀らしい心は有つてゐずに。

東京へ歸つても市村は自宅には寄りつかないで、郊外に住む妻帶した友達のうちに泊り込むでゐた。五月になつても京都から着て來た綿入を着て、することもなくブラ〳〵してゐたゞけに、京都の餘熱が仲々醒め惜くかつた。相變らず「男性の gallantry」を包んだ胸を、懐手をした掌でピタ〳〵叩きなが

ら、友達の庭の西洋花を見て廻つたりしてゐた。そこに昌造や佐々が誘ひ出しに來た。東京の雛妓を相手に遊んでも、彼等はどこかに京都の舞妓の誰かとの似寄りを見つけ出して、「和製のおとめはん」などと呼んだり、京都で覺えて來た「でえんこ〳〵、誰の隣に誰がゐる」と云ふ他愛のない遊戯をしたりして、せめても、「心ゆかせの薄荷パイプ」（そんな流行言葉も出來た）にしてゐた。

それ程の京都熱も次第に醒めて行つた。殊に銘々が一人でゐる時には、夢のやうな思出ばかりでは何んのたしにもならなかつた。中にも昌造は愛慾に渇いて、陰鬱な心でゐた。それでも彼は、時々お京らしい女から知らない名前で掛つて來る電話には決して出ないでゐた。

カラッと晴れ亘つた初夏の或る日のこと、彼は俥夫が持つて來たと云ふ一封の手紙を受け取つた。一目見てそれはお京の手續であつたが、彼はそれをどう處置してい丶か解らなかつた。矢ッ張りあけて讀んだ。そこには、昌造のうちから餘り遠くない或る四辻まで、兎も角一寸でもい丶から來てくれ、と書いてあつた。暫く考へてゐたが、矢ッ張り彼は出て行つた。殊更に、どうにでもなれ、と云ふやうな氣持になつて。そこには、お京が廓にゐた頃使つてゐた少女が一人で立つてゐた。彼はふと、女が瀕死の床にでもゐるのかとも思つた。然し彼等が一町と行かないうちにお京はどこからか出て來て、二三間あとからついて歩いてゐた。電車道へ出た時に女は追ひついて來て、毎日會つてゐる人にでも云ふやうに、いきなり、

「築地に一寸變つた料理屋が出來ましたつて……行つてご覧にならない？」

から云ふ場合、相手の意表外なことを云ふのが女の慣用手段だつた。復か、と思ひながら昌造は暫く

女の顔を見返してゐた。お京は金歯を出して、「駄目よ！」とでも云ふやうにウフフフと笑つた。彼も誘ひ込まれて、一寸笑つて、そこへ來た電車に乘つた。その料理屋の二階で、

「一體どう云ふつもりなんだ」と昌造は、改まつた顔をして云つた。そこに酒や料理が來て話が逃れる。暫くして醉つた。

「一體どう云ふつもりで俺を呼び出したんだ」昌造はもう一度繰り返した。

「どうつて……」女は甘えるやうに、口に入れたものをカチ〳〵嚙んでゐたが、「これからうちへいらつしやらない？　そりや汚いんですよ。吃驚(びつくり)なさるわね、きつと」と少女の方を向いて云つた。

「吃驚するもしないも、まだ誰も行くとは云つてやしないぢやないか」

この返事で、お京のうちへ行くことか殆どきまつたことになつて了つた。――やがて醉つた體が電車で搖られる。淺草のゴミ〳〵した街の古道具屋の店先から二階へ上る。お京の母親がゐて初對面の挨拶をする。酒が出て更に醉ふ。母親と少女がいつの間にかゐなくなる。暫くして昌造は、男便所のない、汚いはゞかりのなかで前後にフラ〳〵しながら、「成程かう云ふつもりだね。……さう云ふ俺は？　矢ッ張りかうなるつもりか。フン」と自分で自分を嘲笑つた。世の中と云ふものはみんな馬鹿げた下らないことで埋まつてゐる。俺ばかりぢやァない。こんな心持が、今まで見聞きした様々な醜怪事(スキアンダルス)でつまつてゐるあたまの一偶から湧き出した。そのはきだめのやうな一偶には、老(とし)つた昌造の父親が、手燭を持つて、いぎたなく寢くたれてゐる女中どもの姿に見入つてゐる恐ろしい夏の夜の繪があつた。彼の情婦であつた女中が、彼の兄の部屋から、赤くなつた耳のそばの毛を掻き上げながら出て來る繪もあつた。その他茲に

書くことが許されない様々な醜怪事——虚飾と獸心とが背合せに貼りつけられてゐる人間の住んでゐるどんな所からでも嗅ぎ出すことの出來る醜惡な輪が、その時彼のあたまのなかで一時に跳梁を極めた。その仲間では、彼のしたことは——血の出るやうな思ひをして別れた女と、忽ちまたヅル／＼に關係して了つたと云ふ、たゞそれだけのことは、ほんの些細に馬鹿げたことだつた。世界には、たゞ一人或は二人の人が知つてゐて、その人たちの死と共に何んの痕跡もなく消えて了つた恐ろしい程の醜怪事が山ほどあるに違ひない。昌造に醜怪邪惡を喜ぶ心がふと頭を擡げる時、よく彼はそれを感じる。そして一種憧憬に近い心持で、その永久に知られざる秘密の臭を嗅ぎつけたい慾望に捕へられる。桀紂とか、テイベリウスとかクレオパトラとか云ふ暴王の話を讀む時、誰でも、多少ともその慾望を感じない人があるだらうか。そこに至ると昌造はいつも邪惡な秘密の前に頭を下げたくなる。たゞそれが卑近な例としてある時は、彼の頭の一偶にはきだめのやうに汚らしく積まれてゐた。そしてそれを、良心を鈍らす必要のある場合に、丁度死體を柔かにする時に振りかける御土砂のやうに、あたまのなかにいつぱいに振り撒いて了ふ。

「いづれは他愛ないもんさね」女の傍に歸つて來た時に昌造はかう云つた。女は顳顬の所を抑えて、疊の上にうつ伏せになつてゐた。

ほどなくお京は目黒に一軒小さな家をもつた。山の手線の停車場を出て、ヂリ／＼と焦きつける光を洋傘越しに受けながら、昌造は急な坂を下りた。廓で會つてゐた頃とは全く違つた趣がそこで彼を待つ

てゐた。北窓の青葉の反射で無智な女の額も、時に神經質らしく、蒼白く見えることがある。西日が次の六疊まで差し込むやうな暑い臺所で、丈のヒヨロ長いお京の母親がセッセと夕飯の仕度をしてゐた。女が**クス〳〵笑ひながら**何か半紙に包んだものを持つて來て、默つて昌造の前に置いた。昔風な字で「神樣**のもの」としてある。あけて見ると、昌造が忘れて行つた手巾が綺麗に洗濯されて**這入つてゐた。

「うちのお母さんは貴方のことをいつでも神樣々々つて云ふのよ」

昌造は本當に神樣のやうに、心からニコ〳〵して、それを彼に與へてくれた者に感謝したいやうな心持になる――さう呼ばれてもいゝ何かを。

永い薄暮の時に彼等は競馬場の高臺の方へ、蜩のトンネルの下を、徑づたいに登つた。ハンデイキャップをつけておいて、埒に沿つて、砂を蹴立てゝ彼等は駈け出す。きめて置いた決勝點まで行かないうちに、女は急に、「妾いや」と云つて、浴衣の兩袖で顏を隱して娘のやうなそぶりをした。向ふの茂みの間から十三四の小娘が飛んで來た。續いて切り下げにした茶の湯の師匠が遠くから、「まアお京さん」と聲をかけながら近づいて來た。彼等は野花を摘むで、歸りには師匠の家で娘のお手前を一服御馳走になる。人通のない道を二人は戯れながら、小さな住家へ歸る。……翌る朝、「神樣」は何んとなく不機嫌に、怒りッぽくなつて坂道を上る。か、さもなければ、(更に機嫌の惡い時には)晝近くまで床のなかにゐて、起きると直ぐ酒にした。――その間に彼のうちでは、もつと不機嫌に、もつと怒りッぽくなつた彼の母親が女中たちに當り散らした。そして彼の書齋に這つて行つて、亂雜になつた机の上から書きかけの原稿を取り上げて、一二枚讀むでみて、舌皷を打つて下りて行つた。

秋が來た。澄み透つた空には、吹き千切られたやうな筵毛を出した美しい雲が流れた。光と雨とを得て、果は熟し葉は落ちる。齢を逐ふて書かれてゐた昌造の長い自叙傳は、十四歳の或る日、或る暗い事實にぶつかつてこの方、机の上で埃を浴びてゐた。

或る日昌造は、友達の北島と一緒に「和製のおとめさん」に會つてゐたが、彼が夢想したほどには相手が何んとも思つてないことを知つて、ムシャクシャして、友達と別れてからお京のうちへ廻つた。お京はもう目黒のうちを疊むで、また淺草へ(古巣のある區へ)歸つて、ひとの二階を借りて住むことになつてゐた。

昌造は露次の溝板を踏むでそこの勝手口へ廻つた。丁度そこにゐたお京は、一寸狼狽へた色を見せたが、直ぐ決心したやうに先に立つて二階へ上つた。六疊の部屋中いつぱいに物が取り散らされてゐる。そのなかで男が古新聞で瀨戸物を包んでゐた。お京は突立つたまゝ、

「もうこゝも落成……明け渡し」

「さうして?」

「叔父さんの所へ轉げ込むの……いゝえ、それは別よ」から云つて道具屋の手から、嘗て昌造が描いた樂燒の菓子皿を取り戻して、うつ伏せに胸に當てがつて、(何これしきの悲運に!)と云ふ風に微笑むだ。

――「神樣さんは婆や奉公」

「一家散亂だね」昌造は冷かに云つた。前に別れる時にはあれだけのことをした。もう今度は俺の知つた

ことぢやアない。と云ふ心持で、――「俺の三味線は？」

「賣つちまつた」

道具屋がへゝラ笑ひをして昌造の顔を見上げた。そこへ、つい近所にゐるお京の叔父の娘が荷物を運びに來て、昌造を見て、羞澁むで直ぐ下りて行かうとした。女は呼び止めて、挨拶をさせてから、何か二品三品持たせてやる。その晩彼等は、黄色い薔薇のやうな顔色をした内氣な娘をつれて外で食事をして歸つてから、何一つないガランとした明き屋のやうな六疊で、明る過ぎる電燈の下でねる。寐ながら昌造は、先刻なか見世で半襟を買つてやつた娘の、日本人に獨特な、黄色い薔薇の花のやうな、わりに光澤のない、細かなきめの皮膚を思ふ。――蠅が一疋、寐靜まつた夜に、甲蟲ほどの羽音をブン／＼云はせながら、彼等の露はな體に來てはとまつた。

お京の叔父の家は六疊と長四疊の二間きりだつた。四疊の方には、上さんが鼻緒を縫ふミシンもあり長火鉢もある。そこへ叔父夫婦と娘とお京親子とが、昌造を上座に据ゑてギッシリつまつて別れの宴を張つた。お京の母親の兄に當る叔父は、職業に要求されるまゝに賣卜者然とした山羊髯を撫でながら、松茸の土瓶蒸しの通を云ふ。さうして自らその料理を用意する。杯がそれからそれへ廻つた。

「……どうぞ今後とも末永く面倒を見てやつて下さい。これだつて」と自分の妹を指して叔父は續けた。

「この年になつて、こんな思ひをしやうとは夢にも思はなかつたでせうが、まアま、みんな持つて生れた運でさア。ねえ、人間は七轉び八起さ……」

こんな話になつて來ると、心のいゝ、デブ〳〵と肥つた上さんは、直ぐに亭主の言葉に感動して、半纒の袖で鼻の穴を突き上げるやうにしながら目を繁叩いた。

「申しちやア何んですが、妾もこれで元はと云へば日本橋で五本の指に數えられる位の問屋で、まア、御新造さん〳〵と云はれたこともある女なんで御座んすが……」お京の母親が亢奮して、いつものオドオドした容子に似げなく、かう、上は釣つた顫えを帶びた聲で始めた。「それが貴方、まア恥を申し上げなければ分りませんけども……」

「およしよヲお母さん」お京は故ら平氣を裝つて、みんなをセンチイメンタリズムから陽氣な世間話にでも誘き出さうと、晴やかに笑つてみせたりする所に、また、彼女は彼女らしいセンチイメンタリズムに裏切られながら、「昔は昔今は今さ。面白くもない……」

母親は恨しさうに娘の顏を眺めてゐたが、「さうさねえ、下らないね。……だがね叔父さん、お前さんだけはみんな知つてるがね、考へてみりやア、あれもこれもみんな妾の身から出た錆さ。これと云ひ、長三郎と云ひ……」かう云ふうちに、彼女の老つた目から大きな涙の筋がポロ〳〵とこぼれて來た。「あゝあ、この年になつて、一度は二十人三十人の奉公人を使つたこともある身が、他人の釜の飯を食べなきアならないやうな端目になると云ふのも、みんな……」

「大袈裟だねえ」と女は鼻の先で。

「いゝえちつとも大袈裟ぢやアないよ。お前は知るまいがね、ねえ叔父さん、まだ先の旦那の生きてなすつた頃にやア……」

「奉公人のことなんぞ云つてるんぢやアないよ。そんな者アよし四十人が五十人だつて、どの道今のたしにやアならないやね、下らない」お京は醉つて、目を据ゑて、ガミ／＼噛みつくやうに云つた。「さうさ、全くお母さんの云ふ通りだよ、みんなお前さんから出たことさ」

「お京さん、まアお前さん何んだね」と上さんが聞き兼ねて宥めた。

「ハッハッハア」と叔父は咽で笑つて、「いゝえね、貴方の前でがすが、兎角女てえ奴は愚痴な奴でがしてね、アッハ、、、」さう云つて彼は、可笑し涙でも拭くやうに目の廻りを擦つた。その時老つた兄妹の心には古い日のことが、同じやうに徂來してゐた。黄色い娘はいつの間にか八疊の方へ寐に行つて了つた。お京の母親は上さんを捕へて、娓々と泣言を聞かせては、二人して襦袢の袖で目を拭いてゐた。昌造と叔父とは下らないことをポツリ／＼話しながら頻りと飲む。お京は急に默り込んで了つてボンヤリ一つ所を見詰めてゐたが、

「さアもう寐ませう／＼。いつまで云つてたつておんなじことさア」と大聲に云つて、昌造を促して、近所で借りて來た屏風で圍つた寐床に這入つた。屏風一重向ふには山羊髯を胸の上に載せて、叔父が盛な鼾をかき始めた。上さんと母親とでカタコトとあと片づけをして了つてから、四疊の方にたつた一つある電燈を消さうとした。

「叔母さん、點けといて」お京の嗄れた氣狂ひじみた聲が屏風の裏から聞える。「そいからおしやを一杯、コップに」

昌造の荒びた心は、この陋巷の棟割長屋の屋根の下に、一家が散亂しやうとしてゐる光景のなかに、みんな少しづゝ亢奮して苛立ち易くなつてゐる無智な、善良な人々の間に、最も居心地のよい安住の地を見出した。普段いやに常識主義なお京までが、苛々と反抗的に、捨て鉢になつてゐるのも、彼には變つた興味を與へた。そこでは、總ての感情が、善惡美醜ともに淺墓で小規範で、昌造の小さな心も、それを分解したり味つたりするのに充分廣かつた。彼はその小さな世界を肴に、エゴイスティックな立場に泰然と構えて、欲するだけの慾を充分に飲みながら、引止められるまゝに、二晩ほど彼等の間で暮して了つた。

深く靄の降りた朝、昌造は珍らしく早起きをして、愈々一同に別れを告げて出た。病氣上句に久し振で外に出た時のやうに、爽かな朝の空氣は却つて彼の皮膚に強すぎるやうに感じ、足腰にも力がなかつた。そこらまで送ると云つて、女がついて來た。電車道まで來ると、もう少し歩かうと云ふ。彼等は一錢蒸氣で向島へ渡つた。お京は、まだ廓にゐた時分隨分贔負にされた老つた發句の宗匠の庵室めいた家を土手の上から眺めて、自分の永い間の遊女生活をボンヤリ思ひ出しながら歩いた。だん〳〵靄が晴れて日光が彼等の上に照り始めた。百花園へ這入つた。若い藝者風な女と、昌造よりもまだ若いほどの青年が石の上に腰を下ろして、肩を押しつけ合つて休んでゐた。彼等は、一組づゝ互に、互の前の晩を想像し合ふ。さうして自分たちをちつとも幸福だとは感じない。――不穩な沈默を續けたまゝ彼等はそこを出た。心の上からクルッと濡紙を貼りつけられたやうに、總て彼等の感情は、今鈍く、息苦しかつた。彼等は通りがかりの人のやうな心持で唯並んで歩いた。

壹近くまで歩き續けて人形町へ出て來た時には、日射で體がグタ／＼にだるくなつて了つた。或る鳥屋へ這入つて酒を飲むだ。焦け爛れた胃の腑に、溜飲に似た苦さで酒がチリ／＼と滲みる。醉ふに從つて彼等は少しづゝ生き／＼して來た。

「これから先一體お前はどうして行く氣なんだ」昌造は、言はず語らずのうちに愈々別れる時が來たと思つて、それをもう既定のことゝして、殆ど義理一扁にさう尋ねた。

「どうにかなりませうさ」

「女にやすたりがないか」と毒々しく、「然しいつまで叔父さんの厄介にもなつてゐられまい—」

お京は、（それぢやア云つて聞かせやうか、）と云ふやうに、暫く男の顏を見詰めて勿態らしい間を置いてから、「今夜から活動に出て唄を唄ふんですとさ、××館でね」

それを今まで隱してゐて、今になつて云つて了つた女の心持を直ぐに感じて、昌造は苦笑ひを浮べたゞけで默つてゐた。それでも、活動小屋の内部を思ひ描くと、流石に墮ちて行く女の運命を哀れまずにはゐられなかつた。出獄したゝめに、獄中より、入獄以前より更に惡い暗い生活へ這入らなければならなくなつたとしても、それは獄吏の知つたことぢやアないが、然し俺は、どんなに控え目に考へても、少くとも、女をより不幸にしやうと思つて彼女の身の自由を購つてやつた譯ではなかつた。それが、その結果は！　六十近い母親は婆や奉公に出る。女は淺草の活動小屋で唄を唄ふ。人間の善良な意思が、思ひがけぬ不幸の因をなした例は山ほどある。「運命」の皮肉な惡戲！　人間の道義心を嘲笑ふ「運命」の惡戲！——昌造は自分の一時の出來心に等しい「善良な意思」、それを貫徹させることに全く無努力無責任

だつたこれまでの態度、そんなことは全く棚に上げて置いて、この不幸の源を「運命の惡戯」と云ふ、決して不服の出ない、うまい所へおッ被せて了つた。そしてその考へにあほられて傲慢になつて、まるで彼が意地惡な「運命」とグルになつて、初めからこの結果を見越してゐながら、「善良な意思」でお京親子を不幸の穴へ落し込みでもしたやうに、その企が愈々思ふ壺へ嵌つて來たやうにさえ思ひ曲げて、私かに邪惡な心に阿つた。惡心が滿足して、出かした〱と褒めた。

鳥屋を出るとお京は或る用事で横濱へ行くから、新橋の停車場まで一緒に行かうと云つた。新橋まで來るともう横濱行はよしたと云ふ。いよ〱別れやうとした。すると女が、もう一生會はないとしても、場合によつては、手紙は上げるかも知れないと云ひ出した。昌造はもうムカ〱して來て、「斷然いかん！」と往來なかで大きな聲を立てた。この爭ひの間に彼等は日比谷公園に這入つた。夕榮えが永田町の岡の上に美しく空を染めてゐた。落ち葉の浮いてゐる池で水禽が群れたり離れたりしてゐる。――むつくりした胸で水を分けて、丸い黒い目であたりを見廻しながら、自分の行きたい方へ勝手に游いで行く。或る一羽がどう思つてか陸へ上つて、身震ひをして水を切る。岸の丸石が少し濡れたゞけで何んにも重大な結果を生まない。昌造は、人間の行動の一寸した左右から分れて來る善惡の結果と、同じく自由な意思を以て行動してゐる禽の、全く善惡のない結果とをボンヤリ思ひ比べてゐた。それが難かしい理窟になつて行かずに、たゞ何んとなく彼の心も禽のやうにゆつたりと緩むで來た。胸の閊が消えて長閑な鳥獸の世界を感じる。――ふと後を向くと、女が勞れ切つたやうに口をあいて夕日を見詰めながらボンヤリ立つてゐた。ほんの瞬間的に、昌造は雄鳥が雌鳥を愛するやうな心持ちになつた。が、直ぐまた苦い顏をし

て默つて歩き出す。廣い芝生の所へ來た。あたりにはまるで人影がなかつた。

「オイもう歸れよ、いゝ加減に」

「近いうちにもう一度だけ會はない？」

「いやだ」

「いやならよござんす」何んの執着もなく云ふ。昌造はカッとなつた。

「そんなら何故初めッからそんな餘計なことを聞くんだ。俺をいやがらせるだけの目的で云ふんだな」

「貴方はもうすッかり氣が變つてお了ひなすつたのね。妾憎い？」

言葉に現はせない程の憎さを、充分に傳へてやりたい慾望で胸がいつぱいになつて、口が利けなくなつて、洋傘の柄を力まかせに握り締めたまゝ、昌造はブル〱顫えてゐた。

「おいやでせうね、××館の下座を情人にしてゐると云はれちやァね」

昌造は女の代りに大地を力まかせに打つた。洋傘の先が折れて飛んだ。女はその飛んで行つた先を見てゐた。草のなかで金物が光つてゐる。

「俺を責める氣だな、貴樣。貴樣が一體俺のよし惡を云ふなんて、第一考へるなんて……」

頭の上を烏の群が鳴きながら歸つて行つた。女は一寸上は目づかいに見上げた。羽音が靜かな夕空に遠ざかつて行く。暫くして女は落ちつき拂つて云つた。

「人間てものは誰でも倦きるわ」

「生意氣云ふとなぐるぞ」

「貴方はどうかしてらつしやるのね」

「もういゝ〳〵。どうしてゐやうとお前の世話にやァならない」

「勘忍して下さいね、妾が悪かつたから」

「なァにあやまらなくつたつていゝよ。お前と云ふ人間はさう云ふ人間なんだ。あやまつたりすると又嘘になる。本性を現はしたまゝで引き下つた方が男らしいぞ」

「何をそんなに怒つてらつしやるの？」

「もういゝんだよ。これですッかり片がついたんだ」

「なにが」とゆつくり引張つて云つた。

「俺たちが一番お仕舞に本當の肚を云ひ合つて別れるんだ。それでいゝぢやァないか」

さう云つて了つて昌造は歩き出した。それでも彼の注意は後に惹かれた。どうしたらう？

烈しい怒のあとで彼の心は次第にもの柔かになつて來た。少し云ひ過ぎたやうな氣もして女が哀れでもあつた。然し彼は努めてその心を抑えつけた。暫くして、二三間あとから女の足音がついて來るのを知つた時、彼はまァよかつたと思つた。彼は電車の方に出ずにそのまゝ家のある方へ歩いて行つた。女がついて來ることが出來るやうに。

足がうちに向ふと同時に彼の心は重くなつた。永い間無斷で、電話一つかけないでうちを明けてゐた結果を彼はよく知つてゐた。屢々繰り返したことだが、兩親は仲々それに馴れなかつた。父の怒、母の心配、兄弟の迷惑。彼も仲々それに馴れなかつた。結局彼は友達のうちに寄つて、そこから兄でも呼び出

して、一緒に歸つて貰はうと思つた。

その友達のうちの門の前に來た時に、昌造は振り返つて、今度はまるで違つた優しい聲で勞るやうにから云つた。

「北島の所へよるがね、若し留守だつたら直ぐ出て來るけれど、ゐたらもう別に斷りには來ないからね、五分ほど待つてみて、出て來なかつたら歸つておくれ」

もう全く夜だつた。女の顏がほの白くたゞ頷くやうに見えた。

「ぢやアさいなら」昌造はサッサと門のなかに這入つた。北島は彼を見るなり、

「オイ〳〵、冗談ぢやアないぜ。一體あれからどこに行つてたんだい。君のうちぢやア大騷動だぜ。何遍電話口に呼び出されたか知れやアしない」

同じ夜の八時頃、俊之助兄の後から昌造がションボリ部屋へ這入つて來た時に、父母は「まア助かつた」と思つた。五人の男の子のうちで、この四男のやうな放蕩者は初めてだつた。どの悴もどの悴も成年になる前後に、きつと何か知らんで苦勞をかけたけれども、昌造のやうに無遠慮に彼等を苦しめた者もなかつた。

「一體どこへ行つてたんだ！」父親は今迄の心弱い不安が急に劇しい怒に變らうとした。然しその時彼は悴の、三四日の間にゲッソリ痩せて了つた顏を見た。蒼く橡どられた目は、勞れて力なく見えながらも、思ひ迫つたやうに潤むで、深い縦皺を刻むだ眉の下に落ち込んで光つてゐる。髯なども汚らしく延び

て一層顏色が惡く見える。口にこそ一言も出しはしなかつたけれども、心のごく底の底では、實際生命さえ氣づかつてゐた我が子の、かう云ふ衰へ切つた容子を見ると、流石に父親も哀を誘はれた。母親は情ないことだと思ふと、ハラ〳〵と心弱い涙を落した。昌造は自分を一文の値うちもない放蕩者だと心から感じて、父母の前に身の置き所もないやうに恐縮してゐた。然しそこには、どこか人の心に觸れるものもあつた。例へば、惡心の風に吹き曝され、善心の雨にたゝかれながら、面俏れるまで誘惑の旅をさ迷ひ廻つた足弱な旅人が、宿を賴むのも恥ぢらはれて、軒先でウヂ〳〵してゐるやうな趣があつた。

「俺は何んにも尋ねまい」と暫く沈默が續いた後に父親が云つた。「また叱りもしまい。が、これからはもう少し氣をつけてくれ。老つた親たちのことも思つてくれ。よウく自分で一度考へてごらん。……然し、それよりもまア、今夜はゆつくりお休み、まるで……」身投げでもしかけて助けられて來た男のやうな顏つきをしてゐる、と父親はその時思つたけれども、元よりそれは口へは出さなかつた。

昌造は勞れ切つて自分の書齋へ這入ると、これと云ふ理由もなく、聲を立てゝ泣き出して了つた。久し振りで父母に對する愛を感じながら、小供のやうに泣きながら寢入つた。

或る日の午後、昌造は佐々を尋ねやうと思つて電話で容子を訊くと、市村と牧野とが來てゐるがよければ、と云ふ返事だつた。昌造はその明け方「蟬脫とづる〳〵べつたり」と題する、幾度か生活を改めやうと志しては幾度も失敗に終る意力のない生活を書いた自叙傳風な小說を脫稿した。それは出來次第に、そのなかの副主人公のモデルである佐々に見せる約束になつてゐた。それで佐々は、他に來客があつ

てはと云ふ遠慮を言葉のうちに現はしたが、昌造は一寸考へて見て、却つてその方がいゝと思つて行くことに約束して電話を切つた。――この小說のなかで、昌造は佐々に對して身を切られるやうな思ひで或ることを白狀してゐた。それは下のやうな事件だつた。

一體佐々は昌造の兄の俊之助の友達だつた。隨つて年も六つほど上だつた。早熟な昌造はこの友達と對等に交際ひたい慾望から、往々自分を實力以上に釣るし上げなければ丈が屆かなかつた。その釣るし上つた足と地面との距りがこの友達との關係に於て昌造の最初の弱味になつた。上釣つた彼の言說でも時には鈍厚な佐々には才氣煥發に聞えた。だから彼等の交際は、はたからは、年のわりには對等らしく見えた。然しその實は、昌造の宙にぶら下つた足と地面との間には、佐々の思想、趣味、道德などが芝居の岩のやうに一見頑丈らしく踏み臺にされてゐた。昌造もそれに心づいてゐて、幾度その空洞な足つぎを自分の大地にまで踏み碎いて了はうと悶掻いたり、或はまたそこから飛び下りて了はうと企てたか知れない。然しかの張子の岩の周圍は、日と共に膨大して、遂には己の立つてゐる大地を見失つて了ひさうな有樣になつて來た。その時分彼は或る英國人の友達からオオガスト・ジョンと云ふ畫家やその周圍の友達の話を聞いた。まだ若冠のジョンは恐ろしいやうな一種の强い性格を享つた男だつた。彼の性癖は一々オリヂナルだつた。彼の周圍には、磁力に引き寄せられる鐵片のやうな崇拜者が常に必ず五六人づゝはあつた。そのなかの一人であつたオスボルンと云ふ畫家は立派な己自身の才能を享つてゐながら、彼の作畫はどう悶掻いてもジョンのあとから〱と從つて行くやうになつた。たうとう彼はロンドンを去つて、或る田舍に引込むで一向自然を觀て描いた。オスホルンはその一枚が出來上つた時分にピスト

ルの彈丸を己の頭腦へ射むで死んで了つた。——そこにゐ合せた昌造と佐々とは殆ど同時に尋ねた。

「その一枚は？」

「オヽ。非常なもの。彼自身の藝術！」

この話を聞いてから二三日の間昌造は佐々を殺さうと云ふ考にhauntされた。自分が殺されて了ふよりは……と思つた。

昌造と佐々との間にはまだ次のやうな關係もあつた。仲間の中にまだ一人も遊びを始めた者がなかつた以前に、昌造は家で使つてゐた年上の下婢と通じてゐた。このことは最も親しい友達の佐々にも打ち明けずにあつたが、唯彼が童貞ではないと云ふだけの輪廓は話してあつた。その後或る冬の晩、佐々が遊びを始めたことを肇めて昌造に打ち明けた時に、昌造はそれに對する償ひのやうに彼自身の秘密をも語れと迫られた。その時以來四年ほどの間、佐々は、昌造の相手が神田に住む煙草を商ふ女だと云ふ虛構を信じさせられた。彼は獨りであの下婢ではないかと想像してゐて、さう突込んで尋ねたこともあつたが、昌造はどこまでも嘘を云つた。この嘘のために、昌造は益々佐々の前に己を暗く弱く感じなければならなくなつて了つた。遂に彼は名を創作に藉りて、佐々に本當のことを白狀しやうとし、同時に今迄の關係にも幾分か光明を持つて來やうと企てた。「蟬脫とづる〳〵べつたり」の一部分がこの目的のために割かれてゐた。昌造にとつてどの道それは苦しい仕事には違ひなかつたが、この頃になつて彼にそれを成すだけの勇氣が湧いて來たと云ふよりも、寧ろさうするだけの闊々しさが出來て來たのだと云つた方が當つてゐる。小說のなかで、彼は、人を陷れやうとした嘘の穴のなかで如何に己自らが苦しむだ

かと云ふ事實を書き、（そこには少しの誇張はあつたとしても無根の嘘はなかつた）また作者の主觀としては、苛酷なまでに主人公を鞭うつて、恰もそれで永い間友達を僞つてゐた罪が償はれるやうに感じた。そこには、友達の前に罪を謝する代りに、この勞作に藝術品としてのよい批評でも受けながら、對等な笑ひ顏のうちに、永い間の嘘を白狀し同時にまた過去に葬つて了はうと云ふ、（さう明かに意識しないまでも）甚だ横着な態度が潛むでゐた。かう云ふヒドイ意味の作を佐々の手に渡すには、差し向ひで目の前で讀まれるよりは、相客があつた方がいゝと感じて、原稿を袱紗に包んで、昌造が佐々のうちへ出掛けたわけであつた。

先に來てゐた友達はもう倦んじ果てたやうに、仰ぬけに寢ころんで出鱈目な鼻唄を唄つたり、兩膝を抱いて床柱に凭れながらユサ〳〵體を搖つたりして、中心になる感情も話題も明かに失はれてゐるやうに見えた。この空氣はいま昌造が身を置くに最も適してゐた。佐々はこの空氣のなかゝら昌造の創作を持つて隣の部屋へ出て行つた。昌造の心はワク〳〵して來た。それを紛らすには、あたりの空氣を一層ダルにすることが有效だつた。

四年の間親しい友達に僞られてゐたことを知つた時には、人を信じることの厚い佐々は可なり不愉快な心持になつた。その上、讀み終つてからもとの座敷へ歸つて見ると、そこでは昌造がダラケ切た冗口（むだぐち）をたゝいてゐて、恬として恥じる樣子もなかつた。佐々は大抵の場合この年下の友達に對して兄貴らしい愛情や寛大や、尙また相應の尊重をも失つたことはなかつたが、その時には彼を下等だと思つた。

「どうだつたい？」と昌造が殊更ら平氣を裝うて訊いた時に、

「その内ゆつくり話さう」とたゞ一言云つたゞけで、佐々は苦り切つた顔をしてゐた。

その晩彼等は醉つて吉原へ這入つて雨に遇つてたが、牧野の童貞に敬意を拂つて、或る名染のない引手茶屋へ上つた。また酒を飮むだり、藝妓たちが來たりした。昌造は亂れ箱のなかに原稿の袱紗包を見つけて、「こんなものが顔を出してちや面白くねえ」などゝ云つて帽子の下に隱してから、頻りと燥ぎ始めた。「蟬脱とづる〳〵べつたり」を讀むだ後で佐々がさして不機嫌でもないのが昌造には嬉しかつた。と同時に、友達の目色を窺ふやうな己の態度に劇しい不愉快をも感じた。酒がその不愉快に働いて、ガサツな無神經な醉漢を拵えた。——藝妓の一人に佐々の心は惹かれた。然しそれは誰にも心附かなかつた。たゞ昌造はそのみさ子と云ふのが一番佐々を厚くもてなすと思つて、微かな嫉妬を感じてゐた。然しその嫉妬に根ざす意地惡は、友達の方へは決して向けられないで、その女に對して、殊更らに佐々の方へ押しやると云ふ心持の、謂はゞ幸福と云ふ形で苦しめるとでも云ふべき心持で現はれて來た。銀貨隱しの遊びをしてゐた時に佐々の拳固を指して、「その熊のやうな手！」と云つたのも、翌朝藝妓たちが歸つて了つた時に「あゝあ、御婦人連がゐなくなると、急にみんな氣をぬいて了つて、惘然した顔をしてるぜ」と云つたのも、昌造の心持には無遠慮過ぎたと云に以外には全く咎められるべき何んの他意もなかつた。所が二三日してから昌造は、「あの晩君が僕に對して爲た下劣な『心の遊戯』で僕は君に對して可なり不愉快を感じた。そしてその心持を今小說に書いてゐるから當分君とは遇ひたくない」と云ふ意味の佐々の手紙を受け取つた。佐々は自分がみさ子に對して抱いた可なり眞面目な愛情を昌造が馬鹿にして、わざと女の前で自分の毛だらけな手を熊のそれに譬へたりしたのだと釋つたのだつた。

それ以來暫く二人は遇はなかつた。昌造は自分に對する佐々の不愉快が毎日彼の原稿紙の上に形を取りつゝあることを思ふと、ふと苛立たしく感じたやうな日もあつた。然し彼はこの友達との間に、どんな形でゞも變化の來ることとは、心私かに望むでゐた所だつたから、さしてそれを苦にもせず、他の友達と相變らず遊び歩いてゐた。

もう冬が來てからの或る日のことであつた。昌造は北島からかゝつて來たと云ふ電話に出た。すると、

「妾よ、わかつて?」かう云ふのがお京の聲だつた。彼は直ぐ電話を切らなければならぬと感じながら、矢ッ張り受話器を耳に當てゝがつてゐた。

「何んと思つて電話なんぞかけるんだ」

「たゞよ。急にかけて見たくなつたのよ」お京は明かに餘程醉つてゐた。デレ〳〵とよく廻らない舌で下らないことを喋り續けた。その後からは、樂隊の音や人の話し聲などが騒々しく聞えてゐた。活動小屋の樂屋の酒宴。醉ばらつた下座の女。堪らなく下愉快になつて、昌造は默つて電話を切つて了つた。

この時肇めて昌造は、別れて後のお京の生活を目前に思ひ浮べて見た。彼は何んとなく胸苦しく情なく感じた。

「いやだ〳〵。たまに善いことをすりアその結果はこんなもんだ」その秋同じことを鳥屋の二階で感じた時と比べると、彼はプッと簡單に、概念的にこの問題を片づけて了つた。人の心に在る善の力が如何に成すなきかを思ふことは、一面から彼の生活をジャスティファイし、不安を痲痺させる功力があつた。

併も彼は善のために悲しまなければならないやうに感じた、末世の世には善もその力を收めなければならないことを。そしてこの幻滅は、(彼の考に從へば)末世の世に目を開く前に必ず受けなければならない dub であつて、これを經て後、人は、自分達のうちに何か或る尊いものを建立(こんりふ)し、常にそれを力綱としてゐずには一日も生きて行かれやうなヒロイズムの時代から、肇めて現實に面接する不屈の力を備えた成熟の時代に這入るので、恰も彼が今その一轉期の時に際して別れて行く過去の時代を懷しみ、且つは幻滅の悲みに逅つてゐる自分であると、かう昌造は自ら解釋した。——然しまた別な見地から云へば、彼の所謂 dub は、徵兵檢査のやうに、誰でも人が受けなければならない「凡人檢査」の試驗であつて、昌造がそれの甲種合格者であつたと云ふことも出來る。この考に從へば、その日の短い電話が、彼を立派な「凡人」に「成熟」させた。昌造はそれを進歩だと考へる——それも事實である。人は幻滅を恐れてはならない。

　社會的に名譽も位置もない「素町人」が何んでもするやうに、(と昌造は或る友達への手紙に書いた。)心の上に君臨するものゝない「素人間」はまたどんなことでも恐れない。何かの役(ロール)に拵(こしら)えてない役者の顏を素顏と云ふやうに、俺は今全く「役(ロール)」のない「素人間」になつたやうな氣がする。早熟な、何んでも知つた風な顏をしたがる少年——無自覺な煩悶を道樂にする靑年——漁色家——情人、こんな樣々な「役」を了へて、俺は顏を洗つて了つた。その時、かう云ふ「役」が思ひがけず心の狀態の君主であることを知つた。自由な心の所有者は、「素人間」に限られてゐる。然しその「素人間」がまた今の俺の心の

君主でないとは云へない。が、兎も角俺は永い間望むでゐた心の自由を近頃になつて得たやうな氣がする。所がそれは、言葉を代へて云ふなら、「自棄的な所のない放埒」と云つてもよいやうなものだつた。俺に於てはそれは淋しい空虚に等しかつた。俺はこれに馴れなければならないのだらうか。この行手に本當の大きな自由が待つてゐるのだらうか……。

（一週間ほどたつてからの手紙に、）

吾々は「自由」と云ふものを掴むことが出來やうか。他人との對立に於てゞなく、自分一人の、絶對の自由を。

自由とは畢竟「意識の自由」であることは論を俟たない。人はごく不自由な自分を自由であると意識する自由も、どんな自由な自分を不自由であると意識する自由も、決して失ふことはない。要はたゞその「意識」が外的な何物かに支配されるか否かに歸する。絶對の自由とは開放されたる意識である。外的な何者をも含まない「人格的意識」、もつと砕いて云ふなら「自然な心」「素な心」それだけが自由だ。僕は近頃から思つて、爲たいことを爲、思ひたいことを思ひ、全く何んの目標もなく、批判もなく暮してゐる。が、然しどうも淋しい。

かう云ふのが昌造の「成熟」した「自由な心」の哲學だつた。彼の心のなかに「建立」された尊かるべき筈の哲學だつた。――それは丁度、輸入される時に少々損じた上に、日本人の性情にはピタリとは合ひ悩い「自然主義」と云ふものが、青年の心に種々な形をとつて働き始める時代だつた。――哲學はそれでよい。所で彼の「自由」な生活とはどんなものだつたらう。

翌年の二月頃、昌造は汚い小さな待合の長火鉢の置いてある部屋で、連れの友達が二階から降りて來るのを待つてゐた。そこに友達の呼んだ女だけが先に降りて來て、一寸上さんに挨拶をして歸つて行つた。――三四時間後に、友達と別れてから、彼はその近所の或る他の待合にゐた。

「フム、貴方だつたの。よくない人ね、貴方は」先刻友達の呼んだ女が座敷に這入つて來てから云つた。

昌造はニヤリ〳〵笑つてゐた。

「お名染かい」

「あの方と？……いゝえ」

「何、お名染だつて構やしないがね。さつきお前が歸る所を見初めたと云ふわけだ」

歸る時分には、昌造はこの色白で小肥な、女學生上りのスレッカラシを、「ガラ〳〵蛇」と字名して、それからまた一週間もすると、直ぐ文通などを始めたりした。

この女の生家は江戸川の終點の近くにあつた。そつちへ歸つてゐるから、一緒にどこかへ遊びに行くから、誘ひに來いと云ふ手紙を受け取つた昌造は、約束の時間に終點で降りて、夕闇のなかに人待ち顔に立つてゐる「ガラ〳〵蛇」を見つけた。彼はこの女相應の、（或はそれがまた彼自身の財布にとつても相應の）料理屋へでも行つて、飲み食ひしたりする氣でゐたが、女は頻りに「活動」へ行かうと云つて強請むだ。その時昌造にはふとかう云ふ名案が浮んだ。――この女と並むで腰かけながら、××館でお京の聲を聞かうと。この思ひ付きが頗る彼を興がらせたので、快く承知して、二人は電車で淺草へ向つ

た。所が行つて見ると、相憎××館は表がかりの改築中で、折角の「名案」も駄目になつて了つた。それで他の小屋で、立廻りの多い舊劇の寫眞を我慢しなければならなかつた。暫して、やつと女に賴むやうにして彼等はそこを出た。

けちな鰻屋の入れ込みの二階で晚い夜食を終る頃には、女はすつかり醉つてゐた。

「ちよいと姐さん〳〵。これで熱く煎れ變えて來たつてえのかい」

まだよからうと思つてゐるうちに、ガクリ醉はれたので昌造は面喰つてゐた。――「何んだね、お前さんとこの脂ッこい稼業でさ、熱ウいお出花を飲ませることも知らないなんて……もう一度煎れ變えといで」

昌造は厄介なことになつて來たと思ひながら、やつと女を宥めて連れ出さうとした。入れ込みの相客はジロ〳〵二人の顏を眺めて、お互に私語き合つてゐた。

「何んだつて？　六區だつて？　巫山戲ちやいけないよ……」その上「から見えたつて」までやられては、可笑しくもあり、恥しくもあり、昌造は女を引きづるやうにして往來に出た。實は彼とても可なり醉つてゐたのだか、「ガラ〳〵蛇」の景氣に怖れをなして、醒めて了つた。外へ出ると、「これから吉原へ繰り込むのだ」と云つて、女は何んと宥めても聽かなかつた。「俥夫ア、二挺だよ」などゝ叫んだりした。吉原では彼女は衆目を一身に集めて了つた。着物を前はだかりにして、ヒヨロ〳〵よろけて行くのを、妓夫どもはよい慰みものが這入つて來たと、てんでに巧な冷罵を呈した。辻卜賣りの洟ッ垂れも、「ヤア女の醉ッぱらひ〳〵」などと囃し立てゝ、ゾロ〳〵跡からついて歩いた。いかな昌造も側へよれな

かつた。時々「女の醉ッぱらひ」は後を振り返つて、昌造の姿が見えればよし、一寸でも見附からないと、委細かまわず大聲で彼の姓を呼び立てた。昌造が知らん顏をして段々近よつて行くと、見附けて、安心してまたヒヨロ〳〵歩いて行く。群集は彼女の視線をたどつて連れの男を見附け出さうとする。そのなかで昌造も群集の一人のやうなものゝ好きな顏をしてあたりを見廻したりした。――大分遲れてゐた昌造が仲の町の通りに出た時に、「ガラ〳〵蛇」は姿が見えないほどの人立ちに圍まれてゐた。彼女は辻卜賣の子が五月蠅いと云つてその一人の頭を打つた。それを見咎めた矢ッ張り醉ッぱらひの義憤家が女と喧嘩を始めた。昌造は今度こそ知らん顏をして先へ歸つて了はうと思つたが、それが出來る性分ならもう夙に淺草で女を捲いてゐたらう。彼は人立を分けて這入つて行つて、女の手首を取ると、默つてグン〳〵大門の方へ引ッ張り出して來た。「ヤア刑事だ〳〵」など云ふ聲を後に聞きながら。

荒れ狂ふ女を無理に俥に乘せて、低聲で俥夫に所番地を云つて聞かせてから、「刑事」はやつと肩の荷を下ろしたやうに、人通りの比較的少ない三の輪の方へ歩いて行つて、やがて俥に乘つた。寒い月が天に冴えてゐた。俥は鷲谿の下の方へ出る淋しい町を走つてゐた。それほどの目に遇はされた「ガラ〳〵蛇」が、彼には、まださういやではなかつた。何か哀れなやうな愛情さへ感じた。灯をとられた提燈を點火さうとしてゐる俥があつた。梶棒を下ろさずに、後押の俥夫が前に行つてマッチを摺つてゐた。俥の上には「ガラ〳〵蛇」が寢入つたやうにグッタリ首を曲げてゐた。

「オイ氣をつけてやつておくれよ」昌造は俥の上から聲をかけて行き過ぎやうとした。

「何んだ貴方だね。わかつてらア」と女は急に顏を振り上げた。その顏にいつぱいに月がさして蒼白く

美しく見えた。
その晩二時頃に、若い泥醉してゐる女を、知れ憎い露次の奥の小さな汚い家へ送り屆けた二人の俥夫は、家中には彼女の妹らしい娘が二人ゐるきりで男や大人がゐないことを慥めた時に、「わつちらもこれから仲まで歸りや夜が明けちまいますから、どこの隅でもよござんさア、一晩泊めてやつておくんなさいな」と科白のやうな口を利いた。俥は露次の奥に霜と月光とを浴びて朝までそこにあつた。
露骨この上なしと云ふ「ガラ〳〵蛇」からこの話を聞かされた時には、流石「自由な心」の持有者も悄げ返つて了つた。

再び夏が環つて來てからのことであつた。その時分には既に以前のやうな友誼に復してゐた昌造と佐々とは、嘗て一週間のうち少くも二日まではさうしたやうに、一緒に連れだつて街を散歩してから、その年納涼のために公開された御臺場の一つへ渡つて見やうと云ふことになつて、芝浦の埋立地の海岸に立つた。舊曆十五日の月が上りかゝつてゐたが、いかにも夏らしく、夢のやうに足もとが暗かつた。ボウ〳〵と締りのない、生溫く濕つた風は肌にベトついて快くなかつた。それで、御臺場に渡す艀の出る所は一寸知れもしなかつたが、乘り氣になつて探してみる氣もなかつた。堤防近く舫つてある舷の高い和船の舳から暗い海の水へドブン〳〵と飛び込んでゐる若者たちの呑氣な夜の水浴が、元來から云ふことの大好きな昌造にも妙に危つかしく思はれるやうな晩だつた。それは耳朶を鳴らしてボー〳〵と吹いて行く、日照り續きの海上で溫められた風や、その下を薄雲が流れる度に息をつくやうに明るくなつた

り暗くなつたりする瘕惚けた夏の月光のせいであつたらう。彼等がいくらか豫期して來たやうな爽かな涼味とは丁度正反對と云つてもいゝやうな、怠けた、或はそれ以上不氣味な感じを受けながら、二人は下駄を揃えてぬいた上へ腰を下ろして、晦い水平線を望むでゐた。潮の匂に混つて腐つた魚の匂もして來た。それが、湯のやうになつた海の上へ白い腹を出して浮んだ死魚の體からでも匂つて來るやうな心持ちをさせた。

廣々とした埋立地の草原を横ぎつて、彼等はそろ〳〵歸りかけた。往き道には心附かなかつた小屋がけの素人相撲の前へ出た。彼等はそこに這入つて、猿股の上から緋金巾の褌など締めた逞しい青年たちを、薄暗いカンテラの光の下に眺めた。好惡の劇しい彼等は、數の知れた力士たちのなかゝら直ぐに贔負々々を見つけ出した。規定の時間が來て、木戸番の爺に追ひ立てられるやうにして、最後に彼等がそこを出た時には、いくらか元氣を回復したやうな氣がした。もう月は天心に昇つて青く澄むでゐた。棧橋のやうな危つかしい橋を一つ渡つてから、安請請の小料理屋や小待合のゴチャ〳〵と建て込むだ一廓へ、例の好奇心から折れ込むで這入つた。その道は湯屋の前へ出て行き止つて了つた。片側は石炭殼がガス頽れ落ちて來る暗い斜傾で、上には鐵道のシグナルが雲を突くやうに立つてゐた。あと戻りをするのが業腹なので、彼等に構はず鐵道線路の土手へ登つた。そこを横切れば直ぐ田町の通りに下りられると思つてゐたが、上つて見ると、土手と向ふ側の往來との間には、コンクリートの壁が何か工事中らしく、その上案外往來は低くかつた。

「こりや下りられない。廻らうか」

「なに、線路についてもうちつと行つてみやう。大低下りられるよ」

　彼等は新橋の方へ向つて線路のわきを歩いて行つた。そこへ前の方から大地を震動させて下り列車が來た。

「危いよ」

「大丈夫だ。こいつは氣違ひぢやアないから」

　自働車のことをケンノン性な牧野が「氣違ひ電車」と呼んだ。電車も怖いが、自働車と來たらいつ何時どこへどう逃れて來るか分らないのだから、これほど怖いものはないとよくその友達が云つてゐた。それでも彼等は出來るだけ線路から離れて、土手の草を蹈むくらゐの端を歩いてゐた。下り列車は彼等の歩いてゐる側からは一番向ふのはづれの線路の上を轟々と凄じい響をたゝて走つて行く――昌造のつひ目の前を歩いてゐた浴衣がけの佐々の薄ら白い後姿がパッと消えてなくなつた。途端に昌造は非常な音響と、吹きよろめかされる程の空氣の攪亂に會つた。熱く感じるほどの、焦臭い風が裾をあほる。直ぐ頭の上を四角な明るいものがチカ〳〵チカッと飛び過ぎる。次の瞬間に昌造は目の前に山の手電車の岡のやうに大きな後姿と赤いランプの光を見る。恐らく三秒よりも短い間にこれだけのことを感覺する一方では、佐々が鞠のやうに五六間さきへケシ飛んで行く瞬間の姿をも見た。そしてその次の瞬間には、切腹した人のやうにうッぷしてゐる佐々を、後から抱き起してゐる己を感じた。額から鼻柱の横へ流れてゐる血を見た。目はあいてゐる――

「大丈夫か」

「大丈夫だ」

怪我人の聲は思つたよりシッカリしてゐて、何か自ら嘲笑ふやうな調子さへあつた。けれども昌造は、「こりや佐々は死ぬかも知れない」と思つた。「どうして死ぬのだらう」と自問して、その時初めて佐々が山の手電車に觸れたと云ふ事實をはつきり意識した。――もう一筋の血が脣から顎へ流れてゐた。これが血ヘドなら助からない！

「シッカリしてくれ！」

「大丈夫だ。大丈夫だ」佐々は一言づゝ慥めるやうに云つた。

そこは往き道に彼等も潜つた三丈ほどある陸橋の天端で、佐々の膝頭から一尺とはない所から下の往來へ石垣の高い絶壁になつてゐた。そのツイ鼻の下を涼みの客がゾロ／＼歩いてゐる。それが彼等とは交渉を許されない他界の人々のやうに、こつちを振り仰ぎながらも、立ち停りも慌てもせずに、平調な足さみでゾロ／＼動いてゐる――昌造は心細くなつて來た。

「誰か來て下さい。大變です」と彼は幾度も呼んだ。谷の底で、「どうしました」と云ふ聲が聞えた。

「誰か早く來て下さい」

その間佐々は膝で立つて前こゞみになつたまゝ一言も口を利かなかつた。昌造は後から、その前こゞみにならうとする頭を顎で支へるやうにして、脇の下から差し込んだ兩腕でシッカリと抱いて、指を佐々の乳のあたりで組み合せてゐた。その昌造の指の上にまた佐々の手が輕く載せてあつた。そこには、生温い、サラ／＼に乾いた、アレ性の、いつも通りの佐々の掌を感覺があつた。それがいくらか昌造に

勇氣を與へた。「大丈夫だらう」とも思つた。そして急に、「兎も角こりや大變なことが出來て了つた。」と初めてさう感じた。……どこからともなく彼等の周圍には人々が上つて來た。角燈を持つた線路工夫もゐた。

「どうしました」

「電車です……大變です」

「兎に角往來まで下ろさなくつちやいけない。お待ち」かう云つて手を藉しに寄つて來た中年の男はヒドく酒の匂ひをさせてゐた。

「貴方はいけない」昌造はその男の手を拂ひのけてあたりを見廻した。湯屋の歸りらしく手拭を下げた屈强の若者が目に這入つた。「さつきの相撲とりの一人だナ」と彼は心丈夫に思つた。

「貴方すみませんが手を藉してくれませんか」

　その若者は、人々がかう云ふ場合に會ふと陷り易い、義に勇むと云ふ風な氣負ひ立つた容子もなく、無愛想に近よつて來た。昌造はそれが氣に入つて、その若者に對しては無遠慮になつてもいゝやうな心持で、下げてゐた手拭を貰ひ受けた。それで佐々の頭に後鉢巻をした。濡手拭はグヽグッと堅く締つた。髮の毛のなかで傷の在かは知れないから、顳顬の動脈を締めつけて置いたらいくらか違ふだらうと。

　そこへ白服の巡査が來て、「醫者はまだ來ないか」と云つた。その時佐々が肝癪を立てたやうな聲で、

「警察醫なんぞに來て貰はなくつてもいゝ。それよか早くどこか病院に連れてつて貰はう」

昌造は自分がすつかり顚倒してゐるのに、怪我人の方が却つてはつきりこんな思慮を保つてゐるのを喜しく心丈夫に思つた。

「さうか〳〵。だけど……大丈夫か」

氣だけはシッカリしてゐても、案外途中で……とそれも案じられるので、昌造はたのめない當人にそれを慥める。何しろ傷の程度がちつとも分らないので、彼の不安は手遲れと云ふ點にあつた。そこには、「若し手遲れにでもなつたら申譯がない」と云ふ自分を護る自己本位の考も混つてゐた。

「大丈夫だ」佐々は受け合ふやうにシッカリと答へた。

「それぢやァ醫者はいりませんから、大急ぎで俥を云つてくれませんか」

巡査は昌造にものを云ひつけられたので、ヒドく感情を害したらしく「そんなことは自分でしろ」と云ふやうな言葉を殘して去つた。兎に角往來へ下ろすことになつて湯歸りの若者が前に廻つて背負つた。昌造が後から助け載せやうとすると、突然怪我人が、「痛い〳〵」と叫んだ。見ると背で浴衣が五六寸ほど破れてゐた。彼の心はまた暗くなつた。

自分のステッキと、丁度持つて歩いてゐた「罪と罰」の英譯本と、佐々の下駄の片一方とを拾つて、昌造は人々のあとから危つかしい所を田町の往來へ下りた。誰が呼んで來たのか俥が二臺待つてゐた。

「一緒に乘らなくつてもいゝか。一人で大丈夫か」

「大丈夫だ」

佐々は俥の腰かけの端の所へ一寸腰をかけて、前こゞみに窮屈さうにしてゐるので、昌造がうまく掛

け直させやうとすると、「膛を延ばすと背が痛いのだ」と云つた。そこに、ヅク濡れになつた佐々の麥藁帽や下駄の片一方を持つて來てくれた人があつた。昌造は先刻拾つた片々の下駄を、「こんなもの片ッぽだけ持つてどうする氣だ」と心附いて、どこかにまた捨てゝ來たのだ。帽子は自分のゝ下から二重に被つたが、下駄は目立たないやうにそつとまた捨てゝ了つた。もう出かけやうとした時に、

「君等逃げて了つちやイカンぢやァないか」

と云つて巡査が近よつて來た。昌造は腹を立てゝ、

「逃げやしないが、何か用があるのか」と喰つてかゝつた。兎も角交番まで來いと云ふので、佐々の俥夫に田町の通りをソロ〳〵先へ行くやうに云ひつけて置いて、昌造は交番へ行つた。いつの間にかあたりは大變な人立ちだつた。巡査は彼等二人の姓名職業住所などを訊かうとした。昌造は人立ちのなかでそれを口にしたくなかつたので、自分の名刺に佐々の姓名や番地を書き添えて、精しいことはこれからU病院に行くから、そつちに調べに來いと云つて俥に乘つた。怪我人の注文でソロ〳〵引いて行く俥は往來の視線を集めた。濕つた手拭が赤黑く血で染つてゐるので人目を惹き易かつた。で、昌造は暗い裏通の方を行かせた。そしてU病院、彼の親戚の男が外科の主任をしてゐるそのU病院へ行かうと、佐々に告げた。

「U病院で不愉快なことはないか」佐々がかう云つた。昌造にはその意味が解らなかつた。

「何故……ないだらう」

「俺はこの頃K病院に通つてるんぢやァないのか」

「ウン」と答へはしたが昌造はギョッとした。それを人に惱めるとは……。

「そんなら矢ッ張りK病院して貰はう」

佐々はその時分K病院で治療を受けてゐた病氣を、友達の親類などに知られたくないと、それを氣にしてゐるのだつた。

「でも大變遠いよ」

「タクシイを云つて貰つたら直ぐだ」

「それでもいゝがU病院ではいやかい」

「不愉快なことがありさうだ。我儘を云つてすまないが矢つ張りK病院にして貰はう」

そこで、新橋のタクシイへ電話をかけて、彼等の行く道を逆に迎ひに來させやうと云ふことにして、昌造の俥だけ先に自動電話のある街角まで走らせた。色々の名で引いてみたが氣が急いてゐるせいかどうしても番號が知れないので、昌造がひとりでワク〳〵してゐる所へもう佐々の俥が來た。その由を告げながら、自働電話の灯で佐々の顏を見ると、蒼ざめてもゐたが、瞳孔が開いたとはかう云ふのを云ふのだらうと思はれるやうな生氣のない、凄い目付をして一つ所と見詰めてゐた。昌造はこりやいけないと思つた。

「U病氣で我慢して貰はう。それだともう直ぐなんだから」

「さうか、ぢやァさうしやう」案外佐々は柔順だつた。昌造はU病院に電話で知らせて置くことにして佐々の俥を先にそこへ向はせた。電話で大分手間取つて、彼が再び俥に乘つた時には、急にゐてゝ立つ

ても居られないやうな不安が襲つて來た。「大急ぎ〳〵」と彼は俥の上でぢだんだを踏むだ。俥夫も人通りの少ない公園を一生懸命に走つた。然しいくら急いでも、行手に佐々の俥が見えなかつた。昌造は目を瞑りながら、兩手に力を込めて、手拭を絞るやうに、ステツキをギリ〳〵振り廻してゐた。濡れた佐々の帽子で箍をはめられたやうに堅く締めつけられてゐる彼の頭は、なか〳〵キユーン〳〵と鳴つてゐるやうな氣がした。

――佐々は死ぬかも知れない！

昌造は四五年前オ、ガスト・ジヨンとオスボルンの話を聞いた時に佐々を殺さうと思つたことはあつた。しかし、佐々が死ぬかも知れない！と云ふ心持に面接したのは初めてだつた。それは全く有り得べからざる、考へても考へられないやうなことだつた。その言葉には意味があるやうでないやうだつた。

佐々は死ぬかも知れない！

いくら思つても、恐ろしくも、悲しくも、喜しくも、尙更ら可笑しくも――どんな感情も一つも浮び上つて來なかつた。その癖彼は嘗て自分が彼を殺さうと思つたことも知つてゐた。さうかと思ふと、佐々の遺稿のあとにでも書くやうな、追憶の文章の突飛な一部分がアリ〳〵と腦に浮んで來た。佐々が死ねば彼は非常に悲むだらうとは思はれた。しかし、死ぬかもしれない！と云ふ事實に伴ふ感情は、あるやうで、漠々として霧のやうに取りとめなく腦のなかに廣がつてゐた。

その晩昌造は怪我人の枕もとで一晩あかした。醫者は傷としては生命に關するやうな重傷では勿論な

いが、右の肩胛骨の下の打撲傷から何か內臟に餘病を引き起せば……と危むだ。その上佐々は全く記憶を失つて了つた。手術を終つて病室の寢床に橫へられた時に、彼にヒドく抗奮して、顏を赤くして、機嫌よくニコ〳〵と笑つてゐた。さうして、

「一體俺はどうしたんだい」と昌造に尋ねた。あらましのことを話して聞かすと、「さうか電車でやられたのかい。さうかなァ、隨分間脫けなことをしたもんだなァ」と笑つた。それから、K病院に通つてゐるのかどうかも憶めた。「俺はあの病氣が惡くなつたんだと思つてた」と云つた。「俺は此頃何か仕事をしてゐたかね」と訊く。長編を書きかけてゐる由を答へると、「さうかなァ、ちつとも覺えてゐないなァ、どんなものだい」「君がR市へ行つた時分のことから書き出してさ」「ァ、さうか、俺はR市へ行つてたのかね」と、こゝらまで來ると、また、「一體俺はどうしたんだ」と初めの質問にあと戻りして、殆ど一つも狂はずに同じ順序で同じことを一順尋ねて了ふと、また最初の質問に直ぐ戾つて行く。そして、それほど記憶を失つて了つたと云ふことに全く何等の不安をも感じないらしい。初めのうち昌造は、「こりや悲慘なことになつて了つた」と思つてゐたが、一晩中少くも二十遍以上同じ返事を繰り返えさせられたので、仕舞には五月蠅く、少し肝癪さえ立つて來た。彼が亢奮してゐてとても寢られさうもなかつたのに故意と橫になつて目をふさいで了つた。それに、その記憶力を失つたことは一時的のことであらうと思はれたから。

翌る日午近く、昌造は血に染つた羽織や「罪と罰」などを風呂敷包みにして、炎天に寢不足な眉を顰めながらうちへ向つた。その時分には佐々はスャ〳〵眠つてゐた。隱りしな外科醫の控室で醫者に憶め

得た所では、もう十中八九心配のないことも解つた。

――佐々も助かつた！

かう思ふと昌造は何かもの足らない氣がした。彼は吃驚して、「俺は……ほんとに呆れ返つた人間だ！」と思ふ。が、然し彼は心の底では安心してゐた。「俺がしんからそんな男なら、ゆうべあんなに夢中になつて世話をしてやしない」

佐々の怪我はドン／＼快くなつて行つた。昌造は見舞に行つてよく佐々の母親や兄弟たちと一緒になつた。この上もなく佐々を愛してゐる祖母が、孫の枕もとで溢れるやうな喜びに老つた體を震はしてゐるのを見た時には、昌造は不思議な不安を感じた。「俺は佐々の生死よりも、この人たちの喜びが見たかつたのではなかつたらうか。若しこのお婆さんが喜びの代りに悲みで震えてゐたら……」

老祖母は繰り返し／＼昌造に禮を云つた。さうされると、昌造も、自分のしたことが何か特別善いことであつたやうな氣がして來て、嬉しさうにニコ／＼してゐた。

――五年六月――

妾垣

上司小剣

一

名所舊蹟を見て廻はることの好きであつた母親に、だん／＼自分も肖て來るのか、此頃は町を歩きさがして、昔の思出に耽ることが多くなつたと、光淳は染染考へる日があつた。

亡き母親の名所舊蹟癖は、それに何か古い時代の公卿か武將か勇士か、さもなければ、名高かつた遊女か俳諧師かの故事が附いてゐなければならぬのを條件としてゐた。變な棄て石にも、菅家の腰掛け岩なんぞといふ札が立つて、注連繩でも張り廻はしてあれば、母親は何かなしに氣に入つて、其の前に立ちつくした。老いてはゐるが、まだ漸く二三百年ほどにしかならぬと思はるゝ松の樹にも、八幡太郎義家鎧懸けの松とでもいふ名がついてゐると、其の葉を毟つて來て、紙に包んだのを大事に手文庫へ納つてゐた。地獄太夫が生れたのはこの邊だといふ、

場末の汚い町にある氣味のわるい床屋へわざ〳〵襟元を剃つて貰ひに行つたり、芭蕉が赤痢に罹つて死んだ花屋裏といふのは、此處の路次だといふ佛具師の店頭に立つて、番頭に怪まれたりしたのも、今は亡き母の逸話として殘つてゐる。

光淳は、そんな古い人間に絡み合つた名所舊蹟には信用を置いてゐなし、興味も有つてゐないのであるが、子供の折からの自分に少しでも係り合ひや緣故のある土地や家屋には、他人に話しても眞事としないほどの强い憧憬を抱いてゐる。

世間では誰れも知らぬ自分一人の名所舊蹟が、自分には一番懷かしい。これは屹と母親の遺傳に違ひない。

朝起きて手水を使つた時、母親は手拭で顏を拭いて、額から腮までツルリと撫でた後で、一寸口を歪めるのが癖であつた。それを自分が此頃よく行るやうになつた。考へてみると、其の時の口の歪めかたが如何にも母親そつくりなので、手拭を持つたまゝ一種の恐怖に打たれることさへある。

こんなことを考へながら、光淳は、用事もないのに家を出た身體の持つて行き場に困つて、兵營の長い煉瓦塀に添ふた寂しい通りを、だら〳〵と谷町の方へ下りた。

この道をこれでもう何遍通るやらう、と光淳は不圖考へた。空が曇つてゐて、夏の太陽もさう劇しくは照り付けないけれど、若い時から帽子を被ることが嫌ひなので、夏の外出には必ず蝙蝠傘を翳さなければならなかつた。黑い毛繻子の蝙蝠傘も、これで四度目の夏に逢ふのである。

夏になると、毎も昔の祭禮の賑やかさを思ひ出す。花車を曳いてこの敷石の坂を上つたこともある。

呉絽に金紗で鯉の繪を繍りした襦袢などを、得意になつて着込んで、花車の綱を持つてゐたのは、もう幾十年の昔であらう。呉絽と言へば、今は風呂屋へ持つて行く垢摺りにしか、其の殘骸を見ることはないが、其の頃は縮緬なんぞよりズッと〳〵珍重されたもので、呉絽の帶を締めてゐると言へば、今時白金の鎖を絡ましてゐるよりも、見せびらかしの利いたものである。それを襦袢に仕立てゝ、おまけに金紗で繍りをしたのであるから、誰れが見ても仰天したに違ひない。

亡き父は若い時江戸へ奉公に出てゐたので、江戸の夏祭の華美な風を見て來て、それをよく自慢げに話した。‥‥江戸では娘や女房を賣つてまで、祭禮の仕度の立派さを競ふのだから面白い。祭禮の終つた後へ買家を探しに行けば、必ず安い家作が見付かるから、家の買ひたい人は、祭禮の濟むのを待ち兼ねてゐる。それに比べると、大阪の祭禮はしみつたれぢや、花車を曳くにも木綿ものか何かで、犢鼻褌だつて紅木綿か黄木綿ぐらゐを締めてゐる。江戸の若い衆見い、緋鹿の子縮緬の犢鼻褌を長くたつぷりと締め、餘つたのを腹へぐる〳〵巻いて、花車を曳いたり、神輿を擔いだり、暑さに苦しむと、其の見事な犢鼻褌のまゝで、橋の上から川の中へ飛び込んだものである。‥‥‥‥

「大阪の若い衆はあかんわい。」と、父は長々しく江戸の祭禮の話をした末に言つて、今度の夏祭には、呉絽の襦袢を光淳に拵へてやると力んだ。

丁ど、光淳が十七になつた夏であつた。豐玉稻荷の砂持ちで、近所の娘たちが、派手な單衣の片肌を脱いで、緋縮緬の襦袢の燃え立つやうな袖を露はし、右の手に持つた團扇で左の掌を叩きつゝ、

「えらいやつちや、えらいやつちや。‥‥‥‥」と、蕾のやうな唇に紅の色のちよんぼりと靑く光るの

と、金絲雀の雛の如くに開けて、口々に呼ばはつて行く長い列の、幾組も續くのを見る時、光淳は其の吳絽の襦袢に金紗で鯉を繡りしたのを着て、緋鹿の子縮緬の犢鼻褌を眞白な腹の臍の上まで卷き付け、父の考へ通りの身形をして、跣足の眞ん中を荒繩で一つ結び、花車を曳きに町へと躍り出した。

父が團扇を使ひ〱、門口まで送つて出た其の折のホク〱した顏は、三十五六年も後の今まで、まだあり〱と眼の底に殘つてゐる。

「江戸では身體に文身がしてないと幅が利かんのや。」と言つて、父が光淳の搗き立ての餅のやうな柔らかい滑々した肌に刺青をしやうとしたことがあつた。

「祭禮になると、江戸では十歳から十二三ぐらゐの子供でも入れ墨するよつてなア。……痛いちうて厭やがるのを、親が捉まへて、梯子へ俯つ伏さに括り付け、刺青師を呼んで來て、餘り手間のかゝらん入れ墨をしたもんや。」と、父は異郷の懷かしげな色を、大きな鼻のまはりに浮べて、自慢さうに言つた。

けれども、光淳は漸くこの刺青だけは免れて、この年になつても、灸點一つない美しい肌の誇りを有つてゐる。近頃は皮がだいぶ弛んで來たけれど、白蠟のやうだと言はうか、象牙の如しと譬へやうか、白い色艶は風呂屋へ行つても、自分ながら目に立つほどである。

吳絽の襦袢は、後になつて垢摺りにばかり使はれるほどだから、しやご〱して着心地の惡いこと、こんなものを長く着てゐると、皮膚が摺り剝けやしないかと思はれた。

それでも、オランダ人に騙されて、吳絽をば蜀紅の錦よりも貴いと思つてゐた其の頃だから、光淳の

襦袢は、祭禮に醉ひ、砂持ちに狂つてゐる人々に、驚異の眼を瞠らせた。側へ寄つて來て、金紗の縫りを撫でたり、硬張つた袖口を引つ張つたりするものもあつた。其の中には新蝶々の形を稍崩して、拔けるやうに白い、肌理の細かな顏へ後れ毛を振りかゝらした隣家のお靜さんの、眞赤な襦袢を半分見せた片肌脫ぎの砂持ち姿もゐた。

吳絽の襦袢と、緋鹿の子の犢鼻褌とに、若々しい肉は、これまでにまだ一度も知らなかつた刺戟を受けたものか、光淳はこの時から、身體の何處かに變な感じを覺えるやうになつた。さうして砂持ちに行く娘たちを見る眼にも、異樣の光を包むことになつた。隣家のお靜さんには、殊に妙な目付が向けられた。――

昔の夢を辿り〳〵、光淳の肥えた大きな足は、谷町を北へ〳〵と行つた。電車は轟と響を立てゝ、幾臺か駛せ過ぎたが、乘らうとする氣は起らなかつた。

何時の間にか辻を西へ曲つて、眞つ直ぐに御堂筋へまで出て了ひ、それをまた南へ〳〵と歩いてゐた。何の橋を渡つて、東橫堀を越えたかも知らなかつた。

芭蕉終焉の舊蹟はこのあたりであらう。母のよく言つた花屋裏といふのは、何處かいな。と光淳は思つた。

二

光淳の足は、何時しか南の御堂の石段を上つて、唐門から廣場へ入ると、茶所の前には五六羽の鳩が丸い顏をして餌を拾つてゐた。茶所の汚ない疊には二人ばかりの老人が腰をかけて、呑氣さうに、眞綠

の煙管で煙草を吸つてゐた。

曾つて、光淳が天主教へ入つて、ドミニコといふ魂名を命けて貰ひ、コンタスや十字架を貰つた時、此處のこの堂に御といふ尊稱を附けて御堂と呼ぶのが忌々しかつたけれど、それはもう土地の名になりおほせてゐて、警察向きの看板にも、御堂筋巡査派出所などとしてあるのを、自分だけが單に「堂」と呼んでみても通用しないので、其の忌々しさを神父に話すと、普通の時は一分間でも強い煙草とマドロスパイプとを離さないで、國府や水戸の名葉に柔かい煙の味を嗜なんでゐるものが一口吸つてもグラグラと眼の廻はりさうなのを、バク〳〵やつて、紫の毒々しさうな烟を、愛嬌皺が渦を巻いてゐる口元に棚引かしつゝ、老神父は、

「そんなこと構ひません、尊稱が其のまゝ地名になつて、尊稱の意味を失つてること、故國の方にもよくあります。氣にかけるに及びません。」と笑つた。

それでも光淳は、「一寸御堂筋までいつて來ます」などといふのが、何んとなく强腹で、出來るだけは御堂といふ地名を使はないやうにと心してゐたのを思ひ出した。

今はもう、そんなことは何うでもよいので、巧みに自家の尊稱を地名にまで使ふやうに持ちかけた、佛教の傳道方法の狡猾なのに感心してゐるだけである。それに比べると耶蘇敎は日本人でありながら、態々西洋人の不得手な日本語を眞似て、言ひにくさうに物を言つたりする牧師も珍らしくなかつた。今はもうそんな剽輕者がないにしても、厭やに熱心ぶるだけで、嘘も方便の缺けてゐる彼等に、碌なことの出來るわけがない。しかし、自分が何うしても佛門に入り得ないのは、其の方便が厭やなからである。

印度の山の中から出て來た敎へは、いろ〳〵の小細工を加へても、煎じ詰めると、山の中の物である。大乘も小乘も落ち付く先きは、無の外道である。山を下りて、こんな町の眞ん中へ寺を建てゝみても、一向念佛の響の末には、幽遠と玄妙との音波が擴がつてゐる。天台、眞言、矢ッ張り其處へ流れ込んで山の奥に隠遁する。自分はそれが嫌ひだ。愚禿の愚の方便の愚だ。自分はそれも嫌ひだ。

説敎が終つたと見えて、老いたもの丶多い人の群れは、天台に象つたといふ大きな大師堂の切り貼りの多い障子の奥から、流れて出て來た。あの立派な建物の障子に、あの切り貼りは何うしたことかと、自分はよく氣になるのだ。西本願寺が王者に取り入つてか、阿諛してか、本堂の家根を紫宸殿に象ると、東本願寺では口惜しいけれども、眞似は出來ないので、家根を天台に象つたとか。其の國に入れば直ぐに其の權力階級に取り入るのが、彼等の奥の手だ。腐敗は其處に始まつて、墮落は彼等の本領であらねばならぬ。革新し向上すれば、一向念佛を止めて、故郷の山に還へらなければならないであらう。

光淳は、取り止めもない知識から、取り止めもない思索を割り出して、大きな身體の太い腰を茶所の床几に下ろしつゝ、大きな顔の太い眉毛をピリ〳〵動かしてゐた。

大きな堂から出て來た、説敎の聽衆は案外に尠なかつた。鳩と子供との遊び場になつてゐる砂の柔らい廣場を、ぞろ〳〵と、杖なんぞ突いて歩いてゐる人の數は三十を多く超えなかつた。

この茶所には、何うしたものか蠅が多い。番人の老婆は、棕櫚の葉を細かく編んで、枝を其のまゝ柄にしたやつで、頻りに蠅を叩き殺してゐる。

「今年は蠅が多て、仕樣がおまへん。……あんたはん、御免やすや。」と、光淳の側さで、堅い土間

に利休の齒を、頭の中へ痺れ込ませるやうな音さして近寄りつゝ、光淳の丸い背中の、まだ紺の香の高い飛白に止まつた蠅までを、ピシャリとやつ付けた。

「何んでこんなとこに、こない蠅がゐますのんやなア。」と、光淳も持つてゐた扇子で、膝の上の蠅を叩かうとして仕損じ、蠅が巧みに翼を翻へしつゝ逃げ去るのを見てゐた。

「詣ゐらはる人が持つて來やはりまんね。……難波や長町の汚ないとこからも來やはりますよつてなア、何んぼ殺したかて、先繰り〱肩や脊中へ蠅を附けて來やはりまんのや。……附けて來やはつても、去ぬ時また持つていて呉れはるとよろしおますけど、さうはいきまへんよつて、此處がいッち迷惑だす、北の蠅も南の蠅も、附いて來た人にはぐれたのが、皆んな此處へ寄つて來ますんやもん。コレラの流行る時なぞ、そら厭やだッせ。」と、老婆はだん〱馴々しく、言葉も粗末にして來た。

「河鹿飼うてる家やと、蠅が一匹來ても喜んで、大騷動して捕りやはるがなア。」と、光淳は老婆の手から棕櫚の枝を借りて、二三匹叩き殺した。

「そんな家にはまた蠅が居まへんのやなア、ようしたもんや。」と、老婆はさも感心した風で言つた。

其の棕櫚の枝は、もう餘程古びて、麻糸で編んだ葉がほぐれかゝつてゐた。赭ちやけた葉裏には、それに打たれて生命を落した蠅の肝腦が塗れ込んで、この小ひさな蟲の恨みが幾百千匹の分も染み付いてゐるやうな氣がした。佛の前、法の庭で死んだら、蠅蟲もまた佛果を得るなぞと、僧等が說くであらうと思ふと、光淳は可笑しくてたまらなかつた。

雌雄と見ゆる二匹の蠅が、相繫がつて古疊の上で、ぶん〱やつてゐるのを見た老婆は、難かしい顏

をして、

「おのれまア。」と叫ぶとゝもに、「一寸お貸しやす。」と、光淳の手から棕櫚の枝を引ッたくり、力を込めてピシャンと打つと、哀はれや一匹の蠅は無殘にも身體を潰され、他の一匹は翼を曲げて、重傷に苦しみつゝ、打ち潰されて死んだ蠅に繋がつたなりで、ピク／＼と足を動かしてゐた。

「あんじやう殺しとかんと、蘇生よるよつてなア。」と、老婆はまたもや棕櫚の枝を振り上げて、一擊を下さうとするのを、光淳は押し止める手振りをして、

「まア待ちなはれ。」と言ひ／＼、ピク／＼動く重傷の蠅の姿に見入つた。

「あんた、えらい思ひやりがよろしおまへんな。」と、老婆はニヤリ厭やな笑ひかたをした。

「可哀さうやおまへんか。」と、光淳は更らに、潰れた死骸になつた蠅と、其の刹那の動物的情人とも覺ゆる半死の蠅とに見入つて、五十を過ぎるまで獨身で童貞を守つて來た自身の上を顧みた。さうして、坐に、

「何んぢや阿呆らしい。」といふ氣特ちになつた。

「もうよろしおまッしやろ。」と、老婆は棕櫚の枝を取り直し、傷ついた蠅がだん／＼元氣を取り戻して細い腸のやうなものを引き摺りつゝ、潰されて死んだ友の身體から離れ、今にも飛び立ちさうにして歩き出したのに、ピシャンとまた一擊を吳れると、狙ひが外れて、手負の蠅から五分ほど距たつたところを、强かに打つた。すると、たゞさへ弱つてゐた蠅は、この霹靂のやうな、すさまじい物音に失神して仰向けにひッくり返へつたまゝ、少しも動かなくなつた。

光淳は、生物の命といふことに就いて考へ始めた。

人間に靈魂があるならば、蠅にだつてそれがなければならぬ。この通り叩き潰された蠅の靈魂の行方は何處に何うなるのであらうか。………蠅の夫婦がこの通り、一方は死んで一方は氣絶してゐる。どッちが男で、どッちが女か見分けは付かぬが、何んだか氣絶してゐる方が小春で、叩き潰された方が治兵衞のやうに思はれる。治兵衞はもうあの世へ行つて、小春の來るのを待つてるかも知れぬ。

あゝ、小春がまたピク〳〵動き出した。小春の魂は先刻から何處に何うしてゐたのであらう。………と、光淳は痛ましさうな顏になつた。

『おのれ、まだ死にくさらんか。』と、老婆は憎々しげに言つて、棕櫚の枝を取り直すと、今度は十分に狙ひを定めて、ピシャンとやつたので、哀れや小春の身體は、頭も胴も分らぬやうに、ひしやげて多くの同類の血や肉がコビリ付いてゐる棕櫚の葉裏へ、新らしい血と肉と翼とをクッ付けた。

さても急がしい小春の靈魂の往來であつたが、かうなつてはもう永久に靈は肉に離れたと思つて、光淳は老婆の手にある棕櫚の葉を見てゐた。老婆はまたピシャッ〳〵と續けて二三匹の蠅を叩き潰し、うッとりした眼で、阿彌陀堂の家根にとまつてゐる白鳩を眺め込んだ。

光淳は何んだか、この老婆が安達ヶ原の鬼婆みたいに思はれて來たので、つと立つて、物も言はずに茶所を出た。

さうして唐門を出る頃には、もう蠅のことを忘れて、善三郎といふ自分の古い名をば、光淳と哲名術の先生に變へて貰つたことに就いて考へ始めた。

三

妻も子も兄弟姉妹もない自分ながら、此の後の幸福を希ふ心はある。

「善三郎といふ名は薄命な名ぢや、盥に乘つて大海に浮び出たといふ形になつてゐるよるわい。苗字次第で、こいつが逆に行きよるんぢやが、あんたの苗字に、善三郎は、だいだいごく惡い名ぢや。」と、赧ら顔の先生の言つたことは、其前に白い腮髯の長い淘宮術の先生から聽た自分の運勢にもよく合つてゐるし、今はもう宗教なんぞよりも、こんな淘宮術や哲名術に信ずる價値の多いことを考へてゐる自分は、直ぐ先生に賴んで『光淳』といふ名を命けて貰つたのである。

「もう十五年早いとなア、光淳といふ名で、あんたの運勢を天へ昇らしたんやが、年齢がいてからの改名は、利きがわるいわい。」と、赧ら顔の先生はまた言つた。

それでも自分は嬉しかつた。第一光淳といふ名が、下へ法主とでもいふ字を付けて呼ぶにふさはしいのも氣に入つた。自分の家は代々門徒宗で、「門徒物知らず」と、たゞ念佛ばかりに打ち込んでゐるやうに數へられたのであるが、自分はそれが嫌ひで、父母の亡なつた後は、寺など構ひ付けないけれど、法主といふ貴族に對しては、尊敬の變形ともいふべき羨望を有つてゐる。さうして光淳といふ代々の法主の名にありさうな名を、偶然に哲名術の先生から選ばれた時は、嬉しくて仕樣がなかつた。自分が獨身で、童貞でゐるのに、愚禿親鸞はじめ、僧形で妻帶する。それが羨ましいやうな、氣に喰はんやうな憤慨を起させる。光淳といふ名は、何んとなしに、さういふことに對しても、蟲が治まつた。

天主敎の神父に會つた時は、生涯獨身で、女を知らずに死ぬ人といふことが、何よりも淸らかで、尊

く思はれた。牛の腦の羹なんぞを喰べて、舌舐りしながら、女を近付けるといふことなしに、烈しい酒や強い煙草に、五體の刺戟を紛らしてゐる其の人が、何故か尊く見えて仕様がなかつた。それは確かに枯木のやうに老い果てゝ、性慾はなくなり、食慾も乏しくなつた佛敎の僧等の、自然の成行から來る淸らかな肉體よりも、ずつと〳〵尊いと思つたことがあつた。童貞さんのいたいけな尼姿を見たこともあつたが、それは餘りに可哀さうであつた。

考へるに事を缺いて、光淳は不圖、神父や童貞さんと、先刻南の御堂の茶所で老婆に打ち殺された雌雄の蠅のことゝを比べて考へてゐた。一生人間の性交を知らずに長く活きてゐるものと、あゝいふ時、棕梠の葉裏で叩き殺されて、自然に心中をした蠅どもと、どッちが幸福であらうか。……………あの蠅は今度こそ人間に生れて、小春と治兵衛とのやうなことをするかも知れぬ。

考へ〳〵て、光淳はまた芭蕉終焉の花屋裏はこの邊りかと思はるゝところを眞ッ直ぐに、堺筋まで出て、其處の辻を南へ〳〵と、電車に追ひ越されながら、老いても達者な足を運んだ。

鐵道馬車といふものゝ時代を過ぐることなしに、電車の時代に入つた。この一足飛びの粗末な進歩といふものが、日本の到る處に見られる。と老神父は、この間も言つたが、……………と、光淳はそれを考へ出したりした。

四

この年齡になつても、ぶら〳〵と外を歩くことより外に餘り樂みのない光淳は、正午を過ぎても空腹を感ずることはなく、灰色の雲が自然の日除けになつて、蝙蝠傘は杖にのみ用ゐらるゝ仕合はせを喜びつ

ゝ、時々パラ〳〵と小ひさな蒸露から撒かるゝほどの驟雨を、ほてつた顏に受ける冷やかさ、涼しさに心持ちをよくしながら、島の內を過ぎて、日本橋の北詰に差しかゝつた。

『あゝ此處やなア。』と、其の時直ぐさう思つた。太い電信柱が一本、ぬうッと邪魔ッ氣に立つてゐるところから、足數にして間口五六步、奧行二十步ぐらゐの地面が、光淳の產湯を浸み込ました土でもあれば、つい二三年前まで住み續けて來た舊蹟でもある。

夥だしく牛の糞のしてあるあたりから、北へかけて一間のところに、幾十年のあひだ拭き込まれて、ピカ〳〵光つてゐた杉の細丸太の妾垣があつた。それへ向ふむきに凭れかゝつて、狹い漆喰場に唾液を吐いたり、內の千本格子を透かして、母親の合はせ鏡をしてゐるのと顏見合はせて笑つたりしたのは、もう何年の昔になるであらうか。其の時分の鏡は、今のやうな硝子でなく、靑銅製の圓形に、裏へは銀で火の玉なぞを浮かし、『天下一藤原忠廣』なぞといふ銘があつた。さうして其の中蓋には桐の板へ金粉を散らして、牡丹の花の鮮やかに眼の覺めるやうな押繪がしてあつた。

一人前の大人は身體を斜めにしなければならぬほどに狹い格子戶が、細長く其の妾垣の脇に附いてゐた。それを入ると、丁度あの新らしく水道の消火柱の出來たあたりから東へかけて、一間の長竈が續いて、大小いろ〳〵の鍋釜のかゝるやうにした五つの黑い穴があつた。狹い格子戶を入ると、直ぐ上り口の沓脫石が橫向きにあつて、其の先きに、冬は黑木綿の、夏は黃ぴらの、のれんが懸り、それから其の長竈と、次ぎの間の上りかまちとの間の細長い土間（一口に庭と言つた）を走り元から、裏口へ出るやうになつてゐた。

竈は土間へ立ちながら焚くので、母は黒の引ッ張りを着て、髮の結び立てを、拇の指で襟の汚れないやうに、白い布片をば脊筋の上にだらりと下げつゝ、祭禮の御馳走なんぞを拵へて呉れた。

呉絽の襦袢を着て、緋鹿の子縮緬の犢鼻褌を締めて出たのも此處の家からであつた。二三年前、電車の通ふやうになる爲めの市區改正で、家を毀はされるまでは、この牛の糞のところあたりにあつた六疊の座敷へ、此方を頭にかう寢たのである。

お靜さんの家は、直ぐ隣家で、矢ッ張り狹い格子戸と、拭き込んだ杉の細丸太の妾垣とが、同じやうにあつた。丁度今あの白雲頭の丁稚が『西洋洗濯』と書いた箱車を曳いて行きよる、あの邊がお靜さんの家の座敷で、彼處の床の間へ三月の節句にはお雛さんや市まを飾つて、其の前で、自分とお靜さんとが、夫婦ごとをしながら、廣島海苔の酢もじや、分葱の酢和へや、慈姑の煮締やを喰べたこともある。

『これ支那人の頭みたいや。』と、お靜さんはせッせと料理を調へてゐる母の側から、生の慈姑を一つ摘んで來て、妾垣の前で自分に言つたことがある。

十五の夏、お靜さんが、何かの用で自分の家へ來た時、丁度祭禮の濟んだ後で、母はあの呉絽の襦袢を取り出して見てゐたが、腋のところに少し綻びがあつたので、それをお靜さんの前へ突き出して、

『お靜さん、此處一寸縫ふといてやつとう、わたへ眼がわるいよつて、若役におたの申します。……

……綻び縫ふのが緣結び、ちう唄の文句がおますやないか。』と、戯れながら賴むと、お靜さんは忽ち一面に紅を刷いた如く、肌理の細かい色白の顏から小ひさな耳朶までを眞ッ赤に染めて、それでも嬉しさうに、渡された襦袢と針とを持つて、透き通るほど白くて、少し青味がゝつたやうに見える細長い指の

先きで可愛らしく針と糸を運んだ。

小學校を卒業してから、裁縫と生花との稽古に通つてゐたお靜さんの後姿に、中學校歸りの光淳はよく追ひ付くことがあつたけれど、其のまゝ追い拔いて、一寸振り返へると、お靜さんはニッと笑つて、直ぐ俯伏いて了うのが常であつた。

河内の大百姓の娘と、島の内の大問屋の息子との緣邊が調ふて三十荷の簞笥長持が舟で相生橋の北詰へ着いた時、近所の人は皆下駄を鳴らして見に走つたが、丁度秋の夕間暮で、羽織袴嚴めしい宰領の人の手には、四つ目の紋の付いた馬乘提灯が、ゆら〳〵と光つてゐた。

『もッと早う出て來やはると好かつたのになア、日が暮れてから荷が着くなんて、あんまりぞッとせんわい。』なぞと、河岸に人垣を作つた中から私語かれた。其の背後の方に立つて伸べ首をしながら、光淳はお靜さんと並びつゝ、紺の法被にだんだら帶を締めて薄い笠を被つてゐる人足の往來するのや、油單のかゝつた簞笥長持の擔がれて行くのやを見てゐたが、三十荷は角の宿屋へ運び込まれて、人足は皆草鞋を脫いで息んだ。人込みに混れて、光淳とお靜さんとは、何時か手を握り合つてゐたが、誰れかゞ横の方から變な羞かしいことを叫んだので、ハッとして繫いでゐた手を互ひに振り離した。この時のお靜さんの手の柔かい溫か味は、何うあつても忘れることが出來ぬ。

十五のお靜さんと、十七の自分と、この時先刻の蝿のやうに、叩き殺されてゐたら、今頃はあの世で二人が蓮の臺に半分づゝ座つて、樂しくしてゐたかも知れぬと、光淳は後になつて、不圖考へることもある。

其の夜から、お靜さんの姿は見えなくなつた。繫いでゐた手を振り離した途端に、二人は人込みの中にはぐれて了つたのである。嫁入りの三十荷が行列立てゝ、宿屋から繰り出して行つたのを見てから、光淳は道頓堀を一廻はりして、小春治兵衞の芝居の看板を大西まで見に行き、戎橋から宗右衞門町の家の路次口へ戻つて、打ち水をした漆喰の上を、片側の燒板の高塀に添ふて、右側に二軒よりない路次の家の手前の方が自分の家で、丁度妾垣の前まで來て、奧の井戸で足を洗はうかと考へてゐるところへ、お靜さんに能う肖たお靜さんの母親が出て來て、

「お靜はまだ戻つて來えしませんがな、あんたと一所に居たんやおまへんか。」と、何やら落ち付かぬ風で訊いた。

「いゝえ。」とだけ手短かに答へて、光淳は心持ち顏を赧くしながら、井戸端へ行つたが、家へ歸つて氣色を窺つてゐると、お靜さんの母親は、幾度も〳〵路次を出たり入つたりしてゐるらしく、可なり夜が更けてゐるのに、まだお靜さんの歸つて來た樣子はなかつた。

十二時を過ぎると、騷ぎはお靜さんの母親一人の上に止まらなかつた。二軒の家の兩親が四人になつて周章て出し、手分けして界隈をズッと探し廻はつたけれど、お靜さんのスラリとした色白の、年よりはませた姿を、何處にも見出すことは出來なかつた。

「十五だすけど、他人さんが御覽うじたら、十七ぐらゐにお見やすやら知れまへん。………」なぞと母親は南警察署へ保護願に出て、涙聲でおろ〳〵しながら、當直の巡査に訴へた。

「頭髮は新蝶々に結ふてました。今朝わたへが結ふてやりましたのだす。………着物は荒い縞の双子

縫で、帶は緋縮緬と黑繻子の晝夜だす。……嫁入りの荷い見るいふて、常の着物の上へ帶だけ結び更へて行きましたんや。……」と、母親の涙聲は、眠むさうな顏をしてゐる黑服の巡査の前に、何時までも續いた。

「はアん。」と、巡査は欠伸混りに返辭して、無茶苦茶みたいな字で、手帖の上へ鉛筆を走らしてゐたが、

「人相は、……」と、五分刈りの頭を上げて訊いた。

「面長の方で、色が白うて鼻も高うおます。眼がパッチリしてまして、……親に似たのだすか瘦せ形で、身長はわたへよりちいと高うおます。」

「ふうん、なか〳〵別嬪ぢやな。……何か目印しになるやうな特徵はなかつたかな。」

「口元に黑子が一つござりました。藥液で拔く〳〵いふて、まだ拔きまへんのでした。」

「何か其の、……情夫でもあつたといふ形跡はなかつたですか。」と、巡査は稍氣乘りのして來たらしい口振りで、眠いことも忘れたやうであつた。

「いゝえ、滅相な、……そんなことはござりまへん、なアあんた。」と、母親は力の籠つた聲で言つて附添ふて行つた光淳の顏を顧みた。

「其處に居るのは當人の兄さんかな。」と、巡査は手帖を閉ぢて、また欠伸を一つしてから此方を向いて言つた。

「いゝえ、隣家の坊ンちでござります。」と、母親はまた光淳の顏を見い〳〵言つた。

「はアん、……」と、巡査は胡散臭さうな眼を振り向けたが、嗄れたやうな咳を一つすると、

「何分まだ昨夕の今ぢやから、何んとも手がゝりが付かん。……或は友達の家で泊つたかも知れんし、事に依つたら、今頃はもう自宅へ歸つてるかも知れん。當署でも出來るだけの手は盡すから……」と唄でもうたうやうに言つた巡査の聲を、賴もしく聽いて、母親と光淳とが警察の門を出る時、巡査の頭の眞上の古びた八角時計が四時を打つた。

夜が明けはなれても、お靜さんの姿を路次内に見ることは出來なかつた。若しやと思ふ空賴みは皆外れて、三人ほど車屋から賴んで心當りへ尋ねにやつた車夫等は、皆氣の毒さうな顏をして、手ぶらで戻つて來た。この上はもう探しやうもなくて、一日二日と經つて行つたが、新聞の變死人の記事は眼を皿のやうにして讀んだ。第一の賴みの警察へは日參したが、行く度に相手の巡査が代つてゐて、同じことを初めから繰り返へし〳〵した。あの夜當直してゐた巡査に四日目で巡り合つた時、母親は懷かしさうに物を言ひかけたが、巡査の方ではもう母親の顏を忘れてゐた。

千日前の八卦見には直ぐ翌る日見て貰つたが、西の方で無事に生きてるとだけで、賴りない次第であつた。天滿の方で、玄關へ定紋付きの幕を張つてゐる評判の八卦見にかゝると、其の先生も矢張り、西の方の遠いところへ行く途中で、今は船に乘つて泣いてゐる。何んぼ血眼になつて探してもあかん。時節を待てばまた會へる。と噛んで含めるやうに言ひ聽かして呉れた。流石に高い見料を取る先生だけあつて、何うやら當になりさうぢやが、時節を待てとあるからには、いづれ永いことであらう。娘姿のお靜にはもう何うしても會へないのか、生憎とこの二三年寫眞もうつさせて置かなかつたと、母親は家の敷居を跨ぐなり、上り口へ泣き崩れた。

『何んの、當るも八卦、當らぬも八卦や、さういふてる中にヒョッコリ戻つて來よるやら知れへん。：……泣くことがあるものか。』と、岩乗な身體づきをした父親も、口でばかり强いことを言つて、眼には涙を一杯溜めてゐた。兵隊に行つてゐた兄さんも、其の爲めに休暇を貰つて歸つたりして、隣家はざわ〳〵と混雜が三四日續いた。光淳の家でも母親が始終貰ひ泣きをして、つい先頃お靜さんが綻びを縫つてくれた與絽の襦袢を取り出し、腋のところの縫口を改めては、あの細い綺麗な指で此處んとこへ針を通してゐたのに、と母親は涙に咽せ返へつた。

　妾垣の脇を、風呂敷包み抱へて裁縫屋へ通ふ赤い姿の見えぬのが、光淳には何よりも寂しくて、朝の中學校行きにも張り合ひがなかつた。學校の歸りに、能う似た赤い帶の後姿を見付けて、追ひ付かうとしながら、ハッと氣が付いて、ホロリとなることも度々であつた。

　路次の中に同じ妾垣を並べた、二軒の寂しい家では、秋から冬へかけて、濕やかな日ばかりが續いた。どつちからか母親が、日に三四度づゝも尋ね合つて、其の噂さばかりした。

『神戸には惡い人買ひがゐますさうで、そいつの手に攫はれたら百年目やちうことだす。……船へ乘せて了うたが最後の助、警察でも手が付けられんのやて。……惡い奴だすなア。』

『けど、お靜さんは賢いもん、やみ〳〵そんな惡い奴の手にかゝつてやおまへんやろ。』

『賢う見えても、年がいきまへんよつてなア。……今頃は其の船に乘せられて、ひどい目に遭ふてますのやろ。二軒とも同んなし八卦が出たんで、わたへもう諦めました。……』

『そんなこと分れしまへんがな。』

「いゝえ、分つてます。……いづれ娼妓か淫賣に賣られるんだへうが、初めて取らされた客で、お家の坊ンちのことを思ひ出しますやろかいな。……」と、言ひ出して、隣家の母親は、もうたまらず、わッとばかりに泣き伏した。

「わたへもなア、この間から家の子を見るたんびに、お靜さんのことが、……」と言ひかけて、家の母親も涙の雨に舌が廻らなくなつた。

「これが病氣か怪我で死にでもしたんなら、壽命やおもて、諦めよいのだすがなア。」

「死ぬより辛いちうことは、この世にないとおもてましたがなア。」

「こんな目に遭うよりは、自分に死んだ方が、何んぼよいか知れまへん。……あゝ死にたい。」

「けど、考へてみると、生命さへあつたら、また會へることもおますがな。……八卦にも、生命はあると出てるやおまへんか。」

「嫁入りの荷い見るいふて、坊ンちと一所に出ていた時の姿のまゝで會へるのならよろしいけど、獣みたいな異人に身體を手遊品にしられて、惡い病を傳染され、見る影もないやうになつた時會うのなら、もうこんなり會はん方が何んぼよいや知れまへんがな。……今頃は何處に何うしてゐるやら。…………」と、隣家の母親はまた涙に咽せて、續けさまに噦をした。

親たちの繰り言がつゞいてゐる中に、秋が去り冬が來て、やがては春のおとづるゝ正月になつても、お靜さんの消息は、かいくれ知れなかつた。

「お靜も十六になつたのやなア。……隣家の坊ンちは十八か。……」と、元日の蔭膳には雜煮

を附けて、母親はまた新らしい涙を、春着の袖で拭いた。――

　ありし昔の家の跡は夥しく小砂利を喰い込んだ堅い道路になつてゐるところへ、何時までも佇んで、往來の人々に怪しみの眼さへ向けられながら、光淳はなほも立ち去り兼ねてゐたが、若の日の思出は、それからそれと、土の下より湧き出るかと思はれて、心の痺れをさへ覺えて來た。

五

　荷車を避けて横へ外れた自轉車に、危く突き當らうとしたのを機會に、光淳は漸う懐かしい家の跡を立ち去つたが、心の裡で、

『名所舊蹟も、草の繁つた荒地になつてゐたり、麥畑の間に標が立つてゐたりするのと違うて、あの通り繁華な街の道筋になつてゐるのは、却つて寂しいものぢや。』と思ひ〳〵、生きてゐるか、死んで了うたか、生きてゐれば今年は五十一の老婆で、先刻御堂の茶所にゐた蠅殺しの婆と同じほどの年恰好になつてゐやうといふお靜をば、矢張り十五の小娘姿に愛らしく頭の中に描いて、日本橋を渡ると、あれから西へ道頓堀を、京與の角から曲つて、小間物屋の前で、昔しお靜さんが揷したやうな房の附いた花簪の、時節が廻はつてまた流行つて來たらしいのを、老の眼で物凄くそれでも心では優さしく睨んで、其の横を法善寺の細道へと入つた。

　流石にお腹が空いたらしいので、行き付けの『一寸一ぱい』屋へ入つて、例もの通り、サイダーと二三種の肴と飯とを言ひ付けてから、透かしの入つた木の衝立を脇に、助老を組んで、夜にならなければ

客のない家の、廣々とした晝座敷を見やりつゝ、強情に童貞を續け通した五十三歳になるまだみづ〳〵と肥えた身體を、投げ出すやうにしてゐた。

今の今でも、お靜さんさへ、自分の側へ來れば、直ぐにも童貞を破るのであるが、それでなければ。

…………

實のところ、自分は、こんなにまでして、お靜さんに節操を立て通すといふ氣はなかつた。たゞ双方の母親が、今にもあの娘が戻つて來ればといふ空賴みを力にして、一年二年と自分の婚期を延ばしたので、自分も何んだか意地づくになつて、生來が母に素直であつた自分の心は、十二分に母の氣持ちを汲み取り、あたりまへならば、逆らつて他に女狂ひでもするところを、お靜さんより外の女には眼も呉れまいと堅く決心すると、天主教に凝るやうにもなり、生涯獨身の老神父に可愛がられたりしたが、さうなると、もう敵に降參する屈辱を女の前に覺えるやうになつて、女には物も言ふまいと考へたこともあつた。

二十歳代はまだよかつたが、辛いのは三十から四十へかけてであつた。道を歩いてゐて、人いきれに行き逢ふと、身體中が硬張つて動けなくなるかと思はれた。

夏の夜、橋の上なんぞで、頭髮の臭い、下等な女に出くわしても、今のやうに其の臭さを感ぜずに、ウッとりとたゞ振り返へるのが常であつた。

神父のして來たやうに、酒と煙草とで、肉體の刺戟を忘れやうともしたけれど、自分の口は、何うしてもそんなものを受け入れるに嵌らないやうで、酒も煙草も、胸苦しく、吐き氣を催す種になるだけで

あつた。

あゝ童貞の怖ろしさ。――――今でもそれを考へると、身慄ひすることが何んぼあるやら知れない。

……

陶然と夢でも見るやうに、何もかも忘れて、心持ちよくなるのは、十五のお靜さんと、十七のの自分とが、背後向きに並んで凭れかゝりながら、罪のない話に興じ合つた妾垣に、今も昔の心で凭れかゝることである。

日本橋の北詰の家は、市區改正で取拂ひになつたが、懷かしいお靜さんの細い身體を支へた妾垣だけはお靜さんの家のであつた分をも合はせて、上町の方へ持つて行つた。

其の古い妾垣に凭れて、身體をば懷かしの杉の細丸太に擦り付けることがなかつたら、自分はもう四十代でこの世を去つてゐたかも知れない。――

もう此頃はさして氣にも止まらぬ「女」といふものが、光淳の前へ食物と飲物とを、細長い脇取りに載せて運んで來た。

第二の樂みのブラ〳〵歩きに疲れた光淳は、早く飲食をして、叔母と二人暮らしの上町の家へ歸らうと思つた。其處には生活の料になる家作が五六軒あつて、懷かしの妾垣も待つてゐる。(完)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
仝　神田區裏神保町	上田屋
仝　京橋區銀座三丁目	東海堂
仝　京橋區元數寄屋町	北隆館
仝　京橋區西紺屋町	良明堂
仝　日本橋區本石町	至誠堂
大阪市北區梅田町	盛文館
仝　東區京町堀	本華堂
仝　北區東梅田町	宮内立盛堂
京都市七條停車場前	三共社
仝　間之町七條	大盛社

○定價　金參拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但支那を除く）

冊數＼國別	内國	外國
六冊	金壹圓八拾錢	金貳圓四拾錢
十二冊	金參圓六拾錢	金四圓八拾錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は内國は金五圓拾錢外國は金六圓八拾錢の割となる

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年社、秀逸堂、信賴社

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は指定を本鄕區西片町十番地中央公論社とし、拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取さるる虞なし
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵劵代用　必ず一割增の事
一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄　金六錢（集金委託料）
　一金五圓迄　金七錢（及送料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正五年六月廿八日印刷納本
大正五年七月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地
中央公論社
電話小石川下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6.80; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.